芥川龍之介全集

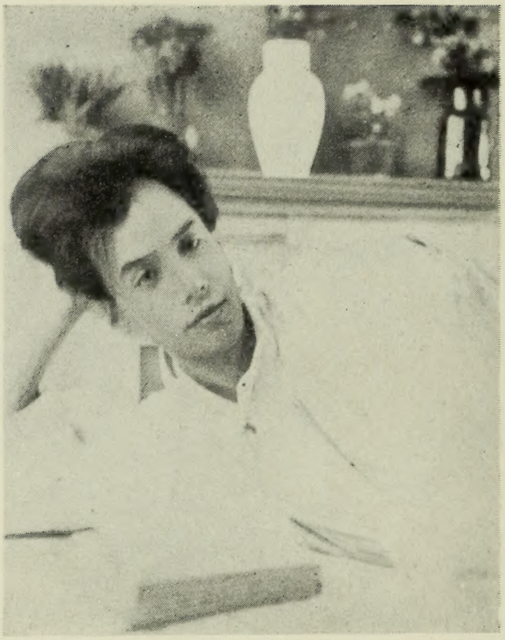
第七巻

芥川龍之介全集

第十巻



大正十年五月撮影
(揚州に於て)



大正十年四月撮影
（上海里見病院にて）

第七巻目錄

日録抄

*

補遺

支那游記

自序

「支那游記」一巻は畢竟天の僕に恵んだ（或は僕に災ひした）Journalist 的才能の産物である。僕は大阪毎日新聞社の命を受け、大正十年三月下旬から同年七月上旬に至る一百二十餘日の間に上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津等を遍歴した。それから日本へ歸つた後、「上海游記」や「江南游記」を一日に一回づつ執筆した。「長江游記」も「江南游記」の後にやはり一日に一回づつ執筆しかけた未成品である。「北京日記抄」は必しも一日に一回づつ書いた訣ではない。が、何でも全體を二日ばかりに書いたと覺えてゐる。「雜信一束」は畫端書に書いたのを大抵はそのまま收めることにした。しかし僕のジヤアナリスト的才能はこれ等の通信にも電光のやうに、――少くとも芝居の電光のやうに閃いてゐることは確である。

大正十四年十月

上海游記

一 海上

愈東京を立つと云ふ日に、長野草風氏が話しに來た。聞けば長野氏も半月程後には、支那旅行に出かける心算ださうである。その時長野氏は深切にも船醉ひの妙藥を敎へてくれた。が、門司から船に乘れば、二晝夜經つか經たない内に、すぐもう上海へ着いてしまふ。高が二晝夜ばかりの航海に、船醉ひの藥なぞを携帶するやうぢや、長野氏の臆病も知るべしである。——かう思つた私は、三月二十一日の午後、筑後丸の舷梯に登る時にも、雨風に浪立つた港内を見ながら、再びわが長野草風畫伯の海に怯なる事を氣の毒に思つた。

處が故人を輕蔑した罰には、船が玄海にかかると同時に、見る見る海が荒れ初めた。同じ船室に當つた馬杉君と、上甲板の籐椅子に腰をかけてゐると、舷側にぶつかる浪の水沫が、時時頭の上へも降りかかつて來る。海は勿論まつ白になつて、底が轟轟煮え返つてゐる。その向うに何處

かの島の影が、ぼんやり浮んで來たと思つたら、それは九州の本土だつた。が、船に慣れてゐる馬杉君は、卷煙草の煙を吐き出しながら、一向弱つたらしい氣色も見せない。私は外套の襟を立てて、ポケツトへ兩手を突つこんで、時時仁丹を口に含んで、——要するに長野草風氏が船醉ひの藥を用意したのは、賢明な處置だと感服してゐた。

その内に隣の馬杉君は、バアか何處かへ行つてしまつた。私はやはり悠悠と、籐椅子に腰を下してゐる。はた眼には悠悠と構へてゐても、頭の中の不安はそんなものぢやない。少しでも體を動かしたが最後、すぐに目まひがしさうになる。その上どうやら胃袋の中も、穩かならない氣がし出した。私の前には一人の水夫が、絕えず甲板を往來してゐる。(これは後に發見した事だが、彼も亦實は憐れむべき船醉ひ患者の一人だつたのである。)その目まぐるしい往來も、私には妙に不愉快だつた。それから又向うの浪の中には、細い煙を擧げたトロオル船が、殆船體も沒しないばかりに、際どい行進を續けてゐる。一體何の必要があつて、あんなに大浪をかぶつて行くのだか、その船も當時の私には、業腹で仕方がなかつたものである。

だから私は一心に、現在の苦しさを忘れるやうな、愉快な事許り考へようとした。子供、草花、渦福の鉢、日本アルプス、初代ぽんた、——後は何だつたか覺えてゐない。いや、まだある。何でもワグネルは若い時に、英吉利へ渡る航海中、ひどい暴風雨に遇つたさうである。さうしてそ

の時の經驗が、後年フリイゲンデ・ホルレンデルを書くのに大役を勤めたさうである。そんな事もいろいろ考へて見たが、頭は益ふらついて來る。胸のむかつくのも癒りさうぢやない。とうとうしまひにはワグネルなぞは、犬にでも食はれろと云ふ氣になつた。

十分ばかり經つた後、寢床に横になつた私の耳には、食卓の皿やナイフなぞが一度に床へ落ちる音が聞えた。しかし私は強情に、胃の中の物が出さうになるのを抑へつけるのに苦心してゐた。この際これだけの勇氣が出たのは、事によると船醉ひに罹つたのは、私一人ぢやないかと云ふ懸念があつたおかげである。虚榮心なぞと云ふものも、かう云ふ時には思ひの外、武士道の代用を勤めるらしい。

處が翌朝になつて見ると、少くとも一等船客だけは、いづれも船に醉つた結果、唯一人の亞米利加人の外は、食堂へも出ずにしまつたさうである。が、その非凡なる亞米利加人だけは、食後も獨り船のサロンに、タイプライタアを叩いてゐたさうである。私はその話を聞かされると、急に心もちが陽氣になつた。同時にその又亞米利加人が、怪物のやうな氣がし出した。實際あんない、しけに遇つても、泰然自若としてゐるなぞは、人間以上の離れ業である。或はあの亞米利加人も、體格檢査をやつて見たら、齒が三十九枚あるとか、小さな尻尾が生えてゐるとか、意外な事實が見つかるかも知れない。——私は不相變馬杉君と、甲板の籐椅子に腰をかけながら、そんな空想

を逞くした。海は昨日荒れた事も、もうけろりと忘れたやうに、蒼蒼と和んだ右舷の向うへ、濟州島の影を横へてゐる。

二　第一瞥（上）

埠頭の外へ出たと思ふと、何十人とも知れない車屋が、いきなり我我を包圍した。我我とは社の村田君、友住君、國際通信社のジョオンズ君並に私の四人である。抑車屋なる言葉が、日本人に與へる映像は、決して薄ぎたないものぢやない。寧ろその勢の好い所は、何處か江戸前な心もちを起させる位なものである。處が支那の車屋となると、不潔それ自身と云つても誇張ぢやない。その上ざつと見渡した所、どれも皆怪しげな人相をしてゐる。それが前後左右べた一面に、いろいろな首をさし伸しては、大聲に何か喚き立てるのだから、上陸したての日本婦人なぞは、少からず不氣味に感ずるらしい。現に私なぞも彼等の一人に、外套の袖を引つ張られた時には、思はず脊の高いジョオンズ君の後へ、退却しかかつた位である。

我我はこの車屋の包圍を切り抜けてから、やつと馬車の上の客になつた。が、その馬車も動き出したと思ふと、忽ち馬が無鐵砲に、町角の煉瓦塀と衝突してしまつた。若い支那人の馭者は腹

立たしさうに、ぴしぴし馬を毆りつける。馬は煉瓦塀に鼻をつけた儘、無暗に尻ばかり躍らせてゐる。馬車は無論顚覆しさうになる。往來にはすぐに人だかりが出來る。どうも上海では死を決しないと、うつかり馬車へも乘れないらしい。

その內に又馬車が動き出すと、鐵橋の架つた川の側へ出た。川には支那の達磨船が、水も見えない程群つてゐる。川の緣には綠色の電車が、滑かに何臺も動いてゐる。建物はどちらを眺めても、赤煉瓦の三階か四階である。アスファルトの大道には、西洋人や支那人が氣忙しさうに步いてゐる。が、その世界的な群衆は、赤いタバアンをまきつけた印度人の巡査が相圖をすると、ちやんと馬車の路を讓つてくれる。交通整理の行き屆いてゐる事は、いくら最屓眼に見た所が、到底東京や大阪なぞの日本の都會の及ぶ所ぢやない。車屋や馬車の勇猛なのに、聊恐れをなしてゐた私は、かう云ふ晴れ晴れした景色を見てゐる內に、だんだん愉快な心もちになつた。

やがて馬車が止まつたのは、昔金玉均が暗殺された、東亞洋行と云ふホテルの前である。するとまつさきに下りた村田君が、馭者に何文だか錢をやつた。が、馭者はそれでは不足だと見えて、容易に出した手を引つこめない。のみならず口角泡を飛ばして、頻に何かまくし立ててゐる。しかし村田君は知らん顏をして、ずんずん玄關へ上つて行く。ジョオンズ友住の兩君も、やはり馭者の雄辯なぞは、一向問題にもしてゐないらしい。私はちよいとこの支那人に、氣の毒なやうな

心もちがした。が、多分これが上海では、流行なのだらうと思つたから、さつさと跡について戸の中へはいつた。その時もう一度振返つて見ると、馭者はもう何事もなかつたやうに、悟然と馭者臺に坐つてゐる。その位なら、あんなに騷がなければ好いのに。

我我はすぐに薄暗い、その癖裝飾はけばけばしい、妙な應接室へ案内された。成程これぢや金玉均でなくても、いつ何時どんな窓の外から、ピストルの丸位は食はされるかも知れない。――そんな事を内内考へてゐると、其處へ勇ましい洋服着の主人が、スリツパアを鳴らしながら、氣忙しさうにはいつて來た。何でも村田君の話によると、このホテルを私の宿にしたのは、大阪の社の澤村君の考案によつたものださうである。處がこの精悍な主人は、芥川龍之介には宿を貸しても、萬一暗殺された所が、得にはならないとでも思つたものか、玄關の前の部屋の外には、生憎明き間はござわせんと云ふ。それからその部屋へ行つて見ると、ベツドだけは何故か二つもあるが、壁が煤けてゐて、窓掛が古びてゐて、椅子さへ滿足なのは一つもなくて、――要するに金玉均の幽靈でもなければ、安住出來る樣な明き間ぢやない。そこで私はやむを得ず、澤村君の厚意は無になるが、外の三君とも相談の上、此處から餘り遠くない萬歲館へ移る事にした。

三　第一瞥（中）

その晩私はジョオンズ君と一しよに、シェツファアドといふ料理屋へ飯を食ひに行つた。此處は壁でも食卓でも、一と通り愉快に出來上つてゐる。給仕は悉支那人だが、隣近所の客の中には、一人も黄色い顏は見えない。料理も郵船會社の船に比べると、三割方は確に上等である。私は多少ジョオンズ君を相手に、イエスとかノオとか英語をしやべるのが、愉快なやうな心もちになつた。

ジョオンズ君は悠悠と、南京米のカリイを平げながら、いろいろ別後の話をした。その中の一つにこんな話がある。何でも或晩ジョオンズ君が、――やつぱり君附けにしてゐたのぢや、何だか友だちらしい心もちがしない。彼は前後五年間、日本に住んでゐた英吉利人である。私はその五年間、（一度喧嘩をした事はあるが）始終彼と親しくしてゐた。一しよに歌舞伎座の立ち見をした事もある。鎌倉の海を泳いだ事もある。殆夜中上野の茶屋に、盃盤狼藉としてゐた事もある。その時彼は久米正雄の一張羅の袴をはいた儘、いきなり其處の池へ飛込んだりした。その彼を君などと奉つてゐちや、誰よりも彼にすまないかも知れない。次手にもう一つ斷つて置くが、私が

彼と親しいのは、彼の日本語が達者だからである。私の英語がうまいからぢやない。——何でも或晩そのジョオンズが、何處かのカツフエへ酒を飲みに行つたら、日本の給仕女がたつた一人、ぼんやり椅子に腰をかけてゐた。彼は日頃口癖のやうに支那は彼の道樂だが日本は彼の情熱だと呼號してゐる男である。殊に當時は上海へ引越し立てだつたさうだから、餘計日本の思ひ出が懷しかつたのに違ひない。彼は日本語を使ひながら、すぐにその給仕へ話しかけた。「何時上海へ來ましたか？」「昨日來たばかりでございます。」「ぢや日本へ歸りたくはありませんか？」給仕は彼にかう云はれると、急に涙ぐんだ聲を出した。「歸りたいわ。」ジョオンズは英語をしやべる合ひ間に、この「歸りたいわ」を繰返した。さうしてにやにや笑ひ出した。「僕もさう云はれた時には、Awfully sentimental になつたつけ。」

我我は食事をすませた後、賑かな四馬路を散歩した。それからカツフエ・パリジアンへ、ちよいと舞蹈を覗きに行つた。

舞蹈場は可也廣い。が、管絃樂の音と一しよに、電燈の光が青くなつたり赤くなつたりする工合は如何にも淺草によく似てゐる。唯その管絃樂の巧拙になると、到底淺草は問題にならない。其處だけはいくら上海でも、さすがに西洋人の舞蹈場である。

我我は隅の卓子に、アニセツトの盃を舐めながら、眞赤な着物を着たフイリツピンの少女や、

背廣を一着した亞米利加の青年が、愉快さうに踊るのを見物した。ホイツトマンか誰かの短い詩に、若い男女も美しいが、年をとつた男女の美しさは、又格別だとか云ふのがある。私などちらも同じやうに、肥つた英吉利の老人夫婦が、私の前へ踊つて來た時、成程とこの詩を思ひ浮べた。が、ジョオンズにさう云つたら、折角の私の詠嘆も、ふふんと一笑に付せられてしまつた。彼は老夫婦の舞蹈を見ると、その肥れると痩せたるとを問はず、吹き出したい誘惑を感ずるのださうである。

四　第一瞥（下）

カツフエ・パリジアンを引き上げたら、もう廣い往來にも、人通りが稀になつてゐた。その癖時計を出して見ると、十一時がいくらも廻つてゐない。存外上海の町は早寢である。

但しあの恐るべき車屋だけは、未に何人もうろついてゐる。さうして我我の姿を見ると、必何とか言葉をかける。私は晝間村田君に、不要と云ふ支那語を教はつてゐた。不要は勿論いらんの意である。だから私は車屋さへ見れば、忽惡魔拂ひの呪文のやうに、不要不要を連發した。これが私の口から出た、記念すべき最初の支那語である。如何に私が欣欣然と、この言葉を車屋へ

抛りつけたか、その間の消息がわからない讀者は、きつと一度も外國語を習つた經驗がないに違ひない。

我我は靴音を響かせながら、靜かな往來を歩いて行つた。その往來の右左には、三階四階の煉瓦建が、星だらけの空を塞ぐ事がある。さうかと思ふと街燈の光が、筆太に大きな「當」の字を書いた質屋の白壁を見せる事もある。或時は又歩道の丁度眞上に、女醫生何とかの招牌がぶら下つてゐる所も通れば、漆喰の剝げた塀か何かに、南洋煙草の廣告びらが貼りつけてある所も通つた。が、いくら歩いて行つても、容易に私の旅館へ來ない。その内に私はアニセットの祟りか、喉が渇いてたまらなくなつた。

「おい、何か飮む所はないかな。僕は莫迦に喉が渇くんだが。」

「すぐ其處にカツフエが一軒ある。もう少しの辛抱だ。」

五分の後我我兩人は、冷たい曹達を飮みながら、小さな卓子に坐つてゐた。

このカツフエはパリジアンなぞより、餘程下等な所らしい。桃色に塗つた壁の側には、髮を分けた支那の少年が、大きなピアノを叩いてゐる。それからカツフエのまん中には、英吉利の水兵が三四人、頰紅の濃い女たちを相手に、だらしのない舞踏を續けてゐる。最後に入口の硝子戸の側には、薔薇の花を賣る支那の婆さんが、私に不要を食はされた後、ぼんやり舞踏を眺めてゐる。

私は何だか畫入新聞の插畫でも見るやうな心もちになつた。畫の題は勿論「上海」である。其處へ外から五六人、同じやうな水兵仲間が、一時にどやどやはいつて來た。この時一番莫迦を見たのは、戸口に立つてゐた婆さんである。婆さんは醉ぱらひの水兵連が、亂暴に戸を押し開ける途端、腕にかけた籠を落してしまつた。しかも當の水兵連は、そんな事にかまふ所ぢやない。もう踊つてゐた連中と一しよに、氣違ひのやうにとち狂つてゐる。婆さんはぶつぶつ云ひながら、床に落ちた薔薇を拾ひ出した。が、それさへ拾つてゐる内には、水兵たちの靴に踏みにじられる。

……

「行かうか？」

ジョオンズは辟易したやうに、ぬつと大きな體を起した。

「行かう。」

私もすぐに立ち上つた。が、我我の足もとには、點點と薔薇が散亂してゐる。私は戸口へ足を向けながら、ドオミエの畫を思ひ出した。

「おい、人生はね。」

ジョオンズは婆さんの籠の中へ、銀貨を一つ抛りこんでから、私の方へ振返つた。

「人生は、——何だい？」

「人生は薔薇を撒き散らした路であるさ。」

我我はカツフエの外へ出た。其處には不相變黄包車が、何臺か客を待つてゐる。それが我我の姿を見ると、我勝ちに四方から駈けつけて來た。車屋はもとより不要である。が、この時私は彼等の外にも、もう一人別な厄介者がついて來たのを發見した。我我の側には、何時の間にか、あの花賣りの婆さんが、くどくどと何かしやべりながら、乞食のやうに手を出してゐる。婆さんは銀貨を貰つた上にも、また我我の財布の口を開けさせる心算でゐるらしい。私はこんな慾張りに賣られる、美しい薔薇が氣の毒になつた。この圖圖しい婆さんと、晝間乘つた馬車の馭者と、——これは何も上海の第一瞥に限つた事ぢやない。殘念ながら同時に又、確に支那の第一瞥であつた。

五　病院

私はその翌日から床に就いた。さうしてその又翌日から、里見さんの病院に入院した。病名は何でも乾性の肋膜炎とか云ふ事だつた。假にも肋膜炎になつた以上、折角企てた支那旅行も、一先づ見合せなければならないかも知れない。さう思ふと大いに心細かつた。私は早速大阪の社へ、

入院したと云ふ電報を打つた。すると社の薄田氏から、「ユツクリレウヨウセヨ」と云ふ返電があつた。しかし一月なり二月なり、病院にはいつたぎりだつたら、社でも困るのには違ひない。私は薄田氏の返電にほつと一先安心しながら、しかも紀行の筆を執るべき私の義務を考へると、愈心細がらずにはゐられなかつた。

しかし幸ひ上海には、社の村田君や友住君の外にも、ジョオンズや西村貞吉のやうな、學生時代の友人があつた。さうしてこれらの友人知己は、忙しい體にも關らず、始終私を見舞つてくれた。しかも作家とか何とか云ふ、多少の虛名を負つてゐたおかげに、時時未知の御客からも、花だの果物だのを頂戴した。現に一度なぞはビスケツトの罐が、聊か處分にも苦しむ位、ずらりと枕頭に並んだりした。(この窮境を救つてくれたのは、やはりわが敬愛する友人知己諸君である。諸君は病人の私から見ると、いづれも不思議な程健啖だつた。)いや、さう云ふ御見舞物を辱くしたばかりぢやない。始は未知の御客だつた中にも、何時か互に遠慮のない友達づき合ひをする諸君が、二人も三人も出來るやうになつた。俳人四十起君もその一人である。石黑政吉君もその一人である。上海東方通信社の波多博君もその一人である。

それでも七度五分程の熱が、容易にとれないとなつて見ると、不安は依然として不安だつた。どうかすると眞つ晝間でも、ぢつと横になつてはゐられない程、急に死ぬ事が怖くなりなぞした。

私はかう云ふ神經作用に、祟られたくない一心から、晝は滿鐵の井川氏やジョオンズが親切に貸してくれた、二十册あまりの横文字の本を手當り次第讀破した。ラ・モツトの短篇を讀んだのも、テイツチエンズの詩を讀んだのも、ジヤイルズの議論を讀んだのも、悉この間の事である。夜は、——これは里見さんには内證だつたが、萬一の不眠を氣づかふ餘り、毎晩缺かさずカルモチンを呑んだ。それでさへ時時は夜明け前に、眼がさめてしまふのには辟易した。確か王次回の疑雨集の中に、「藥餌無徴怪夢頻」とか云ふ句がある。これは詩人が病氣なのぢやない。細君の重病を歎いた詩だが、當時の私を詠じたとしても、この句は文字通り痛切だつた。「藥餌無徴怪夢頻」私は何度床の上に、この句を口にしたかわからない。

その内に春は遠慮なしに、ずんずん深くなつて行つた。西村が龍華の桃の話をする。蒙古風が太陽も見えない程、黄塵を空へ運んで來る。誰かがマンゴオを御見舞にくれる。もう蘇州や杭州を見るには、持つて來いの氣候になつたらしい。私は隔日に里見さんに、ドイヨヂカルの注射をして貰ひながら、このベツドに寢なくなるのは、何時の事だらうと思ひ思ひした。

附記　入院中の事を書いてゐれば、まだいくらでも書けるかも知れない。が、格別上海なるものに大關係もなささうだから、これだけにして置かうと思ふ。唯書き加へて置きたいのは、里見さんが新傾向の俳人だつた事である。次手に近什を一つ擧げると、

炭をつぎつつ胎動のあるを語る

六　城内（上）

上海の城内を一見したのは、俳人四十起氏の案内だつた。

薄暗い雨もよひの午後である。二人を乘せた馬車は一散に、賑かな通りを走つて行つた。朱泥のやうな丸燒きの鷄が、べた一面に下つた店がある。種種雜多の吊洋燈が、無氣味な程並んだ店がある。精巧な銀器が鮮かに光つた、裕福さうな銀樓もあれば、太白の遺風の招牌が古びた、貧乏らしい酒棧もある。――そんな支那の店構へを面白がつて見てゐる内に、馬車は廣い往來へ出ると、急に速力を緩めながら、その向うに見える橫町へはいつた。何でも四十起氏の話によると、以前はこの廣い往來に、城壁が聳えてゐたさうである。

馬車を下りた我我は、すぐに又細い橫町へ曲つた。これは橫町と云ふよりも、露路と云つた方が適當かも知れない。その狹い路の兩側には、麻雀の道具を賣る店だの、紫檀の道具を賣る店だのが、ぎつしり軒を並べてゐる。その又せせこましい軒先には、無暗に招牌がぶら下つてゐるから、空の色を見るのも困難である。其處へ人通りが非常に多い。うつかり店先に並べ立てた安物

の印材でも覗いてゐると、忽ち誰かにぶつかつてしまふ。しかもその目まぐるしい通行人は、大抵支那の平民である。私は四十起氏の跡につきながら、滅多に側眼もふらない程、恐る恐る敷石を踏んで行つた。

その露路を向うへつき當ると、噂に聞き及んだ湖心亭が見えた。湖心亭と云へば立派らしいが、實は今にも壞れ兼ねない、荒廢を極めた茶館である。その上亭外の池を見ても、まつ蒼な水どろが浮んでゐるから、水の色などは殆見えない。池のまはりには石を疊んだ、これも怪しげな欄干がある。我我が丁度其處へ來た時、淺葱木綿の服を着た、辮子の長い支那人が一人、――ちよいとこの間に書き添へるが、菊池寛の說によると、私は度度小說の中に、後架とか何とか云ふやうな、下等な言葉を使ふさうである。さうしてこれは句作なぞするから、自然と蕪村の馬の糞や芭蕉の馬の尿の感化を受けてしまつたのださうである。私は勿論菊池の說に、耳を傾けない心算ぢやない。しかし支那の紀行となると、場所その物が下等なのだから、時時は禮節も破らなければ、潑溂たる描寫は不可能である。もし譃だと思つたら、試みに誰でも書いて見るが好い。――そこで又元へ立ち戾ると、その一人の支那人は、悠悠と池へ小便をしてゐた。陳樹藩が叛旗を飜さうが、白話詩の流行が下火にならうが、日英續盟が持ち上らうが、そんな事は全然この男には、問題にならないのに相違ない。少くともこの男の態度や顏には、さうとしか思はれない長閑さが

あつた。曇天にそば立つた支那風の亭と、病的な緑色を擴げた池と、その池へ斜めに注がれた、隆隆たる一條の小便と、――これは憂鬱愛すべき風景畫たるばかりぢやない。同時に又わが老大國の、辛辣恐るべき象徴である。私はこの支那人の姿に、しみじみと少時眺め入つた。が、生憎四十起氏には、これも感慨に價する程、珍しい景色ぢやなかつたと見える。

「御覧なさい。この敷石に流れてゐるのも、こいつはみんな小便ですぜ。」

四十起氏は苦笑を洩した儘、さつさと池の縁を曲つて行つた。さう云へば成程空氣の中にも、重苦しい尿臭が漂つてゐる。この尿臭を感ずるが早いか、魔術は忽ちに破れてしまつた。湖心亭は畢に湖心亭であり、小便は畢に小便である。私は靴を爪立てながら、匆匆四十起氏の跡を追つた。出たらめな詠歎なぞに耽るものぢやない。

七　城内（中）

それから少し先へ行くと、盲目の老乞食が坐つてゐた。――一體乞食と云ふものは、ロマンテイツクなものである。ロマンテイシズムとは何ぞやとは、議論の干ない問題だが、少くともその一特色は、中世紀とか幽靈とか、アフリカとか夢とか女の理窟とか、何時も不可知な何物かに憧

れる所が身上らしい。して見れば乞食が會社員より、ロマンテイツクなのは當然である。處が支那の乞食となると、一通りや二通りの不可知ぢやない。雨の降る往來に寢ころんでゐたり、新聞紙の反古しか着てゐなかつたり、石榴のやうに肉の腐つた膝頭をべろべろ舐めてゐたり、――要するに少少恐縮する程、ロマンテイツクに出來上つてゐる。支那の小說を讀んで見ると、如何なる道樂か神仙が、乞食に化けてゐる話が多い。あれは支那の乞食から、自然に發達したロマンテイシズムである。日本の乞食では支那のやうに、超自然な不潔さを具へてゐないから、ああ云ふ話は生まれて來ない。まづ精精將軍家の駕籠へ、種ケ島を打ちかけるとか、山中の茶の湯を御馳走しに、柳里恭を招待するとか、その位の所が關の山である。――あまり横道へ反れすぎたが、この盲目の老乞食も、赤脚仙人か鐵枴仙人が、化けてでもゐさうな恰好だつた。殊に前の敷石を見ると悲慘な彼の一生が、綺麗に白墨で書き立ててある。字も私に比べるとどうやら多少うまいらしい。私はこんな乞食の代書は、誰がするのだらうと考へた。

その先の露路へさしかかると、今度は骨董屋が澤山あつた。此處はどの店を覗いて見ても、銅の香爐だの、埴輪の馬だの、七寶の鉢だの、龍頭瓶だの、玉の文鎭だの、青貝の戶棚だの、大理石の硯屛だの、剝製の雉だの、恐るべき仇英だのが、雜然とあたりを塞いだ中に、水煙管を啣へた支那服の主人が、氣樂さうに客を待ち受けてゐる。次手にちよいとひやかして見たが、五割方

は懸値であるとしても、値段は格別安さうぢやない。これは日本へ歸つた後、香取秀眞氏にひやかされた事だが、骨董を買ふには支那へ行くより、東京日本橋仲通りを徘徊した方が好ささうである。

骨董屋の間を通り抜けたら、大きな廟のある所へ出た。これが畫端書でも御馴染の、名高い城内の城隍廟である。廟の中には參詣人が、入れ交り立ち交り叩頭に來る。勿論線香を獻じたり、紙錢を焚いたりするものも、想像以上に大勢ある。その煙に燻ぶるせゐか、梁間の額や柱上の聯は、悉妙に油ぎつてゐる。事によると煤けてゐないものは、天井から幾つも吊り下げた、金銀二色の紙錢だの、螺旋狀の線香だのばかりかも知れない。これだけでも既に私には、さつきの乞食と同じやうに、昔讀んだ支那の小說を想起させるのに十分である。まして左右に居流れた、判官らしい像になると、——或は正面に端坐した城隍らしい像になると、殆聊齋志異だとか、新齊諧だとか云ふ書物の插畫を見るのと變りはない。私は大いに敬服しながら、四十起氏の迷惑などはそつち除けに、何時までも其處を離れなかつた。

八　城内（下）

今更云ふまでもない事だが、鬼狐の談に富んだ支那の小說では、城隍を始め下廻りの判官や鬼隷も暇ぢやない。城隍が廡下に一夜を明かした書生の運勢を開いてやると、判官は町中を荒し廻つた泥坊を驚死させてしまふ。――と云ふと好い事ばかりのやうだが、狗の肉さへ供物にすれば、惡人の味方もすると云ふ、賊城隍がある位だから、人間の女房を追ひ廻した報いに、肘を折られたり頭を落されたり、天下に赤恥を廣告する判官や鬼隷も少くない。それが本だけ讀んだのでは、何だか得心の出來ない所がある。つまり筋だけは呑みこめても、その割に感じがぴつたり來ない。其處が齒痒い氣がしたものだが、今この城隍廟を目のあたりに見ると、如何に支那の小說が、荒唐無稽に出來上つてゐても、その想像の生れた因緣は、一一成程と頷かれる。いやあんな赤つ面の判官では、惡少の眞似位はするかも知れない。あんな美髯の城隍なら、堂堂たる儀衞に圍まれた儘、夜空に昇るのも似合ひさうである。

こんな事を考へた後、私は又四十起氏と一しよに、廟の前へ店を出した、いろいろな露店を見物した。靴足袋、玩具、甘蔗の莖、貝釦、手巾、南京豆、――その外まだ薄穢い食物店が澤山ある。勿論此處の人の出は、日本の緣日と變りはない。向うには派手な縞の背廣に、紫水晶のネクタイ・ピンをして、支那人のハイカラが歩いてゐる。と思ふと又こちらには、手首に銀の環を嵌めた、纏足の靴が二三寸しかない、舊式なお上さんも歩いてゐる。金瓶梅の陳敬濟、品花寶鑑

の谿十一、——これだけ人の多い中には、さう云ふ豪傑もゐさうである。しかし杜甫だとか、岳飛だとか、王陽明だとか、諸葛亮だとかは、藥にしたくもゐさうぢやない。言ひ換へれば現代の支那なるものは、詩文にあるやうな支那ぢやない。猥褻な、殘酷な、食意地の張つた、小說にあるやうな支那である。瀬戸物の亭だの、睡蓮だの、刺繡の鳥だのを有難がつた、安物のモック・オリエンタリズムは、西洋でも追ひ追ひ流行らなくなつた。文章軌範や唐詩選の外に、支那あるを知らない漢學趣味は、日本でも好い加減に消滅するが好い。

　それから我我は引き返して、さつきの池の側にある、大きな茶館を通り拔けた。伽藍のやうな茶館の中には、思ひの外客が立て込んでゐない。が、其處へはいるや否や、雲雀、目白、文鳥、鸚哥、——ありとあらゆる小鳥の聲が、目に見えない驟雨か何かのやうに、一度に私の耳を襲つた。見れば薄暗い天井の梁には、一面に鳥籠がぶら下つてゐる。支那人が小鳥を愛する事は、今になつて知つた次第ぢやない。が、こんなに鳥籠を並べて、こんなに鳥の聲を鬪はせようとは、夢にも考へなかつた事實である。これでは鳥の聲を愛する所か、まづ鼓膜が破れないやうに、匆匆耳を塞がざるを得ない。私は殆逃げるやうに四十起氏を促し立てながら、この金切聲に充滿した、恐るべき茶館を飛び出した。

　しかし小鳥の啼き聲は、茶館の中にばかりある訣ぢやない。やつとその外へ脫出しても、狹い

往來の右左に、ずらりと懸け並べた鳥籠からは、しつきりない囀りが降りかかつて來る。尤もこれは閑人どもが、道樂に啼かせてゐるのぢやない。いづれも專門の小鳥屋が、(實を云ふと小鳥屋だか、それとも又鳥籠屋だか、どちらだか未だに判然しない。)店を連ねてゐるのである。

「少し待つて下さい。鳥を一つ買つて來ますから。」

四十起氏は私にさう云つてから、その店の一つにはいつて行つた。其處をちよいと通りすぎた所に、ペンキ塗りの寫眞屋が一軒ある。私は四十起氏を待つ間、その飾り窓の正面にある、梅蘭芳の寫眞を眺めてゐた。四十起氏の歸りを待つてゐる子供たちの事なぞを考へながら。

九　戲臺(上)

上海では僅に二三度しか、芝居を見物する機會がなかつた。私が速成の劇通になつたのは、北京へ行つた後の事である。しかし上海で見た役者の中にも、武生では名高い蓋叫天とか、花旦では綠牡丹とか小翠花とか、兎に角當代の名伶があつた。が、役者を談ずる前に、芝居小屋の光景を紹介しないと、支那の芝居とはどんなものだか、はつきり讀者には通じないかも知れない。

私の行つた劇場の一つは、天蟾舞臺と號するものだつた。此處は白い漆喰塗りの、まだ眞新ら

しい三階建である。その又二階だの三階だのが、ぐるりと眞鍮の欄干をつけた、半圓形になつてゐるのは、勿論當世流行の西洋の眞似に違ひない。天井には大きな電燈が、煌煌と三つぶら下つてゐる。客席には煉瓦の床の上に、ずつと籐椅子が並べてある。が、苟も支那たる以上、籐椅子と雖も油斷は出來ない。何時か私は村田君と、この籐椅子に坐つてゐたら、兼ね兼ね恐れてゐた南京蟲に、手頸を二三箇所やられた事がある。しかしまづ芝居の中は、大體不快を感じない程度に、綺麗だと云つて差支ない。

舞臺の兩側には大きな時計が一つづつちやんと懸けてある。(尤も一つは止まつてゐた。)その下には煙草の廣告が、あくどい色彩を並べてゐる。舞臺の上の欄間には、漆喰の薔薇やアツカンサスの中に、天聲人語と云ふ大文字がある。舞臺は有樂座より廣いかも知れない。此處にももう西洋式に、フツト・ライトの裝置がある。幕は、――さあ、その幕だが、一場一場を區別する爲には、全然幕を使用しない。が、背景を換へる爲には、――と云ふよりも背景それ自身としては、蘇州銀行と三砲臺香烟卽ちスリイ・キヤツスルズの下等な廣告幕を引く事がある。幕は何處でもまん中から、兩方へ引く事になつてゐるらしい。その幕を引かない時には、背景が後を塞いでゐる。背景はまづ油繪風に、室內や室外の景色を描いた、新舊いろいろの幕である。それも種類は二三種しかないから、姜維が馬を走らせるのも、武松が人殺しを演ずるのも、背景には一向變化

がない。その舞臺の左の端に、胡弓、月琴、銅鑼などを持つた、支那の御囃しが控へてゐる。この連中の中には一人二人、鳥打帽をかぶつた先生も見える。

序に芝居を見る順序を云へば、一等だらうが二等だらうが、ずんずん何處へでもはいつてしまへば好い。支那では席を取つた後、場代を拂ふのが慣例だから、その邊は甚輕便である。さて席が定まると、熱湯を通したタオルが來る。活版刷りの番附が來る。茶は勿論大土瓶が來る。その外西瓜の種だとか、一文菓子だとか云ふ物は、不要不要をきめてしまへば好い。タオルも一度隣にゐた、風貌堂堂たる支那人が、さんざん顏を拭いた擧句鼻をかんだのを目撃して以來、當分不要をきめた事がある。勘定は出方の祝儀とも、一等では大抵一圓から一圓五十錢の間かと思ふ。かと思ふと云ふ理由は、何時でも私に拂はせずに、村田君が拂つてしまつたからである。

支那の芝居の特色は、まづ鳴物の騷騷しさが想像以上な所にある。殊に武劇——立ち廻りの多い芝居になると、何しろ何人かの大の男が、眞劍勝負でもしてゐるやうに舞臺の一角を睨んだなり、必死に銅鑼を叩き立てるのだから、到底天聲人語所ぢやない。實際私も慣れない内は、兩手に耳を押へない限り、とても坐つてはゐられなかつた。が、わが村田烏江君などになると、この鳴物が穩かな時は物足りない氣持がするさうである。のみならず芝居の外にゐても、この鳴物の音さへ聞けば、何の芝居をやつてゐるか、大抵見當がつくさうである。「あの騷騷しい所がよかも

んなあ。」――私は君がさう云ふ度に、一體君は正氣かどうか、それさへ怪しいやうな心もちがした。

十　戲臺（下）

その代り支那の芝居にゐれば、客席では話をしてゐようが、子供がわあわあ泣いてゐようが、格別苦にも何にもならない。これだけは至極便利である。或は支那の事だから、たとひ見物が靜かでなくとも、聽戲には差支へが起らないやうに、こんな鳴物が出來たのかも知れない。現に私なぞは一幕中、筋だの役者の名だの歌の意味だの、いろいろ村田君に教はつてゐたが、向う三軒兩隣りの君子は、一度もうるささうな顏をしなかつた。

支那の芝居の第二の特色は、極端に道具を使はない事である。背景の如きも此處にはあるが、これは近頃の發明に過ぎない。支那本來の舞臺の道具は、椅子と机と幕とだけである。山嶽、海洋、宮殿、道塗――如何なる光景を現すのでも、結局これらを配置する外は一本の立木も使つたことはない。役者がさも重さうに、閂を外すらしい眞似をしたら、見物はいやでもその空間に、扉の存在を認めなければならぬ。又役者が意氣揚揚と、房のついた鞭を振りまはしてゐたら、そ

の役者の股ぐらの下には、驕つて行かざる紫騮か何かが嘶いてゐるなと思ふべきである。しかしこれは日本人だと、能と云ふ物を知つてゐるからすぐにそのこつを呑みこんでしまふ。椅子や机を積上げたのも、山だと思へと云はれれば咄嗟によろしいと引き受けられる。役者がちよいと片足上げたら、其處に内外を分つべき閾があるのだと云はれても、これ亦想像に難くはない。のみならずその寫實主義から、一歩を隔てた約束の世界に、意外な美しささへ見る事がある。さう云へば今でも忘れないが、小翠花が梅龍鎭を演じた時、旗亭の娘に扮した彼はこの閾を越える度に、必ず鶸色の褲子の下から、ちらりと小さな靴の底を見せた。あの小さな靴の底の如きは、架空の閾でなかつたとしたら、あんなに可憐な心もちは起させなかつたのに相違ない。

　この道具を使はない所は、上に述べたやうな次第だから、一向我我には苦にならない。寧ろ私が辟易したのは、盆とか皿とか手燭とか、普通に使はれる小道具類が如何にも出たらめなことである。たとへば今の梅龍鎭にしても、つらつら戲考を按ずると、當世に起つた出來事ぢやない。明の武宗が微行の途次、梅龍鎭の旗亭の娘、鳳姐を見染めると云ふ筋である。處がその娘の持つてゐる盆は、薔薇の花を描いた陶器の底に、銀鍍金の縁などがついてゐる。あれは何處かのデイパアトメント・ストアに、並んでゐたものに違ひない。もし梅若萬三郎が、大口にサアベルをぶら下げて出たら、——そんな事の莫迦莫迦しいのは、多言を要せずとも明かである。

支那の芝居の第三の特色は、隈取りの變化が多い事である。何でも辻聽花翁によると、曹操一人の隈取りが、六十何種もあるさうだから、到底市川流所の騒ぎぢやない。その又隈取りも甚しいのは、赤だの藍だの代赭だのが、一面に皮膚を蔽つてゐる。まづ最初の感じから云ふと、どうしても化粧とは思はれない。私なぞは武松の芝居へ、蔣門神がのそのそ出て來た時には、いくら村田君の說明を聽いても、やはり假面だとしか思はれなかつた。一見あの所謂花臉も、假面ではない事が看破出來れば、その人は確に幾分か千里眼に近いのに相違ない。

支那の芝居の第四の特色は、立廻りが猛烈を極める事である。殊に下廻りの活動になると、これを役者と稱するのは、輕業師と稱するの當れるに若かない。彼等は舞臺の端から端へ、續けさまに二度宙返りを打つたり、正面に積上げた机の上から、眞つ倒に跳ね下りたりする。それが大抵は赤いズボンに、半身は裸の役者だから、愈曲馬か玉乘りの親類らしい氣がしてしまふ。勿論上等な武劇の役者も、言葉通り風を生ずる程、青龍刀や何かを振り廻して見せる。武劇の役者は昔から、腕力が強いと云ふ事だが、これでは腕力がなかつた日には、肝腎の商賣が勤まりつこはない。しかし武劇の名人となると、やはりかう云ふ離れ業以外に、何處か獨得な氣品がある。その證據には蓋叫天が、宛然日本の車屋のやうな、パツチばきの武松に扮するのを見ても、無暗に刀を揮ふ時より、何かの拍子に無言の儘、じろりと相手を見る時の方が、どの位行者武松らし

い、凄味に富んでゐるかわからない。

　勿論かう云ふ特色は、支那の舊劇の特色である。新劇では隈取りもしなければ、とんぼ返りもやらないらしい。では何處までも新しいかと云ふと、亦舞臺とかに上演してゐた、賣身投靠と云ふのなぞは、火のない蠟燭を持つて出てもやはり見物はその蠟燭が、ともつてゐる事と想像する。――つまり舊劇の象徴主義は依然として舞臺に殘つてゐた。新劇は上海以外でも、その後二三度見物したが、此點ではどれも遺憾ながら、五十歩百歩だつたと云ふ外はない。少くとも雨とか稻妻とか夜になつたとか云ふ事は、全然見物の想像に依頼するものばかりだつた。

　最後に役者の事を述べると、――蓋叫天だの小翠花だのは、もう引き合ひに出して置いたから、今更別に述べる事はない。が、唯一つ書いて置きたいのは、樂屋にゐる時の綠牡丹である。私が彼を訪問したのは、亦舞臺の樂屋だつた。いや、樂屋と云ふよりも、舞臺裏と云つた方が、或は實際に近いかも知れない。兎に角其處は舞臺の後の、壁が剝げた、蒜臭い、如何にも慘澹たる處だつた。何でも村田君の話によると、梅蘭芳が日本へ來た時、最も彼を驚かしたものは、樂屋の綺麗な事だつたと云ふが、かう云ふ樂屋に比べると成程帝劇の樂屋なぞは、驚くべく綺麗なのに相違ない。おまけに支那の舞臺裏には、なりの薄ぎたない役者たちが、顔だけは例の隈取りをした儘、何人もうろうろ歩いてゐる。それが電燈の光の中に、恐るべき埃を浴びながら、往つた

り來たりしてゐる容子は殆百鬼夜行の圖だつた。さう云ふ連中の通り路から、ちよいと陰になつた所に、支那鞄や何かが拋り出してある。綠牡丹はその支那鞄の一つに、鬘だけは脱いでゐたが、妓女蘇三に扮した儘、丁度茶を飲んで居る所だつた。舞臺では細面に見えた顏も、今見れば存外華奢ではない。寧ろセンシュアルな感じの強い、立派に發育した青年である。背も私に比べると、確に五分は高いらしい。その夜も一しよだつた村田君は、私を彼に紹介しながら、この利巧さうな女形と、互に久闊を敍し合つたりした。聞けば君は綠牡丹が、まだ無名の子役だつた頃から、彼でなければ夜も日も明けない、熱心な贔屓の一人なのださうである。私は彼に、玉堂春は面白かつたと云ふ意味を傳へた。すると彼は意外にも、「アリガト」と云ふ日本語を使つた。さうして――さうして彼が何をしたか。私は彼れ自身の爲にも又わが村田烏江君の爲にも、こんな事は公然書きたくない。が、これを書かなければ、折角彼を紹介した所が、むざむざ眞を逸してしまふ。それでは讀者に對しても、甚濟まない次第である。その爲に敢然正筆を使ふと、――彼は横を向くが早いか、眞紅に銀絲の繡をした、美しい袖を飜して、見事に床の上へ手洟をかんだ。

十一　章炳麟氏

章炳麟氏の書齋には、如何なる趣味か知らないが、大きな鰐の剝製が一匹、腹這ひに壁に引つ付いてゐる。が、この書物に埋まつた書齋は、その鰐が皮肉に感じられる程、言葉通り肌に沁みるやうに寒い。尤も當日の天候は、發句の季題を借用すると、正に冴え返る雨天だつた。其處へ瓦を張つた部屋には、敷物もなければ、ストオヴもない。坐るのは勿論蒲團のない、角張つた紫檀の肘掛椅子である。おまけに私の着てゐたのは、薄いセルの間着だつた。私は今でもあの書齋に、坐つてゐた事を考へると、幸にも風を引かなかつたのは、全然奇蹟としか思はれない。

しかし章太炎先生は、鼠色の大掛兒に、厚い毛皮の裏のついた、黒い馬掛兒を一着してゐる。だから無論寒くはない。その上氏の坐つてゐるのは、毛皮を掛けた籐椅子である。私は氏の雄辯に、煙草を吸ふ事も忘れながら、しかも氏は暖さうに、悠然と足を伸ばしてゐるのには、大いに健羨に堪へなかつた。

風說によれば章炳麟氏は、自ら王者の師を以て任じてゐると云ふ事である。さうして一時はその御弟子に、黎元洪を選んだと云ふ事である。さう云へば机の横手の壁には、あの鰐の剝製の下

に、「東南撲學」、章太炎先生、「元洪」と書いた、橫卷の軸が懸つてゐる。しかし遠慮のない所を云ふと、氏の顏は決して立派ぢやない。皮膚の色は殆黃色である。口髭や顋髯は氣の毒な程薄い。突兀と聳えた額なども、瘤ではないかと思ふ位である。が、その絲のやうに細い眼だけは、――上品な緣無しの眼鏡の後に、何時も冷然と何時も微笑した眼だけは、確に出來合ひの代物ぢやない。この眼の爲に袁世凱は、先生を囹圄に苦しませたのである。同時に又この眼の爲に、一旦は先生を監禁しても、とうとう殺害は出來なかつたのである。

氏の話題は徹頭徹尾、現代の支那を中心とした政治や社會の問題だつた。勿論不要とか「等一等」とか、車屋相手の熟語以外は、一言も支那語を知らない私に議論なぞのわかる理由はない。それが氏の論旨を知つたり、時時は氏に生意氣な質問なぞも發したりしたのは、悉く週報「上海」の主筆西本省三氏のおかげである。西本氏は私の隣りの椅子に、ちやんと胸を反らせた儘、どんな面倒な議論になつても、親切に通譯を勤めてくれた。（殊に當時は週報「上海」の締切り日が迫つてゐたのだから、私は愈氏の御苦勞に感謝せざるを得ないのである。）

「現代の支那は遺憾ながら、政治的には墮落してゐる。不正が公行してゐる事も、或は清朝の末年よりも、一層夥しいと云へるかも知れない。學問藝術の方面になれば、猶更沈滯は甚しいやうである。しかし支那の國民は、元來極端に趨る事をしない。この特性が存する限り、支那の赤

化は不可能である。成程一部の學生は、勞農主義を歡迎した。が、學生は卽ち國民ではない。彼等さへ一度は赤化しても必ず何時かはその主張を抛つ時が來るであらう。何故と云へば國民性は、――中庸を愛する國民性は、一時の感激よりも強いからである。」

章炳麟氏はしつきりなしに、爪の長い手を振りながら、滔滔と獨得な說を述べた。私は――唯寒かつた。

「では支那を復興するには、どう云ふ手段に出るが好いか？　この問題の解決は、具體的にはどうするにもせよ、机上の學說からは生まれる筈がない。古人も時務を知るものは俊傑たりと道破した。一つの主張から演繹せずに、無數の事實から歸納する。――それが時務を知るのである。時務を知つた後に、計畫を定める、――時に循つて、宜しきを制すとは、結局この意味に外ならない。……」

私は耳を傾けながら、時時壁上の鰐を眺めた。さうして支那問題とは沒交涉に、こんな事をふと考へたりした。――あの鰐はきつと睡蓮の匂と太陽の光と暖な水とを承知してゐるのに相違ない。して見れば現在の私の寒さは、あの鰐に一番通じる筈である。鰐よ、剝製のお前は仕合せだつた。どうか私を憐んでくれ。まだこの通り生きてゐる私を。……

十二　西洋

問。上海は單なる支那ぢやない。同時に又一面では西洋なのだから、その邊も十分見て行つてくれ給へ。公園だけでも日本よりは、餘程進歩してゐると思ふが、――

答。公園も一通りは見物したよ。佛蘭西公園やジエスフイルド公園は、散歩するに、持つて來いだ。殊に佛蘭西公園では、若葉を出した篠懸の間に、西洋人のお袋だの乳母だのが子供を遊ばせてゐる、それが大變綺麗だつたつけ。――だが格別日本よりも、進歩してゐるとは思はないね。唯此處の公園は、西洋式だと云ふだけぢやないか？　何も西洋式になりさへすれば、進歩したと云ふ訣でもあるまいし。

問。新公園にも行つたかい？

答。行つたとも。しかしあれは運動場だらう。僕は公園だとは思はなかつた。

問。パブリツク・ガアドンは？

答。あの公園は面白かつた。外國人ははいつても好いが、支那人は一人もはいる事が出來ない。しかもパブリツクと號するのだから、命名の妙を極めてゐるよ。

問。しかし往來を歩いてゐても、西洋人の多い所なぞは、何だか感じが好いぢやないか？　此も日本ぢや見られない事だが、――

答。さう云へば僕はこの間、鼻のない異人を見かけたつけ。あんな異人に遇ふ事は、ちよいと日本ぢやむづかしいかも知れない。

問。あれか？　あれは流感の時、まつさきにマスクをかけた男だ。――しかし往來を歩いてゐても、やはり異人に比べると、日本人は皆貧弱だね。

答。洋服を着た日本人はね。

問。和服を着たのは猶困るぢやないか？　何しろ日本人と云ふやつは、肌が人に見える事は、何とも思つてゐないんだから、――

答。もし何とか思ふとすれば、それは思ふものが猥褻なのさ。久米の仙人と云ふ人は、その爲に雲から落ちたぢやないか？

問。ぢや西洋人は猥褻かい？

答。勿論その點では猥褻だね。唯風俗と云ふやつは、殘念ながら多數決のものだ。だから今に日本人も、素足で外へ出かけるのは、卑しい事のやうに思ふだらう。つまりだんだん以前よりも、猥褻になつて行くのだね。

問。しかし日本の藝者なぞが、白晝往來を歩いてゐるのは、西洋人の手前も恥入るからね。

答。何、そんな事は安心し給へ。西洋人の藝者も歩いてゐるのだから、――唯君には見分けられないのさ。

問。これはちと手嚴しいな。佛蘭西租界なぞへも行つたかい？

答。あの住宅地は愉快だつた。柳がもう煙つてゐたり、鳩がかすかに啼いてゐたり、桃がまだ咲いてゐたり、支那の民家が殘つてゐたり、――

問。あの邊は殆西洋だね。赤瓦だの、白煉瓦だの、西洋人の家も好いぢやないか？

答。西洋人の家は大抵駄目だね。少くとも僕の見た家は、悉下等なものばかりだつた。

問。君がそんな西洋嫌ひとは、夢にも僕は思はなかつたが、――

答。僕は西洋が嫌ひなのぢやない。俗惡なものが嫌ひなのだ。

問。それは僕も勿論さうさ。

答。譃をつき給へ。君は和服を着るよりも、洋服を着たいと思つてゐる。門構への家に住むよりも、バンガロオに住みたいと思つてゐる。釜揚うどんを食ふよりも、マカロニを食ひたいと思つてゐる。山本山を飲むよりも、ブラジル珈琲を飲み――

問。もうわかつたよ。しかし墓地は惡くはあるまい、あの靜安寺路の西洋人の墓地は？

答。墓地とは亦窮したね。成程あの墓地は氣が利いてゐた。しかし僕はどちらかと云へば、大理石の十字架の下より、土饅頭の下に横になつてゐたい。況や怪しげな天使などの彫刻の下は眞平御免だ。

問。すると君は上海の西洋には、全然興味を感じないのかい？

答。いや、大いに感じてゐるのだ。上海は君の云ふ通り、兎に角一面では西洋だからね。善かれ惡かれ西洋を見るのは、面白い事に違ひないぢやないか？　唯此處の西洋は本場を見ない僕の眼にも、やはり場違ひのやうな氣がするのだ。

十三　鄭孝胥氏

坊間に傳ふる所によれば、鄭孝胥氏は悠悠と、清貧に處してゐるさうである。處が或曇天の午前、村田君や波多君と一しよに、門前へ自動車を乘りつけて見ると、その清貧に處してゐる家は、私の豫想よりもずつと立派な、鼠色に塗つた三階建だつた。門の內には庭續きらしい、やや黃ばんだ竹むらの前に、雪毬の花などが匂つてゐる。私もかう云ふ清貧ならば、何時身を處しても差支へない。

五分の後我我三人は、應接室に通されてゐた。此處は壁に懸けた軸の外に殆何も裝飾はない。が、マントル・ピイスの上には、左右一對の燒き物の花瓶に、小さな黃龍旗が尾を垂れてゐる。鄭蘇戡先生は中華民國の政治家ぢやない、大淸帝國の遺臣である。私はこの旗を眺めながら、誰かが氏を批評した「他人之退而不隱者殆不可同日論」とか云ふ、うろ覺えの一句を思ひ出した。

其處へ小肥りの靑年が一人、足音もさせずにはいつて來た。これが日本に留學してゐた、氏の令息鄭垂氏である。氏と懇意な波多君は、すぐに私を紹介した。鄭垂氏は日本語に堪能だから、氏と話をする場合は、波多村田兩先生の通譯を煩はす必要はない。

鄭孝胥氏が我我の前に、脊の高い姿を現はしたのは、それから間もなくの事だつた。氏は一見した所、老人に似合はず血色が好い。眼も殆靑年のやうに、朗な光を帶びてゐる。殊に胸を反らせた態度や、盛な手眞似を交へる工合は、鄭垂氏よりも反つて若若しい。それが黑い馬掛兒に、心もち藍の調子が勝つた、薄鼠の大掛兒を着てゐる所は、さすがは當年の才人だけに、如何にも氣が利いた風采である。いや、閑日月に富んだ今さへ、かう潑剌としてゐるやうぢや、康有爲氏を中心とした、芝居のやうな戊戌の變に、花花しい役割を演じた頃には、どの位才氣煥發だつたか、想像する事も難くはない。

氏を加へた我我は、少時支那問題を談じ合つた。勿論私も臆面なしに、新借款團の成立以後、日本に對する支那の輿論とか何とか、柄にもない事を辯じ立てた。――と云ふと甚不眞面目らしいが、その時は何も出たらめに、そんな事を饒舌つてゐたのではない。私自身では大眞面目に、自説を披露してゐたのである。が、今になつて考へて見ると、どうもその當時の私は、多少正氣ではなかつたらしい。尤もこの逆上の原因は、私の輕薄な根性の外にも、確に現代の支那その物が、一半の責を負ふべきものである。もし譃だと思つたら、誰でも支那へ行つて見るが好い。必一月とゐる内には、妙に政治を論じたい氣がして來る。あれは現代の支那の空氣が、二十年來の政治問題を孕んでゐるからに相違ない。私の如きは御丁寧にも、江南一帶を經めぐる間、容易にこの熱がさめなかつた。さうして誰も頼まないのに、藝術なぞよりは數段下等な政治の事ばかり考へてゐた。

　鄭孝胥氏は政治的には、現代の支那に絶望してゐた。支那は共和に執する限り、永久に混亂は免れ得ない。が、王政を行ふとしても、當面の難局を切り拔けるには、英雄の出現を待つばかりである。その英雄も現代では、同時に又利害の錯綜した國際關係に處さなければならぬ。して見れば英雄の出現を待つのは、奇蹟の出現を待つものである。

　そんな話をしてゐる内に、私が卷煙草を啣へると、氏はすぐに立上つて、燐寸の火をそれへ移

してくれた。私は大いに恐縮しながら、どうも客を遇する事は、隣國の君子に比べると、日本人が一番拙らしいと思つた。

紅茶の御馳走になつた後、我我は氏に案内されて、家の後にある廣庭へ出て見た。庭は綺麗な芝原のまはりに、氏が日本から取り寄せた櫻や、幹の白い松が植わつてゐる。その向うにもう一つ、同じやうな鼠色の三階建があると思つたら、それは近頃建てたとか云ふ、鄭垂氏一家の住居だつた。私はこの庭を歩きながら、一むらの竹の秋の上に、やつと雲切れのした青空を眺めた。さうしてもう一度、これならば私も清貧に處したいと思つた。

此原稿を書いて居る時、丁度表具屋から私の所へ、一本の軸が届いて來た。軸は二度目に訪問した時、氏が私に書いてくれた七言絶句を仕立てたのである。「夢奠何如史事強。只興題識遜元章。延平劍合誇神異。合浦珠還好祕藏」――さう云ふ字が飛舞するやうに墨痕を走らせてゐるのを見ると、氏と相對してゐた何分かは、やはり未に懷しい氣がする。私はその何分かの間、獨り前朝の遺臣たる名士と相對してゐたのみではない。又實に支那近代の詩宗、海藏樓詩集の著者の謦咳に接してゐたのである。

十四　罪惡

拜啓。上海は支那第一の「惡の都會」だとか云ふ事です。何しろ各國の人間が、寄り集まつてゐる所ですから、自然さうもなり易いのでせう。私が見聞しただけでも、風儀は確に惡いやうです。たとへば支那の人力車夫が、追剝ぎに早變りをする事なぞは、始終新聞に載つてゐます。又人の話によれば、人力車を走らせてゐる間に、後から帽子を盜まれる事も、此處では家常茶飯事ださうです。その最もひどいのになると、女の耳環を盜む爲に耳を切るのさへあると云ひます。これは或は泥坊と云ふより、Psychopathia sexualis の一種が手傳ふのかも知れません。さう云ふ罪惡では數月前から、蓮英殺しと云ふ事件が、芝居にも小說にも仕組まれてゐます。これは此處では拆白黨と云ふ、つまり無賴の少年團の一人が、金剛石の指環を奪ふ爲に、蓮英と云ふ藝者を殺したのです。その又殺し方が、自動車へ乘せて、徐家滙近傍へ連れ出した擧句、絞り殺したと云ふのですから、支那では兎に角前例のない、新機軸を出した犯罪なのでせう。何でも世間の評判では、日本でも度度耳にする通り、探偵物なぞの活動寫眞が、惡影響を與へたのだと云ふ事でした。尤も蓮英と云ふ藝者は、私の見た寫眞によると、義理にも美人とは評されません。

勿論賣婬も盛です。青蓮閣なぞと云ふ茶館へ行けば、彼是薄暮に近い頃から、無數の賣笑婦が集まつてゐます。これを野雉と號しますが、ざつとどれも見た所は、二十歲以上とは思はれません。それが日本人なぞの姿を見ると、「アナタ、アナタ」と云ひながら、一度に周圍へ集まつて來ます。「アナタ」の外にもかう云ふ連中は、「サイゴ、サイゴ」と云ふ事を云ひます。「サイゴ」とは何の意味かと思ふと、これは日本の軍人たちが、日露戰爭に出征中、支那の女をつかまへては、近所の高粱の畑か何かへ、「さあ行かう」と云つたのが、濫觴だらうと云ふ事です。語原を聞けば落語のやうですが、何にせよ我我日本人には、餘り名譽のある話ではなささうです。それから夜は四馬路あたりに、人力車へ乘つた野雉たちが、必何人もうろついてゐます。この連中は客があると、その客は自分の車に乘せ、自分は步いて彼等の家へつれこむと云ふのが習慣ださうです。彼等はどう云ふ料簡か、大抵眼鏡をかけてゐます。事によると今の支那では、女が眼鏡をかける事は、新流行の一つかも知れません。

鴉片も半ばは公然と、何處でも吸つてゐるやうです。私の見に行つた鴉片窟なぞでは、かすかな豆ランプを中にしながら、賣笑婦も一人、客と一しよに、柄の長い煙管を啣へてゐました。その外人の話では、磨鏡黨とか男堂子とか云ふ、大へんな物もあるやうです。男堂子とは女の爲に、男が媚を賣るのであり、磨鏡黨とは客の爲に、女が婬戲を見せるのださうです。そんな事を聞か

されると、往來を通る支那人の中にも、辮髮を下げた Marquis de Sade なぞは何人もゐさうな氣がして來ます。又實際ゐるのでせう。或丁抹人が話したのでは、四川や廣東には六年ゐても、屍姦の噂は聞かなかつたのが、上海では近近三週間の內に、二つも實例が見當つたさうです。

　その上この頃ではシベリア邊から、男女とも怪しい西洋人が、大勢此處へ來てゐるやうです。私も一度友だちと一しよに、パブリツク・ガアドンを步いてゐた時、身なりの惡い露西亞人に、しつつこく金をねだられました。あれなぞは唯の乞食でせうが、餘り氣味の好いものぢやありません。尤も工部局がやかましい爲、上海もまづ大體としては、おひおひ風紀が改まるやうです。現に西洋人の方面でも、エル・ドラドオとかパレルモとか云ふ、如何はしいカツフエはなくなりました。しかしずつと郊外に近い、デル・モンテと云ふ所には、まだ商賣人が大勢來ます。

　"Green satin, and a dance, white wine and gleaming laughter, with two nodding ear-rings——these are *Lotus.*"

　これはユニイス・テイツチエンズが、上海の妓ロオタスを歌つた詩の一節です。「白葡萄酒と輝かしい笑ひと」——それは一ロオタスばかりぢやない、デル・モンテの卓に寄りながら、印度人を交へたオオケストラの音に、耳を貸してゐる女たちは、畢竟この外に出ないのです。（以上。）

十五　南國の美人（上）

上海では美人を大勢見た。見たのは如何なる因縁か、何時も小有天と云ふ酒樓だつた。此處は近年物故した淸道人李瑞淸が、贔屓にしてゐた家ださうである。「道道非常道、天天小有天」――さう云ふ洒落さへあると云ふ事だから、その贔屓も一方ならず、御念が入つてゐるのに違ひない。尤もこの有名な文人は、一度に蟹を七十匹、ぺろりと平げてしまふ位、非凡な胃袋を持つてゐたさうである。

一體上海の料理屋は、餘り居心の好いものぢやない。部屋毎の境は小有天でも無風流を極めた板壁である。その上卓子に並ぶ器物は、綺麗事が看板の一品香でも、日本の洋食屋と選ぶ所はない。その外雅敍園でも、杏花樓でも、乃至興華川菜館でも、味覺以外の感覺は、まあ滿足させられるよりも、ショックを受けるやうな所ばかりである。殊に一度波多君が、雅敍園を御馳走してくれた時には、給仕に便所は何處だと訊いたら、料理場の流しへしろと云ふ。實際又其處には私よりも先に、油じみた庖丁が一人、ちやんと先例を示してゐる。あれには少からず辟易した。

その代り料理は日本よりも旨い。聊か通らしい顏をすれば、私の行つた上海の御茶屋は、たと

へば瑞記とか厚德福とか云ふ、北京の御茶屋より劣つてゐる。が、それにも關らず、東京の支那料理に比べれば、小有天なぞでも確に旨い。しかし値段の安い事は、ざつと日本の五分の一である。

大分話が横道に外れたが、私が大勢美人を見たのは、神州日報の社長余洵氏と、食事を共にした時に勝るものはない。此も前に云つた通り、小有天の樓上にゐた時である。小有天は何しろ上海でも、夜は殊に賑かな三馬路の往來に面してゐるから、欄干の外の車馬の響は、殆一分も止む事はない。樓上では勿論談笑の聲や、唄に合せる胡弓の音が、しつきりなしに湧き返つてゐる。私はさう云ふ騷ぎの中に、玫瑰の茶を啜りながら、余君穀民が局票の上へ健筆を振ふのを眺めた時は、何だか御茶屋に來てゐると云ふより、郵便局の腰掛の上にでも、待たされてゐるやうな忙しさを感じた。

局票は洋紙にうねうねと、「叫―速至三馬路大舞臺東首小有天閩菜館―座　侍　酒　勿　延」と赤刷の文字をうねらせてゐる。確か雅敍園の局票には、隅に毋忘國恥と、排日の氣焔を擧げてゐたが、此處のには幸ひそんな句は見えない。(局票とは大阪の逢ひ狀のやうに、校書を呼びにやる用箋である。)余氏はその一枚の上に、私の姓を書いてから、梅逢春と云ふ三字を加へた。

「これがあの林黛玉です。もう行年五十八ですがね。最近二十年間の政局の祕密を知つてゐるの

は、大總統の徐世昌を除けば、この人一人だとか云ふ事です。あなたが呼ぶ事にして置きますから、參考の爲に御覽なさい。」

余氏はにやにや笑ひながら、次の局票を書き始めた。氏の日本語の達者な事は、嘗て日支兩國語の卓上演說か何かやつて、お客の德富蘇峰氏を感服させたとか云ふ位である。

その內に我我、——余氏と波多君と村田君と私とが食卓のまはりへ坐ると、まつさきに愛春と云ふ美人が來た。これは如何にも利巧さうな、多少日本の女學生めいた、品の好い丸顏の藝者である。なりは白い織紋のある、薄紫の衣裳に、やはり何か模樣の出た、靑磁色の褲子だつた。髮は日本の御下げのやうに、根もとを靑い紐に括つたきり、長長と後に垂らしてゐる。額に劉海(前髮)が下つてゐる所も、日本の少女と違はないらしい。その外胸には翡翠の蝶、耳には金と眞珠との耳環、手頸には金の腕時計が、いづれもきらきら光つてゐる。

十六　南國の美人（中）

私は大いに敬服したから、長い象牙箸を使ふ間も、つらつらこの美人を眺めてゐた。しかし料理がそれからそれへと、食卓の上へ運ばれるやうに、美人も續續とはいつて來る。到底一愛春ば

かりに、感歎してゐるべき場合ぢやない。私はその次にはいつて來た、時鴻と云ふ藝者を眺め出した。

この時鴻と云ふ藝者は、愛春より美人ぢやない。が、全體に調子の強い、何處か田園の匂を帶びた、特色のある顏をしてゐる。髮を御下げに括つた紐が、これは桃色をしてゐる外に、全然愛春と變りはない。着物には濃い紫緞子に、銀と藍と織りまぜた、五分程の縁がついてゐる。余作穀民の說明によると、この妓は江西の生まれだから、なりも特に時流を追はず、古風を存してゐるのだと云ふ。さう云へば紅や白粉も、素顏自慢の愛春よりも遙に濃艷を極めてゐる。私はその腕時計だの、(左の胸の)金剛石の蝶だの、大粒の眞珠の首飾りだの、右の手だけに二つ嵌めた寶石入りの指環だのを見ながら、いくら新橋の藝者でも、これ程燦然と着飾つたのは、一人もあるまいと感心した。

時鴻の次にはいつて來たのは、——さう一一書き立ててゐては、如何に私でもくたびれるから、跡は唯その中の二人だけをちよいと紹介しよう。その一人の洛娥と云ふのは、貴州の省長王文華と結婚するばかりになつてゐた所、王が暗殺された爲に、今でも藝者をしてゐると云ふ、甚薄命な美人だつた。これは黑い紋緞子に、匂の好い白蘭花を插んだきり、全然何も着飾つてゐない。その年よりも地味ななりが、涼しい瞳の持ち主だけに、如何にも清楚な感じを與へた。もう

一人はまだ十二三のおとなしさうな少女である。金の腕環や眞珠の首飾りも、この藝者がしてゐるのを見ると、玩具のやうにしか思はれない。しかも何とかからかはれると、世間一般の處子のやうに、恥しさうな表情を見せる。それが又不思議な事には、日本人だと失笑に堪へない、天竺と云ふ名の主人公だつた。

これらの美人は順順に、局票へ書いた客の名通り、我我の間に席を占める。が、私が呼んだ筈の、嬌名一代を壓した林黛玉は、容易に姿を現さない。その內に秦樓と云ふ藝者が、のみかけた紙卷を持つたなり、西皮調の汾河灣とか云ふ、宛轉たる唄をうたひ出した。藝者が唄をうたふ時には、胡弓に合はせるのが普通らしい。胡弓彈きの男はどう云ふ訣か、大抵胡弓を彈きながらも、殺風景を極めた鳥打帽や中折帽をかぶつてゐる。胡弓は竹のずんど切りの胴に、蛇皮を張つたのが多かつた。秦樓が一曲うたひやむと、今度は時鴻の番である。これは胡弓を使はずに自ら琵琶を彈じながら、何だか寂しい唄をうたつた。江西と云へば彼女の產地は、潯陽江上の平野である。中學生じみた感慨に耽ければ、楓葉荻花瑟瑟の秋に、江州の司馬白樂天が、靑衫を沾した琵琶の曲は、斯の如きものがあつたかも知れない。時鴻がすむと萍鄉がうたふ。萍鄉がすむと、――村田君が突然立ち上りながら「八月十五、月光明」と、西皮調の武家坡の唄をうたひ始めたのには一驚した。尤もこの位器用でなければ、君程複雜な支那生活の表裏に通曉する事は出來ないかも知

れない。
林黛玉の梅逢春がやつと一座に加はつたのは、もう食卓の鱶の鰭の湯が、荒らされてしまつた後だつた。彼女は私の想像よりも、餘程娼婦の型に近い、まるまると肥つた女である。顔も今では格段に、美しい器量とは思はれない。頬紅や黛を粧つてゐても、往年の麗色を思はせるのは、細い眼の中に漂つた、さすがにあでやかな光だけである。しかし彼女の年齢を思ふと、――これが行年五十八歳とは、どう考へても譃のやうな氣がする。まづ一見した所は、精精四十としか思はれない。殊に手なぞは子供のやうに、指のつけ根の關節が、ふつくりした甲にくぼんでゐる。なりは銀の縁をとつた、蘭花の黒緞子の衣裳に同じ鞘形の褲子だつた。それが耳環にも腕環にも、胸に下げた牌にも、べた一面に金銀の臺へ、翡翠と金剛石とを嵌めこんでゐる。中でも指環の金剛石なぞは、雀の卵程の大きさがあつた。これはこんな大通りの料理屋に見るべき姿ぢやない。罪惡と豪奢とが入り交つた、たとへば「天鵞絨の夢」のやうな、谷崎潤一郎氏の小説中に、髣髴さるべき姿である。
しかしいくら年はとつても、林黛玉は畢に林黛玉である。彼女が如何に才氣があるか、それは彼女の話振りでも、すぐに想像が出來さうだつた。のみならず彼女が何分かの後、胡弓と笛とに合はせながら、秦腔の唄をうたひ出した時には、その聲と共に迸る力も、確に群妓を壓してゐた。

十七　南國の美人（下）

「どうです、林黛玉は？」
彼女が席を去つた後、余氏は私にかう尋ねた。
「女傑ですね。第一若いのに驚きました。」
「あの人は何でも若い時分に眞珠の粉末を吞んでゐたさうです。眞珠は不老の藥ですからね。あの人は鴉片を吞まないと、もつと若くも見える人ですよ。」
その時はもう林黛玉の跡に、新に來た藝者が坐つてゐた。これは色の白い、小造りな、御孃樣じみた美人である。寶盡しの模樣を織つた、薄紫の緞子の衣裳に、水晶の耳環を下げてゐるのも、一層この妓の品の好さを助けてゐるのに違ひない。早速名前を尋ねて見たら、花寶玉と云ふ返事があつた。花寶玉、——この美人がこの名を發音するのは宛然たる鳩の啼き聲である。私は卷煙草をとつてやりながら、「布穀催春種」と云ふ杜少陵の詩を思ひ出した。
「芥川さん。」
余洵氏は老酒を勸めながら、言ひ憎さうに私の名を呼んだ。

「どうです、支那の女は？　好きですか？」
「何處の女も好きですが、——支那の女も綺麗ですね。」
「何處が好いと思ひますか？」
「さうですね。一番美しいのは耳かと思ひます。」

實際私は支那人の耳に、少からず敬意を拂つてゐた。日本の女は其處に來ると、到底支那人の敵ではない。日本人の耳には平すぎる上に、肉の厚いのが澤山ある。中には耳と呼ぶよりも、如何なる因果か顏に生えた、木の子のやうなのも少くない。按ずるにこれは、深海の魚が、盲目になつたのと同じ事である。日本人の耳は昔から、油を塗つた髮の後に、ずつと姿を隱して來た。が、支那の女の耳は、何時も春風に吹かれて來たばかりか、御丁寧にも寶石を嵌めた耳環なぞさへぶら下げてゐる。その爲に日本の女の耳は、今日のやうに墮落したが、支那のは自然と手入れの屆いた、美しい耳になつたらしい。現にこの花寶玉を見ても、丁度小さい貝殼のやうな、世にも愛すべき耳をしてゐる。西廂記の中の鶯鶯が、「他釵軃玉斜横。髻偏雲亂挽。日高猶自不明眸。暢好是懶懶。半晌擡身。幾回搔耳。一聲長歎。」と云ふのも、きつとかう云ふ耳だつたのに相違ない。笠翁は昔詳細に、支那の女の美を說いたが、（偶集卷之三、聲容部）未嘗この耳には、一言も述べる所がなかつた。この點では偉大な十種曲の作者も、當に芥川

龍之介に、發見の功を讓るべきである。

耳の說を辯じた後、私は他の三君と一しよに、砂糖のはいつた粥を食つた。其から妓館を見物しに、賑かな三馬路の往來へ出た。

妓館は大抵横へ切れた、石疊みの露路の兩側にある。余氏は我我を案内しながら、軒燈の名前を讀んで行つたが、やがて或家の前へ來ると、さつさと中へはいつて行つた。はいつた所には不景氣な土間に、身なりの惡さうな支那人どもが、飯を食つたり何かしてゐる。これが藝者のゐる家とは、前以て聞いてゐない限り、誰でも譃としか思はれまい。しかしすぐに階段を上ると、小ぢんまりした支那のサロンに、明るい電燈が輝いてゐる。紫檀の椅子を並べたり、大きた鏡を立てたりした所は、さすがに一流の妓館らしい。靑い紙を貼つた壁にも、硝子を入れた南畫の額が、何枚もずらりと懸つてゐる。

「支那の藝者の檀那になるのも、容易な事ぢやありませんね。何しろこんな家具類さへ、みんな買つてやるのですから。」

余氏は我我と茶を飲みながら、いろいろ嫖界の說明をした。

「まあ今夜來た藝者なぞだと、どうしても檀那になるまでに、五百圓位は入るでせう。」

その間にさつきの花寶玉が、ちよいと次の間から顏を出した。支那の藝者は座敷へ出ても、五

分ばかりすると歸つてしまふ。小有天にゐた花寶玉が、もう此處にゐるのも不思議はない。のみならず支那では檀那なるものが、——後は井上紅梅氏著「支那風俗卷之上、花柳語彙」を參照するが好い。

我我は二三人の藝者と一しよに、西瓜の種を撮んだり、御先煙草をふかしたりしながら少時の閒無駄話をした。尤も無駄話をしたと云つても、私は啞に變りはない。波多君が私を指さしながら、惡戲さうな子供の藝者に、「あれは東洋人ぢやないぜ。廣東人だぜ。」とか何とか云ふ。藝者が村田君に、本當かと云ふ。村田君も「さうだ。さうだ。」と云ふ。そんな話を聞きながら、私は獨り漫然とくだらない事を考へてゐた。——日本にトコトンヤレナと云ふ唄がある。あのトンヤレナは事によると、東洋人の變化かも知れない。……

二十分の後、やや退屈を覺えた私は、部屋の中をあちこち步いた次手に、そつと次の閒を覗いて見た。すると其處の電燈の下には、あの優しい花寶玉が、でつぷり肥つた阿姨と一しよに、晚餐の食卓を圍んでゐた。食卓には皿が一枚しかない。その又一つは菜ばかりである。花寶玉はそれでも熱心に、茶碗と箸とを使つてゐるらしい。私は思はず微笑した。小有天に來てゐた花寶玉は、成程南國の美人かも知れない。しかしこの花寶玉は、——菜根を嚙んでゐる花寶玉は、蕩兒の玩弄に任すべき美人以上の何物かである。私はこの時支那の女に、初めて女らしい親しみを感

じた。

十八　李人傑氏

「村田君と共に李人傑氏を訪ふ。李氏は年未二十八歳、信條よりすれば社會主義者、上海に於ける『若き支那』を代表すべき一人なり。途上電車の窓より、青青たる街路の樹、既に夏を迎へたるを見る。天陰、稀に日色あり。風吹けども塵を揚げず。」

これは李氏を訪ねた後、書き留めて置いた手控へである。今手帳をあけて見ると、走り書きにした鉛筆の字が、消えかかつたのも少くない。文章は勿論蕪雜である。が、當時の心もちは、或はその蕪雜な所に、反つてはつきり出てゐるかも知れない。

「僮あり。直に予等を引いて應接室に到る。長方形の卓一、洋風の椅子二三、卓上に盤あり。陶製の果物を盛る。この梨、この葡萄、この林檎、――この拙き自然の摸倣以外に、一も目を慰むべき裝飾なし。然れども室に塵埃を見ず。簡素の氣に滿てるは愉快なり。

「數分の後、李人傑氏來る。氏は小づくりの青年なり。やや長き髮。細面。血色は餘り宜しからず。才氣ある眼。小さな手。態度は頗る眞摯なり。その眞摯は同時に又、鋭敏なる神經を想察せ

しむ。刹那の印象は惡しからず。恰も細且強靭なる時計の彈機に觸れしが如し。卓を隔てて予と相對す。氏は鼠色の大掛兒を着たり。」

李氏は東京の大學にゐたから、日本語は流暢を極めてゐる。殊に面倒な理窟なども、はつきり相手に會得させる事は、私の日本語より上かも知れない。それから手控へには書いてないが、我我の通つた應接室は、二階の梯子が部屋の隅へ、ぢかに根を下した構造だつた。その爲に梯子を下つて來ると、まづ御客には足が見える。李人傑氏の姿にしても、まつさきに見たのは支那靴だつた。私はまだ李氏以外に、如何なる天下の名士と雖も、足からさきへ相見した事はない。

「李氏云ふ。現代の支那は如何にすべきか？　この問題を解決するものは、共和にあらず復辟にあらず。這般の政治革命が、支那の改造に無力なるは、過去既に之を證し、現在亦之を證す。然らば吾人の努力すべきは、社會革命の一途あるのみと。こは文化運動を宣傳する『若き支那』の思想家が、いづれも呼號する主張なり。李氏又云ふ。社會革命を齎さんとせば、プロパガンダに依らざるべからず。この故に吾人は著述するなり。且覺醒せる支那の士人は、新しき智識に冷淡ならず。否、智識に餓ゑつつあり。然れどもこの餓を充すべき書籍雜誌に乏しきを如何。予は君に斷言す。刻下の急務は著述にありと。或は李氏の言の如くならん。現代の支那には民意なし。民意なくんば革命生ぜず。況んやその成功をや。李氏又云ふ。種子は手にあり。唯萬里の荒蕪、或

は力の及ばざらんを惧る。吾人の肉體、この勞に堪ふるや否や、憂ひなきを得ざる所以なりと。言ひ畢つて眉を顰む。予は李氏に同情したり。李氏又云ふ。近時注目すべきものは、支那銀行團の勢力なり。その背後の勢力は問はず、北京政府が支那銀行團に、左右せられんとする傾向あるは、打消し難き事實なるべし。こは必しも悲しむべきにあらず。何となれば吾人の敵は――吾人の砲火を集中すべき的は、一銀行團に定まればなりと。予云ふ。予は支那の藝術に失望したり。予が眼に入れる小說繪畫、共に未だ談ずるに足らず。然れども支那の現狀を見れば、この土に藝術の興隆を期する、期するの寧ろ誤れるに似たり。君に問ふ、プロパガンダの手段以外に、藝術を顧慮する餘裕ありやと。李氏云ふ。無きに近しと。」

私の手控へはこれだけである。が、李氏の話しぶりは、如何にもきびきびしたものだつた。一しよに行つた村田君が「あの男は頭が好かもんなあ。」と感歎したのも不思議ぢやない。のみならず李氏は留學中、一二私の小說を讀んだとか何とか云ふ事だつた。これも確に李氏に對する好意を增したのに相違ない。私のやうな君子人でも、小說家などと云ふものは、この位虛榮を求める心が、旺盛に出來上つてゐるものである。

十九　日本人

上海紡績の小島氏の所へ、晩飯に呼ばれて行つた時、氏の社宅の前の庭に、小さな櫻が植わつてゐた。すると同行の四十起氏が、「御覧なさい。櫻が咲いてゐます。」と云つた。その又言ひ方には不思議な程、嬉しさうな調子がこもつてゐた。玄關に出てゐた小島氏も、もし大袈裟に形容すれば、亞米利加歸りのコロムブスが、土産でも見せるやうな顏色だつた。その癖櫻は瘦せ枯れた枝に、乏しい花しかつけてゐなかつた。私はこの時兩先生が、何故こんなに大喜びをするのか、内心妙に思つてゐた。しかし上海に一月程ゐると、これは兩氏ばかりぢやない、誰でもさうだと云ふ事を知つた。日本人はどう云ふ人種か、それは私の知る所ぢやない。が、兎に角海外に出ると、その八重たると一重たるとを問はず、櫻の花さへ見る事が出來れば、忽幸福になる人種である。

×

同文書院を見に行つた時、寄宿舍の二階を歩いてゐると、廊下のつき當りの窓の外に、青い穗

麥の海が見えた。その麥畑の處處に、平凡な菜の花の群つたのが見えた。最後にそれ等のずつと向うに、――低い屋根が續いた上に、大きな鯉幟のあるのが見えた。鯉は風に吹かれながら、鮮かに空へ飜つてゐた。この一本の鯉幟は、忽風景を變化させた。私は支那にゐるのぢやない。日本にゐるのだと云ふ氣になつた。しかしその窓の側へ行つたら、すぐ目の下の麥畑に、支那の百姓が働いてゐた。それが何だか私には、怪しからんやうな氣を起させた。私は遠い上海の空に、日本の鯉幟を眺めたのは、やはり多少愉快だつたのである。櫻の事なぞは笑へないかも知れない。

×

上海の日本婦人倶樂部に、招待を受けた事がある。場所は確か佛蘭西租界の、松本夫人の邸宅だつた。白い布をかけた圓卓子、その上のシネラリアの鉢、紅茶と菓子とサンドウイツチと。――卓子を圍んだ奧さん達は、私が豫想してゐたよりも、皆溫良貞淑さうだつた。私はさう云ふ奧さん達と、小說や戲曲の話をした。すると或奧さんが、かう私に話しかけた。

「今月中央公論に御出しになつた『鴉』と云ふ小說は、大へん面白うございました。」

「いえ、あれは惡作です。」

私は謙遜な返事をしながら、「鴉」の作者宇野浩二に、この問答を聞かせてやりたいと思つた。

×

南陽丸の船長竹内氏の話に、漢口のバンドを歩いてゐたら、篠懸の並木の下のベンチに、英吉利だか亞米利加だかの船乘が、日本の女と坐つてゐた。その女は一と目見ても、職業がすぐにわかるものだつた。竹内氏はそれを見た時に、不快な氣もちがしたさうである。私はその話を聞いた後、北四川路を歩いてゐると、向うへ來かかつた自動車の中に、三人か四人の日本の藝者が、一人の西洋人を擁しながら、頻にはしやいでゐるのを見た。が、別段竹内氏のやうに、不快な氣もちにはならなかつた。が、不快な氣もちになるのも、まんざら理解に苦しむ訣ぢやない。いや、寧ろさう云ふ心理に、興味を持たずにはゐられないのである。この場合は不快な氣持だけだが、もしこれを大にすれば、愛國的義憤に違ひないぢやないか？

×

何でもXと云ふ日本人があつた。Xは上海に二十年住んでゐた。結婚したのも上海である。子が出來たのも上海である。金がたまつたのも上海である。その爲かXは上海に熱烈な愛着を持つ

てゐた。たまに日本から客が來ると、何時も上海の自慢をした。建築、道路、料理、娯樂、——いづれも日本は上海に若かない。上海は西洋も同然である。日本なぞに齷齪してゐるより、一日も早く上海に來給へ。——さう客を促しさへした。そのXが死んだ時、遺言狀を出して見ると、意外な事が書いてあつた。——「骨は如何なる事情ありとも、必日本に埋むべし。……」

私は或日ホテルの窓に、火のついたハヴアナを啣へながら、こんな話を想像した。Xの矛盾は笑ふべきものぢやない。我我はかう云ふ點になると、大抵Xの仲間なのである。

二十　徐家滙

明の萬歴年間。墻外。處處に柳の立木あり。墻の彼方に天主堂の屋根見ゆ。その頂の黄金の十字架、落日の光に輝けり。雲水の僧一人、村の童と共に出で來る。

雲水。徐公の御屋敷はあすこかい？

童。あすこだよ。あすこだけれど——叔父さんはあすこへ行つたつて、御齋の御馳走にはなれないぜ、殿様は坊さんが大嫌ひだから。——

雲水。よし。よし。そんな事はわかつてゐる。

童。わかつてゐるのなら、行かなければ好いのに。

雲水。(苦笑)お前は中中口が惡いな。私は掛錫を願ひに行くのぢやない。天主教の坊さんと問答をしにやつて來たのだ。

童。さうかい。ぢや勝手におし。御家來たちに打たれても知らないから。――

童走り去る。

雲水。(獨白)あすこに堂の屋根が見えるやうだが、門は何處にあるのかしら。

紅毛の宣教師一人、驢馬に跨りつつ通りかかる。後に僕一人從ひたり。

雲水。もし、もし。

宣教師驢馬を止む。

雲水。(勇猛に)什麼の處より來る？

宣教師。(不審さうに)信者の家に行つたのです。

雲水。黄巣過ぎて後、還つて劍を收得するや否や？

宣教師呆然たり。

雲水。還つて劍を收得するや否や？　道へ。道へ。道はなければ、――

雲水如意を揮ひ、將に宣教師を打たんとす。僕雲水を突き倒す。

僕。氣違ひです。かまはずに御出なさいまし。
宣教師。可哀さうに。どうも眼の色が妙だと思つた。
宣教師等去る。雲水起き上る。
雲水。忌忌しい外道だな。如意まで折つてしまひ居つた。鉢は何處へ行つたかしら。
墻内よりかすかに讃頌の聲起る。

× × × × × ×

淸の雍正年間。草原。處處に柳の立木あり。その間に荒廢せる禮拜堂見ゆ。村の娘三人、いづれも籃を腕にかけつつ、蓬なぞを摘みつつあり。
甲。雲雀の聲がうるさい位だわね。
乙。ええ。――あら、いやな蜥蜴だ事。
甲。姉さんの御嫁入りはまだ？
乙。多分來月になりさうだわ。
丙。あら、何でせう、これは？（土にまみれたる十字架を拾ふ。丙は三人中、最も年少なり。）
人の形が彫つてあるわ。

乙。どれ？　ちよいと見せて頂戴。これは十字架と云ふものだわ。
丙。十字架つて何の事？
乙。天主教の人の持つものだわ。これは金ぢやないかしら？
甲。およしなさいよ。そんな物を持つてゐたり何かすると、又張さんのやうに首が斬られるわ。
丙。ぢや元の通り埋て置きませうか？
甲。ねえ、その方が好くはなくつて？
乙。さうねえ。その方が間違ひなささうだわね。
娘等去る。數時間の後、暮色次第に草原に迫る。丙、盲目の老人と共に出で來る。
丙。この邊だつたわ。お祖父さん。
老人。ぢや早く捜しておくれ。邪魔がはいるといけないから。
丙。ほら、此處にあつたわ、これでせう？
新月の光。老人は十字架を手にせる儘、徐に默禱の頭を垂る。

×　　×　　×　　×　　×　　×

中華民國十年。麥畑の中に花崗石の十字架あり。柳の立木の上に、天主堂の尖塔、屹然と雲端

を摩せるを見る。日本人五人、麥畑を縫ひつつ出で來る。その一人は同文書院の學生なり。

甲。あの天主堂は何時頃出來たものでせう？

乙。道光の末ださうですよ。（案内記を開きつつ）奥行二百五十呎、幅百二十七呎、あの塔の高さは百六十九呎ださうです。

學生。あれが墓です。あの十字架が、――

甲。成程、石柱や石獸が殘つてゐるのを見ると、以前はもつと立派だつたのでせうね。

丁。さうでせう。何しろ大臣の墓ですから。

學生。この煉瓦の臺座に、石が嵌めこんであるでせう。これが徐氏の墓誌銘です。

丁。明故少保加贈大保禮部尚書兼文淵閣大學士徐文定公墓前十字記とありますね。

甲。墓は別にあつたのでせうか？

乙。さあ、さうかと思ひますが、――

甲。十字架にも銘がありますね。十字聖架萬世瞻依か。

丙。（遠方より聲をかける。）ちよいと動かずにゐてくれ給へ。寫眞を一枚とらせて貰ふから。

四人十字架の前に立つ。不自然なる數秒の沈默。

二十一　最後の一瞥

村田君や波多君が去つた後、私は巻煙草を啣へた儘、鳳陽丸の甲板へ出て見た。電燈の明い波止場には、もう殆人影も見えない。その向うの往來には、三階か四階の煉瓦建が、ずつと夜空に聳えてゐる。と思ふと苦力が一人、鮮かな影を落しながら、目の下の波止場を歩いて行つた。あの苦力と一しよに行けば、何時か護照を貰ひに行つた日本領事館の門の前へ、自然と出てしまふのに相違ない。

私は靜かな甲板を、船尾の方へ歩いて行つた。此處から川下を眺めると、バンドに沿うた往來に、點點と灯が燦いてゐる。蘇州河の口に渡された、晝は車馬の絶えた事のないガアドン・ブリツヂは見えないかしら。その橋の袂の公園は、若葉の色こそ見えないが、あすこに群つた木立ちらしい。この間あすこに行つた時には、白白と噴水が上つた芝生に、S・M・Cの赤半被を着た、背むしのやうな支那人が一人、巻煙草の殼を拾つてゐた。あの公園の花壇には、今でも鬱金香や黄水仙が、電燈の光に咲いてゐるであらうか？　向うへあすこを通り抜けると、庭の廣い英吉利領事館や、正金銀行が見える筈である。その横を川傳ひにまつ直行けば、左へ曲る横町に、ライ

シアム・シアタアも見えるであらう。あの入り口の石段の上には、コミツク・オペラの畫看板はあつても、もう人出入は途絶えたかも知れない。其處へ一臺の自動車が、まつ直ぐに河岸を走つて來る。薔薇の花、絹、頸飾りの琥珀、――それらがちらりと見えたと思ふと、すぐに眼の前から消えてしまふ。あれはきつとカルトン・カツフエへ、舞蹈に行つてゐたのに違ひない。その跡は森とした往來に、誰か小唄をうたひながら、靴音をさせて行くものがある。Chin chin Chinaman――私は暗い黃浦江の水に、煙草の吸ひさしを抛りこむと、ゆつくりサロンへ引き返した。

　サロンにもやはり人影はない。唯絨氈を敷いた床に、鉢物の蘭の葉が光つてゐる。私は長椅子によりかかりながら、漫然と囘想に耽り出した。――吳景濂氏に會つた時、氏は大きな一分刈の頭に、紫の膏藥を貼りつけてゐた。さうして其處を氣にしながら、「腫物が出來ましてね。」とこぼしてゐた。あの腫物は直つたかしら？――醉歩蹣跚たる四十起氏と、暗い往來を歩いてゐたら、丁度我我の頭の上に、眞四角の小窓が一つあつた。窓は雨雲の垂れた空へ、斜に光を射上げてゐた。さうして其處から小鳥のやうに、若い支那の女が一人、目の下の我我を見下してゐる。四十起氏はそれを指さしながら、「あれです、廣東娼は。」と敎へてくれた。あすこには今夜も不相變、あの女が顏を出してゐるかも知れない。――樹木の多い佛蘭西租界に、輕快な馬車を走らせてゐると、ずつと前方に支那の馬丁が、白馬の頭を引つ張つて行く。その馬の一頭がどう云ふ訣か、

突然地面へころがつてしまつた。すると同乗の村田君が、「あれは背中が搔いんだよ。」と、私の疑念を晴らしてくれた。――そんな事を思ひ續けながら、私は煙草の箱を出しに、間着のポケツトへ手を入れた。が、つかみ出したものは、黄色い埃及の箱ではない、先夜其處に入れ忘れた、支那の芝居の戲單である。と同時に戲單の中から、何かがほろりと床へ落ちた。何かが、――一瞬間の後、私は素枯れた白蘭花を拾ひ上げてゐた。白蘭花はちよいと嗅いで見たが、もう匂さへ殘つてゐない。花びらも褐色に變つてゐる。「白蘭花、白蘭花」――さう云ふ花賣りの聲を聞いたのも、何時か追憶に過ぎなくなつた。この花が南國の美人の胸に、匂つてゐるのを眺めたのも、今では夢と同樣である。私は手輕な感傷癖に、墮し兼ねない危險を感じながら、素枯れた白蘭花を床へ投げた。さうして卷煙草へ火をつけると、立つ前に小島氏が送つてくれた、メリイ・ストオプスの本を讀み始めた。

（大正十年八月―九月）

江南游記

前置き

私はつい昨日の朝、本郷臺から藍染橋へ、ぶらぶら坂を下つて行つた。すると二人の青年紳士が、反對にその坂を登つて來た、私も男の淺間しさに、すれ違ふ相手が女性でないと、滅多に行人には注意しない。が、この時はどう云ふ訣か、まだ五六間距離のある内から、相手の風采に氣をつけてゐた。殊にその一人が薄青い背廣に、雨外套をひつかけたのには、血色の好い瓜實顏や、細い銀の柄の杖と共に、瀟洒たる趣を感じてゐた。二人は何か話しながら、ゆつくり足を運んで來る。――それが愈すれ違つた時、私の耳は意外にも、卒然曖喲と云ふ間投詞を捉へた。曖喲！私は心の躍るのを感じた。それは何も彼等二人が、支那人だつたのに驚いたのではない。この偶然耳にした曖喲と云ふ言葉の爲にいろいろな記憶がよみがへつたのである。

私は北京の紫禁城を思つた。洞庭湖に浮んだ君山を思つた。南國の美人の耳を思つた。雲崗や

龍門の石佛を思つた。京漢鐵道の南京蟲を思つた。廬山の避暑地、金山寺の塔、蘇小小の墓、秦淮の料理屋、胡適氏、黃鶴樓、大門牌の煙草、梅蘭芳の嫦娥を思つた。同時に又腸胃の病の爲に、三月ばかり中絕してゐた、私の紀行の事をも思つた。

私は彼等を振り返つた。彼等は勿論悠悠と不相變何か話しながら、霜晴れの坂を登つて行つた。しかし私の耳の中には、未に噯喲の聲が殘つてゐる。彼等は何處の下宿から、何處へ出かける途中であらう？ 事によると彼等の一人は、「留東外史」の張全のやうに、戶山ケ原の雜木林へ、女學生をつれ出す所かも知れない。さう云へばもう一人の留學生も、同じ小說の王甫察のやうに、馴染の藝者位はありさうである。私はこんな彼等にとつては失禮な想像を逞しくしながら、藍染橋の停留場へ出ると、田端の家へ歸る爲に、動坂行きの電車に乘つた。

處が家へ歸つて見ると、大阪の社から電報が來てゐた。文句は「ゲンコウヲタノミマス」である。私は度度薄田氏に、迷惑をかけるのに恐縮した。しかし正直に白狀すれば、重重恐れ入りながらも、腹の工合が惡かつたり、寢不足が何日も續いたり、感興がなかつたりする所から、ペンを執らない事もないではない。それがこの電報を見た時は、明日にも早速「上海游記」の續稿を書き出さうと云ふ氣になつた、噯喲！ さう云ふ聲が私の耳に、忘れない響を殘したのは、薄田氏の爲にも私の爲にも、意外な仕合せになつた訣である。

私の知つてゐる支那語の數は、やつと二十六しかない。その中の一つが偶然にも、私の耳に止まつたばかりか、兎に角何かを目ざめさせた事は、大袈裟に云へば天惠である。尤も私の惡文の爲に惱まされる讀者の身になれば、天惠より寧ろ天災かも知れない。しかし天災と考へれば、讀者も諦め易さうである。かたがた噯喲の聲を耳にしたのは、御互に感謝して然るべきであらう。これが本文へとりかかる前に、から云ふ前置きを加へる所以である。

一　車中

杭州行きの汽車へ乘つてゐたら、車掌が切符を檢べに來た。この車掌はオリヴ色の洋服に金筋入りの大黑帽をかぶつてゐる。日本の車掌に比べると、何だか敏活な感じがしない。が、勿論さう考へるのは、我我の僻見の祟りである。我我は車掌の風采にさへ、我我の定木を振り廻しやすい。ジョン・ブルは乙に澄まさなければ、紳士でないと思つてゐる。アンクル・サムは金がなければ、紳士でないと思つてゐる。ジヤツプは、――少くとも紀行文を草する以上、旅愁の淚を落したり、風景の美に見惚れたり、游子のポオズをつくらなければ、紳士でないと思つてゐる。我我は如何なる場合でも、から云ふ僻見に捉はれてはならん。――私はこの悠悠とした車掌が、切

符を檢べてゐる間に、かう云ふ僻見論を發表した。尤も支那人の車掌を相手に、氣焰を揚げた訣ではない。案內役に同行した、村田烏江君に吹きかけたのである。

汽車の外は何時まで行つても、菜畑かげんげ野ばかりである。その中に時時羊がゐたり、臼挽き小屋があつたりする。と思ふと大きい水牛も、のそのそ田の畔を歩いてゐた。五六日前やはり村田君と、上海の郊外を歩いてゐたら、突然一頭の水牛に路を塞がれた事がある。私は動物園の柵內は知らず、目のあたりこんな怪物に遭遇した事は始めてだから、つい感心した拍子に、ほんの半步ばかり退却した。すると忽ち村田君に、「臆病だなあ。」と輕蔑された。今日は勿論驚嘆はしない。が、ちよいと珍しかつたから、「君、水牛がゐるぜ。」と云はうとしたが、まあ、泰然と默つてゐる事にした。村田君もきつとあの瞬間は、私も中中支那通になつたと、敬服してゐたに相違ない。

汽車は一室八人の、小さい部屋に分かれてゐる。尤もこの車室には、我我二人の外誰もゐない。室のまん中の卓子の上には、土瓶や茶碗が並べてある。其處へ時時青服の給仕が熱いタオルを持つて來てくれる。乘り心は餘り悪い方ぢやない。但し我我が乘つてゐても、この客車は正に一等である。一等と云へば何時か鎌倉から、ちよいと一等へ乘つた所が、勿體なくも或宮樣と、たつた二人ぎりになつたのには、恐懼の至りに堪へなかつたけ。しかもあの時持つてゐたのは、白切

符だつたか赤切符だつたか、其邊も實は確ぢやない。……

二 車中（承前）

その中に汽車は嘉興を過ぎた。ふと窓の外を覗いて見ると、水に臨んだ家家の間に、高高と反つた石橋がある。水には兩岸の白壁も、はつきり映つてゐるらしい。その上南畫に出て來る船も、二三艘水際に繋いである。私は芽を吹いた柳の向うに、こんな景色を眺めた時、急に支那らしい心持になつた。

「君、橋がある。」

私は大威張りにかう云つた。

「うん、橋がある。ああ云ふ橋は好かもんなあ。」

村田君もすぐに贊成した。

しかしその橋が隱れたと思ふと、今度は一面の桑畑の彼方に、廣告だらけの城壁が見えた。古色蒼然たる城壁に、生生しいペンキの廣告をするのは、現代支那の流行である。無敵牌牙粉、嬰孩香烟、――さう云ふ齒磨や煙草の廣告は、沿線到る所の停車場に、殆見えなかつたと云ふ

事はない。支那は抑如何なる國から、から云ふ廣告術を學んで來たか？　その答を與へるものは、此處にも諸方に並び立つた、ライオン齒磨だの仁丹だのの、俗惡を極めた廣告である。日本は實にこの點でも、隣邦の厚誼を盡したものらしい。

汽車の外は不相變、菜畑か桑畑かげんげ野である。どうかすると松柏の間に、古塚のあるのが見える事もある。

「君、墓があるぜ。」

村田君は今度は橋の時程、私の興味に應じなかつた。

「我我は同文書院にゐた時分、ああ云ふ墓の崩れたやつから、度度頭蓋骨を盜んで來たですよ。」

「盜んで來て何にするのですか？」

「おもちやにし居つたですよ。」

我我は茶を啜りながら、腦味噌の焦げたのは肺病の藥だとか、人肉の味は羊肉のやうだとか、野蠻な事を話し合つた。汽車の外には何時の間にか、茨になつた油菜の上に、赤赤と西日が流れてゐる。

三　杭州の一夜（上）

杭州の停車場へ着いたのは、彼是午後の七時だつた。停車場の柵の外には、薄暗い電燈のともつた下に、稅關の役人が控へてゐる。私はその役人の前へ、赤革の鞄を持つて行つた。鞄の中には手當り次第に、書物だのシャツだのボンボンの袋だの、いろいろな物が詰めこんである。役人はさも悲しさうに、一一シャツを疊み直したり、ボンボンのこぼれたのを拾つたり、鞄の中の整理に着手してくれた。いや、少くともさう見えた程、一通り檢査をすませた後は、ちやんと鞄の中が片附いたのである。私は彼が鞄の上へ、白墨の圓を描いてくれた時、「多謝」と支那語の御禮を云つた。が、彼はやはり悲しさうに、私には眼さへ注がなかつた。

其處にはまだ役人の外にも、宿引きが大勢集まつてゐる。彼等は我我の姿を見ると、口口に何か喚きながら、小さい旗を振り廻したり、色紙の引き札をつきつけたりした。が、我我が泊る筈の、新新旅館の旗なるものは、何處を搜しても見當らない。すると圖圖しい宿引きどもは、滔滔と何か饒舌り立てては、我我の鞄へ手をかけようとする。如何に村田君に怒鳴られた所が、少しも辟易する樣子がない。私は勿論この場合も、雀が丘のナポレオンのやうに、悠然と彼等を睥睨

してゐた。しかし何分か待たされた後、怪しげな背廣を一着した新新旅館の宿引きが、やつと我我の前に現れた時には、やはり正直な所は嬉しかつた。

我我は宿引きの命令通り、停車場前の人力車に乗つた。車は梶棒を上げたと思ふと、いきなり狹い路へ飛びこんだ。路は殆どまつ暗である。敷石は凸凹を極めてゐるから、車の揺れるのも一通りではない。その中に一度芝居小屋があるのか、騒騒しい銅鑼の音を聞いた事がある。が、其處を通り過ぎた後は、人聲一つ聞えて來ない。唯生暖い夜の町に、我我の車の音ばかりがする。私は葉卷を啣へながら、何時か亞剌比亞夜話じみた、ロマンテイツクな氣もちを弄び始めた。

その内に路が廣くなると、時時戸口に電燈をともした、大きい白壁の邸宅が見える。――と云つたのでは意を盡さない。始は唯闇の中から、朦朧と白い物が浮き上つて來る。その次にそれが星のない夜空に、はつきり聳え立つた白壁になる。それから壁を切り拔いた、細長い戸口が現れて來る。戸口には赤い標札の上に、電燈の光が當つてゐる。――と思ふと戸口の奧にも、電燈のともつた部屋部屋が見える。聯、瑠璃燈、鉢植ゑの薔薇、どうかすると人の姿も見える。このちらりと眼にはいる、明るい邸宅の内部程、不思議に美しい物は見た事がない。其處には何か私の知らない、祕密な幸福があるやうな氣がする。スマトラの忘れな草、鴉片の夢に見る白孔雀――何かそんな物があるやうな氣がする。古來支那の小說には、深夜路に迷つた孤客が、堂堂たる邸

宅に泊めて貰ふ。處が翌朝になつて見ると、大廈高樓と思つたのは、草の茂つた古塚だつたり、山蔭の狐の穴だつたりする、――さう云ふ種類の話が多い。私は日本にゐる間、この種類の鬼狐の譚も、机上の空想だと思つてゐた。處が今になつて見ると、それはたとひ空想にしても、支那の都市や田園の夜景に、然るべき根ざしを持つてゐる。夜の底から現れて來る、燈火に滿ちた白壁の邸宅、――その夢のやうな美しさには、古今の小說家も私と同樣、超自然を感じたのに相違ない。さう云へば今見た邸宅の戶口には、隴西の李廣と云ふ標札があつた。事によるとあの家の中には、昔の儘の李太白が、幻の牡丹を眺めながら、玉盞を傾けてゐるかも知れない。私はもし彼に會つたら、話して見たい事が澤山ある。彼は一體太白集中、どの刊本を正しいとするか？ジユデイト・ゴオテイエが飜譯した、佛蘭西語の彼の采蓮の曲には、吹き出してしまふか腹を立てるか？　胡適氏だとか康白情氏だとか、現代の詩人の白話詩には、どう云ふ見解を持つてゐるか？――そんな出たらめを考へてゐる内に、車は忽ち橫町を曲ると、無暗に幅の廣い往來へ出た。

四　杭州の一夜（中）

この往來の兩側には、明るい店店が並んでゐる。が、人通りは疎らだから、少しも陽氣な心も

ちがしない。寧ろ町幅が廣いだけに、如何にも支那の新開地らしい、妙な寂しさを與へるだけである。

「これが城外の町、——この突き當りが西湖ですよ。」

後の車に乘つた村田君は、かう私に聲をかけた。西湖！　私は往來の外れを眺めた。しかしいくら西湖でも、闇夜に鎖されてゐては仕方がない。唯車上の私の顏には、その遙な闇の中から、涼しい風が流れて來る。私は何だか月島あたりへ、十三夜を見にでも來たやうな氣がした。

車は少時走つた後、とうとう西湖のほとりへ出た。其處には電燈をつけ並べた、大きい旅館が二三軒ある。が、それもさつきの店店のやうに、明るい寂しさを加へるに過ぎない。西湖は薄白い往來の左に、暗い水面を廣げたなり、ひつそりと靜まり返つてゐる。そのだだつ廣い往來にも、我我二人の車の外は、犬の子一つ歩いてゐない。私は晝のやうな旅館の二階に、去來する人影を眺めながら、晩飯だのベツドだの新聞だの、——要するに「文明」が戀しくなり出した。しかし車屋は不相變、默默と走り續けてゐる。路も行人を絶つた儘、何處まで行つても盡きさうぢやない。旅館も、——旅館はもうずつと後になつた。今では唯湖の縁に、柳らしい樹ばかり並んでゐる。

「おい、君、新新旅館はまだ遠いのかね？」

私は村田君を振り返つた。すると村田君の車屋が、咄嗟にその意味を想像したのか、君よりも

先に返事をした。

「十里！　十里！」

私は急に悲しい氣がし出した。この上まだ十里も先だとすると、新新旅館に着かない内に、夜が明けてしまふのに相違ない。して見れば今夜は斷食である。私はもう一度村田君へ、我ながら情無い聲をかけた。

「十里とは驚いたな。僕は腹が減つて來たがね。」

「わしも減つた。」

村田君は車上に腕組みをした儘、恬然と支那煙草を啣へてゐた。

「十里位何でもないですよ。支那里數の十里だから、――」

私はやつと安心した。が、忽ち又がつかりした。如何に六町一里だと云つても、十里となれば六十町ある。この空腹を抱へながら、まだ日本の一里以上、闇夜の車に搖られるのは、何人にも嬉しい行程ぢやない。私は失望を紛らせる爲に、昔習つた獨逸文法の規則を、一一口の中に繰り返し始めた。

それが名詞から始まつて、強變化動詞に辿りついた時、ふとあたりを透かして見ると、何時か道が狹くなつた上に、樹木なぞも左右に茂つてゐる。殊に不思議に思はれたのは、その樹の間に

飛んでゐる、大きい螢の光だつた。螢と云へば俳諧でも、夏の季題ときまつてゐる。が、今はまだ四月だから、それだけでも妙としか思はれない。おまけにその光の輪は、ぽつと明るくなる度に、あたりの闇が深いせゐか、鬼灯程もありさうな氣がする。私はこの青い光に、燐火を見たやうな無氣味さを感じた。と同時にもう一度、ロマンテイツクな氣もちに浸るやうになつた。しかし肝腎の西湖の夜色は、家の蔭か何かに隱れたらしい。路の左の樹木の向うは、ずつと土塀に變つてゐる。

「此處が日本領事館ですよ。」

村田君の聲が聞えた時、車は急に樹樹の中から、なだらかに坂を下り出した。すると、見る見る我我の前へ、薄明るい水面が現れて來た。西湖！　私は實際この瞬間、如何にも西湖らしい心もちになつた。茫茫と煙つた水の上には、雲の裂けた中空から、幅の狹い月光が流れてゐる。その水を斜に横ぎつたのは、蘇堤か白堤に違ひない。堤の一箇所には三角形に、例の眼鏡橋が盛り上つてゐる。この美しい銀と黑とは、到底日本では見る事が出來ない。私は車の搖れる上に、思はず體をまつ直にした儘、何時までも西湖に見入つてゐた。

五　杭州の一夜（下）

新新旅館へ辿り着いたのは、その後十分とたたない內だつた。此處は新新と號するだけに、兎に角西洋風のホテルである。が、支那人の給仕と一しよに、狹い裏梯子を登りながら、我我の部屋へ行つて見ると、東洋人と見縊つたのか、餘り居心の好い二階ぢやない。第一狹い部屋の中に、寢臺を二臺並べた所は、正に支那の宿屋である。おまけに肝腎の部屋の位置も、丁度ホテルの後の隅だから、坐つた儘西湖を眺めるなぞと云ふ、贅澤な眞似は到底出來ない。しかし車と空腹とロマンテイシズムとにくたびれた私はこの部屋の椅子へ腰を下すと、やつと人間らしい心もちになつた。

村田君は早速我我の給仕に、食事の支度を註文した。が、食堂はもう締つたから、西洋料理は出來ないと云ふ。では支那料理と云ふ事になつたが、給仕が持つて來た皿を見るとどうも食ひ殘りか何からしい。何でも偕樂園主人の說によると、全家寶と稱する支那料理は、食ひ殘りの集成だと云ふ事である。私は無氣味になつたから、この殘皿かの支那料理の中、全家寶はないかと尋ねて見た。すると忽ち村田君に、全家寶はこんな物ぢやないですよと、水牛以來の輕蔑をされた。

給仕はこの間も珍しさうに、我我の顔を覗きながら、絶えず小うるさい御饒舌をしてゐる。しかも村田君に飜譯して貰ふと、穴の明いた銀貨を持つてゐたら、一枚くれろと云ふのだつた。ではその銀貨を何にするかと聞けば、チヨツキの釦にすると云ふのだから、非凡な思ひつきには違ひない。成程さう云はれて見ると、この給仕のチヨツキの釦は悉穴の明いた銀貨である。村田君はビイルを引掛けながら、日本へそのチヨツキを持つて行けば、きつと五十錢には賣れるぜなぞと、つまらない保證を與へてゐた。

我我は食事をすませた後、下のサロンへ降りて行つた。が、其處には寫眞の額や、安物の家具が並んでゐる外は、一人も客の姿が見えない。唯玄關へ出て見ると、石段の上の卓子のまはりには、ヤンキイの男女が五六人、ぐいぐい酒を煽りながら、大聲に唄をうたつてゐる。殊に禿頭の先生なぞは、女の腰を抱いた儘、唄の音頭をとる拍子に、何度も椅子ごと倒れさうになつた。

玄關の外には門の左に、玫瑰の棚が出來てゐる。我我はその下に佇みながら、細かい葉の間に簇つた、赤い花を仰いで見た。花は遠い電燈の光に、かすかな匂ひを放つてゐる。それが何だかつやつやと、濡れてゐると思つたら、何時の間にか暗い空は、糠雨に變つてゐるのだつた。玫瑰、微雨、孤客の心、——此處までは詩になるかも知れない。が、鼻の先の玄關には、醉つ拂ひのヤンキイが騷いでゐる。私はとてもこの分では、「天鵞絨の夢」の作者のやうに、ロマンテイツクに

はなれないと思つた。

　其處へ靜かに門の外から、雨に濡れた轎子が二つ、四人の駕籠舁きに舁かれて來た。それが玄關へ横附けになると、まつさきに轎をくぐり出たのは、品の好い支那服の老人である。その次に玄關へ下り立つたのは、——私は正直に白狀すると、せめては十人並みの器量だと云ひたい。が、實際はどちらかと云へば、寧ろ醜い少女である。しかし青磁色の緞子の衣裳に、耳環の水晶のきらめいてゐるのは、確に風流な心もちがした。少女は老人の指圖通り、出迎へた宿の番頭と一しよに、ホテルの中へはいつてしまふ。老人は後に殘つた儘、丁度來合せた我我の給仕に、轎夫の賃銀を拂はせてゐる。この光景を眺めてゐる内に、もう一度私は變節した。これならば谷崎潤一郎氏のやうに、ロマンテイツクになり了はせる事もどうやら出來さうな氣がしたのである。

　しかし結局運命は、私のロマンテイシズムに殘酷だつた。この時突然玄關から、ひよろひよろ石段を下りて來たのは、あの禿頭の亞米利加人である。彼は同類に聲をかけられると、妙な手つきをして見せながら、ブラツデイ何とか返答をした。上海の異人はヴエリイの代りに、屢恐る可きブラツデイを使ふ。これだけでも既に愉快ぢやない。その上彼は危なさうに、我我の側へ立ち止まるが早いか、玄關へ後を向けたなり、傍若無人にも立小便をした。

　ロマンテイシズムよ、さようならである。私は陶然たる村田君と、人氣のないサロンへ引き返

した。水戸の浪士にも十倍した、攘夷的精神に燃え立ちながら。

六　西湖（一）

ホテルの前の棧橋には、朝日の光に照された、槐の葉の影が動いてゐる。其處に我我を乘せる爲に、畫舫が一艘繫いである。畫舫と云ふと風流らしいが、何處が一體畫舫の畫の字だか、それは未に判然しない。唯白木綿の日除けを張つたり、眞鍮の手すりをつけたりした、平凡極まる小舟である。その畫舫――兎に角畫舫と教へられたから、今後もやはりさう呼ぶつもりだが、――その畫舫は我我を乘せると、好人物らしい船頭の手に、悠悠と湖水へ漕ぎ出された。

水は思つたより深くはない。萍の漂つた水面から、蓮の芽を出した水底が見える。これは岸に近いせゐかと思つたが、何處まで行つても同じ事らしい。まあ、大體の感じを云ふと、湖水なぞと稱へるよりも、大水の田圃に近い位である。聞けばこの西湖なるものは、自然の儘に任せたが最後、忽ち干上つてしまふから、水を外に出さないやうに、無理な工面がしてあるのだと云ふ。私は舟緣に凭りかかりながら、その淺い水底の土に、村田君の杖を突こんでは、時時藻の間に泳いで來る、鯊のやうな魚を嚇かしたりした。

我我の畫舫の向うには、日本領事館のあたりから、湖の中に浮んだ孤山へ、長い堤が連つてゐる。西湖全圖を按ずると、これは昔白樂天の築いた、白堤なるものに相違ない。尤も石版刷の書圖を見ると、柳や何かが描いてあるが、重修した時に伐られたのか、今は唯寂しい沙堤である。その堤に橋が二つあつて、孤山に近いのを錦帶橋と云ひ、日本領事館に近いのを斷橋と云ふ。斷橋は西湖十景の中、殘雪の名所になつてゐるから、前人の詩も少くない。現に橋畔の殘雪亭には、清の聖祖の詩碑が建つてゐる。その他楊鐵崖が「段家橋頭猩色酒」と云つたのも、張承吉が「斷橋荒蘚澁」と云つたのも、悉この橋の事である。――と云ふと博學に聞えるが、これは池田桃川氏の「江南の名勝史蹟」に出てゐるのだから、格別自慢にも何にもならない。第一その斷橋は、はあ、あれが斷橋かと遙かに敬意を表したぎり、とうとう舟を寄せずにしまつた。が、萍の疎らな湖中に、白白と堤の續いてゐるのは、――殊に其處へ近づいた時、辮髪を垂れた老人が一人、柳の枝を鞭にしながら、悠悠と馬を歩ませてゐたのは、詩中の景だつたのに違ひない。私は樂天の西湖の詩に「半醉閑行湖岸東。馬鞭敲鐙轡玲瓏。萬株松樹青山上。十里沙隄明月中。」云云とあるのは、たとひ晝夜を異にしても、髣髴出來るやうな心もちがした。勿論この詩も斷橋同樣、池田氏の本の孫引きである。

畫舫は錦帶橋をくぐり拔けると、すぐに進路を右に取つた。右は即ち孤山である。これも西湖

十景の中の、平湖の秋月と稱するのは、この邊の景色だと教へられたが、晩春の午前では致し方がない。孤山には金持の屋敷らしい、大きいだけに俗惡な、門や白壁が續いてゐる。其處を一しきり通り過ぎた所に、不思議にも品の好い三層樓があつた。水に臨んだ門も好ければ、左右に並んだ石獅も美しい。これは何物の住居かと思つたら、乾隆帝の行宮の址だと云ふ、評判の高い文瀾閣だつた。此處には金山寺の文宗閣(鎭江)や、大觀堂の文滙閣(揚州)と共に、四庫全書が一部づつ納めてある。おまけに庭も立派だと云ふから、一見の爲岸へ登つたが、どちらも凡人には見せてくれない。我我はやむを得ず岸傳ひに昔の孤山寺、今の廣化寺を瞥見してから、その先にある兪樓へ行つた。

　兪樓は兪曲園の別莊である。規模は如何にもこせついてゐるが、滿更惡い住居でもない。東坡の古址にちなんだとか云ふ、伴坡亭の後なぞも、竹や龍の髭の茂つた中に、藻の多い古池が一つあるのは、甚閑寂な心もちがした。その池の側を登つて見ると、所謂曲曲廊の盡きる所に、壁へ嵌めこんだ石刻がある。それが曲園の爲に描いた、彭玉麟の梅花の圖——と云ふよりも本郷曙町の、谷崎潤一郎氏の二階に懸つてゐた、凄じい梅花の圖の原物だつた。曲曲廊の上の小軒、——扁額によれば碧霞西舍を見た後、我我はもう一度山の下の、伴坡亭へ下つて來た。亭の壁にはべた一面に、曲園だの朱晦庵だの何紹基だの岳飛だの、いろいろの石刷がぶら下つてゐる。花

刷もかう澤山あると、格別どれも欲しい氣がしない。その正面には額に入れた、髯の長い曲園の寫眞が、難有さうに飾つてある。私はこの家の主人が持つて來た、一碗の茶を啜りながら、つらつら曲園の人相を眺めた。章炳麟氏の兪先生傳によると、（これは孫引きをするのではない）「雅性不好聲色旣喪母妻終身不肴食。」云云とある。成程そんな所も見えないではない。「雜流亦時時至門下此其所短也。」――さう云へば多少の俗氣もある。事によると兪曲園は、この俗氣があつたおかげに、かう云ふ別莊を拵へてくれる、立派な御弟子たちが出來たのかも知れない。現に一點の俗氣も帶びない、玲瓏玉の如き我我なぞは、未に別莊を持つどころか、賣文に露命を繫いでゐる。――私は玫瑰のはいつた茶碗を前に、ぼんやり頰杖をついた儘、ちよいと蔭甫先生を輕蔑した。

七　西湖（二）

その次に蘇小小の墓を見た。蘇小小は錢塘の名妓である。何しろ藝者と云ふ代りに、その後は蘇小と稱へる位だから、墓も古來評判が高い。處が今詣でて見ると、この唐代の美人の墓は、瓦葺きの屋根をかけた、漆喰か何か塗つたらしい、詩的でも何でもない土饅頭だつた。殊に墓のあ

るあたりは、西冷橋の橋普請の爲に、荒され放題荒されてゐたから、愈索漠を極めてゐる。少時愛讀した孫子瀟の詩に、「段家橋外易斜曛。芳草凄迷綠似裙。弔罷岳王來弔汝。勝他多少達官墳。」と云ふのがある。が、現在は何處を見ても、裙に似た草色どころの騒ぎぢやない。掘り返された土の上に、痛痛しい日の光が流れてゐる。おまけに西冷橋畔の路には、支那の中學生が二三人、排日の歌か何かうたつてゐる。私は匆匆村田君と、秋瑾女史の墓を一見した後、水際の畫舫へ引き返した。

畫舫は岳飛の廟へ向ふ爲に、もう一度西湖へ漕ぎ出された。

「岳飛の廟は好いですよ。古色に富んでゐるですからね。」

村田君は私を慰めるやうに、曾遊の記憶を話してくれた。が、私は何時の間か、西湖に反感を持ち出してゐた。西湖は思つた程美しくはない。少くとも現在の西湖なるものは、去るに忍びざる底のものぢやない。水の淺い事は前にも云つた。が、その上に西湖の自然は、嘉慶道光の諸詩人のやうに、纖細な感じに富み過ぎてゐる。大まかな自然に飽き飽きした、支那の文人墨客には、或は其處が好いのかも知れない。しかし我我日本人は、纖細な自然に慣れてゐるだけ、一應は美しいと考へても、再應は不滿になつてしまふ。が、もしこれだけに止まるとすれば、西湖は兎に角春寒を怯れる、支那美人の觀だけはある筈である。處がその支那美人は、湖岸至る所に建てら

れた、赤と鼠と二色の、俗悪恐るべき煉瓦建の爲に、垂死の病根を與へられた。いや、獨り西湖ばかりぢやない。この二色の煉瓦建は、殆大きい南京蟲のやうに、古蹟と云はず名勝と云はず江南一帶に蔓つた結果、悉風景を破壞してゐる。私はさつき秋瑾女史の墓前に、やはりこの煉瓦の門を見た時、西湖の爲に不平だつたばかりか、女史の靈の爲にも不平だつた。「秋風秋雨愁殺人」の詩と共に、革命に殉した鑑湖秋女俠の墓門にしては、如何にも氣の毒に思はれたのである。しかもかう云ふ西湖の俗化は、益盛になる傾向もないではない。どうも今後十年もたてば、湖岸に並び建つた西洋館の中に、一軒づつヤンキイどもが醉拂つてゐて、その又西洋館の門の前は、一人づつヤンキイが立小便をしてゐる、——と云ふやうな事にもなりさうである。何時か蘇峰先生の「支那漫遊記」を讀んでゐたら、氏は杭州の領事にでもなつて、悠悠と餘生を送る事が出來れば、大幸だとか何とか云ふ事だつた。しかし私は領事どころか、浙江の督軍に任命されても、こんな泥池を見てゐるよりは、日本の東京に住んでゐたい。……

私が西湖を攻撃してゐる内に、畫舫は跨虹橋をくぐりながら、やはり西湖十景の中の、曲院の風荷あたりへさしかかつた。この邊は煉瓦建も見えなければ、白壁を圍んだ柳なぞの中に、まだ桃の花も咲き殘つてゐる。左に見える趙堤の木陰に、青青と苔蒸した玉帶橋が、ぼんやり水に映つてゐるのも、南田の畫境に近いかも知れない。私は此處へ船が來た時、村田君の誤解を招かな

いやうに、私の西湖論へ増補を施した。

「但し西湖はつまらんと云つても、全部つまらん次第ぢやないがね。」

畫舫は曲院の風荷を過ぎると、岳王廟の前へ止まつた。我我は早速船を跡に、「西湖佳話」以來御馴染の、岳將軍の靈を拜みに出かけた。すると廟は八分ばかり、新しい壁を光らせた儘、泥や砂利の山の中に、改修中の醜さを曝してゐる。勿論村田君を喜ばせた、古めかしい景色なぞは何處にもない。唯燒け跡のやうな境内には、土方や左官ばかりがうろついてゐる。村田君はカメラを出しかけたなり、落膽したやうに足を止めた。

「これはいかん。かうなつてはもう形なしだ。――ぢや墓へ行つて見よう。」

墓は蘇小小の墓のやうに、漆喰を塗つた土饅頭である。尤もこれは名將だけに、蘇家の麗人のより餘程大きい。墓の前には筆太に、宋岳鄂王之墓と書いた、苔痕斑斑たる碑が立つてゐる。後の竹木の荒れたのも、岳飛の子孫でない我我には、詩趣こそ感ずるが、悲しい氣はしない。私は墓のまはりを歩きながら、聊か懷古めいた心もちになつた。岳王墳上草萋萋――誰かにそんな句もあつたやうな氣がする。が、これは孫引きではないから、誰の詩だつたか判然しない。

八　西湖（三）

岳飛の墓前には鐵柵の中に、秦檜張俊等の鐵像がある。像の恰好を按ずると、面縛された所に違ひない。何でも此處に詣でるものは、彼等の姦を憎む爲に、一一これらの鐵像へ、小便をひつかけて行くさうである。しかし今は仕合せと、どの鐵像も濡れてゐない。唯そのまはりの土の上に、青蠅が何匹も止まつてゐる。それが僅に遠來の私に、不潔な暗示を與へるだけだつた。

古來惡人多しと雖も、秦檜程憎まれたものは滅多にない。上海あたりの往來では確か字では油炸塊とか云ふ、棒のやうな油揚を賣つてゐる。あれも宗方小太郎氏の説によると、秦檜の油揚と云つたつもりだから、油炸檜と云ふのが本名ださうである。一體民衆と云ふものは、單純なものしか理解しない。支那でも關羽とか岳飛とか、衆望を集めてゐる英雄は、皆單純な人間である。或は單純な人間でないにしても、單純化され易い人間である。この特色を具へてゐない限り、如何に不世出の英雄でも、容易に大向うには持て囃されない。たとへば井伊直弼の銅像が立つには、死後何十年かを要したが、乃木大將が神樣になるには、殆一週間も要さなかつたやうなものである。それだけに又敵になると、かう云ふ英雄の敵は憎まれ易い。秦檜は如何なる惡因緣か、見

事にこの貧乏鬮を引いた。その結果は御覧の通り、中華民國の十年にさへも、散散な取扱ひを受けてゐる。私もこの新年の「改造」に、「將軍」と云ふ小説を書いた。しかし日本に生れた難有さには、油揚の憂目にも遇はなければ、勿論小便もひつかけられない。唯一部分伏せ字になつた上、二度ばかり雜誌の編輯者が、當局に小言を云はれただけである。

次手にどの位秦檜と云へば、憎惡の的になつてゐたか。――その間の消息を語るべきコントを一つ紹介しよう。これは清人景星杓の「山齋客譚」の中の話である。

× × × × × ×

「何年前になりますか？　私が江上の或寺に、讀書かたがた住んでゐた時です。突然隣家の婆さんに、何か鬼物が乘り移りました。」

嚴曉蒼は話し出した。

「婆さんは白眼を吊り上げたなり、一家の男女を睨み廻しては、頻にかう罵るのです。――わが輩は冥道押使だぞ。今秦檜の魂を押しながら、閻王の府へ赴いた還りだが、途中此處を通りかかると、この死損ひの婆あの爲に、汚れ水を着物にかけられた。何とか扱ひをつければよし、さもなければこの婆あは、閻王の御前へ引きずつて行くぞ。……

「一家の男女は仰天しました。が、婆さんについたのは、實際冥土の使かどうか、それをまづ確める爲に、いろいろ問答をして見たさうです。すると婆さんは不相變、傲然と正面にかまへたなら、何でもはきはき返答をしました。して見れば鬼使に相違ない。――から云ふ事になりましたから、一家の男女はとりあへず、紙錢に火をつけるやら、地に酒を注ぐやら、百方祈願を凝らしました。御承知の通り冥土の下役も、人界の下役と同じやうに賄賂を使ひさへすれば無事なのです。

「婆さんは少時たつた後、ばつたり其處へ倒れました。が、ぢきに起き上つた時には、もう鬼使も去つたのでせう。唯きよろきよろするばかりだつたのです。鬼に憑かれる、――それは珍しい事でもありますまい。が、婆さんに乘り移つた鬼は、一家の男女の問を受けると、こんな幽冥の事も話したさうです。

「問。――秦檜は一體どうなりましたか？　御差支なければ御教へ下さい。

「答。――秦檜も今は輪廻の果に、金華の女に生れてゐる。それが今度大膽にも、謀夫の罪を犯したから、磔の刑に處せられたのだ。

「問。――しかし秦檜は宋の人ではありませんか？　金元明の三朝を閲した後、やつと罪を正されると云ふのは、遲過ぎるやうに思ひますが。

「答へ。——檜賊は、恣に和議を唱へ、妄に忠良を屠戮した。兇悪も亦甚しい。天曹はその罪を憎む餘り、磔刑三十六度、斬首の刑三十二度の判決を與へた。合計六十八度の刑は、さう手輕にすむものではない。

「まあ、かう云ふ調子なのです。秦檜の罪は憎むべしとは云へ、氣の毒なものではありませんか？」

嚴曉蒼は嚴灝庭先生の曾孫である。決して譃をつくやうな人ではない。

九　西湖（四）

岳王廟に詣でた後、我我は又畫舫を浮べながら、孤山の東岸へ返つて來た。其處には槐や梧桐の蔭に、樓外樓の旗を出した飯館がある。「讀賣新聞」に出た紀行によると、武林無想庵氏の新夫妻は、この樓外樓で食事をしたらしい。我我も船頭の勸め通り、この店の前の槐の下に、支那の晝飯を食ふ事にした。が、私の前に坐つてゐるのは、押川春浪氏の冒險小説を愛讀した結果、中學時代に家を抜け出して、何とかと云ふ軍艦の給仕になつて、八月十日の旅順の海戰に、砲火の下をくぐつて來たとか云ふ、蠻骨稜稜とした村田君である。私は料理を待ちながら、村田君には

内證だつたが、ひそかに無想庵氏を羨望した。

我我の卓子は前にも云つた通り、枝をさし交した槐の下にある。前にはぢき足もとに、西湖の水が光つてゐる。その水が絶えずゆらめいては、岸を塞いだ石の間に、音を立ててゐるのも物優しい。水際には青服の支那人が三人、一人は毛を抜いた鶏を洗ひ、一人は古布子の洗濯をし、一人はやや離れた柳の根がたに、悠悠と釣竿をかまへてゐる。と思ふとこの男は、急に釣竿を高くあげた。綸の先には鮒が一匹、ぴんぴん空中に跳ね返つてゐる。――かう云ふ光景は春光の中に、頗長閑な感じを與へた。しかも彼等の向うには、縹渺と西湖が開いてゐる。私は確に一瞬間、赤煉瓦を忘れ、ヤンキイを忘れ、この平和な眼前の景色に、小説めいた氣もちも起す事が出來た。――石碣村の柳の梢には、晩春の日影が當つてゐる。阮小二はその根がたに坐つた儘、さつきから魚釣りに餘念がない。阮小五は鶏を洗つてしまふと、庖丁をとりに家の中へはいつた。「鬢には石榴の花を插し、胸には青き豹を刺し」た、あの愛すべき阮小七は、未に古布子を洗つてゐる。其處へのそのそ歩み寄つたのは、――

智多星呉用でも何でもない。大きい籃を腕にかけた、甚散文的な駄菓子賣である。彼は我我の側へ來ると、キヤラメルか何か買つてくれろと云ふ。かうなつてはもうおしまひである。私は水滸傳の世界から、蚤のやうに躍り出した。天罡地煞百八人の中にも、キヤラメルを賣る豪傑は

一人もゐない。のみならず今は湖水の上にも、まつ白に塗つたボオトが一艘、四五人の女學生に漕がれながら、湖心亭の方へ進んでゐる！

　十分の後、我我は老酒を啜つたり、生姜煮の鯉を突ついたりしてゐた。すると其處へ又畫舫が一艘、槐の蔭に横づけになつた。岸へ登つた客を見れば、男が一人、女が三人、男女いづれとも判然しない、小さい赤ん坊が一人である。女の一人は身なりを見ると、乳母か下女の類らしい。男は金縁の眼鏡をかけた、（如何にも不思議な因縁だが）無想庵氏に似た大男である。跡に殘つた二人の女は、きつと姉妹に違ひない。それが二人共同じやうに桃色と藍と縞になつた、セル地の衣裳を一着してゐる。器量も昨夜見た少女よりは、少くとも二割方美しい。私は箸を動かしながら、時時彼等へ眼をやつた。彼等は隣の卓子に、料理の來るのを待つてゐる。その中でも二人の姉妹だけは、何かひそひそ話しながら、我我へ流眄を送つたりした。尤もこれは嚴密に云ふと、食事中の私を映すとか云つて、村田君がカメラをいぢつてゐる――其處が御目にとまつたのだから餘り自慢にもならないかも知れない。

「君、あの姉さんの方は細君だらうか？」

「細君さ。」

「僕にはどうもわからない。支那の女は三十を越さない限り、どれも皆御孃さんに見える。」

そんな話をしてゐる内に、彼等も食事にとりかかつた。靑靑と枝垂れた槐の下に、このハイカラた支那人の家族が、文字通り嬉嬉と飯を食ふ所は、見てゐるだけでも面白い。私は葉卷へ火をつけながら、飽かずに彼等を眺めてゐた。斷橋、孤山、雷峰塔、――それ等の美を談ずる事は、蘇峰先生に一任しても好い。私には明媚な山水よりも、やはり人間を見てゐる方が、どの位愉快だか知れないのである。

しかし何時までも彼等の食事に、敬意を拂つてゐる訣にも行かない。我我は勘定を拂つた後、三潭の印月へ出かける爲に、早速畫舫の客になつた。三潭の印月は孤山から見ると、丁度向う岸に近い島のほとりにある。島の名は何と云ふのだか、これは西湖全圖にも池田氏の案内記にも記してない。唯この島の近所には、東坡が杭州の守だつた時、みをつくしの爲に建てたと云ふ、石塔が三つ殘つてゐる。その石塔が月明の夜には、水面に三つの影を落す、――と云ふ事だけは確である。舟は可也長い間、靜かな湖水を漕ぎ續けてから、やつと柳と蘆との深い、退省庵前の棧橋に着いた。

十　西湖（五）

棧橋を上ると門がある。門の中には水の澄んだ池に、支那の八つ橋がかかつてゐる。兪樓の廊が曲曲廊なら、これは曲曲橋だと評しても好い。その橋の處處に、氣の利いた亭が出來てゐる。それを向うへ渡り切ると、眩い西湖の水の上に、三つの石塔のあるのが見えた。梵字を刻んだ丸石に、笠を着せた石塔だから、石燈籠と大した違ひはない。我我は其處の亭の中に、この石塔を眺めながら、支那の巻煙草を二本吸つた。それから、――露西亞のソヴィエット政府の話はしたが、蘇東坡の話はしなかつたやうである。

八つ橋をもとへ渡つて來ると、若い四五人の支那人に遇つた。彼等は皆めかした上に、胡弓や笛を携へてゐる。何でも長安の公子とか號したのは、かう云ふ連中だつたのに違ひない。水色や綠の大掛兒、指環にきらめいたいろいろの寶石、――私は彼等とすれ違ひながら、一一その容子を物色した。すると最後に通りすがつた男は、殆小宮豐隆氏と、寸分も違はない顔をしてゐた。その後京漢鐵道の列車ボオイにも、宇野浩二にそつくりの男がゐたし、北京の芝居の出方にも、南部修太郎に似た男がゐた所を見ると、一體日本の文學者には、支那人に似たのが多いのかも知れない。しかしこの時はまだ始めだつたから、他人の空似とは云ふものの、きつと小宮氏の先祖の一人は――なぞと、失禮な事も想像した。

――こんな事を書いてゐると、至極天下泰平だが、私は現在床の上に、八度六分の熱を出して

ゐる。頭も勿論ふらふらすれば、喉も痛んで仕方がない。が、私の枕もとには、二通の電報がひろげてある。文面はどちらも大差はない。要するに原稿の催促である。醫者は安靜に寢てゐろと云ふ。友だちは壯だなぞと冷かしもする。しかし前後の行きがかり上、愈高熱にでもならない限り、兎に角紀行を續けなければならぬ。以下何回かの江南游記は、かう云ふ事情の下に書かれるのである。芥川龍之介と云ひさへすれば、閑人のやうに思つてゐる讀者は、速に謬見を改めるが好い。――

我我は退省庵を一見した後、さつきの棧橋へ歸つて來た。棧橋には支那人の爺さんが一人、魚籃を前に坐りながら、畫舫の船頭と話してゐる。その魚籃を覗いて見たら、蛇が一ぱいはいつてゐた。聞けば日本の放し龜同樣、この爺さんは錢を貰ふと、一匹づつ蛇を放すのだと云ふ。如何に功德になると云つても、わざわざ蛇を逃がす爲に、金を出す日本人は一人もゐまい。

畫舫は又我我を乘せると、島の岸に沿ひながら、雷峯塔の方へ進んで行つた。岸には蘆の茂つた中に、河柳が何本も戰いでゐる。その水面へ這つた枝に、何か蠢いてゐると思つたら、それは皆大きい泥龜だつた。いや、龜ばかりならば驚きはしない。ちよいと上の枝の股には、代赭色に脂切つた蛇が一匹、半身は柳に卷ついたなり、半身は空中にのたくつてゐる。私は背中が痒いやうた氣がした。勿論さう云ふ心もちは、愉快なものでも何でもない。

その内に島の角を繞ると、水を隔てた新綠の岸には、突兀と雷峯塔の姿が見えた。まづ目前に仰いだ感じは、花屋敷の近處に佇んだ儘、十二階に對したのと選ぶ所はない。唯この塔は赤煉瓦の壁へ、一面に蔦蘿をからませたばかりか、雜木なぞも頂には靡かせてゐる。それが日の光に煙りながら、幻のやうに聳え立つた所は何と云つても雄大である。赤煉瓦もかうなれば不足はない。赤煉瓦と云へば案内記には、何故に雷峯塔は赤煉瓦であるか、――その理由を說明した、尤らしい話が載せてある。但しこの案内記は、池田氏の著した本ではない。新新旅館に賣つてゐた、英文の西湖案内記である。私はそれを書いた後、ペンを捨てるつもりだつたが、かう頭がふらついては、到底もう一枚と書く勇氣はない。跡は又明日でも、――いや、さう云ふ斷りを書くのも面倒である。肺炎にでもなられた日には、助からない。

十一 西湖（六）

その案內記 Hangchow Itineraries によると、今を距る三百七十年餘りの昔、この西湖のほとりには、屢倭寇が攻めこんで來た。處が彼等海賊には、雷峯塔が邪魔になつて仕方がない。何故かと云ふと支那の官憲は、塔上に物見を立たせてある。だから倭寇の一進一退は、杭州城へ

近かない内に、ちやんと支那側に知られてしまふ。そこで或時日本の海賊は、雷峯塔のまはりに火を放つて、三日三晩焼き打ちを續けた。かかるが故に雷峯塔は、赤煉瓦の製造が始まらない以前、早くも赤煉瓦の塔に變つたのである。――ざつとかう云ふ次第だが、眞僞は勿論保證しない。

雷峯塔を少時仰いだ後、我我は新新旅館の方へ、――今日は昨日よりも熱が低い。喉も焼いたのが利いたやうである。この分ならば二三日中に、机の前へ坐れるかも知れない。しかし紀行を續ける事は、依然として厄介な心もちがする。その心もちを押して書くのだから、どうせ碌な物は出來さうもない。まあ、一日に一回だけ、纏りがつけば本望である。そこでもう一度繰り返すが、――雷峯塔を少時仰いだ後、我我は新新旅館の方に、徐に畫舫をめぐらせた。

西湖は今我我の前に、東岸一帶を開いてゐる。向うに、――新新旅館の上に、綠をなすつた石山は、葛洪煉丹の地だとか云ふ、評判の高い葛嶺であらう。葛嶺の頂には廟が一つ、丁度飛び立たうとする小鳥のやうに、軒先の甍を反らせてゐる。その右に續いた山、――西湖全圖によると寳石山には、華奢な保俶塔の姿も見える。この塔が細細と突き立つた容子は、老衲の如き雷峯塔に比すると、正に古人の云つた通り、美人の如きものがあるかも知れない。しかも葛嶺は曇つてゐるが、寳石山の山頂の草には、鮮かに日の光が流れてゐる。これらの山山の裾あたりには、我我の泊つたホテルを始め、赤煉瓦の建物もないではない。が、いづれも遠いせゐか、格別目に立

たないのは幸福である。唯山山のなだれの所に、白い一線の連つてゐるのは、今朝通つた白堤に違ひない。白堤が左に盡きた所には、樓外樓の旗こそ見えないにせよ、新綠の孤山が横はつてゐる。から云ふ景色は何と云つても、美しい事だけは否み難い。殊に今は點點と菱の葉を浮べた水の面も、底の淺いのを瞞着すべく、鈍い銀色に輝いてゐる。

「今度は何處に行くのです？」

「放鶴亭に行つて見ませう。林和靖のゐた所だから。」

「放鶴亭と云ふと？」

「孤山ですよ。新新旅館のすぐ前の所――」

その放鶴亭に上陸したのは、二十分餘り後の事だつた。畫舫は今度も其處へ來るのには錦帶橋をくぐつた上、ずつと白堤に圍はれた、所謂裡湖を横つたのである。我我は梅の青葉の中に、放鶴亭を見物したり、もう一つ上に側立つた、これも林逋の巣居閣へ行つたり、その又後に立てられた、やはり大きい土饅頭の、「宋林處士墓」なるものを見たり、いろいろその邊をうろつき廻つた。林逋は高人だつたのに違ひない。が、同時に又日本の小說家程、貧乏もしてゐなかつたのに違ひない。林逋七世の孫、洪の著した「山家清事」によると、洪の隱遁生活は「舍三寢一讀書一治藥一。後舍二一儲酒穀列農具山具一安僕役庖廚稱是。童一婢一園丁二犬十二足驢四蹄牛

四角」だつたと云ふ。和靖先生も似たやうなものだとすれば、月五十圓の借家にゐるより、餘程豐だつたと云はなければならぬ。私にしても箱根あたりへ、母屋が一軒に物置が一軒――書齋、寢室、女中部屋等、すつかり揃つたのを建てて貰つた上、書生一人、女中一人、下男二人使つて好ければ、林處士の眞似などはむづかしくもない。水邊の梅花に鶴を舞はせるのも、鶴さへ承知すれば訣無しである。しかし私はさうなつても、「犬十二足驢四蹄牛四角」は使ひ途がない。これはそつくり君に上げるから、どうとも勝手にしてくれ給へ。――私は放鶴亭一見をすませた後、岸の畫舫へ歸りながら、こんな理窟を發表した。岸には柳絮の飛び交ふ間に、白の着物へ黑のスカアトをはいた、支那の女學生が二三十人、ぞろぞろ西冷橋の方へ歩いてゐる。

十二　靈隱寺

私は薄汚い新新旅館の二階に、何枚かの畫はがきを認めてゐる。村田君はもう寢てしまつた。暗い窓硝子の一角には、不思議な位鮮かに、一匹の守宮がひつ附いてゐる。それを見るのが嫌だから、私は全然わき見をしずに、ずんずん萬年筆を走らせ續ける。……

豐島與志雄に。

今日靈隱寺に出かける途中、淸漣寺と云ふ寺を覗いたら、大きい長方形の池の中に、眞鯉、緋鯉が澤山ゐた。此處は玉泉魚躍とか號して、五色の鯉に名高い寺だと云ふ。尤も五色と云つた所が、實際は精精三色しかない。池に臨んだ亭の中には、籐椅子や卓子が並べてある。其處に腰をかけてゐると、坊主が茶や菓子を持つて來てくれる。くれると云つても唯ぢやない。つまり坊主は鯉を養つてゐるやうだが、實は鯉に養はれてゐるのだらう。君は染井の釣堀に、夜通し絲を垂れる豪傑だから、この寺の鯉も見さへすれば、釣りたくなるのに違ひない。

小穴隆一に。

靈隱寺に詣る。途中小石橋あり。橋下の水佩環を鳴らすが如し。兩岸皆幽竹。雨を帶ぶるの翠色、殆人に媚ぶるに似たり。石谷の畫境に近きもの乎。僕大いに詩興を催す。然れども旅嚢「圓機活法」なし。畢に一詩なき所以。ない方が仕合せかも知れない。

香取秀眞氏に。

靈隱寺は中中大きい寺です。總門をはいつて少し行つた所に、天竺の靈鷲山が飛んで來たと云ふ、飛來峯と號する山があります。(實は山と云ふよりも、大岩と云ふ方が好いのですが。)其處の石窟にある佛は、宋元の佛だと云ふ事です。が、僕にはどの佛も、好いのだか惡いのだかわかりません。難有いと思つたのはたつた一つです。尤も石窟の一部分は、連日の雨に水が出てゐまし

たから、中へはいらずにしまひました。今日も時時雨が來ます。高い杉檜、苔の蒸した石橋、——
——まあ、この寺の大體の感じは、支那の高野山と思へばよろしい。

小杉未醒氏に。

靈隱寺を見ました。杉の幹に栗鼠の駈け上る所なぞは、如何にも山寺らしい閑寂なものです。雨天だつたせゐか、赭塗りの大雄寶殿なぞも、甚落着いた氣がしました。駱賓王がゐたと云ふのは、傳說かも知れないが、一應尤らしい氣がします。此處の空氣には何となく、駱賓王じみた所がある。——あなたはさう思ひませんか？　もう一つ次手に申し上げたいのは、この寺の五百羅漢です。これは勿論御覽だつた事と思ひますが、少くとも二百位は、殆あなたと瓜二つです。冗談でも何でもない、實際あなたにそつくりです。聞けばこの五百羅漢の中には、マルコ・ポオロの像があるさうですが、まさかあなたの遠つ祖はマルコ・ポオロだつた次第でもないでせう。が、僕は萬里の異域に、あなたと相見る事が出來たやうな、愉快な心もちになりました。

佐佐木茂索に。

靈隱寺に詣りし歸途、鳳林寺一名喜鵲寺を訪ふ。烏窠禪師のゐた寺なり。寺は殆見るに足らず。唯葬ひか何かありしならん、鼠色の袈裟に海老茶の袈裟かけし坊主、何人も經を讀みながら、寺の廊下を步みゐたり。白樂天、烏窠に問ふ。如何か是佛法の大意。烏窠答へて曰、諸惡莫作、

衆善奉行。樂天又云ふ。三尺の童子も之を知れり。烏窠笑つて曰、三尺の童子も之を知れど、八十の老翁も行ひ難し。樂天卽ち服すと。かう手輕く服された日には、烏窠禪師も氣味が惡かつたらう。寺門の前に支那の子供大勢あり。剪綵の花を持つて遊ぶ。雨後夕陽愛すべし。

手紙を書いてしまつたら、幸ひ守宮も見えなくなつてゐた。明日は杭州を去る豫定である。湧金門、回回堂、——そんな物を見る暇はないかも知れない。私は多少の寂しさを感じながら、シャツ一枚になつた後、ベッドの毛布へもぐりこまうとした。が、思はず飛びのきながら、「こん畜生」と大きい聲を出した。白いベッドの枕の上には、碁石程の蜘蛛がぢつとしてゐる！　これだけでも西湖は碌な所ぢやない。

十三　蘇州城内（上）

驢馬は私を乘せるが早いか、一目散に駈け出した。場所は蘇州の城内である。狹い往來の兩側には、例の通り招牌が下つてゐる。それだけでも好い加減せせこましい所へ、驢馬も通る、轎子も通る、人通りも勿論少くはない、——と云ふ次第だつたから、私は手綱を引張つたなり、一時は思はず眼をつぶつた。これは臆病でも何でもない。あの驢馬に跨つた儘、支那の敷石道を駈け

て行くのは、容易ならない冒險である。その危なさを經驗しない讀者は、罰金をとられるのは覺悟の上、東京ならば淺草の仲店、大阪ならば心齋橋通りへ、全速力の自轉車を驅つて見るが好い。
私は島津四十起氏と、今し方蘇州へ來たばかりである。本來ならば午前中に、上海を立つつもりだつたが、つい朝寢坊をしたものだから、豫定の汽車に間に合はなかつた。――それも一汽車乘り遲れたのぢやない。都合三列車乘り遲れたのである。其處へ島田太堂先生なぞは、その度に停車場へ來られたと云ふのだから、今思ひ出しても恥ぢ入らざるを得ない。しかも私を送る爲に、七絕を一首頂いた事は、愈恐縮すべき思ひ出である。……
私の前には意氣揚揚と、島津氏が驢馬を走らせてゐる。尤も島津氏は私のやうに、始めて驢馬に乘つたのぢやない。だから腰の据り方が違ふ。私は島津氏を御手本に、內心は何度も冷や冷やしながら、いろいろ馬術の工夫をした。但しその後落馬したのは、正に御弟子の私ぢやない。御師匠番の島津氏自身である。
狹い往來の左右には、――實は最初の何分かは、何があるのか見えなかつた。が、その何分かが過ぎた後には、經師屋と寶石屋とが何軒もあつた。經師屋の店には山水だの花鳥だの、表裝中の畫が並べてある。寶石屋の店には、翡翠や玉が銀の飾りなぞときらめいてゐる。それがどちらも姑蘇城らしい、優美な心もちを起させた。しかしあの優美な心もちも驢馬の背中に躍つてゐな

いと、もつと嬉しかつたのに相違ない。實際一度なぞは縫箔屋の店に、牡丹だの麒麟だのを縫ひとつた、紅い布が壁に吊してある、――それを見ようと思つたら、もう少しで目くらの胡弓弾きと、衝突してしまふ所だつた。

しかし驢馬を走らせるのも、平な敷石の上ならば、まだしも我慢が出來ない事はない。それが橋を渡るとなると、いづれも例の反り橋だから、上りは尻餅をつきさうになるし、下りも運が惡ければ、驢馬の頭越しにずり落ちかねない。おまけに橋の多い事は、姑蘇三千六百橋、吳門三百九十橋の語が、文字通りほんたうでないにもせよ、滿更譃ばかりではなささうである。私はやむを得ず橋へかかると、手綱なぞを控へる代りに、驢馬の鞍へしがみついた。それでも橋を渡る時は、汚い白壁の並んだ間に、細細と蒼い運河の水が、光つてゐるのだけ眼にはいつた。

そんな道中を續けた後、やつと我我の辿りついたのは、北寺の塔の前である。聞けば蘇州七塔の中、登覽する事の出來るのは、僅にこの塔ばかりだと云ふ。塔の前の草原には、籃を携へた婆さんたちが、二三人摘草に耽つてゐる。この草原は案内記によると、昔の死刑場だと云ふ事だから、草も人血に肥えてゐるのかも知れない。しかし白堊に日の光を浴びた、九層の塔の聳える前に、靑服の婆さんが三三五五、靜かに草を摘んでゐるのは、頗悠悠とした眺めである。

我我は驢馬を飛び下りると、塔の最下層の入り口へ行つた。其處には支那の寺男が一人格子戸

の中に控へてゐる。それが二十錢の銀貨を貰つたら、大きい錠を外した上、おはいりなさいと云ふ手眞似をした。塔の二階へ上る所には、埃臭い暗闇の中に、カンテラが一つともつてゐる。が、梯子を上りかけると、もうその光はさして來ない。その上手すりへつかまつたら、この塔へ詣でた善男善女何萬人かの手垢の名殘が、べとり冷たいのには辟易した。しかし二階へ登つてしまへば、四方に口もついてゐるし、もう暗いのに困る事なぞはない。塔の内部は九層とも、皆桃色の壁の間に、金色の佛が安置してある。桃色と金と——かう云ふ色の配合は、妙に肉感的な所があるだけ、如何にも現代の南國らしい。私は何だかこの塔の上には、支那料理でもありさうな心もちがした。

十分の後、我我は塔の頂上から、蘇州の市街を見下してゐた。市街は黑い瓦屋根の間に鮮かな白壁を組みこんだなり、思つたより廣廣と廣がつてゐる。その向うに霞を帶びた、高い塔があると思つたら、それは孫權が建てたとか云ふ、名高い瑞光寺の古塔だつた。（勿論今のは重修に重修を重ねた塔である。）町の外はどちらを向いても、水光りと綠との見えない所はない。私は欄干によりかかりながら、塔の下に草を食つてゐる、小さい二頭の驢馬を見下した。驢馬の側には驢馬引きの子供も、二人ながら石に腰かけてゐる。

「おおうい。」

私は大きい聲を出した。が、彼等はふり向きもしない。——高い塔上に立つてゐる事は、何だか寂しいものである。

十四　蘇州城内（中）

我我は北寺の塔を見てから、玄妙觀を見物に行つた。玄妙觀はさつき通つた、寶石屋の多い往來から、ちよいと横町をはいつた所にある。觀前の廣場に露店の多い事は、上海の城隍廟と違ひはない。うどん、饅頭、甘蔗の莖、地栗——さう云ふ食物店の間には、玩具屋や雜貨屋も店を出してゐる。人出も勿論非常に多い。が、上海と違ふ事は、これ程ぞろぞろ練つてゐる中に、殆洋服の見えない事である。のみならず場所も廣いせゐか、何だか上海のやうに陽氣でない。華やかな靴下が並べてあつても、韮臭い湯氣が立つてゐても、いや、漆のやうに髮が光つた、若い女が二三人、鶸色や薄紫の着物の尻をわざと振るやうに歩いてゐても、何處か鄙びた寂しさがある。私は昔ピエル・ロティが、淺草の觀音に詣でた時も、こんな氣がしたのに違ひないと思つた。

その群集の中を歩いて行つたら、突きあたりに大きい御堂があつた。それも大きい事は大きいが、柱の赤塗りも剝げてゐれば、白壁も埃にまみれてゐる。その上參詣人もこの堂へは、たまに

上つて來るばかりだから、一層荒廢した感じが強い。中へはいるとべた一面に、石版だの木版だの肉筆だの、いづれも安物の懸け軸が、惡どい色彩を連ねてゐる。と云つても書畫の奉納ぢやない。皆新しい賣物である。店番は何處にあるのかと思つたら、薄暗い堂の片隅に、小さい爺さんが坐つてゐた。しかしこの懸け物の外には、香花は勿論尊像も見えない。

堂を後へ通り拔けると、今度は其處の人だかりの中に、兩肌脫ぎの男が二人、兩刀と槍との試合をしてゐた。まさか刃はついてもゐるまいが、赤い房のついた槍や、鉤なりに先の曲つた刀が、きらきら日の光を反射しながら、火花を散らして切り結ぶ所は、頗見事なものである。その内に辮子のある大男は、相手に槍を打ち落されると、隙間もない太刀先を躱し躱し、咄嗟に相手の脾腹を蹴上げた。相手は兩刀を握つた儘、仰向けざまにひつくり返る、――と、まはりの見物は、嬉しさうにどつと笑ひ聲をあげた。何でも病大蟲薛永とか、打虎將李忠とか云ふ豪傑は、こんな連中だつたのに相違ない。私は堂の石段の上に、彼等の立ち廻りを眺めながら、大いに水滸傳らしい心もちになつた。

水滸傳らしい――と云つただけでは、十分に意味が通じないかも知れない。一體水滸傳と云ふ小說は、日本にも馬琴の八犬傳を始め、神稻水滸傳とか本朝水滸傳とか、いろいろ類作が現れてゐる。が、水滸傳らしい心もちは、そのいづれにも寫されてゐない。ぢや「水滸傳らしい」とは何

かと云へば、或支那思想の閃きである。天罡地煞一百八人の豪傑は、馬琴などの考へてゐたやうに、忠臣義士の一團ぢやない。寧數の上から云へば、無頼漢の結社である。しかし彼等を糾合した力は、惡を愛する心ぢやない。確武松の言葉だつたと思ふが、豪傑の士の愛するものは、放火殺人だと云ふのがある。が、これは嚴密に云へば、放火殺人を愛すべくんば、豪傑たるべしと云ふのである。いや、もう一層丁寧に云へば、既に豪傑の士たる以上、區區たる放火殺人の如きは、問題にならぬと云ふのである。つまり彼等の間には、善惡を脚下に蹂躪すべき、豪傑の意識が流れてゐる。模範的軍人たる林冲も、專門的博徒たる白勝も、この心を持つてゐる限り、正に兄弟だつたと云つても好い。この心——云はば一種の超道德思想は、獨り彼等の心ばかりぢやない。古往今來支那人の胸には　少くとも日本人に比べると　遙に深い根を張つた、等閑に出來ない心である。天下は一人の天下にあらずと云ふが、さう云ふ事を云ふ連中は、唯昏君一人の天下にあらずと云ふのに過ぎない。實は皆肚の中では、昏君一人の天下の代りに彼等即ち豪傑一人の天下にしようと云ふのである。もう一つその證據を擧げれば、英雄頭を回らせば、即ち神仙と云ふ言葉がある。神仙は勿論惡人でもなければ、同時に又善人でもない。善惡の彼岸に棚引いた、霞ばかり食ふ人間である。放火殺人を意としない豪傑は、確にこの點では一囘頭すると、神仙の仲間にはいつてしまふ。もし譃だと思ふ人は、試みにニイチエを開いて見るが好い。毒藥を用ゐるツ

アラトストラは、卽ちシイザア・ボルヂアである。水滸傳は武松が虎を殺したり、李逵が鉞を振廻したり、燕青が相撲をとつたりするから、萬人に愛讀されるんぢやない。あの中に磅礴した、圖太い豪傑の心もちが、直に讀む者を醉はしめるのである。……

私は又武器の音に目を見張つた。あの二人の豪傑は、私が水滸傳を考へてゐる内に、何時か一人は靑龍刀を、一人は幅の廣い刀をふり上げながら、二度目の切り合ひを始めてゐる。——

十五　蘇州城内（下）

孔子廟へ來たのは日暮れ方だつた。疲れた驢馬に跨りながら、敷石の間に草の生えた、廟前の路へさしかかると、寂しい路ばたの桑畑の上に、薄白い瑞光寺の廢塔が見える。塔の一層一層に、蔦蘿や草の茂つたのも見える。その空に點點と飛び違ふ、この邊に多い鵲も見える。私は實際この瞬間、蒼茫萬古の意とでも形容したい、哀れにも嬉しい心もちになつた。

この蒼茫萬古の意は、幸ひにずつと裏切られなかつた。門外に驢馬を乘り捨てた後、路も覺束ない草の中を行けば、暗い柏や杉の間に、南京藻の浮んだ池がある。と思ふと池の縁には、赤い筋の帽子の兵卒が一人、蘆や蒲を押し分けながら、叉手網に魚を掬つてゐる。此處は明治七年に

再建されたとは云ふものの、宋の名臣范仲淹が創めた、江南第一の文廟である。それを思へばこの荒廢は、直に支那の荒廢ではないか？　しかし少くとも遠來の私には、この荒廢があればこそ、懷古の詩興も生ずるのである。私は一體歎けば好いのか、それとも又喜べば好いのか？——さう云ふ矛盾を感じながら、苔蒸した石橋を渡つた時、私の口には何時の間にか、こんな句がかすかに謳はれてゐた。「休言竟是人家國。我亦書生好感時。」——但しこの句の作者は私ぢやない。北京にゐる今關天彭氏である。

　黑い禮門を通り過ぎてから、石獅の間を少し歩むと、何とか云ふ小さい通用門がある。その門を開けて貰ふ爲には、靑服の門番の上さんに、二十錢銀貨をやらなければならない。が、その貧しさうな上さんが、瘡痕のある十ばかりの女の子と一しよに、案內に立つ所は哀れである。我我は彼等の後から、毒だみの花だけ仄白い、夕濕りの敷石を踏んで行つた。敷石の盡きる所には、戟門と云ふのだらう、大きい門が聳えてゐる。名高い天文圖や支那全圖の石に刻まれたのも此處にあるが、あたりに漂つた薄明りでは、碑面もはつきりとは見る事が出來ない。唯その門をはいつた所に、太鼓や鐘が並んでゐる。甚しいかな、禮樂の衰へたるや。——今考へると滑稽だが、私はこの埃だらけの、古風な樂器を眺めた時、何だかそんな感慨があつた。

　戟門の中の石疊みにも、勿論茫茫と草が伸びてゐる。石疊みの兩側には、昔の文官試驗場たつ

たと云ふ、廊下同樣の屋根續きの前に、何本も太い銀杏がある。我我は門番の親子と一しよに、その石疊みのつきあたりにある、大成殿の石段を登つた。大成殿は廟の成殿だから、規模も中中雄大である。石段の龍、黃色の壁、群青に白く殿名を書いた、御筆らしい正面の額――私は殿外を眺めはした後、薄暗い殿内を覗いて見た。すると高い天井に、雨でも降るのかと思ふ位、颯颯たる音が渡つてゐる。同時に何か異樣の臭ひが、ぷんと私の鼻を打つた。

「何です、あれは?」

私は早速退却しながら、島津四十起氏をふり返つた。

「蝙蝠ですよ、この天井に巢を食つてゐる。――」

島津氏はにやにや笑つてゐた。見れば成程敷き瓦の上にも、一面に黑い糞が落ちてゐる。あの羽音を聞いた上、この夥しい糞を見れば、如何に澤山の蝙蝠が、梁間の暗闇に飛んでゐるか、想ふだに餘り好い氣味はしない。私は懷古の詩境からゴヤの畫境へつき落された。かうなつては蒼茫どころぢやない。宛然たる怪談の世界である。

「孔子も蝙蝠には閉口でせう。」

「何、蝠と福とは同音ですから、支那人は蝙蝠を喜ぶものです。」

驢背の客となつた後、我我はもう夕靄の下りた、暗い小道を通りながら、こんな事を話し合つ

た。蝙蝠は日本でも江戸時代には、氣味が惡いと云ふよりも、意氣な物だと思はれたらしい。蝙蝠安の刺靑の如きは、確にその證據である。しかし西洋の影響は、何時の間にか鹽酸のやうに、地金の江戸を腐らせてしまつた。して見れば今後二十年もすると、「蝙蝠も出て來て濱の夕涼み」の唄には、ボオドレエルの感化があるなぞと、述べ立てる批評家が出るかも知れない。――驢馬はその間も小走りに、頸の鈴を鳴らし鳴らし、新綠の匂の漂つた、人氣のない路を急いでゐる。

十六　天平と靈巖と（上）

天平山白雲寺へ行つて見たら、山に倚つた亭の壁に、排日の落書きが澤山あつた。「諸君儞在快活之時、不可忘了三七二十一條」と云ふのがある。「犬與日奴不得題壁」と云ふのがある。（尤も島津氏は平然と、層雲派の俳句を題してゐた。）更に猛烈なやつになると、「莽蕩河山起暮愁。何來不共戴天仇。恨無十萬橫磨劍。殺盡倭奴方罷休。」と云ふ名詩がある。何でもこの詩の前書きには、天平山へ詣でる途中、日本人と喧嘩をしたら、多勢に無勢のため負けてしまつた。痛憤に堪へないなどと書いてあつた。聞けば排日の使嗾費は、三十萬圓内外とか云ふ事だが、この位利き目があるとすれば、日本の商品を驅逐する上にも、寧ろ安い廣告費である。

私は欄外の若楓の枝が、雨氣に垂れたのを眺めながら、若い寺男の持つて來る、抹香臭い茶を飲んだり、固い棗の實を嚙つたりした。

「天平山は思つたより好い。もう少し綺麗にしてあると猶好いが、――おや、あの山の下の堂の障子は、あれは硝子が嵌まつてゐるのですか？」

「いや、貝ですよ。木連れ格子の目へ一枚づつ、何とか云ふ貝の薄いやつを、硝子代りに貼りつけたのです。――天平山は何時か谷崎さんも、書いてゐたぢやありませんか？」

「ええ、蘇州紀行の中に。――尤も天平山の紅葉よりは、途中の運河の方が面白かつたやうです。」

　我我は靈巖山へも登る必要上、今日も驢馬に跨つて來たが、それでも初夏の運河に沿うた、姑蘇城外の田舍路は、美しかつたのに相違ない。白い鷺の浮いた運河には、やはり太鼓なりに反り上つた、古い石橋がかかつてゐる。その水にはつきり影を落した、涼しい道ばたの槐や柳、或は青麥の畠の間に、紅い花をつけた玫瑰の棚、――さう云ふ風景の處處に、白壁の農家が何軒も見える。殊に風流に思つたのは、そんな農家を通り過ぎる毎に窓の中を覗きこむと、上さんだか娘だか、刺繡の針を動かしてゐる。若い女も少くない。生憎空は曇つてゐたが、もし晴れてゐたとすれば、彼等の窓の向うには、靈巖、天平の青山が、描いたやうに見えた事であらう。……

「谷崎さんも乞食に惱まされたやうですね。」

「あれには誰でも惱まされる。――しかし蘇州の乞食はまだ好いですよ。杭州の靈巖寺と來た日には。――」

私は思はず笑ひ出した。靈巖寺の乞食の非凡さは、日本人には到底想像も出來ない。大袈裟にぽんぽん胸を叩いたり、地びたへ頭を續け打ちにしたり、足首のない足をさし上げて見せたり、――まづ、乞食の技巧としては、最も進步した所を見せる。が、我我日本人の眼には、聊か藥が利きすぎるから、憐憫の情を催すよりも、餘り仰仰しいのに吹き出してしまふ。あれを思へば蘇州の乞食は、唯泣き聲を出すだけだから、手の內をやるにもやり心地が好い。しかし獅子山の裾か何かの、寂しい村を通つた時、うつかり一錢投げてやつたばかりに、村の子供だの女だのが、いづれも手をさし出しながら、驢馬のまはりを取り卷いたのには、少からず難澁した。如何に柳が垂れてゐたり、女が刺繡をしてゐたりしても、敬服ばかりすべきものぢやない。その村の白壁の一重內には、丁度巢を食つた燕のやうに、恐るべき娑婆苦が潛んでゐる。……

「ぢや山の上に登つて見ませうか？」

島津氏は私を促しながら、亭後の山路を登り始めた。油ぎつた若葉の中に、土の赤い山路が、細細と岩を縫つてゐるのは、何だか嬉しいものである。その路を斜に登りつめると、今度は屛風

を立てたやうに、巨岩の突き立つた所へ出た。此處が行き止りかと思つたら、岩と岩との迫つた間に、體を横にしなければ、殆通過も出來ない位、小さい路が走つてゐる。いや、走つてゐるのぢやない。まつ直に天上へ向つてゐるのである。私は岩の下に佇んだ儘、樹の枝や蔦蘿に絡られた、遠い青空を振り仰いだ。

「卓筆峯とか望湖臺とか云ふのはこの山の上にあるのでせうか？」

「さあ、多分さうでせう。」

「成程、これは登天平路らしい。」

十七　天平と靈巖と（中）

萬笏朝天の名を負うた、山頂の岩むらへ登つた後、又山路を下りて來ると、さつきの亭へ出る前に、横に切れる廊下が見えた。次手に其處を曲つて見たら、龍の髯や擬寶珠に圍まれた、小さい池が一つある。その池へ亞鉛の懸け樋から、たらたら水の落ちてゐるのが、名高い呉中第一泉だつた。池のまはりには白雲泉とか、魚樂とか、いろいろの名を彫りつけた上に、御丁寧にもペンキか何かさした、大小の碑が並んでゐる。あれは呉中第一泉にしては、餘り水が汚いから、唯

の泥池と間違はれないやうに、廣告をしたのに違ひない。

しかしその池の前の、見山閣とか號するものは、支那の燈籠がぶら下つてゐたり、新しい紺の布團があつたり、半日位寢ころんでゐるには、誂へ向きらしい所だつた。おまけに窓に倚つて見れば、山藤の靡いた崖の腹に、ずつと竹が群つてゐる。その又遙か山の下に、池の水が光つてゐるのは、乾隆帝が命名した、高義園の林泉であらう。更に上を覗いて見ると、今登つた山頂の一部が、かすかな霧を破つてゐる。私は窓によりかかりながら私自身南畫か何かの點景人物になつたやうに、ちよいと悠然たる態度を粧つて見た。

「天平地平、人心不平、人心平平、天下泰平。」

「何です、それは？」

「さつきの壁に書いてあつた、排日の落書きの一つですがね。中中口調が好いぢやありませんか？　天平地平、人心不平、……」

天平山一見をすませた後、我我は又驢馬に乘りながら、靈巖山靈巖寺へ志した。靈巖山は傳説にもせよ、西施彈琴の岩もあれば、范蠡の幽閉された石室もある。西施や范蠡は幼少の時に、呉越軍談を愛讀した以來、未に私の贔屓役者だから、是非さう云ふ古蹟を見て置きたい。――と云ふ心もちも勿論あつたが、實は社命を帶びてゐる以上、いざ紀行を書かされるとなると、英雄や

美人に緣のある所は、一つでも餘計に見て置いた方が、萬事に好都合ぢやないかと云ふ、さもしい算段もあつたのである。この算段は上海から、江南一帶につき纏つた上、洞庭湖を渡つても離れなかつた。さもなければ私の旅行は、もつと支那人の生活に觸れた、漢詩や南畫の臭味のない、小說家向きのものになつたのである。が、今は便便と道草なぞを食つてゐる場合ぢやない。――兎に角靈巖山へ志した。處が十町と來ない内に、何時か道が無くなつてしまつた。あたりには草の深い濕地に、脊の低い雜木が茂つてゐる。可笑しいなと思つてゐると、驢馬を曳いて來た二人の子供も、其處に足を止めたぎり、何か不安さうに饒舌り出した。

「路が分らないのですか？」

私は島津氏に聲をかけた。島津氏は私の鼻のさきに、瘦せた驢馬を乘り据ゑた儘、大澤に陷つた項羽のやうに、あたりの景色を見廻してゐる。

「分らないのださうです。――おお、あすこに百姓がゐる。おい、モンモンケ！」

但しこのモンモンケなる言葉は、驢馬曳きの子供に發せられたのである。旣に百姓がゐると云ふ以上、これはきつとその百姓に、路を問へと云ふ事に違ひない。私の推察にして誤らなければ、モンは問答の問である。――私はかう思つたから、私について來た驢馬曳きにも、早速同樣の命令を下した。

「モンモンケ！　モンモンケ！」
　モンモンケは秘密の呪文のやうに、忽路をわからせてくれた。驢馬曳きの復命した所によれば、右にまつ直に行きさへすれば、靈巖山の麓へ出るさうである。我我は早速教へられた方へ、驢馬の頭を向け直した。が、又一二町行つたと思ふと、本街道へ來るどころか、寂しい谷合ひへはいつてしまつた。磊磊と横はつた石の間には細い松ばかり生え伸びてゐる。おまけに水でも出た跡か、その松の根こぎになつたのも見えれば、山腹の土の崩れてゐるのも見える。更に一層困つた事には、少時谷に沿うて登つて行つたら、とうとう驢馬が動かなくなつた。
「弱つたな。」
　私は山を見上げながら、ため息をつかずにはゐられなかつた。
「何、かう云ふ事も面白いです。あの山がきつと靈巖山ですから、——さうです、兎に角あの山へ登つて見ませう。」
　島津氏は私を勵ますやうに、わざとしか思はれない快活さを見せた。
「驢馬はどうするのです？」
「驢馬は此處に待たして置けばよろしい。」
　島津氏は驢馬を飛び下りると、一人の子供と二頭の驢馬とを松の中に殘した儘、猛然と山腹へ

登り出した。勿論、登り出したと云つても、路なぞがついてゐる訣ぢやない、野薔薇や笹を押し分けながら、ひた押しに斜面を押し上るのである。私はもう一人の驢馬曳きと一しよに、負けずに島津氏の跡を追つた。が、病後の事だから、かうなるとさすがに息が切れる。その上十間ばかり登る内にぽつりと冷たい物が顔に落ちた。と思ふと一山の木木が、さあつとかすかに戰ぎ始める。雨――私は靴を辷らせないやうに、細い松の木につかまりながら、足もとの谷を見下した。谷の底には驢馬や子供が小さく雨に濡らされてゐる。……

十八　天平と靈巖と（下）

やつと靈巖山へ辿り着いて見たら、苦勞して來たのが莫迦莫迦しい程、侘しい禿げ山に過ぎなかつた。第一西施の彈琴臺とか、名高い館娃宮址とか云ふのは、裸の岩が散在した、草も碌にない山頂である。これでは如何に詩人がつても、到底わが李太白のやうに、「宮女如花滿春殿」などと、懷古の情には沈めさうもない。それに天氣でも好かつたなら、遙に太湖の水光か何か、見晴らす事が出來たのだが、生憎今日はどちらを見ても唯模糊たる雲煙が、立ち迷つてゐるばかりである。私は靈巖寺の朽廊に、蕭蕭たる雨の音を聞きながら、七級の廢塔を仰ぎ見た時、古人

の名句を思ふよりも、しみじみ腹の減つた事を感じた。

我我は寺の一室に、ビスケツトばかりの晝飯をすませた。が、一應腹は張つても、精力は更に恢復しない。私は埃臭い茶を飲みながら、妙に悲しい心もちがして來た。

「島津さん。この寺の坊主に掛け合つてくれませんか？　白砂糖が少し欲しいのですが、――」

「白砂糖？　白砂糖をどうするのです？」

「舐めるのです。白砂糖がなければ赤砂糖でもよろしい。」

しかし小皿へ山盛り一杯、どす黒い砂糖を舐めた後も、やはり元氣にはなれなかつた。雨は中中晴れさうもない。蘇州へは日本里數にしても、四五里の道を隔ててゐる。――そんな事を考へると、愈心もちが沈んでしまふ。私は何だか肋膜炎が、再發しさうな氣さへして來た。

この情ない心もちは、靈巖山を下る間にも、だんだん募つて來る一方だつた。風雨は暗い中空から、絶えず我我を襲つて來る。我我は傘を持つてゐたが、さつき驢馬を捨てる時に、一本とも其處に殘して來た。路は勿論辷りさうである。時間は彼是三時過ぎになつた。――其處へ最後の打擊だつたのは、山の麓の村へ來ても、我我の驢馬の姿が見えない。驢馬曳きの子供は大聲に、何度も友だちの名を呼んだが、それこそ答へるのは谺だけである。私は吹きかける雨の中に、すぶ濡れの島津氏へ聲をかけた。

「驢馬がゐないとすると、どうしたものでせう？」

「ゐますよ。ゐなければ歩くだけです。」

島津氏はやはり元氣だつた。それは私を慰める爲に、強て裝つたものだつたかも知れない。が、私はその言葉を聞くと、急に癇癪が起り出した。元來癇癪と云ふものは、決して強者の起すものぢやない。この場合も私が腹を立てたのは、全然弱者だつた祟りである。四百餘州を縱横した島津氏と、自脈ばかりとつてゐる病後の私と、——困苦缺乏に耐へる上から見れば、私なぞは島津氏の足もとへもよれない。それだけに、平然たる島津氏の言葉は、私の怒火を吹き煽つたのである。私は前後四箇月の旅行中、この時だけ比類ない佛頂面になつた。

その内に驢馬曳きは驢馬を尋ねに、何處か村の外へ行つてしまふ。我我は或農家の戸口に、やつと雨を避けながら、驢馬曳きの歸るのを待ち暮してゐる。古い白壁、石だらけの村道、雨に光つた道ばたの桑の葉、——その外は殆人影さへ見えない。時計を出して見れば、四時になつてゐる。雨、四五里の路、肋膜炎、——私はなほこの上にも、日の暮れる事を惧れながら、風を引かない用心に、絶えず足踏みをする必要があつた。

すると其處へこの家の主人か、ぢぢむさい支那人が顏を出した。見れば家の内部には、轎子が一臺しまつてある。きつと此男の副業は、駕籠舁きか何かに違ひない。

「此處から轎子は雇へないのですか？」

私は業腹なのを我慢しながら、かう島津氏に尋ねて見た。

「聞いて見ませう。」

しかし島津氏の上海語は、相手の支那人に通ずるにしても、殘念ながら相手の蘇州語は十分島津氏に通じないらしい。島津氏は押問答を重ねた後、とうとう交渉を斷念した。斷念したのはやむを得ない。が、一瞬の後振り向いて見ると、島津氏は私に頓着なく、悠悠と手帳を擴げながら、今日得た俳句を書きつけてゐる。私はこの容子を眺めた時、羅馬の大火を前にした儘、微笑してゐるネロを見たやうに、喧嘩を吹きかけなければすまない氣になつた。

「お互に迷惑しますね、案内者がその土地を知らないと。——」

喧嘩面の私の言葉は、忽ち島津氏にも腹を立てさせた。これは怒るのが當り前である。私は今考へると、あの時島津氏に擲られなかつたのは、不幸中の幸と思はざるを得ない。

「その土地を知らない？　知らない事は前にも申し上げた筈です。」

島津氏は私を睨みつけた。私も足踏みを續けながら、負けずに島津氏を睨み返した。——これは次手に注意するが、かう云ふ時には威張るにしても、ちやんと直立して威張るべきである。威張る傍、機械的に、行儀の好い足踏みを繰返してゐるのは、少からず威厳を傷けるらしい。

雨は依然として降りしきつてゐる。驢馬の鈴音は何時になつても、容易に聞えさうなけはひがしない。我我は寂しい桑畑を前に、二人とも血相を變へながら、ぢつと長い間立ち續けてゐた。

十九　寒山寺と虎邱と

客。蘇州はどうだつたね？

主人。蘇州は好い處だよ。僕に云はせれば江南第一だね。まだあすこは西湖のやうに、ヤンキイ趣味に染んでゐない。それだけでも難有い氣がした。

客。姑蘇城外の寒山寺は？

主人。寒山寺かい？　寒山寺は、――誰でも支那へ行つた連中に聞いて見給へ。きつと皆下らんと云ふから。

客。君もかね？

主人。さうさね。下らんには違ひない。今の寒山寺は明治四十四年に、江蘇の巡撫程德全が、重建したと云ふ事だが、本堂と云はず、鐘樓と云はず、悉紅殼を塗り立てた、俗悪恐るべき建物だから、到底月落ち烏啼くどころの騒ぎぢやない。おまけに寺のある所は、城の西一里ばかり

の、楓橋鎮と云ふ支那町だがね。これが又何の特色もない、不潔を極めた門前町と來てゐる。

客。それぢや取り柄がないぢやないか。

主人。まあ、幾分でも取り柄のあるのは、その取り柄のない所だね。何故と云へば寒山寺は、一番日本人には馴染の深い寺だ。誰でも江南へ遊んだものは、必寒山寺へ見物に出かける。唐詩選を知らない連中でも、張繼の詩だけは知つてゐるからね。何でも程德全が重修したのも、一つには日本人の參詣が多いから、日本に敬意を表する爲に、一肌脫いだのだと云ふ事だ。すると寒山寺を俗惡にしたのは、日本人にも責はあるかも知れない。

客。しかし日本人には氣に入らないのだらう？

主人。さうらしいね。が、程德全の愚を哂ふ連中でも、西洋人相手の仕事になると、程大人と同じ事をしてゐる。寒山寺はその實物教訓だね。其處に多少興味があるだらう？ 殊にあの寺の坊さんは、日本人の顏さへ見ると、早速紙を展げては「跨海萬里弔古寺、惟爲鐘聲遠送君」と、得意さうに惡筆を振ふ。これは誰でも名を聞いた上、何何大人正とか何とか入れて、一枚一圓に賣らうと云ふのだ。日本人の旅客の面目は、こんな所にも窺はれるぢやないか？ またその上に面白いのは、張繼の詩を刻んだ石碑が、あの寺には新舊二つある。古い碑の書き手は文徵明、新しい碑の書き手は兪曲園だが、この昔の石碑を見ると、散散に字が缺かれてゐる。これ

を缺いたのは誰だと云ふと、寒山寺を愛する日本人ださうだ。——まあ、ざつとこんな點では、寒山寺も一見の價値があるね。

客。それぢや國辱を拜見する訣ぢやないか？

主人。さうさね。事によると案外程徳全は、日本人を愚弄する爲に、あんな重修をやつたのかも知れない。たとひ皮肉でないにしても、あらゆる支那旅行記の著者のやうに、程徳全を嗤ふのは殘酷だね。敷島の大和の知事閣下にしても、あの位の英斷に出づるの士は餘りなささうでもないぢやないか。

客。寶帶橋は？

主人。唯長い石橋さ。ちよいとあの不忍の池の觀月橋と云ふ感じだね。尤もあれ程俗な氣はしない。春風春水春草堤——道具立てはちやんと揃つてゐる。

客。虎邱は好い所だらう？

主人。虎邱も荒廢を極めてゐたつけ。あすこは吳王闔閭の墓ださうだが、今日では全然塵塚の山だね。傳說によればあの山の下には、金銀珠玉を細工をした鴨が、三千の寶劍と一しよに埋めてあると云ふ。そんな事だけ聞いてゐる方が、反つて興味が多い位だ。秦の始皇の試劍石、生公の說法を聞いた點頭石、江南の美人眞孃の墓、——いろいろ因緣を承ると、難有い遺蹟が澤山

あるが、どれも見てもつまらん物だ。殊に劍池なぞと來た日には、池と云ふよりも水たまりだね。しかも五味捨て場も同じ始末なのだから、王禹の劍池銘にあるやうに、「巖巖虎邱、沈沈劍池、峻不可以仰視、深不可以下窺」の趣は、義理にもあるとは考へられない。唯殘曛を漲らした空に、やや傾いた塔を見上げた時は、悲壯に近い心もちがした。この塔もとうに朽廢してゐるから、一層毎に草を茂らせてゐる。それに何だか無數の鳥が、盛に啼き聲を飛ばせながら、塔のまはりを繞つてゐたのは、一段と嬉しかつたのに違ひない。僕はその時島津氏に、鳥の名前を尋ねて見たが、確かパクとか云ふ事だつた。パクとはどう云ふ字を書くのか、其處は島津氏も知らないのだがね。君はパクなるものを知らないのかい？

客。パクかい？ バクなら夢を食ふ獸だがね。

主人。一體日本の文學者は、動植物の知識に乏しすぎるね。南部修太郎と云ふ男なぞは日比谷公園の蘆を見ても、麥だとばかり思つてゐたのだから。――まあ、そんな事はどうでも好い。塔の外にもう一つ、小呉軒と云ふ建物がある。其處は中中見晴しが好い。暮色に煙つた白壁や新樹、その間を縫つた水路の光、――僕はそんな物を眺めながら、遠い蛙の聲を聞いてゐると、かすかに旅愁を感じたものだ。

二十　蘇州の水

主人。寒山寺だの虎邱だのの外にも、蘇州には名高い庭がある。留園だとか、西園だとか。——

客。それも皆つまらないものぢやないか？

主人。まあ、格別敬服もしないね。唯留園の廣いのには、——園その物が廣いのぢやない、屋敷全體の廣いのには、聊か妙な心もちになつた。つまり白壁の八幡知らずだね、どちらへ行つても同じやうに、廊下や座敷が續いてゐた。庭も大抵同じやうに、竹だの芭蕉だの太湖石だの、似たやうな物があるばかりだから、愈迷子になりかねない。あんな屋敷へ誘拐された日には、ちよいと逃げる訣にも行かないだらう。

客。誰か誘拐されたのかい？

主人。何、された訣ぢやないが、どうもさう云ふ氣がするのだね。今に支那の谷崎潤一郎は、きつと「留園の祕密」とか何とか、そんな名の小說を作るに違ひない。いや、未來は兎も角も、金瓶梅や紅樓夢を讀むには、現在一見の價値があるやうだ。

客。寒山寺、虎邱、寶帶橋、——いづれもつまらないとなつて見ると、蘇州は大抵つまらなさうぢやないか。

主人。そんな所はつまらないがね。蘇州はつまらない所ぢやない。蘇州にはヴエニスのやうに、何よりもまづ水がある。蘇州の水、——さうさう、蘇州の水と云へば、僕は當時手帳の端に、こんな事も書いて置いたつけ。「自然と人生」式の名文だがね。

——橋名を知らず、石欄に依りつつ河水を見る。日光。微風。水色鴨頭の綠に似たり。兩岸皆粉壁、水上の影描けるが如し。橋下を過ぐるの舟、まづ赤塗りの船首見え、次に竹を編みし船艙見ゆ。櫓聲の咿啞耳にあれど、船尾既に橋下を出づ。桂花一枝流れ來るあり。春愁水色と共に深からんとす。

——暮歸。蹇驢に騎す。路常に水畔。夜泊の船、皆蓬を蔽へるを見る。月明、水靄、兩岸粉壁の影、朦朧として水にあり。時に窓底の人語、燈光の赤きに伴ふを聞く。或は又石橋あり。偶橋上を過ぐるの人、胡弓を弄する事三兩聲。仰ぎ見ればその人既にあらず。唯橋欄の高きを見るのみ。景情宛として「聯芳樓の記」を想はしむ。知らず、闔閭門外宮河の邊、珠簾重重月に垂るる事、薛家の粧樓の如きものありや否や。

——春雨霏霏、兩岸の粉壁、苔色鮮なるもの少からず。水上鵞浮ぶ事三四。橋畔の柳條、

殆水に及ばんとす。畫とすれば或は套。實景を見るには惡しからず。舟あり。徐に橋下より來る。載する物を見れば棺なり。艙中の一老媼、線香に火をともしつつ、棺前に手向けんとするを見る。

客。へええ、大いに又感心したものぢやないか？

主人。水路だけは實際美しい。日本にすれば松江だね。しかしあの白壁の影が、狹い川に落ちてゐる所は、松江でもちよいと見られさうもない。その癖未に情ない事には、とうとう畫舫にも乘らずにしまつた。しかし水には感服しただけ、兎に角未練は殘つてゐない。殘念なのは美人を見なかつた事だ。

客。一人も見ない？

主人。一人も見ない。——何でも村田君の說によると、目をつぶつて摑んでも、蘇州の女ならば別嬪ださうだ。現に支那の藝者の言葉は、皆蘇州語ださうだから、その位の事はあるかも知れない。處が又島津氏の說では、一體蘇州の藝者なるものは、蘇州語に一通り通じた上、上海へ出ようと云ふ候補生か、又は上海へ出ても流行らないので、歸つて來たと云ふ落伍卒だから、碌な女はゐないさうだ。成程これも一理窟だね。

客。それで見ずにしまつたのかい？

主人。何、別に理由なぞはない。唯藝者の顏を見るよりは、一時間も餘計に眠りたかつたのさ。

何しろあの時分は驢馬へ乘つたおかげに、すつかり尻をすり剝いてゐたから。——

客。意氣地のない男だな。

主人。我ながら意氣地があつたとは思へないよ。

二十一　客棧と酒棧

島津氏が何處かへ出て行つた後、私は椅子に腰を下しながら、ゆつくり一本の敷島を吸つた。寢臺が二つ、椅子が二つ、茶道具を載せた卓子が一つ、それから鏡のある洗面臺が一つ、——その外は窓掛も敷物もない。唯白いむき出しの壁に、ペンキ塗りの戸が鎖してある。が、思つたより不潔ぢやない。蚤とり粉を盛に撒いたせゐか、幸南京蟲にも食はれなかつた。この分なら支那宿へ泊るのも、茶代の多寡を心配しながら日本人の旅館に陣取るよりは、遙に氣が利いて居る位である。——私はそんな事を考へながら、硝子窓の外へ眼をやつた。この部屋のあるのは三階だから、窓の外の眺も可也廣い。しかし眼にはいるものは、夕明りの中に黑み渡つた、侘しい瓦屋根ばかりである。何時かジョオンズがさう云つたつけ、最も日本らしい寂しさは、三越の屋上から見下した、限りない瓦屋根に漂つてゐる。何故日本の畫家諸君は。——

私は物音に驚かされた。見ればペンキ塗りの戸口には、不相變青い服を着た、脊の低い婆さんが佇んでゐる。婆さんはにやにや笑ひながら、何か私に話しかけるが、唖の旅行家たる私には、勿論一言も判然しない。私は當惑し切つた儘、やむを得ず顏ばかり眺めてゐた。すると、開け放した戸の外に、ちらりと花やかな色彩が見えた。水水しい劉海(前髮)、水晶の耳環、最後に繻子らしい薄紫の衣裳——少女は手巾を弄びながら、部屋の中には一瞥も送らず、靜に廊下を通り抜けた。と思ふと又婆さんは、早口に何か饒舌り立てては、得意さうに笑つて見せる、かうなればもう婆さんの來意も、島津氏の通譯を待つ必要はない。私は脊の低い婆さんの肩へ、ちよいと兩手をかけるが早いか、くるりと彼女に廻れ右をさせた。

「不要！」

其處へ島津氏が歸つて來た。

その晩私は島津氏と一しよに、城外の酒棧へ出かけて行つた。島津氏は「老酒に醉つた父の横顏」と云ふ、自畫像めいた俳句の作者だから、勿論相當の酒家である。が、私は殆飲めない。それが彼是一時間あまり、酒棧の一隅に坐つてゐたのは、一つには島津氏の德望の力、二つには酒棧に纏綿する、小說めいた氣もちの力である。

居酒屋は都合二軒見たが、便宜上一軒だけ紹介すると、其處は白壁を左右にした、天井の高い

店裏である。部屋の突き當りはどう云ふ訣か、荒い格子戸にたつてゐたから、夜目にも往來の人通りが見える。机や腰掛けは剝てゐたが、ため塗りのやうに塗つてあるらしい。私はその机を中に、甘蔗の莖をしやぶりながら、時時島津氏へ御酌をしたりした。

我我の向うには二三人、薄汚い一座が酒を飲んでゐる。その又向うの白壁の際には、殆ど天井につかへる位、素燒の酒甁が積み上げてある。何でも老酒の上等なのは、白い甁に入れると云ふ事だから、この店の入り口の金看板に、京莊花雕なぞと書いてあるのはきつと大法螺に違ひない。さう云へば土間に寢てゐる犬も、氣味の惡い程瘦せた上に、癩蓋だらけの頭をしてゐる。往來を通る驢馬の鈴、門附らしい胡弓の音、――さう云ふ騷ぎの聞える中に、向うの一座は愉快さうに、何時か拳を打ち始めた。

其處へ面皰のある男が一人、汚い桶を肩へ吊りながら、我我の机へ歩み寄つた。桶の中を覗いて見ると、紫がかつた臟腑のやうな物が、幾つも渾沌と投げこんである。

「何です、これは？」

「豚の胃袋や心臟ですがね、酒の肴には好いものです。」

島津氏は銅貨を二枚出した。

「一つやつて御覽なさい。ちよいと鹽氣がついてゐますから。」

私は小さい新聞紙の切れに、二つ三つ轉がつた臟腑を見ながら、遙に東京醫科大學の解剖學教室を思ひ出した。母夜叉孫二娘の店ならば知らず、今日明るい電燈の光に、こんな肴を賣つてゐるとは、さすがに老大國は違つたものである。勿論私は食はなかつた。

二十二　大運河

我我は鎭江から揚州に通ふ、川蒸氣の上等室に腰をかけてゐる。と云ふと如何にも贅澤らしいが、この汽船の上等室は、奴隷船の船艙と大差はない。現に我我が坐つてゐるのもまつ黑な揚げ板の上である。揚げ板の下は、察する所、直と船底に違ひない。ぢや上等室なる所以は何處にあるかと云ふと、兎に角此處は室になつてゐる、下等は船の屋根の上だから、室と呼びたくも室ぢやない。

船の外は名代の揚子江である。揚子江の水の赭い事は、中學生と雖も心得てゐる。が、どの位赭いかと云ふ事は、江に泛ばないと髣髴出來ない。私は上海滯在中、黃浦江の水さへ見れば、必ず黃疸を思ひ出した。あれは今考へると、多少でも海水を交へてゐるだけ、やつと黃疸ですんでゐたのである。しかし揚子江の水の色は、黃浦江よりも遙に赭い。まあ似た色を搜して來れば、

金物の赤錆にそつくりである。それが起伏する波の間に、紫の影を煙らせながら、何處までも無法に廣がつてゐる。殊に今日は曇つてゐるから、一層その色が重苦しい。江上には無數のジヤンクの外に、英吉利の旗を翻した、二本檣の汽船が一艘、一心に濁浪と鬪つてゐる。勿論實際は鬪はずとも、航行出來たのかも知れないが、そのまつ白に塗られた船が、徐に江を溯る所は、どうしても鬪ふと云ふ感じである。私は彼是五分ばかり、揚子江に敬意を拂つてから、冷い板の上に寢ころんだ儘、眠るとも思はず眠つてしまつた。

我我は昨夜十二時頃、蘇州の停車場から汽車に乘つた。鎭江へ着いたのは夜明け方である。停車場の外へ出て見ると、車屋もまだ集まつてゐない。唯曇つた葉柳の空に、鴉ばかり何羽も集まつてゐる。我我は兎に角朝飯を食ひに、停車場前の茶館へ行つた。茶館も今起きたばかりだから、麵類も急には出來ないと云ふ。すると島津氏は茶館の亭主に、何とか云ふ物を持つて來いと云つた。それならば今でもある所を見ると、上等な食物ぢやないに違ひない。又實際食つて見た感じも簾麩のやうな、湯葉のやうな、要するに二度と食ふ氣のしない、頗怪しげな代物である。――さう云ふ艱難を嘗めた上、やつとこの汽船に乘つたのだから、ほつと一息すると同時に、眠氣を催したのも不思議ぢやない。

少時うとうとしてゐた後、汽船の外を眺めると、何時の間に瓜州を過ぎたのか、草の青い一帶

の土手が、直と眼の前に動いてゐた。此處はもう長江ぢやない。隋の煬帝が開鑿した、延長二千五百哩と云ふ、世界第一の大運河である。しかし船から眺めた所は、格別雄大でも何でもない。薄日の當つた土手の上に、野菜の色がちらついたり、百姓の姿が見えたりするのは、何だか銚子通ひの汽船の窓から、葛飾の平野でも眺めるやうな、平凡な氣もちがする位である。私は又煙草を啣へながら、紀行を書かされる時の下拵へに、懷古の詩情を捏ね上げようとした。しかしこれは取りかかつて見ると、思つた程容易に成功しない。第一私が考へる事は、悉案内記が破壞してしまふ。今その見本を擧げて見れば、大體下の通りである。

私。ああ、煬帝はこの堤に、萬株の楊柳を植ゑさせた上、十里に一亭を造らせたと云ふ。堤は昔の堤である。が、煬帝は今何處にあるか？

案内記。堤は昔の堤ぢやない。爾來五代以降元明清、皆北京に都を定め、食糧を江南に需めたから、運河も度度修理された。この堤の草色を見ながら、煬帝の昔を懷ふのは、銀座尾張町に佇みながら、太田道灌を憶ふのも同じ事である。

私。水は今も昔のやうに、悠悠と南北に通じてゐる。が、隋朝は夢のやうに、忽瓦解してしまつたではないか？

案内記。水は南北に通じてゐない。とうに山東省臨清州では、河底に田畑を拵へたから舟楫の

通ずるのは其處までである。

私。ああ、過去よ。美しい過去よ。たとひ隋は亡びても、雲の如き麗姫と共に、この運河に舟を浮べた、我風流天子の榮華は、たとへば壯大な虹のやうに、歴史の空を横切つてゐる。

案内記。煬帝は佚樂に耽つたのではない。あれは大業七年に、遠く高麗を伐たうとした、その準備が暴露しないやうに、表面だけ悠遊を裝つたのである。この運河もすはと云ふ時に、糧食を送る必要上、特に開かせたと思ふが好い。お前は「迷樓記」や「開河記」などを正史と混同してゐはしないか？　あんな俗書は信ずるに足りない。殊に「煬帝艶史」なぞは、小説としても惡作である。

……

私は煙草を吸ひやむと共に、詩情の製造も斷念した。土手の上の春風には、子供を乘せた驢馬が一匹、汽船と同じ方へ歩いてゐる。

二十三　古揚州（上）

揚州の町の特色は、第一に見すぼらしい事である。二階建の家なぞは殆ど見えない。平家も眼に止まつた限りは、いづれも貧しさうな容子である。往來は敷石の凸凹した上に、至る所泥水が

たまつてゐる。蘇州や江州を見た眼には、悲しい氣がすると云つても誇張ぢやない。私は泥だらけな人力車の上に、さう云ふ町町を通りながら、鹽務署の門前へ辿りついた時、腰纏十萬貫、鶴に騎して揚州に遊んでも、これぢやつまらないに違ひないと思つた。

鹽務署の前には石獅と一しよに、番兵がちやんと控へてゐる。我我は來意を告げた後、長い花疊の奧にある、大きい役所の玄關へ行つた。それから給仕の案內通り、アンペラ敷きの應接室へ通つた。應接室の外の庭には、梧桐か何かが立つてゐる。その梢を透かして見たら、糠雨の降つてゐる空が見えた。役所の中はひつそりした儘、何處に人がゐるか判然しない。成程今でもかう云ふ風なら、歐陽修とか蘇東坡とか、昔の文人墨客たちが、本職の詩酒を樂む片手間、役人を務めたのも當然である。

少時其處に待つてゐると、老人のやうな、若いやうな、背廣の御役人がはいつて來た。これが揚州唯一の日本人、鹽務官の高洲太吉氏である。我我は上海の小島氏から、高洲氏へ紹介狀を貰つて來た。さもなければ意氣地のない私は、揚州へ來る氣にはならなかつたかも知れない。來ても高洲氏を知らなければ、愉快に見物は出來なかつたかも知れない。私は甚失禮だが、此處に小島梶郞氏へ、感謝を表して置きたいと思ふ。「上海游記」を讀まれた君子は、多分記憶に殘つてゐると思ふが、小島氏はあの小さい庭に、櫻の咲いたのを得意にしてゐた、俳骨稜稜たる紳士

である。――高洲氏は大きい卓子の向うに、我我二人を招ずると、快活にいろいろ話をした。氏自身の說によると、外國人の揚州に官たるもの、前にマルコ・ポオロあり、後に高洲氏あるのみだと云ふ。私はこれを聞いた時、大いに氏を尊敬したが、今になつて考へて見ると、損をしたやうな氣がしないでもない。今年今月今日今時、揚州の鹽務署へはいつたのも、一足先には島津四十起、一足後には私のみである。

うどんの御馳走になつた後、我我は揚州一見の爲に、高洲氏と鹽務署の門を出た。すると巡兵が二三人、一度に我我へ捧げ銃をした。糠雨はもう晴れてゐたが、往來は不相變ぬかるみが多い。私はこの泥の中を步きながら、又古蹟なるものを見るのだと思ふと、甚心細い氣もちがした。が、高洲氏に尋ねて見たら、見物は畫舫でするのだと云ふ。畫舫ならば勿論悄氣なくとも好い。私はそれを聞かされるが早いか、忽揚州廣しと雖も、悉經めぐりたい心願を起した。

高洲氏の邸に一休みしてから、門前の川へ繫がせた、屋根のある畫舫に乘りこんだのは、その後まだ三十分と、たたない内の事である。畫舫はぢぢむさい船頭の棹に、直と川筋へ漕ぎ出された。川は幅も狹ければ、水の色も妙に黑ずんでゐる。まあ正直に云つてしまへば、これを川と稱するのは、溝と稱するの勝れるのに若かない。その又黑い水の上には、家鴨や鵞鳥が泳いでゐる。兩岸は汚い白壁になつたり、乏しい菜の花の畑になつたり、どうかすると岸の崩れた、寂しい雜

木原になつたりする。が、いづれにした所が、名高い杜牧の詩にあるやうな「青山隱隱水超超」の趣なぞは見られさうもない。殊に煉瓦の橋があつたり、水際に下りた支那の年増が、泥靴の洗濯をしてゐたりするのは、吟懷を傷けるばかりである。が、それはまだしも好い。一番私の辟易したのは、この大溝の臭氣である。私はその臭ひを嗅ぎながら、ぢつと舟の中に坐つてゐると、何だか又肋膜のあたりが、かすかに痛みさうな氣がして來た。しかし高洲、島津の兩先生は、香料の川にでも泛んでゐるやうに、平然と何か話してゐる。私の信ずる所によれば、日本人は支那に住んでゐると第一に嗅覺が鈍るらしい。

二十四　古揚州（中）

この水路を行き盡した所に、城門へ穿つた水門があつた。水門にはちやんと番人がゐるから、舟さへ行けば開けてくれる。それを向うに通り拔けると、急に川幅が廣くなつた。畫舫の左には高高と、揚州城の城壁が連つてゐる。この城壁も瓦の間に、蔦蘿が網を張つてゐたり、灌木が生え伸びてゐたりするのは、杭州や蘇州と變りはない。水と城壁との境には、盛り上つた洲の土の色が、蘆むらの向うに續いてゐる。畫舫の右には竹林が多い。その中に一軒百姓家が見えた。

百姓家の壁にはべた一面に、牡丹餅程のものが貼りつけてある。いや、現在もこの家の前には、鳥打帽をかぶつた男が一人、頻に牡丹餅を製造してゐる。これは何かと思つたら、冬の燃料を作る爲に、牛糞を干し固めてゐるのであつた。

しかし水門を拔けてからは、水も前程臭くはない。景色も畫舫の進むのにつれて、だんだん美しさを加へるやうである。殊に或竹林の後に、古い茶館が一軒ある、――その邊の名前を聞いて見たら、綠楊村と云ふのは風流だつた。實際さう云はれて見れば、茶館の卓子を圍みながら、川を見てゐる連中の顏も、綠楊村裏の佳人らしい、泰平の相を具へてゐる。

その內に我我の畫舫の先には、もう一艘畫舫が見え始めた。この畫舫に乘つてゐるのはいづれも女ばかりである。しかも棹をとつたのなぞは、日本めかしい御下げの髮に、紅い玫瑰の花をさしてゐる。私はもう五分もすれば、彼等の舟を追ひ越すから、その時この揚州の美人に、一瞥を與へようと思つてゐた。が、城壁が盡きると同時に、水路の分れる處へ來ると、彼等の畫舫は右へ曲るし、我我の畫舫は反對の方へ、冷淡にも船首を向けてしまふ。見送れば彼等の舟の跡には、兩岸の蘆の靜な間に、薄白い水光が殘つてゐる。「二十四橋明月夜。玉人何處敎吹簫」――私は突然杜牧の詩が、必しも誇張ぢやない事を感じた。どうも揚州の風物の中には、私さへ詩人と化せしめるやうな、快い惱しさがあるやうである。

畫舫は船頭の操る棹に、水上の水草を押し分けながら、大きい石の眼鏡橋をくぐつた。橋のアアチの石面には、白堊かペンキか覺えてゐないが、兎に角白い字を並べ立てた、排日の宣言が書き立ててある。その橋の下を通り拔けると、畫舫は高洲氏の命令通り、斜に右岸へ進路を向けた。其處にはずつと水際に、柳ばかり枝を垂らしてゐる。

「今の橋？　今の橋が大虹橋、この岸が春柳堤さ。」

高洲氏は舟を止めさせながら、かう私に敎へてくれた。

その春柳堤へ上つて見たら、路を隔てた麥畠の向うに、草色の薄い小山がある。その又小山に幾つとなく、丁度鼹鼠が土を上げたやうに、小さい土饅頭が並んでゐる。墓もかうなると惡くはない。何だか揚州の土の底では、死人さへ微笑してゐさうな氣がする。私は徐氏の花園の方へ、ぶらぶら柳の下を歩きながら、うろ覺えのミユツセなぞを暗誦した。ミユツセ、――尤もミユツセだつたかどうだか當てにはならない。實は唯口の內に、柳、墓、水、戀、草、と云ふやうな、その場合に適切な言葉ばかり、好い加減に呟いてゐると、如何にもミユツセじみた氣がし出したのである。

徐氏の花園を一見した後、我我は又畫舫に乘つて、元通り川を上つて行つた。すると今度は水の向うに、名高い五亭橋が見え始めた。五亭橋一名蓮華橋は、やはり石の眼鏡橋の上に、中央に

一つ、左右に二つ、都合五つの亭を構へた、頗贅澤な橋である。亭の柱や欄干は、皆寂びた丹塗りだから、贅澤でも格別悪どくはない。唯橋臺の石の色は、もう少し古みを帯びてゐても、差支へないと云ふ氣がした。が、大體感じを云へば、周圍に蔓る柳や蘆と、多少不調和な氣がする位、支那風に風雅を極めてゐる。私はこの橋の姿が、かすかに青んだ空を後に、柳の中から現れた時、思はず微笑せずにはゐられなかつた。西湖、虎邱、寶帶橋、——それらも勿論悪いとは云はない。しかし私を幸福にしたのは、少くとも上海以來、何處よりもまづ揚州である。

二十五　古揚州（下）

「——五亭橋畔に喇嘛塔があります。この寺は法海寺と云ふのださうですが、紅殼を塗つた本堂は勿論、喇嘛塔もひどく荒れてゐました。しかし疎な竹林の空に、大きい辣韮形の塔が聳えてゐるのは、壯觀でない事もありません。我我は寺の中をぶらついた後、又畫舫に乘りこみました。

「川の兩岸には不相變、寂しい蘆の茂つた間に、柳や槐が立つてゐます。法海寺の對岸は、確乾隆帝の釣魚臺だつたと思ひますが、その水郷らしい風景の中に、古い亭が一つありました。その水路の窮まつた所が、平山堂のある蜀岡です。遙に畫舫から眺めても、松林と麥畠と土の赤い崖

と、斑に入り交つた蜀岡の景色は、頗る畫趣に富んでゐました。これは一つには岡の上に、處處青空を見せた、春雲が靜に動いてゐる。――その微妙な光の工合が、手傳つてゐたのかも知れません。

「しかし畫舫から上つた後も、蜀岡、――少くとも歐陽修が建てたと云ふ、平山堂のあるあたりは、甚閑雅な所でした。堂は法海寺の境内に、大雄寶殿と並んでゐますが、ひやりと埃の匂のする、薄暗い堂へはいつた時は、何だか難有い氣がしたものです。私は額や聯を讀んだり、欄外の見晴しを賞したり、少時堂の中を徘徊しました。この堂の主人歐陽修は勿論、此處に遊んだ乾隆帝も、きつと今の私のやうに、悠悠たる氣もちを樂んだでせう。その意味では私も凡俗ながら、古人と默會が出來たのです。堂の前には亭亭と、幹の白い松が二本、高い軒瓦を凌いでゐる、――私はそれを仰ぎ見ながら、鄭蘇戡先生のヴェランダの外にも、やはり此白松と云ふのが植ゑてあつた事を思ひ出しました。松の梢に遮られた空には、絶えず時鳥が啼き渡つてゐます。……」

私は手紙を書きかけた儘、「やあ」と高洲氏に御時儀をした。高洲氏は其時私の前へ、一椀の草決明を勸めたからである。――我我は名所の見物をすますと、高洲氏の邸宅へ引き揚げて來た邸宅は手廣い庭を控へた、好く云へば支那の庵室のやうな、惡く云へば稗蒔きの家に近い、藁葺屋根の建物である。が、草花の多い庭は決して稗蒔きどころの騷ぎぢやない。殊に現在暮色の中

に、シネラリアや雛菊の仄いてゐるのは、明星派の歌じみた心もちもする。——私は窓の硝子の外に、さう云ふ庭先を眺めながら、書きかけた手紙はそつちのけに、ゆつくり熱い草決明を啜つた。

「これさへ飲んでゐれば無病長壽さ。僕は珈琲も紅茶も飲まない。朝夕これぱかり飲んでゐる。」

高洲氏はやはり茶椀を前に、草決明の效能を吹聽した。按ずるに草決明と稱するのは、はぶ草の實を煎じたものである。これは牛乳や砂糖を入れると、飲料としても惡いものぢやない。

「つまり何首烏の類ですか？」

島津氏は一口飲んでから、口髭についてゐる滴を拭つた。

「何首烏は君、婬藥さ。草決明はあんな物ぢやない。」

私はそんな對話を外に、もう一度手紙を書き始めた。

「——我我は今夜高洲氏の所に、一晩止めて貰つた後、鎭江へ引返す豫定です。島津氏とは多分鎭江から別れる事になるでせう。私は蘇州滯在中、島津氏と一度大喧嘩をしました。が、今ではかう云ふ好漢と、何故喧嘩をしたかと思つてゐます。どうかその點は御安心下さい。

「何でも坊間の說によると、高洲氏は年俸何萬圓とかの大官になつてゐるさうですが、この部屋も紫檀の寢臺があつたり、いろいろ骨董が並べてあつたり、ホテルよりも遙に難有い位です。唯

寢臺の足りない爲、私は島津氏と長椅子の上へ、同衾する運命を荷ひました。それも足と頭と並ぶやうに、枕を反對にするのださうですから、私の頭は島津氏の足に何時蹴飛ばされるかわかりません。私は如何に島津氏の足が、赤縣の山河を踏破しただけに巖丈であるかを知つてゐます。その足が私の枕の近所に、夜中横はつてゐるのだと思ふと、確に愉快ではありません。私は昔袈裟御前が、盛遠に打たれる覺悟をしながら、靜に獨り寢てゐた如く、今夜も豫め……」

私は急に手紙を隱した。

「大分長い手紙ですな。」

島津氏は何だか落ち着かなさうに、部屋の中を歩きながら、私の手紙へ眼をやつた。事によると島津氏自身も、私に頭を蹴られはしないかと、內心不安に思つたのかも知れない。

二十六　金山寺

「對聯の文句も變りましたね。御覽なさい。あすこに貼つてゐるやつなぞは、獨立大道、共和萬歲としてあります。」

「成程、此處のも新しい。文明世界、安樂人家と書いてあります。」

我我は人力車に揺られながら、こんな事を話し合つた。狹い路の兩側には、煮賣屋だの安宿だの、いづれも薄汚い家が並んでゐる。その戶口に貼りつけた、例の緋唐紙の聯を讀むと、大抵今話した通り、新時代の對句が書いてある。我我が今通つてゐるのは、吳中の門戶たる鎭江ぢやない。正に「西曆千八百六十一年天津條約により開港せられたる」民國十年の鎭江である。

「今眞紅な着物を着た子供がゐたでせう?」

「ええ、肥つたお上さんが抱いてゐた。――」

「あれです。あれは天然痘ですよ。」

私は急にこの四五年、種痘をしない事を思ひ出した。

その內に我我の人力車は、鎭江停車場の前に着いた。が、時間表を調べて見ると、南京行の汽車に乘るのには、まだ一時間程餘裕がある。既に餘裕があるとすれば、あの山の上に塔の見える、金山寺を見ないと云ふ法はない。我我は評議一決するが早いか、早速又人力車の客となつた。但し早速とは云ふものの、例の通り賃錢を値切る爲に、十分ばかりかかつたのは事實である。

最初に車の通つたのは、掘立小屋ばかり軒を並べた、頗る原始的な貧民窟である。小屋の屋根は藁葺きだが、土を塗つた壁は殆ど見えない、多くはあんぺらか蓆張りである。その內外には男も女も、陰慘たる顏をしたのがうろついてゐる。私は小屋の屋根の後に、丈の高い蘆を眺めなが

ら、もう一度疱瘡になりさうな氣がした。

「どうです、あの犬は？」

「毛も何もない犬は珍しい。が、氣味も惡いですね。」

「ああ云ふのは皆梅毒ですよ。苦力や何かに移されるのださうです。」

その次に車の通つたのは、川があつて、材木屋があつて、——要するに木場のやうな所である。此處には家家の軒に貼つた、小さい緋唐紙の切れ端に、「姜大公在此」云云の文字が並んでゐる。これは「爲朝御宿」のやうな、お呪ひの類に違ひない。その川を向うへ渡つたら、不景氣な町を通り拔けた所に、赤壁の寺の門が立つてゐた。門の前には乞食が一人、松の木の根かたに坐つた儘、どう云ふ訣か深呼吸をしてゐる。事によるとあれは哀を乞ふ爲に、苦しさうな容子をして見せたのかも知れない。

金山寺は勿論この寺である。我我は車を捨てた後、一通り寺内を歩き廻つた。が、何分にも汽車の時間があるから、ゆつくり見物する氣もちになれない。寺は山に倚つてゐるので、(昔はこれが島だつたと云ふが、)一堂毎にだんだん高くなつてゐる。その間の石段を上下しながら、ざつと見て歩いた感じを云ふと、勢ひ未來派の畫のやうな、妙に錯雜したものになつてしまふ。しかし當時の印象は、それに違ひなかつたのだから、手帳に書いてあるのを寫して見ると、大體こんな

調子である。

「白壁。赤い柱。白壁。乾いた敷石。廣い敷石。忽又赤い柱。白壁。梁の額。梁の彫刻。梁の金と赤と黑と。大きい鼎。僧の頭。頭に殘つた六つの灸跡。揚子江の波。代赭色に泡立つた波。無際限に起伏する波。塔の屋根。甍の草。塔の甍に劃られた空。壁に嵌めた石刻。金山寺の圖。査士標の詩。流れて來る燕。白壁と石欄と。蘇東坡の木像。甍の黑と柱の赤と壁の白と。島津氏はカメラを覗いてゐる。廣い敷石。簾。突然鐘の音。敷石に落ちた葱の色。……」

どうもこれだけ書いたのぢや、讀者には一向通じさうもない。が、通じる事にして置かないと、書き直すだけでも手數である。手數も勿論ふだんなら辭さない。が、私は今名古屋にゐる。おまけに道づれの菊池寛は、熱を出して呻つてゐる。どうか其處を御酌量の上、通じるとして置いて頂きたい。この一回を書き終つた後、私は又菊池の病室へ出張しなければならないのである。

二十七　南京（上）

南京へ着いた日の午後、私は何とか云ふ支那人と、とり敢へず城内一見の爲に、例の通り人力車の客となつた。夕日の光の流れた町は、西洋建も交つた家並の後に、麥や蠶豆の畠を見せたり、

鵞鳥のゐる池を見せたりする。その上比較的廣い往來には、行人の數も疎にしかない。案内者の支那人に尋ねて見ると、南京城内の五分の三は、畠や荒地になつてゐると云ふ。私は路側の柳だの、崩れかかつた土塀だの、燕の群だのを眺めながら、懷古の情を催すと同時に、かう云ふ空き地を買つて置いたら、成金になれさうな心もちもし出した。

「誰か今の内に買つて置けば好いのに。浦口(南京の對岸にある町)が盛になりさへすれば、きつと地價も暴騰するぜ。」

「駄目です。支那人は皆明日の事を考へない。地面なぞを買ふものはありやしません。」

「ぢや君だけ考へるさ。」

「私もやはり考へない。——第一考へる事は出來ないのです。家を燒かれるか殺されるか、明日の事はわからんでせう。其處が日本とは違ふ所です。まあ今の支那人は、子供の生ひ先を樂みにするより、酒か女かに嵌つてゐますね。」

その内に何時か往來には、呉服屋だの本屋だの、賑かな店が見え始めた。私は靈巖山へ登つた歸りに、何度も路に迷つた擧句、とうとう日さへ暮れたものだから、驢馬ごと田の中へ飛びこんだり、襯衣まで雨に透されたり、一方ならない難儀をした。その記念にはキッドの靴に、二三箇所大きい穴が明いてゐる。私は靴屋の見えたのを幸ひ、靴を買ふ必要を痛感したから、早速その

店の飾り窓の前へ、車を止めるやうに命令した。

靴屋は中へはいつて見ると、思つたより廣い店構へだつた。其處に職人がたつた二人、こつこつ靴を拵へてゐる。まはりには大きい硝子の戸棚に、西洋風の靴は勿論、支那の靴もいろいろ飾つてある。黑い靴、桃色の靴、水色の靴、――支那の靴はいづれも繻子張りだから、大小さまざまの男女の靴が、夕明りの中に並んでゐるのは、妙に美しい氣がしない事もない。おまけに帳場に立つた主人は、色の白い、口もとの優しい、それだけに一層氣味の惡い、片目眇の男である。私はちよいとロマンティツクな氣になりながら、出來合ひの靴を物色し出した。この店には戸棚の何處かに、人間の皮を縫ひ合はせた、華奢な女の靴があるかも知れない、――そんな氣も多少はしたのである。が、私の買つた靴はロマンティツクでも何でもない。正價六圓の編上げである。色は、――その後この靴をはいた儘、村田烏江君とめぐり遇つたら、「妙な色ですね。鞄をはいて歩いてゐるやうぢやないですか。」と、殘酷な批評を加へられた。實際又黃色いやうな、黑いやうな、甚怪しげな赤靴である。

新しい靴をはいた後、又車に乘つて行つたら、貢院の續いてゐる往來へ出た。貢院は坪數約三萬、戸數二萬六百とか云ふ、途方もない規模を備へた、昔の文官試驗場である。通りすがりに見た感じは、棟割長屋と大差はない。が、日の入りの空に聳えた、壁だけ灰白い明遠樓の下に、無

數の甍が連つてゐるのは、大袈裟な氣もちがするばかりか、如何にも荒涼たる景色である。私はその屋根を眺めてゐると、急に天下の試驗制度が悉下らない氣がし出した。同時に又天下の落第書生に、滿腔の同情も捧げたくなつた。諸君が試驗に落第したのは、諸君の無能によるのぢやない。單に不幸なる偶然である。古來支那の小說家は、この偶然を必然とする爲に、諸處の貢院を舞臺とする、因果の怪談を作り出した。が、あれは信ずるに足りない。いや、寧ろさう云ふ話は、彼等も試驗の及落には、如何に偶然が幅を利かすか、明かに知つてゐる證據である。諸君は試驗に落第しても、諸君の能力を疑つてはならない。もしそれを疑つたが最後、諸君は諸君自身を亡ぼすと共に、諸君の先進たる試驗官をも、精神的殺人の犯罪に陷らせる事になるからである。現に私なぞは落第點を取つても、私自身の才力に就いては、寸毫の疑も挾まなかつた。その爲に當時の試驗官諸公も、私に接する時だけは、良心の呵責を感じないらしい。……

「貢院はもつとあつたのです。」

案內者の聲は卒然と、私の妄想を驚かせた。彼は私を顧みながら、點點と空に蝙蝠を飛ばせた、物悲しい瓦屋根を指さしてゐる。

「一時は議員の選擧場にも使はれたのですが、去年以來どしどし毀され出しました。」

我我の車はさう云ふ內に、名高い秦淮のほとりへ出てゐた。

二十八　南京（中）

私はホテルの西洋間に、きな臭い葉卷を啣へた儘、昨日ざつと見物した、秦淮の景色を書き留めてゐた。此處は日本人經營の宿屋だが、室の一隅に立て廻した、惡どいペンキ塗りの山水屛風は、私を惱ます事一通りぢやない。おまけにバタの惡い燒麪包は、私の胃袋の口もとに、さつきからまだ痞へてゐる。私は多少のノスタルジアを感じながら、せつせと萬年筆を走らせ續けた。

「秦淮の孔子廟を過ぐ。時既に薄暮なれば、門を鎖して人を入れず。門前に老いたる講釋師あり。多數の閑人に圍まれつつ、三國志か何か辯ずるを見る。掌中の扇子、舌頭の諧謔、日本の辻講釋を髣髴せしむ。

「橋上より眺むれば、秦淮は平凡なる溝川なり。川幅は本所の竪川位。兩岸に櫛比する人家は、料理屋藝者屋の類なりと云ふ。人家の空に新樹の梢あり。人なき畫舫三四、暮靄の中に繋がれしも見ゆ。古人云ふ。「煙籠寒水月籠沙」と。這般の風景既に見るべからず。云はば今日の秦淮は、俗臭紛紛たる柳橋なり。

「水畔の飯館に晩飯を喫す。一流の料理屋の由なれども、室内は餘り綺麗ならず。木彫りの菊に

ペンキを塗れる柱、西瓜の種を散亂したる板敷き、拙き水墨の四君子の軸、――畢に今日の支那料理屋は、味覺以上の何物をも滿足せしめざる場所なるべし。食事は八寶飯佳。勘定は祝儀共二人前三圓二十錢。食事中隣室に胡弓の音あり。歌聲又次いで起る。昔は一曲の後庭花、詩人を愁殺せしめたれど、東方の遊子多恨ならず。青黑き玉子を頬張りながら、微醺を帶びたる案内者と、明日の豫定を談ずる事多時。

「飯館を出づれば既に夜なり。家家の電燈の光、妓の人力車に駕せるを照す。宛然代地の河岸を行くが如し。されど一の姝麗を見ず。私に疑ふ、『秦淮畫舫錄』中の美人、幾人か懸け値のなきものある。もし夫『桃花扇傳奇』の香君に至つては、獨り秦淮の妓家と云はず、四百餘州を遍歷するも、恐らくは一人もあらざるべし。……」

私はふと顏を擧げた。卓子の前には社の五味君が、支那服を着たなり佇んでゐる。暖さうな黑の馬掛兒に、藍の大掛兒を着こんだ所は、威儀堂堂と評しても誇張ぢやない。私は挨拶をする前に、ちよいとその支那服に敬意を表した。(後に私の支那服が、北京の日本人諸君を惱ませたのは、確にこの五味君の惡影響である。)

「今日は私が御案内しませう。明の孝陵から莫愁湖の方へ。」

「さうですか。ぢや早速出かけませう。」

私は名所を見たいよりも、胃の中の麪包を消化したさに、早速外套へ手を通した。

一時間の後、我我二人は、鍾山の陵に至るべき、堂堂たる石橋を渡つてゐた。孝陵は長髪賊の亂の爲に、大抵の殿樓を燒かれたから、何處を見ても草ばかりである。その離離とした草の中に、大きい石の象が立つてゐたり、門の礎が殘つてゐたりするのは、到底奈良の郊外の綠蕪に、銀の目貫の太刀を下げ佩いた公子を憶ふ所の寂しさぢやない。現にこの石橋にしても、處處の石の隙間に、薊の花が咲いてゐるのは、その儘懷古の詩境である。私は吐き氣をこらへながら、鍾山の松柏を仰ぎ見ては、六朝の金粉何とか云ふ前人の詩を思ひ出さうとした。

陵その物――かどうか知らないが、兎に角最後に聳えてゐるのは、無暗に高い石の壁だつた。その壁のまん中に、ざつと自動車でも通れさうな、爪先上りのトンネルがある。このトンネルの高さへも、壁全體の高さから見れば、やつと四分の一位しかない。私はトルネルの前に佇んだ儘、薄黑い壁のずつと上に、晩春の靑空を仰いだ時、何だか急に自分の體が、小鳥程になるやうな心もちがした。さうして其處の敷石の草へ、酸つぱい水を少し吐いた。

そのトンネルを通り抜けた後、少時石段を登つたら、とうとう陵の一番上へ出た。其處には屋根も柱もない、赤壁だけがぐるりと殘つてゐる。あたりに生え伸びた若木や草、壁一面の落書の跡、――荒廢はやはり變りがない。しかしこの陵上に立つて見ると、紛紛と飛び交ふ燕の下に、

さつき渡つた石橋は勿論、正殿、郭門、薄白い陵道、——その他日の光に照つた山河が、遙に青青と廣がつてゐる。五味君は叡山の將門のやうに、悠然と風に吹かれながら、點點と眼下を步いてゐる、何人かの男女を見下した。

「御覽なさい。今日は西門外に、高跳動があるものですから、見物人が大分多いやうです。」

が、鳥打帽をかぶつた純友は、酸つぱい水を口にためた儘、高跳動とは何の事だか、尋ねて見る元氣も起らなかつた。

二十九　南京（下）

私はホテルに歸つて來ると、直にベッドに這ひ上つた。胃は相不變痛んでゐる。熱も少しはあるらしい。何だかこのベッドに横はつた儘、曠世の大志を抱きながら、往生してしまひさうな心もちがする。私は茶を入れて來た束髮の女中に、按摩はないかと尋ねて見た。すると純粹の按摩はないが、按摩をする床屋ならばあると云ふ。私は床屋でも湯屋でも好いから、早速その按摩を呼んでくれろと云つた。

女中が驚いて引き下つた後、久米正雄とお揃ひに買つた、ニツケルの時計を出して見ると、や

つと二時何分過ぎである。今日は孝陵を見物したきり、莫愁湖へは廻らずに歸つて來た。西湖では蘇小を弔ひ、虎邱では眞娘を弔つたのだから、やはり三美妓の一人たる莫愁も弔ひに行きたかつたが、かう云ふ始末ぢややむを得ない。いや、今日五味君と晝飯を食ひに、秦淮の料理屋にゐた時などは、鮑の湯を吸ひかけたなり、少時は口も利けなかつた程、世にも胸苦しい心もちになつた。事によると胃病と同時に、肋膜炎も再發したのかも知れない、――そんな事を考へてゐると、愈私は五六分の内に、落命にでも及びさうな氣がし始めた。

その内にふと人音がしたから、突伏してゐた顏を擧げると、嫌に脊の高い支那人が一人、ベッドの前に佇んでゐる。私はちよいとショックを受けた。實際ペンキ塗りの屛風の前に、突然こんなのつぽを發見するのは、誰にも氣もちの好いものぢやない。しかも彼は私を見るなり、悠悠と支那の腕まくりをし出した。

「何だい、君は？」

彼は私に怒鳴られても、全然顏色を動かさなかつた。さうして唯一言返事をした。

「アンマ！」

私は思はず苦笑しながら、彼に揉めと云ふ手眞似をした。が、この床屋を兼ねた按摩は、揉みもしなければ叩きもしない。唯首筋から背筋の方へ、順順に筋肉をつまむだけである。それでも

決して莫迦には出來ない。私はだんだん體の凝りが、寛いで來るのを感じたから、出たらめに「好、好」と褒めてやつた。

その後二時間程晝寢をしたら、大分元氣も恢復してゐた。五時には五味君と多賀中尉――多賀氏は少時愛讀した「家庭軍事談」の筆者である。私はその時の署名通り、最も私に親みのある、多賀中尉と云ふ名を使ふ事にするが、現在は何だか未に知らない。――その當年の多賀中尉に、晩餐の御馳走になる約束がある。そこで顏へ剃刀を當てたり、黑い洋服を着用したり、五時まではさつと身支度をすませた。

その夜私は多賀中尉と、昆布だの干物だのを嚙りながら、「家庭軍事談」の話をした。この昆布だの干物だのは、抵抗療法に據つたとか云ふ、惡辣な獻立の一部である。中尉は一見武人らしい、脊梁骨を感ぜしむる人物だつた。その癖座談も下手ぢやない。私は中尉と桂月先生の噂をしたり、我我の他にもう一人呼ばれた年の若い御客樣と、江南の風光を論じたり、少時は病體も忘れてゐた。殊にその御客樣が、搗栗や何かを平げるのにも、頗みやびやかだつた事は、今でも印象が鮮である。

我我は食事をしまつてから、客間に又一しきり話しこんだ。此處には支那の土中物だの、眞紅な山を描いた田夫氏の畫だの、骨董じみた物が並べてある。私は例のペンキ塗りの屏風に、半日

惱まされた後だつたから、かう云ふ室内の安樂椅子に、漫然と腰を落ちつけてゐるのは、少からず愉快だつた。おまけに中尉は仕合せにも、「唐の三彩は」とか何とか辯ずる程、骨董眼を具へてゐないらしい。

その内に何時か一座の話題は、病氣の上に移つて行つた。

「南京で怖いのは病氣だけだね。古來南京で病氣になつたら、早速日本へ歸らない限り、一人も命の助かつたやつはない。」

多賀中尉は酒氣と一しよに、冗談のやうな、眞面目のやうな、甚心もとない斷案を下した。一人も命の助かつたやつはない、――私はこの言葉を聞いた時、急に又死にさうな心もちになつた。同時に明日は汽車のあり次第、棲霞寺も見ず、莫愁湖も見ず、上海へ歸らうと決心した。……

……

翌日上海へ歸つた私は、糠雨の降る翌翌日の朝、里見病院の診察室に、打診や聽診を受けてゐた。それが一通り終つた時、里見先生は手を洗ひながら、私の方へ笑ひ顏を見せた。

「何處も惡くありません。惡いと思つたのは神經ですね。」

「しかしまだ漢口から、北京へ行かなければならないのですが、――」

「その位の旅行は大丈夫です。」

私は兎に角嬉しかつた。しかしその嬉しさの何處かには、折角上海へ歸つて來たのも、結局骨折損に過ぎなかつたと云ふ、失望があつたのは事實である。里見先生は立派な御醫者だが、憖むらくは立派なサイコロヂストぢやない。もし私が先生ならば、たとひ無病息災でも、かう云ふ診斷を下したであらう。

「右の肺にちとインフラマティオンがあります。すぐに御入院なさるがよろしい。」

（大正十一年一月―二月）

長江游記

前置き

これは三年前支那に遊び、長江を溯つた時の紀行である。から云ふ目まぐるしい世の中に、三年前の紀行などは誰にも興味を與へないかも知れない。が、人生を行旅すれば、畢竟あらゆる追憶は數年前の紀行である。私の文章の愛讀者諸君は「堀川保吉」に對するやうに、この「長江」の一篇にもちらりと目をやつてはくれないであらうか？

私は長江を溯つた時、絶えず日本を懷しがつてゐた。しかし今は日本に、――炎暑の甚しい東京に汪洋たる長江を懷しがつてゐる。長江を？――いや、長江ばかりではない。蕪湖を、漢口を、廬山の松を、洞庭の波を懷しがつてゐる。私の文章の愛讀者諸君は「堀川保吉」に對するやうに、この私の追憶癖にもちらりと目をやつてはくれないであらうか？

一　蕪湖

私は西村貞吉と一しよに蕪湖の往來を歩いてゐた。往來は此處も例の通り、日さへ當らない敷石道である。兩側には銀樓だの酒棧だの、見慣れた看板がぶら下つてゐるが、一月半も支那にゐた今では、勿論珍しくも何ともない。おまけに一輪車の通る度に、きいきい心棒を軋ませるのは、頭痛さへしかねない騷騷しさである。私は暗澹たる顏をしながら、何と西村に話しかけられても、好い加減な返事をするばかりだつた。

西村は私を招く爲に、何度も上海へ手紙を出してゐる。殊に蕪湖へ着いた夜なぞはわざわざ迎への小蒸氣を出したり、歡迎の宴を催したり、いろいろ深切を盡してくれた。(しかもわたしの乘つた鳳陽丸は浦口を發するのが遲かつた爲に、かう云ふ彼の心盡しも悉水泡に歸したのである。)のみならず彼の社宅たる唐家花園に落ち着いた後も、食事とか着物とか寢具とか、萬事に氣を配つてくれるのには、實際恐れ入るより外はなかつた。して見ればこの東道の主人の前へも、二日間の蕪湖滯在は愉快に過さねばならぬ筈である。しかし私の紳士的禮讓も、蟬に似た西村の顏を見ると、忽何處かへ消滅してしまふ。これは西村の罪ではない。君僕の代りにお前おれを

使ふ、我我の親みの罪である。さもなければ往來の眞ん中に、尿をする豚と向ひ合つた時も、あんなに不快を公表する事は、當分差控へる氣になつたかも知れない。

「つまらない所だな、蕪湖と云ふのは。――いや一蕪湖ばかりぢやないね。おれはもう支那には飽き飽きしてしまつた。」

「お前は一體コシヤマクレテゐるからだ。支那は性に合はないのかも知れない。」

西村は横文字は知つてゐても、日本語は甚未熟である。「こましやくれる」を「コシヤマクレル」、鶏冠を「トカサ」、懷を「フトロコ」、「がむしやら」を「ガラムシヤ」――その外日本語を間違へる事は殆擧げて數へるのに堪へない。私は西村に日本語を敎へにわざわざ渡來した次第でもないから、佛頂面をして見せたぎり、何とも答へず歩き續けた。

すると稍幅の廣い往來に、女の寫眞を並べた家があつた。その前に閑人が五六人、つらつら寫眞の顏を見ては、何か靜に話してゐる。これは何だと聞いて見たら、濟良所だと云ふ答があつた。濟良所と云ふのは養育院ぢやない。自由廢業の女を保護する所である。

一通り町を遍歷した後、西村は私を倚陶軒、一名大花園と云ふ料理屋へつれて行つた。此處は何でも李鴻章の別莊だつたとか云ふ事である。が、園へはいつた時の感じは、洪水後の向島あたりと違ひはない。花木は少いし、土は荒れてゐるし、「陶塘」の水も濁つてゐるし、家の中はがら

んとしてゐるし、殆御茶屋と云ふ物とは、最も縁の遠い光景である。我我は軒の鸚鵡の籠を見ながら、さすがに味だけはうまい支那料理を食つた。が、この御馳走になつてゐる頃から、支那に對する私の嫌惡はだんだん逆上の氣味を帶び始めた。

その夜唐家花園のバルコンに、西村と籐椅子を並べてゐた時、私は莫迦莫迦しい程熱心に現代の支那の惡口を云つた。現代の支那に何があるか？　政治、學問、經濟、藝術、悉墮落してゐるではないか？　殊に藝術となつた日には、嘉慶道光の間以來、一つでも自慢になる作品があるか？　しかも國民は老若を問はず、太平樂ばかり唱へてゐる。成程若い國民の中には、多少の活力も見えるかも知れない。しかし彼等の聲と雖も、全國民の胸に響くべき、大いなる情熱のないのは事實である。私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。この國民的腐敗を目擊した後も、なほ且支那を愛し得るものは、頽唐を極めたセンジュアリストか、淺薄なる支那趣味の憧憬者であらう。いや、支那人自身にしても、心さへ昏んでゐないとすれば、我我一介の旅客よりも、もつと嫌惡に堪へない筈である。……

私は盛に辯じ立てた。バルコンの外の槐の梢は、ひつそりと月光に浸されてゐる。この槐の梢の向う、——幾つかの古池を抱へこんだ、白壁の市街の盡きる所は揚子江の水に違ひない。その水の汪汪と流れる涯には、ヘルンの夢みた蓬萊のやうに懷しい日本の島山がある。ああ、日本

へ歸りたい。

「お前なんぞは何時でも歸れるぢやないか？」

ノスタルジアに感染した西村は月明りの中に去來する、大きい蛾の姿を眺めながら、殆獨語のやうにかう云つた。私の滯在はどう考へても、西村には爲にならなかつたらしい。

二　溯江

私は溯江の汽船へ三艘乘つた。上海から蕪湖までは鳳陽丸、蕪湖から九江までは南陽丸、九江から漢口までは大安丸である。

鳳陽丸に乘つた時に、偉い丁抹人と一しよになつた。客の名は盧絲、横文字に書けば Roos である。何でも支那を縱横する事、二十何年と云ふのだから、當世のマルコ・ポオロと思へば間違ひない。この豪傑が暇さへあると、私だの同船の田中君だのを捉へては、二十何呎の蟒蛇を退治した話や、廣東の盜俠ランクワイセン（漢字ではどんな字に當るのだか、ルウズ氏自身も知らなかつた）の話や、河南直隸の飢饉の話や、虎狩豹狩の話なぞを滔滔と辯じ來り辯じ去つてくれた。その中でも面白かつたのは、食卓を共にした亞米利加人の夫婦と、東西兩洋の愛を論じた時であ

る。この亞米利加人の夫婦、――殊に細君に至つては、東洋に對する西洋の侮蔑に踵の高い靴をはかせた如き、甚横柄な女人だつた。彼女の見る所に從へば、支那人は勿論日本人も、ラヴと云ふ事を知つてゐない。彼等の曖昧には憐むべしである。これを聞いたルウズ氏は、カリイの皿に向ひながら、忽異議を唱へ出した。いや、愛の何たるかは東洋人と雖も心得てゐる。たとへば或四川の少女は、――と得意の見聞を吹聽すると、細君はバナナの皮を剝きかけた儘、いや、それは愛ではない、單なる憐憫に過ぎぬと云ふ。するとルウズ氏は頑強に、では或日本東京の少女は、――と又實例をつきつけ始める。とうとうしまひには相手の細君も、怒火心頭に發したのであらう、突然食卓を離れると、御亭主と一しよに出て行つてしまつた。私はその時のルウズ氏の顏を未にはつきり覺えてゐる。先生は我我黃色い仲間へ、人の悪い微笑を送るが早いか、人さし指に額を叩きながら、「ナロウ・マインデット」とか何とか云つた。生憎この夫婦の亞米利加人は、南京で船を下りてしまつたが、ずつと溯江を續けたとすれば、もつといろいろ面白い波瀾を卷き起してゐたのに相違ない。

蕪湖から乘つた南陽丸では、竹内栖鳳氏の一行と一しよだつた。栖鳳氏も九江に下船の上、廬山に登る事になつてゐたから、私は令息、――どうも可笑しい。令息には正に違ひないが、餘り懇意に話をしたせゐか、令息と呼ぶのは空空しい氣がする。が、兎に角その令息の逸氏なぞと愉

快に溯江を續ける事が出來た。何しろ長江は大きいと云つても、結局海ではないのだから、ロオリングも來なければピッチングも來ない。船は唯機械のベルトのやうにひた流れに流れる水を裂きながら、悠悠と西へ進むのである。この點だけでも長江の旅は船に弱い私には愉快だつた。

水は前にも云つた通り、金鏽に近い代赭である。が、遠い川の涯は青空の反射も加はるから、大體刃金色に見えぬ事はない。其處を名高い大筏が二艘も三艘も下つて來る。現に私の實見した中にも、豚を飼つてゐる筏があつたから、成程飛び切りの大筏になると、一村落を載せたものもあるかも知れない。又筏とは云ふものの、屋根もあるし壁もあるし、實は水に浮んだ家屋である。南陽丸の船長竹下氏の話では、これらの筏に乘つてゐるのは雲南貴州等の土人だと云ふ。彼等はさう云ふ山の中から、萬里の濁流の押し流す儘に、悠悠と江を下つて來る。さうして浙江安徽等の町町へ無事に流れついた時、筏に組んで來た木材を金に換へる。その道中短きものは五六箇月、長きものは殆一箇年、家を出る時は妻だつた女も、家へ歸る時は母になるさうである。しかし長江を去來するのは、勿論この筏のやうに、原始時代の遺物に限つた訣ぢやない。一度は亞米利加の砲艦が一艘、小蒸氣に標的を牽かせながら、實彈射擊なぞをしてゐた事もある。

江の廣い事も前に書いた。が、これも三角洲があるから、一方の岸には遠い時でも、必一方には草色が見える。いや、草色ばかりぢやない。水田の稻の戰ぎも見える。楊柳の水に生え入つ

たのも見える。水牛がぼんやり立つたのも見える。青い山は勿論幾つも見える。私は支那へ出かける前、小杉未醒氏と話してゐたら、氏は旅先の注意の中にかう云ふ事をつけ加へた。

「長江は水が低くつてね、兩岸がずつと高いから、船の高い所へ上るんですね。船長のゐる、――何と云ふかな、あの高い所があるでせう。あすこへ上らねえと、眺望が利きませんよ。あすこは普通の客はのせねえから、何とか船長を胡麻化すんですね。……」

私は先輩の云ふ事だから、鳳陽丸でも南陽丸でも、江上の眺望を恣にする爲に、始終船長を胡麻化さうとしてゐた。處が南陽丸の竹下船長はまだ胡麻化しにかからない内からサロンの屋根にある船長室へ、親切にも私を招待してくれた。しかし此處へ上つて見ても、格別風景には變りもない。實際又甲板にゐても、ちやんと陸地は見渡せたのである。私は妙に思つたから、胡麻化さうとした意志を白狀した上、船長にその訣を尋ねて見た。すると船長は笑ひ出した。

「それは小杉さんの來られた時はまだ水が少かつたのでせう。漢口あたりの水面の高低は、夏冬に四十五六呎も違ひますよ。」

三　廬山（上）

若葉を吐いた立ち木の枝に豚の死骸がぶら下つてゐる。それも皮を剝いだ儘、後足を上にぶら下つてゐる。脂肪に蔽はれた豚の體は氣味の悪い程まつ白である。私はそれを眺めながら、一體豚を逆吊りにして、何が面白いのだらうと考へた。吊下げる支那人も悪趣味なら、吊下げられる豚も間が抜けてゐる。所詮支那程下らない國は何處にもあるまいと考へた。

その間に大勢の苦力どもは我我の駕籠の支度をするのに、腹の立つ程騒いでゐる。勿論苦力に碌な人相はない。しかし殊に獰猛なのは苦力の大將の顔である。この大將の麦藁帽は Kuling Estate Head Coolie No ※ とか横文字を抜いた、黒いリボンを巻きつけてゐる。昔 Marius the Epicurean は、蛇使ひが使ふ蛇の顔に、人間じみた何かを感じたと云ふ。私は又この苦力の顔に蛇らしい何かを感じたのである。愈支那は氣に食はない。

十分の後、我我一行八人は籐椅子の駕籠に揺られながら、石だらけの路を登り出した。一行とは竹内栖鳳氏の一族郎黨、並に大元洋行のお上さんである。駕籠の乗り心地は思つたよりも好い。私はその駕籠の棒に長長と兩足を伸ばしながら、廬山の風光を樂んで行つた。と云ふと如何にも體裁が好いが、風光は奇絶でも何でもない。唯雑木の茂つた間に、山空木が咲いてゐるだけである。廬山らしい氣などは少しもない。これならば、支那へ渡らずとも、箱根の舊道を登れば澤山である。

前の晩私は九江にとまつた。ホテルは即ち大元洋行である。その二階に寢ころびながら、康白情氏の詩を讀んでゐると、潯陽江に泊した支那の船から、蛇皮線だか何だかの音がして來る。それは兎に角風流な氣がした。が、翌朝になつて見ると、潯陽江に候と威張つてゐても、やはり赤濁りの溝川だつた。楓葉荻花秋瑟瑟などと云ふ、洒落れた趣は何處にもない。川には木造の軍艦が一艘、西鄕征伐に用ゐたかの如き、怪しげな大砲の口を出しながら、琵琶亭のほとりに繫つてゐる。では猩猩は少時措き、浪裡白跳張順か黑旋風李逵でもゐるかと思へば、眼前の船の篷の中からは、醜惡恐るべき尻が出てゐる。その尻が又大膽にも、――甚尾籠な申し條ながら、悠悠と川に糞をしてゐる。……

私はそんな事を考へながら、何時かうとうと眠つてしまつた。何十分か過ぎた後、駕籠の止まつたのに眼をさますと、我我のつい鼻の先には、出たらめに石段を積み上げた、嶮しい坂が突き立つてゐる。大元洋行のお上さんは、此處は駕籠が上らないから、步いて頂きたいと說明した。私はやむを得ず竹內逸氏と、胸突き八町を登り出した。風景は不相變平凡である。唯坂の右や左に、炎天の埃を浴びながら、野薔薇の花が見えるのに過ぎない。

駕籠に乘つたり、步かせられたり、いづれにもせよ骨の折れる、忌忌しい目を繰返した後、やつとクウリンの避暑地へ來たのは彼是午後の一時頃だつた。この又避暑地の一角なるものが輕井

澤の場末と選ぶ所はない。いや、赤禿の山の裾に支那のラムプ屋だの酒棧だのがごみごみ店を出した景色は輕井澤よりも一層下等である。西洋人の別莊も見渡した所、氣の利いた構へは一軒も見えない。皆烈しい日の光に、赤や青のペンキを塗つた、卑しい亞鉛屋根を火照らせてゐる。私は汗を拭ひながら、このクウリンの租界を拓いた牧師エドワアド・リツトル先生も永年支那にゐたものだから、とんと美醜の判斷がつかなくなつたのだらうと想像した。

しかし其處を通り拔けると、薊や除蟲菊の咲いた中に、うつ木も水水しい花をつけた、廣い草原が展開した。その草原が盡きるあたりに、石の垣をめぐらせた、小さい赤塗りの家が一軒、岩だらけの山を後にしながら、翩翩と日章旗を飜してゐる。私はこの旗を見た時に、祖國を思つた、――と云ふよりは、祖國の米の飯を思つた。なぜと云へばその家こそ、我我の空腹を滿たすべき大元洋行の支店だつたからである。

四　廬山（下）

飯を食つてしまつたら、急に冷氣を感じ出したのはさすがに海拔三千尺である。成程廬山はつまらないにもしろ、この五月の寒さだけは珍重に値するのに違ひない。私は窓側の長椅子に岩山

の松を眺めながら、兎に角廬山の避暑地的價値には敬意を表したいと考へた。

其處へ姿を現したのは大元洋行の主人である。主人はもう五十を越してゐるのであらう。しかし赤みのさした顏はまだエネルギイに充ち滿ちた、逞しい活動家を示してゐる。我我はこの主人を相手にいろいろ廬山の話をした。主人は頗る雄辯である。或は雄辯過ぎるのかも知れない。何しろ一たび興到ると、白樂天と云ふ名前をハヽヽクラクと縮めてしまふのだから、それだけでも豪快や思ふべしである。

「香爐峯と云ふのも二つありますがね。こつちのは李白の香爐峯、あつちのは白樂天の香爐峯——このハヽヽクラクの香爐峯つてやつは松一本ない禿山でがす。……」

大體から云ふ調子である。が、それはまだしも好い。いや、香爐峯の二つあるのなどは寧ろ我我には便利である。一つしかないものを二つにするのは特許權を無視した罪惡かも知れない。しかし既に二つあるものは、たとひ三つにしたにもせよ、不法行爲にはならない筈である。だから私は向うに見える山を忽「私の香爐峯」にした。けれども主人は雄辯以外に、廬山を見ること戀人の如き、熱烈なる愛着を蓄へてゐる。

「この廬山つて山はですね。五老峯とか、三疊泉とか、古來名所の多い山でがす。まあ、御見物なさるんなら、いくら短くつても一週間、それから十日つて所でがせう。その先は一月でも半年

でも、――尤も冬は虎も出ますが……」

かう云ふ「第一の愛郷心」はこの主人に限つたことぢやない。支那に在留する日本人は、恐らくみんなふんだんに持ち合はせてゐる。苟も支那を旅行するのに愉快ならんことを期する士人は土匪に遇ふ危險は犯すにしても、彼等の「第一の愛郷心」だけは尊重するやうに努めなければならぬ。上海の大馬路はパリのやうである。北京の文華殿にもルウブルのやうに、贋物の畫などは一枚もない。――と云ふやうに感服してゐなければならぬ。しかし廬山に一週間ゐるのは單に感服してゐるのよりも、遙に骨の折れる仕事である。私はまづ恐る恐る、主人に私の病弱を訴へ、相成るべくは明日の朝下山したいと云ふ希望を述べた。

「明日もうお歸りですか？　ぢや何處も見られませんぜ。」

主人は半ば憐むやうに、又半ば嘲るやうにかう私の言葉に答へた。が、それきりあきらめるかと思ふと、今度はもう一層熱心に、「ぢや今の内にこの近所を御見物なさい。」と勸め出した。これも斷つてしまふのは虎退治に出かけるよりも危險である。私はやむを得ず竹内氏の一行と、見たくもない風景を見物に出かけた。

主人の言葉に從へば、クウリンの町は此處を距ること、ほんの一跨ぎだと云ふことである。しかし實際歩いて見ると、一跨ぎや二跨ぎどころの騷ぎではない。路は山笹の茂つた中に何處まで

もうねうね登つてゐる。私はいつかヘルメットの下に汗の滴るのを感じながら、愈天下の名山に對する憤慨の念を新にし出した。名山、名畫、名人、名文――あらゆる「名」の字のついたものは、自我を重んずる我我を傳統の奴隷にするものである。未來派の畫家は大膽にも古典的作品を破壞せよと云つた。古典的作品を破壞する次手に、廬山もダイナマイトの火に吹き飛ばすが好い。

……

しかしやつと辿り着いて見ると、山風に鳴つてゐる松の間、岩山を繞らせた目の下の谷に、赤い屋根だの黒い屋根だの、無數の屋根が並んでゐるのは、思つたよりも快い眺めである。私は道ばたに腰を下し、大事にポケツトへ蓄へて來た日本の「敷島」へ火を移した。レエスを下げた窓も見える。草花の鉢を置いたバルコンも見える。青芝を劃つたテニス・コオトも見える。ハクラクの香爐峯は姑く問はず、兎に角避暑地たるクウリンは一夏を消するのに足る處らしい。私は竹内氏の一行のずんずん先へ行つた後も、ぼんやり卷煙草を啣へた儘、かすかに人影の透いて見える家家の窓を見下してゐた、いつか東京に殘して來た子供の顏などを思ひ出しながら。

（大正十三年八月）

北京日記抄

一　雍和宮

今日も亦中野江漢君につれられ、午頃より雍和宮一見に出かける。喇嘛寺などに興味も何もなけれど、否、寧ろ喇嘛寺などは大嫌ひなれど、北京名物の一つと言へば、紀行を書かされる必要上、義理にも一見せざる可らず。我ながら御苦労千萬なり。

薄汚い人力車に乗り、やつと門前に辿りついて見れば、成程大伽藍には違ひなし。尤も大伽藍などと言へば、大きいお堂が一つあるやうなれど、この喇嘛寺は中中そんなものにあらず。永祐殿、綏成殿、天王殿、法輪殿などと云ふ幾つものお堂の寄り合ひ世帯なり。それも日本のお寺とは違ひ、屋根は黄色く、壁は赤く、階段は大理石を用ゐたる上、石の獅子だの、青銅の惜字塔だの(支那人は文字を尊ぶ故、文字を書きたる紙を拾へば、その塔の中へ入れるよし。中野君の説明なり。つまり多少藝術的なる青銅製の紙屑籠を思へば好し。)乾隆帝の「御碑」だのも立つてゐれ

ば、兎に角莊嚴なるに近かるべし。

第六所東配殿に木彫りの歡喜佛四體あり。堂守に銀貨を一枚やると、繡幔をとつて見せてくれる。佛は皆藍面赤髮、背中に何本も手を生やし、無數の人頭を頸飾にしたる醜惡無雙の怪物なり。歡喜佛第一號は人間の皮をかけたる馬に跨り、炎口に小人を啣ふるもの、第二號は象頭人身の女を足の下に踏まへたるもの、第三號は立つて女を婬するもの。第四號は――最も敬服したるは第四號なり。第四號は牛の背上に立ち、その又牛は僭越にも仰臥せる女を婬しつつあり。されど是等の歡喜佛は少しもエロティツクな感じを與へず。只何か殘酷なる好奇心の滿足を與ふるのみ。歡喜佛第四號の隣には半ば口を開きたるやはり木彫りの大熊あり。この熊も因緣を聞いて見れば、定めし何かの象徴ならん。熊は前に武人二人（藍面にして黑毛をつけたる槍を持てり）、後に二匹の小熊を伴ふ。

それから寧阿殿なりしと覺ゆ。ワンタン屋のチャルメラに似たる音せしかば、ちよつと中を覗きて見しに、喇嘛僧二人、怪しげなる喇叭を吹奏しゐたり。喇嘛僧と言ふもの、或は黄、或は赤、或は紫などの毛のつきたる三角帽を頂けるは多少の畫趣あるに違ひなけれど、どうも皆惡黨に思はれてならず。幾分にても好意を感じたるはこの二人の喇叭吹きだけたり。

それから又中野君と石疊の上を歩いてゐたるに、萬福殿の手前の樓の上より堂守一人顏を出し、

上つて來いと手招きをしたり。狹い梯子を上つて見れば、此處にも亦幕に蔽はれたる佛あれど、堂守容易に幕をとつてくれず。二十錢出せなどと手を出すのみ。やつと十錢に妥協し、幕をとつて拜し奉れば、藍面、白面、黃面、赤面、馬面等を生やしたる怪物なり。おまけに又何本も腕を生やしたる上、（腕は斧や弓の外にも、人間の首や腕をふりかざしゐたり）右の脚は鳥の脚にして左の脚は獸の脚なれば、頗る狂人の畫に類したりと言ふべし。されど豫期したる歡喜佛にはあらず。（尤もこの怪物は脚下に二人の人間を踏まへゐたり。）中野君即ち目を瞋らせて「貴樣は譃をついたな。」と言へば、堂守大いに狼狽し、頻に「これがある、これがある」と言ふ。「これ」とは藍色の男根なり。隆隆たる一具、子を作ることを爲さず、空しく堂守をして煙草錢を儲けしむ。悲しいかな、喇嘛佛の男根や。

喇嘛寺の前に喇嘛畫師の店七軒あり。畫師の總數三十餘人。皆西藏より來れるよし。恆豐號と言ふ店に入り、喇嘛佛の畫數枚を購ふ。この畫、一年に一萬二三千元賣れると言へば、喇嘛畫師の收入も莫迦にならず。

二　辜鴻銘先生

辜鴻銘先生を訪ふ。ボイに案内されて通りしは素壁に石刷の掛物をぶら下げ、床にアンペラを敷ける廳堂なり。ちよつと南京蟲はゐさうなれど、蕭散愛すべき廳堂と言ふべし。

待つこと一分ならざるに眼光炯炯たる老人あり。闥を排して入り來り、英語にて「よく來た、まあ坐れ」と言ふ。勿論辜鴻銘先生なり。胡麻鹽の辮髪、白の大掛兒、顏は鼻の寸法短かければ、何處か大いなる蝙蝠に似たり。先生の僕と談ずるや、テエブルの上に數枚の藁半紙を置き、手は鉛筆を動かしてさつさと漢字を書きながら、口はのべつ幕なしに英吉利語をしやべる。僕の如く耳の怪しきものにはまことに便利なる會話法なり。

先生、南は福建に生れ、西は蘇格蘭のエディンバラに學び、東は日本の婦人を娶り、北は北京に住するを以て東西南北の人と號す。英語は勿論、獨逸語も佛蘭西語も出來るよし。されどヤング・チャイニイズと異り、西洋の文明を買ひ冠らず、基督教、共和政體、機械萬能などを罵る次手に、僕の支那服を着たるを見て、「洋服を着ないのは感心だ。只憾むらくは辮髪がない。」と言ふ。先生と談ずること三十分、忽ち八九歳の少女あり。羞かしさうに廳堂へ入り來る。蓋し先生のお孃さんなり。(夫人は既に鬼籍に入る。)先生、お孃さんの肩に手をかけ、支那語にて何とか囁けば、お孃さんは小さい口を開き、「いろはにほへとちりぬるをわか……」云云と言ふ。夫人の生前教へたるなるべし。先生は滿足さうに微笑してゐれど、僕は聊センティメンタルになり、お孃

さんの顔を眺むるのみ。

お孃さんの去りたる後、先生、又僕の爲に段を論じ、呉を論じ、併せて又トルストイを論ず。（トルストイは先生へ手紙をよこしたよし。）論じ來り、論じ去つて、先生の意氣大いに昂るや、眼は愈炬の如く、顏は益蝙蝠に似たり。僕の上海を去らんとするに當り、ジョオンズ、僕の手を握つて曰、「紫禁城は見ざるも可なり、辜鴻銘を見るを忘るること勿れ。」と。ジョオンズの言、僕を欺かざるなり。僕、亦先生の論ずる所に感じ、何ぞ先生の時事に慨して時事に關せんとせざるかを問ふ。先生、何か早口に答ふれど、生憎僕に聞きとること能はず。「もう一度どうか」を繰り返せば、先生、さも忌忌しさうに藁半紙の上に大書して曰、「老、老、老、老、老、……」と。

一時間の後、先生の邸を辭し、歩して東單牌樓のホテルに向へば、微風、並木の合歡花を吹き、斜陽、僕の支那服を照す。しかもなほ蝙蝠に似たる先生の顏、僕の眼前を去らざるが如し。僕は大通りへ出づるに當り、先生の門を回看して、――先生、幸に咎むること勿れ、先生の老を歎ずるよりも先に、未だ年少有爲なる僕自身の幸福を讃美したり。

三 十刹海

中野江漢君の僕を案内してくれたるものは北海の如き、萬壽山の如き、或は又天壇の如き、誰も見物するもののみにあらず。文天祥祠も、楊椒山の故宅も、白雲觀も、永樂大鐘も、(この大鐘は半ば土中に埋まり、事實上の共同便所に用ゐられつつあり。)悉中野君の案内を待つて一見するを得しものなり。されど最も面白かりしは今日中野君と行つて見たる十刹海の遊園なるべし。尤も遊園とは言ふものの、庭の出來てゐる次第にはあらず。只大きい蓮池のまはりに葭簾張りの掛茶屋のあるだけなり。掛茶屋の外には針鼠だの大蝙蝠だのの看板を出した見世物小屋も一軒ありしやうに記憶す。僕等はかう言ふ掛茶屋にはいり、中野君は玫瑰露の杯を嘗め、僕は支那茶を啜りつつ、二時間ばかり坐つてゐたり。何がそんなに面白かりしと言へば、別に何事もあつた訣にはあらず、只人を見るのが面白かりしだけなり。

蓮花は未だ開かざれど、岸をめぐれる槐柳のかげや前後の掛茶屋にゐる人を見れば、水煙管を啣へたる老爺あり、雙孖髻に結へる少女あり、兵卒と話してゐる道士あり、杏賣りを値切つてゐる婆さんあり、人丹(仁丹にあらず)賣りあり、巡査あり、背廣を着た年少の紳士あり、滿洲旗人の細君あり、――と數へ上げれば際限なけれど、兎に角支那の浮世繪の中にゐる心ちありと思ふべし。殊に旗人の細君は黑い布か紙にて造りたる髷とも冠ともつかぬものを頂き、頰にまるまると紅をさしたるさま、古風なること言ふべからず。その互にお時儀をするや、膝をかがめて腰を

かがめず、右手をまつ直に地へ下げるは奇體にも優雅の趣ありと言ふべし。成程これでは觀菊の御宴に日本の宮女を見たるロティも不思議の魅力を感ぜしならん。僕は實際旗人の細君にちよつと滿洲流のお時儀をし、「今日は」と言ひたき誘惑を受けたり。但しこの誘惑に從はざりしは少くとも中野君の幸福なりしならん。僕等のはいりし掛茶屋を見るも、まん中に一本の丸太を渡し、男女は斷じて同席することを許さず。女の子をつれたる親父などは女の子だけを向う側に置き、自分はこちら側に坐りながら、丸太越しに菓子などを食はせてゐたり。この分にては僕も敬服の餘り、旗人の細君にお時儀をしたとすれば、忽ち風俗壞亂罪に問はれ、警察か何かへ送られしたならん。まことに支那人の形式主義も徹底したものと稱すべし。

僕、この事を中野君に話せば、中野君、一息に玫瑰露を飲み干し、扨徐に語つて曰「そりや驚くべきものですよ。環城鐵道と言ふのがあるでせう。ええ、城壁のまはりを通つてゐる汽車です。あの鐵道を拵へる時などには線路の一部が城内を通る、それでは環城にならんと言つて、わざわざ其處だけは城壁の中へもう一つ城壁を築いだからですね。兎に角大した形式主義ですよ。」

四　胡蝶夢

波多野君や松本君と共に辻聽花先生に誘はれ、昆曲の芝居を一見す。京調の芝居は上海以來、度たび覗いても見しものなれど、昆曲はまだ始めてなり。例の如く人力車の御厄介になり、狹い町を幾つも通り拔けし後、やつと同樂茶園と言ふ劇場に至る。紅に金文字のびらを貼れる、古き煉瓦造りの玄關をはいれば、――但し「玄關をはいれば」と言ふも、切符などを買ひし次第にあらず、元來支那の芝居なるものは唯ぶらりと玄關をはいり、戲を聽くこと幾分の後、金を集めに來る支那の出方に定額の入場料を拂つてやるを常とす。これは波多野君の說明によれば、つまるかつまらぬかわからぬ芝居に前以て金など出せるものかと言ふ支那的論理によれるもののよし。まことに我等看客には都合好き制度と言はざるべからず。扨煉瓦造りの玄關をはいれば、土間に並べたる腰掛に雜然と看客の坐れることはこの劇場も他と同樣なり。否、昨日梅蘭芳や楊小樓を見たる東安市場の吉祥茶園は勿論、一昨日餘叔岩や尙小雲を見たる前門外の三慶園よりも一層ぢぢむさき位ならん。この人ごみの後を通り、二階棧敷に上らんとすれば、醉顏酡たる老人あり、鼈甲の簪に辮髮を卷き、芭蕉扇を手にして徘徊するを見る。波多野君、僕に耳語して曰「あの老爺

が樊牛山ですよ。」と。僕は忽ち敬意を生じ、梯子段の中途に佇みたるまま、この老詩人を見守ること多時。恐らくは當年の醉李白も――などと考へし所を見れば、文學青年的感情は少くとも未だ國際的には幾分か僕にも殘りをるなるべし。

二階棧敷には僕等よりも先に、疎髯を蓄へ、詰め襟の洋服を着たる辻聽花先生あり。先生が劇通中の劇通たるは支那の役者にも先生を拜して父と做するもの多きを見て知るべし。揚州の鹽務官高洲太吉氏は外國人にして揚州に官たるもの、前にマルコ・ポオロあり、後に高洲太吉ありと大いに氣焰を吐きゐたれど、外國人にして北京に劇通たるものは前にも後にも聽花散人一人に止めを刺さざるべからず。僕は先生を左にし、波多野君を右にして坐りたれば、(波多野君も「支那劇五百番」の著者なり。)「綴白裘」の兩帙を手にせざるも、今日だけは兎に角半可通の資格位は具へたりと言ふべし。(後記。辻聽花先生に漢文「中國劇」の著述あり。順天時報社の出版に係る。僕は北京を去らんとするに當り、先生になほ邦文「支那芝居」の著述あるを仄聞したれば、先生に請うて原稿を預かり、朝鮮を經て東京に歸れる後、二三の書肆に出版を勸めたれど、書肆皆愚にして僕の言を容れず。然るに天公その愚を懲らし、この書今は支那風物研究會の出版する所となる。次手を以て廣告すること爾り。)

乃ち葉卷に火を點じて俯瞰すれば、舞臺の正面に紅の緞帳を垂れ、前に欄干をめぐらせること

もやはり他の劇場と異る所なし。其處に猿に扮したる役者あり。何か歌をうたひながら、くるくる棒を振りまはすを見る。番附に「火焰山」とあるを見れば、勿論この猿は唯の猿にあらず。僕の幼少より尊敬せる齊天大聖孫悟空ならん。悟空の側には又衣裳を着けず、粉黛を装はざる大男あり。三尺餘りの大團扇を揮つて、絕えず悟空に風を送るを見る。羅刹女とはさすがに思はれざれば、或は牛魔王か何かと思ひ、そつと波多野君に尋ねて見れば、これは唯煽風機代りに役者を煽いでやる後見なるよし。牛魔王は既に戰負けて、舞臺裏へ逃げこみし後なりしならん。悟空も亦數分の後には一打十萬八千路、——と言つても實際は大股に悠悠と鬼門道へ退却したり。憾むらくは樊半山に感服したる餘り、火焰山下の大殺を見損ひしことを。

「火焰山」の次は「胡蝶夢」なり。道服を着たる先生の舞臺をぶらぶら散步するは「胡蝶夢」の主人公莊子ならん。それから目ばかり大いなる美人の莊子と喋喋喃喃するはこの哲學者の細君なるべし。其處までは一目瞭然なれど、時時舞臺へ現るる二人の童子に至つては何の象徴なるかを明かにせず。「あれは莊子の子供ですか？」と又ぞろ波多野君を悩ますれば、波多野君、聊か唖然として、「あれはつまり、その、蝶蝶ですよ。」と言ふ。しかし如何に贔屓眼に見るも、蝶蝶などと言ふしろものにあらず。或は六月の天なれば、火取蟲に名代を賴みしならん。唯この芝居の筋だけは僕も先刻承知なりし爲、登場人物を知りし上はまんざら盲人の垣覗きにもあらず。否、今までに

僕の見たる六十有餘の支那芝居中、一番面白かりしは事實なり。抑「胡蝶夢」の筋と言へば、莊子も有らゆる賢人の如く、女のまごころを疑ふ爲、道術によりて死を裝ひ、細君の貞操を試みんと欲す。細君、莊子の死を嘆き、喪服を着たり何かすれど、楚の公子の來り弔するや、………

「好！」

この大聲を發せるものは辻聽花先生なり。僕は勿論「好！」の聲に慣れざる次第でも何でもなけれど、未だ曾て特色あること、先生の「好！」の如くなるものを聞かず。まづ匹を古今に求むれば、長坂橋頭蛇矛を橫へたる張飛の一喝に近かるべし。僕、惘れて先生を見れば、先生、向うを指して曰、「あすこに不准怪聲叫好と言ふ札が下つてゐるでせう。怪聲はいかん。わたしのやうに「好！」と言ふのは好いのです。」と。大いなるアナトオル・フランスよ。君の印象批評論は眞理なり。怪聲と怪聲たらざるとは客觀的標準を以て律すべからず。僕等の認めて怪聲と做すものは、――しかしその議論は他日に讓り、もう一度「胡蝶夢」に立ち戻れば、楚の公子の來り弔するや、細君、忽ち公子に惚れて莊子のことを忘るるに至る。忘るるに至るのみならず、公子の急に病を發し、人間の腦味噌を嘗めるより外に死を免るる策なしと知るや、斧を揮つて棺を破り、莊子の腦味噌をとらんとするに至る。然るに公子と見しものは元來胡蝶に外ならざれば、忽ち飛んで天外に去り細君は再婚するどころならず、却つて惡辣なる莊子の爲にさんざん油をとらるるに終る。

まことに天下の女の爲には氣の毒千萬なる諷刺劇と言ふべし。——と言へは劇評位書けさうなれど、實は僕には崑曲の崑曲たる所以さへ判然せず。唯どこか京調劇よりも派手ならざる如く感ぜしのみ。波多野君は僕の爲に「梆子は秦腔と言ふやつでね。」などと深切に說明してくるれど、畢竟馬の耳に念佛なりしは我ながら哀れなりと言はざるべからず。なほ次手に僕の見たる「胡蝶夢」の役割を略記すれば、莊子の細君——韓世昌　莊子——陶顯亭、楚の公子——馬夙彩、老胡蝶——陳榮會等なるべし。

「胡蝶夢」を見終りたる後、辻聽花先生にお禮を言ひ、再び波多野君や松本君と人力車上の客となれば、新月北京の天に懸り、ごみごみしたる往來に背廣の紳士と腕を組みたる新時代の女子の通るを見る。ああ言ふ連中も必要さへあれば、忽——斧は揮はざるにもせよ、斧よりも銳利なる一笑を用ゐ、御亭主の腦味噌をとらんとするなるべし。「胡蝶夢」を作れる士人を想ひ、古人の厭世的貞操觀を想ふ。同樂園の二階棧敷に何時間かを費したるも必しも無駄ではなかつたやうなり。

五　名勝

萬壽山。自動車を飛ばせて萬壽山に至る途中の風光は愛すべし。されど萬壽山の宮殿泉石は西

太后の惡趣味を見るに足るのみ。柳の垂れたる池の邊に醜惡なる大理石の畫舫あり。これも亦大評判なるよし。石の船にも感歎すべしとせば、鐵の船なる軍艦には卒倒せざるべからざらん乎。

玉泉山。山上に廢塔あり。塔下に踞して北京の郊外を俯瞰す。好景、萬壽山に勝ること數等。尤もこの山の泉より造れるサイダアは好景よりも更に好なるかも知れず。

白雲觀。洪大尉の石碣を開いて一百八の魔君を走らせしも恐らくはかう言ふ所ならん。靈官殿、玉皇殿、四御殿など、皆槐や合歡の中に金碧燦爛としてゐたり。次手に葡萄架後の臺所を覗けば、これも世間並の臺所にあらず。「雲廚寶鼎」の額の左右に金字の聯をぶら下げて曰、「勺水共飮蓬萊客、粒米同餐羽士家」と。但し道士も時勢には勝たれず、せつせと石炭を運びゐたり。

天寧寺。この寺の塔は隋の文帝の建立のよし。尤も今あるのは乾隆二十年の重修なり。塔は綠瓦を疊むこと十三層、屋縁は白く、塔壁は赤し、――と言へば綺麗らしけれど、實は荒廢見るに堪へず。寺は既に全然滅び、只紫燕の亂飛するを見るのみ。

松筠庵。楊椒山の故宅なり。故宅と言へば風流なれど、今は郵便局の横町にある上、入口に君子自重の小便壺あるは沒風流も亦甚し。瓦を敷き、岩を積みたる庭の前に諫草亭あり。庭に擬寶珠の鉢植ゑ多し。椒山の「鐵肩擔道義、辣手著文章」の碑をランプの臺に使ひたるも滑稽なり。後生、まことに恐るべし。椒山、この語の意を知れりや否や。

謝文節公祠。これも外右四區警察署第一半日學校の門內にあり。尤もどちらが家主かは知らず。薇香堂なるものの中に疊山の木像あり。木像の前に紙錫、硝子張の燈籠など、他は只滿堂の塵埃のみ。

窰臺。三門閣下に晝寢する支那人多し。滿目の蘆荻。中野君の說明によれば、北京の苦力は炎暑の候だけ皆他省へ出稼ぎに行き、苦力の細君はその間にこの蘆荻の中にて賣婬するよし。時價十五錢內外と言ふ。

陶然亭。古刹慈悲淨林の額なども仰ぎ見たれど、そんなものはどうでもよし。陶然亭は天井を竹にて組み、窓を綠紗にて張りたる上、蔀めきたる卍字の障子を上げたる趣、簡素にして愛すべし。名物の精進料理を食ひをれば、鳥聲頻に天上より來る。ボイにあれは何だと聞けば、——實はちよつと聞いて貰へば、郭公の聲と答へたよし。

文天祥祠。京師府立第十八國民高等小學校の隣にあり。堂內に木像並に宋丞相信國公文公之神位なるものを安置す。此處も亦塵埃の漠漠たるを見るのみ。堂前に大いなる楡(?)の木あり。杜少陵ならば老楡行か何か作る所ならん。僕は勿論發句一つ出來ず。英雄の死も一度は可なり。二度目の死は氣の毒過ぎて、到底詩興などは起らぬものと知るべし。

永安寺。この寺の善因殿は消防隊の展望臺に用ゐられつつあり。葉卷を啣へて殿上に立てば、

紫禁城の黃瓦、天寧寺の塔、アメリカの無線電信柱等、皆歷歷と指呼すべし。

北海。柳、燕、蓮池。それ等に面せる黃瓦丹壁の大清皇帝用小住宅。

天壇。地壇。先農壇。皆大いなる大理石の壇に雜草の萋萋と茂れるのみ。天壇の外の廣場に出づるに、忽一發の銃聲あり。何ぞと問へば、死刑なりと言ふ。

紫禁城。こは夢魔のみ。夜天よりも厖大なる夢魔のみ。

雜信一束

一 歐羅巴的漢口

この水たまりに映つてゐる英吉利の國旗の鮮さ、――おつと、車子にぶつかるところだつた。

二 支那的漢口

彩票や麻雀戲の道具の間に西日の赤あかとさした砂利道。其處をひとり歩きながら、ふとヘルメツト帽の庇の下に漢口の夏を感じたのは、――

ひと籃の暑さ照りけり巴旦杏

三　黄鶴樓

甘棠酒茶樓と言ふ赤煉瓦の茶館、惟精顯眞樓と言ふやはり赤煉瓦の寫眞館、――その外には何も見るものはない。尤も代赭色の揚子江は目の下に並んだ瓦屋根の向うに浪だけ白じらと閃かせてゐる。長江の向うには大別山、山の頂には樹が二三本、それから小さい白壁の禹廟、……

僕――鸚鵡洲は？

宇都宮さん――あの左手に見えるのがさうです。尤も今は殺風景な材木置場になつてゐますが。

四　古琴臺

前髮を垂れた小妓が一人、桃色の扇をかざしながら、月湖に面した欄干の前に曇天の水を眺めてゐる。疎な蘆や蓮の向うに黑ぐろと光つた曇天の水を。

五　洞庭湖

洞庭湖は湖とは言ふものの、いつも水のある次第ではない。夏以外は唯泥田の中に川が一すぢあるだけである。――と言ふことを立證するやうに三尺ばかり水面を抜いた、枯枝の多い一本の黒松。

六　長沙

往來に死刑の行はれる町。チフスやマラリアの流行する町、水の音の聞える町、夜になつても敷石の上にまだ暑さのいきれる町、鷄さへ僕を脅すやうに「アクタガハサアン！」と鬨をつくる町、………

七　學校

長沙の天心第一女子師範學校並に附屬高等小學校を參觀。古今に稀なる佛頂面をした年少の教師に案内して貰ふ。女學生は皆排日の爲に鉛筆や何かを使はないから、机の上に筆硯を具へ、幾何や代數をやつてゐる始末だ。次手に寄宿舍を一見したいと思ひ、通譯の少年に掛け合つて貰ふと、教師愈佛頂面をして曰「それはお斷り申します。先達もこの寄宿舍へは兵卒が五六人闖入し、强姦事件を惹き起した後ですから」！

八　京漢鐵道

どうもこの寢臺車の戸に鍵をかけただけでは不安心だな。トランクも次手に凭せかけて置かう。さあ、これで土匪に遇つても、――待てよ。土匪に遇つた時にはティップをやらなくつても好いものかしら？

九　鄭州

大きい街頭の柳の枝に辮髮が二すぢぶら下つてゐる。その又辮髮は二すぢとも丁度南京玉を貫

いたやうに無數の青蠅を綴つてゐる。腐つて落ちた罪人の首は犬でも食つてしまつたのかも知れない。

十　洛陽

モハメット教の客棧の窓は古い卍字の窓格子の向うにレモン色の空を覗かせてゐる。夥しい麥ほこりに暮れかかつた空を。

麥ほこりかかる童子の眠りかな

十一　龍門

黑光りに光つた壁の上に未に佛を恭敬してゐる唐朝の男女の端麗さ！

十二　黃河

汽車の黄河を渡る間に僕の受用したものを擧げれば、茶が二椀、棗が六顆、前門牌の卷煙草が三本、カアライルの「佛蘭西革命史」が二頁半、それから——蠅を十一匹殺した！

十三　北京

甍の黄色い紫禁城を繞つた合歡や槐の大森林、——誰だ、この森林を都會だなどと言ふのは？

十四　前門

僕——おや、飛行機が飛んでゐる。存外君はハイカラだね？
北京——どう致しまして。ちよつとこの前門を御覽下さい。

十五　監獄

京師第二監獄を參觀。無期徒刑の囚人が一人、玩具の人力車を拵へてゐた。

十六　萬里の長城

居庸關、彈琴峽等を一見せる後、萬里の長城へ登り候ところ、乞食童子一人、我等の跡を追ひつつ、蒼茫たる山巒を指して、「蒙古！　蒙古！」と申し候。然れどもその僞なるは地圖を按ずるまでも無之候。一片の銅銭を得んが爲に我等の十八史略的ロマン主義を利用するところ、まことに老大國の乞食たるに愧ぢず、大いに敬服仕り候。但し城壁の間にはエエデル・ワイスの花なども相見え、如何にも案外へ參りたるらしき心もちだけは致し候。

十七　石佛寺

藝術的エネルギイの洪水の中から石の蓮華が何本も歡喜の聲を放つてゐる。その聲を聞いてゐるだけでも、——どうもこれは命がけだ。ちよつと一息つかせてくれ給へ。

十八　天津

僕――かう言ふ西洋風の町を歩いてゐると、妙に郷愁を感じますね。

西村さん――お子さんはまだお一人ですか？

僕――いや、日本へぢやありません。北京へ歸りたくなるのですよ。

十九　奉天

丁度日の暮の停車場に日本人が四五十人歩いてゐるのを見た時、僕はもう少しで黄禍論に贊成してしまふ所だつた。

二十　南滿鐵道

高粱の根を這ふ一匹の百足。

小品

大川の水

自分は、大川端に近い町に生まれた。家を出て椎の若葉に掩はれた、黒塀の多い横網の小路をぬけると、直あの幅の廣い川筋の見渡される、百本杭の河岸へ出るのである。幼い時から、中學を卒業するまで、自分は殆毎日のやうに、あの川を見た。水と船と橋と砂洲と、水の上に生まれて水の上に暮してゐるあわただしい人々の生活とを見た。眞夏の日の午すぎ、燬けた砂を踏みながら、水泳を習ひに行く通りすがりに、嗅ぐともなく嗅いだ河の水のにほひも、今では年と共に、親しく思ひ出されるやうな氣がする。

自分はどうして、かうもあの川を愛するのか。あの何方かと云へば、泥濁りのした大川の生暖い水に、限りない床しさを感じるのか。自分ながらも、少しく、其説明に苦しまずにはゐられない。唯、自分は、昔からあの水を見る毎に、何となく、涙を落としたいやうな、云い難い慰安と寂寥とを感じた。完く、自分の住んでゐる世界から遠ざかつて、なつかしい思慕と追憶との國に

はいるやうな心もちがした。此心もちの爲に、此慰安と寂寥とを味ひ得るが爲に、自分は何よりも大川の水を愛するのである。

銀灰色の靄と青い油のやうな川の水と、吐息のやうな、覺束ない汽笛の音と、石炭船の鳶色の三角帆と、――すべて止み難い哀愁をよび起す是等の川のながめは、如何に自分の幼い心を、其岸に立つ楊柳の葉の如く、をののかせた事であらう。

此三年間、自分は山の手の郊外に、雜木林のかげになつてゐる書齋で、靜平な讀書三昧に耽つてゐたが、それでも猶、月に二三度は、あの大川の水を眺めにゆくことを忘れなかつた。動くともなく動き、流るるともなく流れる大川の水の色は、靜寂な書齋の空氣が休みなく與へる刺戟と緊張とに、切ない程あわただしく、動いてゐる自分の心をも、丁度、長旅に出た巡禮が、漸く又故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由な、なつかしさに、とかしてくれる。大川の水があつて、始めて自分は再、純なる本來の感情に生きることが出來るのである。

自分は幾度となく、青い水に臨んだアカシアが、初夏のやはらかな風にふかれて、ほろほろと白い花を落とすのを見た。自分は幾度となく、霧の多い十一月の夜に、暗い水の空を寒むさうに鳴く、千鳥の聲を聞いた。自分の見、自分の聞くすべてのものは、悉、大川に對する自分の愛を新にする。丁度、夏川の水から生まれる黒蜻蛉の羽のやうな、をののき易い少年の心は、其度に

新な驚異の眸を見はらずにはゐられないのである。殊に夜網の船の舷に倚つて、音もなく流れる、黒い川を凝視めながら、夜と水との中に漂ふ「死」の呼吸を感じた時、如何に自分は、たよりのない淋しさに迫られたことであらう。

大川の流を見る毎に、自分は、あの僧院の鐘の音と、鵠の聲とに暮れて行く伊太利亞の水の都――バルコンにさく薔薇も百合も、水底に沈んだやうな月の光に青ざめて、黒い柩に似たゴンドラが、其中を橋から橋へ、夢のやうに漕いでゆく、ヴェネチアの風物に、溢るるばかりの熱情を注いだダンヌンチョの心もちを、今更のやうに慕はしく、思ひ出さずにはゐられないのである。

此大川の水に撫愛される沿岸の町々は、皆自分にとつて、忘れ難い、なつかしい町である。吾妻橋から川下ならば、駒形、並木、藏前、代地、柳橋、或は多田の藥師前、うめ堀、横網の川岸――何處でもよい。是等の町々を通る人の耳には、日をうけた土藏の白壁と白壁との間から、格子戸づくりの薄暗い家と家との間から、或は銀茶色の芽をふいた、柳とアカシアとの並樹の間から、磨いた硝子板のやうに、青く光る大川の水は、其冷な潮の匂と共に、昔ながら南へ流れる、懷しいひびきをつたへてくれるだらう。ああ、其水の聲のなつかしさ、つぶやくやうに、拗ねるやうに、舌うつやうに、草の汁をしぼつた青い水は、日も夜も同じやうに、兩岸の石崖を洗つて

ゆく。班女と云ひ、業平と云ふ、武藏野の昔は知らず、遠くは多くの江戸淨瑠璃作者、近くは河竹默阿彌翁が、淺草寺の鐘の音と共に、其殺し場のシュチンムングを、最力強く表す爲に、屢、其世話物の中に用ゐたものは、實に此大川のさびしい水の響であつた。十六夜清心が身をなげた時にも、源之丞が鳥追姿のおこよを見染めた時にも、或は又、鑄掛屋松五郎が蝙蝠の飛交ふ夏の夕ぐれに、天秤をになひながら兩國の橋を通つた時にも、大川は今の如く、船宿の棧橋に、岸の靑蘆に、猪牙船の船腹に懶いささやきを繰返してゐたのである。

殊に此水の音をなつかしく聞く事の出來るのは、渡し船の中であらう。自分の記憶に誤がないならば、吾妻橋から新大橋までの間に、元は五つの渡しがあつた。其中で、駒形の渡し、富士見の渡し、安宅の渡しの三つは、次第に一つづつ、何時となく廢れて、今では唯一の橋から濱町へ渡る渡しと、御藏橋から須賀町へ渡る渡しとの二つが、昔のままに殘つてゐる。自分が子供の時に比べれば、河の流れも變り、蘆荻の茂つた所々の砂洲も、跡方なく埋められてしまつたが、此二つの渡しだけは、同じやうな底の淺い舟に、同じやうな老人の船頭をのせて、岸の柳の葉のやうに靑い河の水を、今も變りなく日に幾度か横ぎつてゐるのである。自分はよく、何の用もないのに、此渡し船に乘つた。水の動くのにつれて、搖籃のやうに輕く體をゆすられる心地よさ。殊に時刻が遲ければ遲い程、渡し船のさびしさとうれしさとがしみじみと身にしみる。——低い舷

の外は直に緑色の滑な水で、青銅のやうな鈍い光のある、幅の廣い川面は、遠い新大橋に遮られるまで、唯一目に見渡される。兩岸の家々はもう、黄昏の鼠色に統一されて、其所々には障子にうつる灯の光さへ黄色く靄の中に浮んでゐる。上げ潮につれて灰色の帆を半張つた傳馬船が一艘、二艘と稀に川を上つて來るが、何の船もひつそりと靜まつて、舵を執る人の有無さへもわからない。自分は何時も此靜な船の帆と、青く平に流れる潮のにほひとに對して、何と云ふこともなく、ホフマンスタアルのエアレエプニスと云ふ詩をよんだ時のやうな、云ひやうのないさびしさを感ずると共に、自分の心の中にも亦、情緒の水の囁が、靄の底を流れる大川の水と同じ旋律をうたつてゐるやうな氣がせずにはゐられないのである。

けれ共、自分を魅するものは獨り大川の水の響ばかりではない。自分にとつては、此川の水の光が殆、何處にも見出し難い、滑さと暖さとを持つてゐるやうに思はれるのである。

海の水は、たとへば碧玉の色のやうに餘りに重く緑を凝らしてゐる。と云つて潮の滿干を全く感じない上流の川の水は、云はば緑柱石の色のやうに、餘りに輕く、餘りに薄つぺらに光りすぎる。唯淡水と潮水とが交錯する平原の大河の水は、冷な青に、濁つた黄の暖みを交へて、何處となく人間化された親しさと、人間らしい意味に於て、ライフライクな、なつかしさがあるやうに

思はれる。殊に大川は、赭ちやけた粘土の多い關東平野を行きつくして、「東京」と云ふ大都會を靜に流れてゐるだけに、其濁つて、皺をよせて、氣むづかしい猶太の老爺のやうに、ぶつぶつ口小言を云ふ水の色が、如何にも落付いた、人なつかしい、手ざはりのいい感じを持つてゐる。さうして、同じく市の中を流れるにしても、猶「海」と云ふ大きな神祕と、絶えず直接の交通を續けてゐる爲か、川と川とをつなぐ堀割の水のやうに暗くない。眠つてゐない。何處となく、生きて動いてゐると云ふ氣がする。しかも其動いてゆく先は、無始無終に亙る「永遠」の不可思議だと云ふ氣がする。吾妻橋、厩橋、兩國橋の間、香油のやうな青い水が、大きな橋臺の花崗石と煉瓦とをひたしてゆくうれしさは云ふ迄もない。岸に近く、船宿の白い行燈をうつし、銀の葉うらを翻す柳をうつし、又水門にせかれては三味線の音のぬるむ晝すぎを、紅芙蓉の花になげきながら、氣のよわい家鴨の羽にみだされて、人氣のない廚の下を靜に光りながら流れるのも、其重々しい水の色に云ふ可らざる溫情を藏してゐる。たとへ、兩國橋、新大橋、永代橋と、河口に近づくに從つて、川の水は、著しく暖潮の深藍色を交へながら、騷音と煙塵とにみちた空氣の下に、白く爛れた日をぎらぎらとブリキのやうに反射して、石炭を積んだ達磨船や白ペンキの剝げた古風な汽船をものうげに搖ぶつてゐるにしても、自然の呼吸と人間の呼吸とが落ち合つて、何時の間にか融合した都會の水の色の暖さは、容易に消えてしまふものではない。

殊に日暮、川の上に立こめる水蒸氣と、次第に暗くなる夕空の薄明とは、この大川の水をして、殆、比喩を絶した、微妙な色調を帶ばしめる。自分はひとり、渡し船の舷に肘をついて、もう靄の下りかけた、薄暮の川の水面を、何と云ふ事もなく見渡しながら、其暗い綠色の水のあなた、暗い家々の空に大きな赤い月の出を見て、思はず涙を流したのを、恐らく終世忘れることが出來ないであらう。

「すべての市は、其市に固有なにほひを持つてゐる。フロレンスのにほひは、イリスの白い花と埃と靄と古の繪畫のニスとのにほひである。」(メレジユコウスキイ)もし自分に「東京」のにほひを問ふ人があるならば、自分は大川の水のにほひと答へるのに何の躊躇もしないであらう。獨にほひのみではない。大川の水の色、大川の水のひびきは、我愛する「東京」の色であり、聲でなければならない。自分は大川あるが故に、「東京」を愛し、「東京」あるが故に、生活を愛するのである。

（一九一二・一）

其後「一の橋の渡し」の絶えたことをきいた。「御藏橋の渡し」の廢れるのも間があるまい。

創作

僕に小說をかけと云ふのかね。書けるのなら、とうに書いてゐるさ。が、書けない。遺憾ながら、職業に逐はれてペンをとる暇がない。そこで、人に話す、その人が、それを小說に書く。僕が材料を提供した小說が、これで十や二十はあるだらう。勿論、有名なる作家の作品でね。唯、君に注意して置きたいのは、僕の提供する材料が、大部分は、僕の創作だと云ふ事だよ。勿論、これは、今まで、人に話した事はない。さう云ふと、誰も、僕の話を聞いて、小說にする奴がないからね。僕は、何時でも、小說らしい事實を想像でつくり上げて、それを僕の友たちの小說家に、ほんたうらしく話してやる。すると、それが旬日ならずして、小說になる。自分が小說を書くのも、同じ事さ。唯、技巧が、多くの場合、全然僕の氣に入らないがね、それは、まあ仕方がないさ。

尤も、ほんたうらしく見せかけるのには、いろんな條件が必要だよ。僕自身、僕の小說の主人

公になる事もある。或は、僕の友だちの夫婦關係を粉本に、ちよいと借用する事もある。が、決して、モデル問題は起らない。起らない筈さ。モデル自身は、實際、僕の提供する材料のやうな事をしてはゐないんだし、僕の友だちの小說家も、それが姦通とか、竊盜とか、シリアスな事になればなる程、德義上、モデルの名は出さないからね。そこで、その小說が活字になる。作家は原稿料を貰ふ。どうかすると、僕をよんで、一杯やらうと云ふやうな事になる。實は、僕の方が、作家に禮をすべき筈なのだが、向ふで、嬉しがつて、するのだからさせて置くのさ。

所が、この間、弱つた事があつた。なに、Ｋの奴を、小說の主人公にして見たのさ。何しろ先生あの通り、トルストイヤンだから、あいつが、藝者に關係してゐる事にしたら、面白からうと思つて、さう云ふ情話を、創作してしまつたのだね。すると、その小說が出て、五六日すると、Ｋが僕の所へやつて來て、恨がましい事を並べるぢやあないか。いくら、あれは君の事を書いたのではないと云つても、承知しない。始めから、僕の手から出た材料ではないと云つてしまへば、よかつたのだが、それをしなかつたのが、こつちの落度さ。が、僕がＫの話をした小說家と云ふのは、氣の小さい、大學を出たての男で、Ｋ君の名譽に關る事だから位、おどかして置けば、決して、モデルが誰だなぞと云ふ事を、吹聽する男ぢやあない。そこで、怪しいと思つたから、Ｋに、何故君がモデルだと云ふ事がわかつたと、追窮したら、驚いたね、實際Ｋの奴が、かくれて

藝者遊びをしてゐたのだ。それも、筈なのだらうぢやあないか。仕方がないから、僕は、表面上、Ｋの私行を發いたと云ふ罪を甘受して、Ｋに謝罪したがね。まるで、寃罪に伏した事になるのだから、僕もいい迷惑さ。しかし、それ以來、僕の提供する材料が、嘘ではないと云ふ事が、僕の友だちの小説家仲間に、確證されたからね。滿更、莫迦を見たわけでもないと云ふものさ。

だが、たまには、面白い事もあるよ。僕は、いつかＭが、他人の細君に戀してゐると云ふ話を創作した。尤も一切の社會的羈絆を蹂躙して、その女と結婚する事が男らしい如く、自分の戀を打明けずにおくのも男らしいと云ふ信念から、依然として、童貞を守りながら、その女ときれいな交際をしてゐると云ふ筋なのだがね。すると、それを聞いた僕の友だちの小説家は、それ以來、大にＭに推服してしまつたぢやあないか。實は、Ｍ位、誘惑に負け易い、男らしくない人間はないのだがね。それを見てゐると、いくら僕でも、笑はずにはゐられないよ。

君は、いやな顏をするね。僕を、罪な事をする男だとでも、思つてゐるのだらう。隱したつて、駄目だよ、商賣がら、僕の診察に間違ひはない。醫者と云ふものは、病狀の診斷を、患者の顏色からも、拵へるものだからね。それは、君のモラアルも、僕にはよくわかつてゐるさ。しかしたね、僕が、さう云ふ事をしたからと云つて、どれだけ他人に迷惑を與へるだらう。唯、甲が乙に對して持つてゐる考へを、少し變更するだけの事だ。善くか、惡くかは、場合場合でちがふがね。

え、僞を眞に代へる惧がある？　冗談云つちやあいけない。甲が乙に對して持つてゐる考へに、眞僞の別なんぞ、あり得ないぢやあないか。自分を知つてゐる者は、自分だけさ。もう一つあれば、自分を造つた、自分の上の實在だけさ。

尤も、その僞に、甲と乙との間に、不和でも起れば、僕の責任だが、そんな事は、絶對にないと云つても、まあいいね。それだけの注意は、僕でも、ちやんとしてゐるのだから。

第一僕のやうな眞似をした人間は、昔から澤山ゐたらうと思ふね。それは、僕程、明白な自覺を以て、した奴はないかも知れないさ。が、ゐた事は、確にゐたよ。たとへばだね、僕が、實際、何か經驗して、それを、僕の友だちに話したとする。君は、その時、嚴密な意味で、僕が嘘をつかずに、ありのままを話せると思ふかね。よし、出來るにしても、むづかしい事には、ちがひなからう。さうすると、嘘の材料を提供すると云ふ事と、實際のそれを提供すると云ふ事との差が、一般に考へてゐるよりも、少なくなつてくる。それなら、昔から、出たらめを、小說家や詩人に話した奴が、澤山ゐたらうぢやあないか。出たらめと云ふと、人聞きが惡いがね。實は、立派な想像の產物さ。

まあ、そんなむづかしい顏をするのは、よし給へ。それよりその珈琲でものんで、一しよに出かけよう。さうして、あの電燈の下で、ベエトオフエンでも聞かう。ヘルデン・レエベンは、自

動車の音に似てゐるから、好きだと云ふ男が、ジアン・クリストフの中に、出て來るぢやあないか。僕のベエトオフエンの聞き方も、あの男と同じかも知れない。事によると、人生と云ふものの觀方もね。……（一九・八・五）

出帆

成瀬君

君に別れてから、もう一月の餘になる。早いものだ。この分では、存外容易に、君と僕等とを隔てる五六年が、すぎ去つてしまふかも知れない。

　君が横濱を出帆した日、銅鑼が鳴つて、見送りに來た連中が、皆、梯子傳ひに、船から波止場へ下りると、僕はジョオンズと一しよになつた。尤も、さつき甲板ではちよいと姿を見かけたが、その後、君の船室へもサロンへも顔を出さなかつたので、僕はもう歸つたのかと思つてゐた。所が、先生、僕をつかまへると、大元氣で、ここへ來ると何時でも旅がしたくなるとか、己も來年かさ來年は亞米利加へ行くとか、いろんな事を云ふ。僕はいい加減な返事をしながら、甚、煮切らない態度で、お相手をつとめてゐた。第一、莫迦に暑い。それから、胃がしくしく、痛む。到底彼のしやべる英語を、一々理解する程、神經を緊張する氣になれない。

その中に、船が動き出した。それも、甚、緩慢な動き方で、船と波止場との間の水が少しづつ幅を廣くして行くから、わかるやうなものの、さもなければ、殆、動いてゐるとは受取れない位である。おまけに、この間の水なるものが、非常にきたない。藁くづやペンキ塗りの木の片が黄綠色に濁つた水面を、一面に蔽つてゐる。どうも、昔、森さんの「棧橋」とか云ふもので讀んだ程、小説らしくも何ともない。

麥稈帽子をかぶつて、茶の背廣を着た君は、扇を持つて、こつちを眺めてゐた。それも至極通俗な眺め方である。學校から歸りに、神田を一しよに散歩して、須田町へ來ると、何時も君は三田行の電車へのり、僕は上野行の電車にのつた。さうしてどつちか先へのつた方を、後にのこされた方が見送ると云ふ習慣があつた。今日、船の上にゐる君が、波止場を眺めるのも、その時と大した變りはない。(或は僕の方に、變りがないせゐだらうか。)僕は、時々君の方を見ながら、ジヨオンズと出たらめな會話をやつてゐた。彼はクロムプトン・マツケンジイがどうとか云つたかと思ふと、露西亞の監獄へは、牢やぶりの器械を賣りに來るとか何とか云ふ。何をしやべつてゐるのだか、わからない。唯、君を見送つてから彼が沼津へ寫生にゆくと云ふ事だけは、何度もきき返してやつとわかつた。

その中に、氣がついて見ると、船と波止場との距離が、大分遠くなつてゐる。この時、可成痛

切に、君が日本を離れるのだと云ふ氣がした。皆が、成瀬君萬歳と云ふ。君は扇を動かして、それに答へた。が、僕は中學時代から一度も、大きな聲で萬歳と云つた事がない。そこで、その時も、唯、かぶつてゐた麥稈帽子をぬいで、それを高くさし上げて、パセテイツクな心もちに順應させた。萬歳の聲は、容易に止まない。僕は君に、何時か、「燃燒しない」(君の語をそのまま、使へば)と云つて非難された事を思ひ出した。さうして微笑した。僕の前では君の弟が、ステツキの先へハンケチをむすびつけて、それを勢よくふりながら「兄さん萬歳」を繰返してゐる。……

後甲板には、露西亞の役者が大ぜい乘つてゐた。それが男は、大抵、うすぎたない日本の浴衣をひつかけてゐる。いつか本郷座へ出た連中であるが、かうして日のかんかん照りつける甲板に、だらしのない浴衣がけで、集まつてゐるのを見ると、甚、振はない。中には、赤い頭巾をかぶつた女役者や半ズボンをはいた子供も、まじつてゐた。――すると、その連中が、突然聲を揃へて、何か歌をうたひ出した。やはり浴衣がけの脊の高い男が、バトンを持つてゐるやうな手つきで、拍子をとつてゐるのが見える。ジョオンズは、歌の一節がきれる度に、頷いて「グツド」と云つた。が何がグツドなのだか、僕にはわからない。

船の方は、その通り陽氣だが、波止場の方は中々さうは行かない。どつちを見ても泣いてゐる人が、大ぜいある。君のおかあさんも、泣いてゐられた。妹たちも泣いてゐたらしい。涙は見え

なくとも、泣かないばかりの顔は、其處にも此處にもある。殊に、フロツクコオトに山高帽子をかぶつた、年よりの異人が、手をあげて、船の方を招くやうな眞似をしてゐたのは、甚小說らしい心もちがした。

「君は泣かないのかい。」

僕は、君の弟の肩をたたいて、訊いてみた。

「泣くものか。僕は男ぢやないか。」

さながら、この自明の理を知らない僕を憐むやうな調子である。僕は又、微笑した。

船はだんだん、遠くなつた。もう君の顔も見えない。唯、扇をあげて、時々こつちの萬歳に答へるのだけがわかる。

「おい、みんな日向へ出ようぢやないか。日かげにゐると、向うからこつちが見えない。」

久米が、皆をふり返つてから云つた。そこで、皆日向へ出た。僕はやはり帽子をあげて立つてゐる。僕のとなりには、ジヨオンズが、怪しげなパナマをふつてゐる。その前には、脊の高い松岡と脊の低い菊池とが、袂を風に飜しながら、並んで立つてゐる。さうして、これも帽子をふつてゐる。時々、久米が、大きな聲を出して、「成瀨」と呼ぶ。ジヨオンズが、口笛をふく。君の弟が、ステツキをふりまはして「兄さん萬歳」を連呼する。――それが、愈、君が全く見えなくなるまで、

續いた。

歸りぎはに、ふりむいて見たら、例の年よりの異人は、まだ、ぼんやり船の出て行つた方を眺めてゐる。すると、僕と一しよにふりむいたジョオンズは、指をぴんと鳴らしながら、その異人の方を顋でしやくつて He is a beggar とか何とか云つた。

「へえ、乞食かね。」

「乞食さ。毎日、波止場をうろついてゐるらしい。己はここへよく來るから、知つてゐる。」

それから、彼は、日本人のフロツクコオトに對する尊敬の愚なる所以を、長々と辯じ立てた。僕のセンティメンタリズムは、ここでも亦愈「燃燒」せざる可く、新に破壞された譯である。

その中に、久米と松岡とが、日本の文壇の狀況を、活字にして、君に報ずるさうだ。僕も亦近近に、何か書く事があるかも知れない。

（大正五年九月）

蛙

自分の今寢ころんでゐる側に、古い池があつて、そこに蛙が澤山ゐる。

池のまはりには、一面に蘆や蒲が茂つてゐる。その蘆や蒲の向うには、脊の高い白楊の並木が、品よく風に戰いでゐる。その又向うには、靜な夏の空があつて、そこには何時も細い、硝子のかけのやうな雲が光つてゐる。さうしてそれらが皆、實際よりも遙に美しく、池の水に映つてゐる。

蛙はその池の中で、永い一日を飽きず、ころろ、からからと鳴きくらしてゐる。ちよいと聞くと、それが唯ころろ、からからとしか聞えない。が、實は盛に議論を鬪してゐるのである。蛙が口をきくのは、何もイソツプの時代ばかりと限つてゐる譯ではない。

中でも蘆の葉の上にゐる蛙は、大學教授のやうな態度でこんなことを云つた。

「水は何の爲にあるか。我々蛙の泳ぐ爲にあるのである。蟲は何の爲にゐるか。我々蛙の食ふ爲にゐるのである。」

「ヒヤア、ヒヤア」と、池中の蛙が聲をかけた。空と艸木との映つた池の水面が、殆ど埋る位な蛙だから、贊成の聲も勿論大したものである。丁度その時、白楊の根元に眠つてゐた蛇は、このやかましいころろ、からの聲で眼をさました。さうして、鎌首をもたげながら、池の方へ眼をやつて、まだ眠むさうに舌なめづりをした。

「土は何の爲にあるか。艸木を生やす爲にあるのである。では、艸木は何の爲にあるか。我々蛙に影を與へる爲にあるのである。從つて、全大地は我々蛙の爲にあるのではないか。」

「ヒヤア、ヒヤア。」

蛇は、二度目の贊成の聲を聞くと、急に體を鞭のやうにぴんとさせた。それから、そろそろ蘆の中へ這ひこみながら、黑い眼をかがやかせて、注意深く池の中の樣子を窺つた。

蘆の葉の上の蛙は、依然として、大きな口をあけながら、辯じてゐる。

「空は何の爲にあるか。太陽を懸ける爲にあるのである。太陽は何の爲にあるか。我々蛙の背中を乾かす爲にあるのである。從つて、全大空は我々蛙の爲にあるのではないか。既に水も艸木も、蟲も土も空も太陽も、皆我々蛙の爲にある。森羅萬象が悉く我々の爲にあると云ふ事實は、最早何等の疑をも容れる餘地がない。自分はこの事實を諸君の前に闡明すると共に、併せて全宇宙を我々の爲に創造した神に、心からな感謝を捧げたいと思ふ。神の御名は讚むべきかなである。」

蛙は、空を仰いで、眼玉を一つぐるりとまはして、それから又、大きな口をあいて云つた。

「神の御名は讃むべきかな……」

さう云ふ語がまだ完らない中に、蛇の頭がぶつけるやうにのびたかと思ふと、この雄辯なる蛙は、見る間にその口に啣へられた。

「から、大變だ。」

「ころろ、大變だ。」

「大變だ、から、ころろ。」

池中の蛙が驚いてわめいてる中に、蛇は蛙を啣へた儘、蘆の中へかくれてしまつた。後の騷は、恐らくこの池の開闢以來未嘗なかつた事であらう。自分にはその中で、年の若い蛙が、泣き聲を出しながら、かう云つてゐるのが聞えた。

「水も艸木も、蟲も土も、空も太陽も、みんな我々蛙の爲にある。では、蛇はどうしたのだ。蛇も我々の爲にあるのか。」

「さうだ。蛇も我々蛙の爲にある。蛇が食はなかつたら、蛙はふえるのに相違ない。ふえれば、池が――世界が必狹くなる。だから、蛇が我々蛙を食ひに來るのである。食はれた蛙は、多數の幸福の爲に捧げられた犧牲だと思ふがいい。さうだ。蛇も我々蛙の爲にある。世界にありとあ

らゆる物は、悉蛙の爲にあるのだ。神の御名は讃む可きかな。」

これが、自分の聞いた、年よりらしい蛙の答である。

（大正六年九月）

女體

楊某と云ふ支那人が、或夏の夜、あまり蒸暑いのに眼がさめて、頬杖をつきながら腹んばひになつて、とりとめのない妄想に耽つてゐると、ふと一匹の虱が寢床の緣を這つてゐるのに氣がついた。部屋の中にともした、うす暗い灯の光で、虱は小さな背中を銀の粉のやうに光らせながら、隣に寢てゐる細君の肩を目がけて、もずもず這つて行くらしい。細君は、裸の儘、さつきから楊の方へ顏を向けて、安らかな寢息を立ててゐるのである。

楊は、その虱ののろくさい歩みを眺めながら、こんな蟲の世界はどんなだらうと思つた。自分が二足か三足で行ける所も、虱には一時間もかからなければ、歩けない。しかもその歩きまはる所が、せいぜい寢床の上だけである。自分も虱に生れたら、嘸退屈だつた事であらう。……

そんな事を漫然と考へてゐる中に、楊の意識は次第に朧げになつて來た。勿論夢ではない、さうかと云つて又、現でもない。唯、妙に恍惚たる心もちの底へ、沈むともなく沈んで行くのであ

る。それがやがて、はつと眼がさめたやうな氣に歸つたと思ふと、何時か楊の魂はあの虱の體へはいつて、汗臭い寢床の上を、蠕々然として歩いてゐる。楊は餘りに事が意外なので、思はず茫然と立ちすくんだ。が、彼を驚かしたのは、獨りそればかりではない。――

彼の行く手には、一座の高い山があつた。それが又自らな圓みを暖く抱いて、眼のとどかない上の方から、眼の先の寢床の上まで、大きな鍾乳石のやうに垂れ下つてゐる。その寢床についてゐる部分は、中に火氣を藏してゐるかと思ふ程、うす赤い柘榴の實の形を造つてゐるが、そこを除いては、山一圓、どこを見ても白くない所はない。その白さが又、凝脂のやうな柔かみのある、滑な色の白さで、山腹のなだらかなくぼみでさへ、丁度雪にさす月の光のやうな、かすかに青い影を湛へてゐるだけである。まして光をうけてゐる部分は、融けるやうな鼈甲色の光澤を帶びて、どこの山脈にも見られない、美しい弓なりの曲線を、遙な天際に描いてゐる。……

楊は驚嘆の眼を見開いて、この美しい山の姿を眺めた。が、その山が彼の細君の乳の一つだと云ふ事を知つた時に、彼の驚きは果してどれ位だつた事であらう。彼は、愛も憎みも、乃至又性慾も忘れて、この象牙の山のやうな、巨大な乳房を見守つた。さうして、驚嘆の餘り、寢床の汗臭い匂も忘れたのか、何時までも凝固まつたやうに動かなかつた。――楊は、虱になつて始めて、細君の肉體の美しさを、如實に觀ずる事が出來たのである。

しかし、藝術の士にとつて、虱の如く見る可きものは、獨り女體の美しさばかりではない。

（大正六年九月）

黄粱夢

盧生は死ぬのだと思つた。眼の前が暗くなつて、子や孫のすすり泣く聲が、だんだん遠い所へ消えてしまふ。さうして、眼に見えない分銅が足の先へついてでもゐるやうに、體が下へ下へと沈んで行く——と思ふと、急にはつと何かに驚かされて、思はず眼を大きく開いた。

すると枕もとには依然として、道士の呂翁が坐つてゐる。主人の炊いでゐた黍も、未だに熟さないらしい。盧生は青磁の枕から頭をあげると、眼をこすりながら大きな欠伸をした。邯鄲の秋の午後は、落葉した木々の梢を照らす日の光があつてもうすら寒い。

「眼がさめましたね。」呂翁は、髭を噛みながら、笑を噛み殺すやうな顔をして云つた。

「ええ——」

「夢を見ましたらう。」

「見ました。」

「どんな夢を見ました。」

「何でも大へん長い夢です。始は清河の崔氏の女と一しよになりました。うつくしいつつましやかな女だつたやうな氣がします。さうして明る年、進士の試驗に及第して、渭南の尉になりました。それから、監察御史や起居舍人知制誥を經て、とんとん拍子に中書門下平章事になりましたが、讒を受けてあぶなく殺される所をやつと助かつて、驩州へ流される事になりました。其處に彼是五六年もゐましたらう。やがて、寃を雪ぐ事が出來たおかげで又召還され、中書令になり、燕國公に封ぜられましたが、その時はもういい年だつたかと思ひます。子が五人に、孫が十何人とありましたから。」

「それから、どうしました。」

「死にました。確か八十を越してゐたやうに覺えてゐますが。」

呂翁は、得意らしく髭を撫でた。

「では、寵辱の道も窮達の運も、一通りは味はつて來た譯ですね。それは結構な事でした。生きると云ふ事は、あなたの見た夢といくらも變つてゐるものではありません。これであなたの人生の執着も、熱がさめたでせう。得喪の理も死生の情も知つて見れば、つまらないものなのです。さうではありませんか。」

盧生は、ぢれつたさうに呂翁の語を聞いてゐたが、相手が念を押すと共に、青年らしい顏をあげて、眼をかがやかせながら、かう云つた。
「夢だから、猶生きたいのです。あの夢のさめたやうに、この夢もさめる時が來るでせう。その時が來るまでの間、私は眞に生きたと云へる程生きたいのです。あなたはさう思ひませんか。」
呂翁は顏をしかめた儘、然りとも否とも答へなかつた。

（大正六年十月）

英雄の器

「何しろ項羽と云ふ男は、英雄の器ぢやないですな。」

漢の大將呂馬通は、唯でさへ長い顏を、一層長くしながら、疎な髯を撫でて、かう云つた。彼の顏のまはりには、十人あまりの顏が、皆まん中に置いた燈火の光をうけて、赤く幕營の夜の中にうき上つてゐる。その顏が又、どれも何時になく微笑を浮べてゐるのは、西楚の霸王の首をあげた今日の勝戰の喜びが、まだ消えずにゐるからであらう。――

「さうかね。」

鼻の高い、眼光の鋭い顏が一つ、これは稍皮肉な微笑を脣頭に漂はせながら、ぢつと呂馬通の眉の間を見ながら、かう云つた。呂馬通は何故か、聊狼狽したらしい。

「それは強い事は強いです。何しろ塗山の禹王廟にある石の鼎さへ擡げると云ふのですからな。現に今日の戰でもです。私は一時命はないものだと思ひました。李佐が殺される、王恆が殺され

る。その勢と云つたら、ありません。それは實際、強い事は強いですな。」

「ははあ。」

相手の顔は依然として微笑しながら、鷹揚に頷いた。幕營の外はしんとしてゐる。遠くで二三度、角の音がした外は、馬の嘶く聲さへ聞えない。その中で、どことなく、枯れた木の葉の匂がする。

「しかしです。」呂馬通は、一同の顔を見廻して、さも「しかし」らしく、眼ばたきを一つした。「しかし、英雄の器ぢやありません。その證據は、やはり今日の戰です。烏江に追ひつめられた時の楚の軍は、たつた二十八騎です。雲霞のやうな味方の大軍に對して、戰つた所が、仕方はありません。それに、烏江の亭長は、わざわざ迎へに出て、江東へ舟で渡さうと云つたさうですな。もし項羽に英雄の器があれば、垢を含んでも、烏江を渡るです。さうして捲土重來するです。面目なぞをかまつてゐる場合ぢやありません。」

「すると、英雄の器と云ふのは、勘定に明いと云ふ事かね。」

この語につれて、一同の口からは、靜な笑ひ聲が上つた。が、呂馬通は、存外ひるまない。彼は髯から手を放すと、稍反り身になつて、鼻の高い、眼光の鋭い顔を時々ちらりと眺めながら、勢よく手眞似をして、しやべり出した。

「いやさう云ふつもりぢやないです。——項羽はですな。項羽は、今日戰の始まる前に、二十八人の部下の前で『項羽を亡すものは天だ。人力の不足ではない。その證據には、これだけの軍勢で、必漢の軍を三度破つて見せる』と云つたさうです。さうして、實際三度どころか、九度も戰つて勝つてゐるです。私に云はせると、それが卑怯だと思ふのですな、自分の失敗を天にかづける——天こそいい迷惑です。それも烏江を渡つて、江東の健兒を糾合して、再び中原の鹿を爭つた後でなら、仕方がないですよ。が、さうぢやない。立派に生きられる所を、死んでゐるです。私が項羽を英雄の器でないとするのは、勘定に暗かつたからばかりではないです。一切を天命でごまかさうとする——それがいかんですな。英雄と云ふものは、そんなものぢやないと思ふです。蕭丞相のやうな學者は、どう云はれるか知らんですが。」

　呂馬通は、得意さうに左右を顧みながら、暫く口をとざした。彼の議論が、尤もだと思はれたのであらう。一同は互に輕い頷きを交しながら、滿足さうに默つてゐる。すると、その中で、鼻の高い顏だけが、思ひがけなく、一種の感動を、眼の中に現した。黑い瞳が、熱を持つたやうに、かがやいて來たのである。

「さうかね。項羽はそんな事を云つたかね。」

「云つたさうです。」

呂馬通は、長い顔を上下に、大きく動かした。

「弱いぢやないですか。いや、少くとも男らしくないぢやないですか。英雄と云ふものは、天と戰ふものだらうと思ふですが。」

「さうさ。」

「天命を知つても尙、戰ふものだらうと思ふですが。」

「さうさ。」

「すると項羽は――」

劉邦は鋭い眼光をあげて、ぢつと秋をまたたいてゐる燈火の光を見た。さうして、半ば獨り言のやうに、徐にかう答へた。

「だから、英雄の器だつたのさ。」

饒舌

始皇帝がどう思つたか、本を皆焼いてしまつたので、神田の古本屋が職を失つたと新聞に出てゐるから、ひどい事をしたもんだと思つて、その本の焼けあとを見に丸ノ内へ行かうとすると、銀座尾張町の四つ角で、交番の前に人が山のやうにたかつてゐる。そこで後から脊のびをして覗いて見ると、支那人の婆さんが一人巡査の前でおいおい云ひながら泣いてゐた。尤も支那人と云つても、今の支那人ではない。平福百穂さんの豫譲の畫からぬけ出したやうな、古雅な服装をした婆さんである。巡査はいろいろ說諭をしてゐるが、婆さんの耳には少しもそれがはいらないらしい。何しろあんまり婆さんの泣き方が猛烈だから、どうしたんだらうと思つて見てゐると、側にゐたどこかのメッセンヂア・ボイが二人でこんな事を話してゐる。

「あれは丸善の金どんのお母さんだよ。」

「どうして又金どんのお母さんがあんなに泣いてゐるんだらう。」

「なにね、始皇帝が今日東京中の學者をみんな日比谷公園の池へ抛りこんで、生埋めにしちまつたらう。それで金どんもやつぱり生埋めにされちまつたもんだから、それであんなにお母さんが泣いてゐるのさ。」

「だつて金どんは學者でも何でもないぢやないか。」

「學者ぢやないけれど、金どんはあんまり生物識を振まはすから、丸善ぢや學者つて綽名がついてゐるんだよ。だから警察でも大學教授や何かの同類だと思つて、生埋めにしてしまつたのさ。」

するとその隣の、小倉の袴をはいた書生が、

「怪しからんな。名の爲に實を顧みないに至つては閥族の横暴も極れりだ。」と憤慨した。

自分もそれは亂暴だと思つたから、

「實に怪しからんですな。」と書生の憤慨に贊成の意を表した。書生は自分の贊成を得て大に知己を得たやうな氣がしたのだらう。彼は自分の方をふりむくと、滔々としてこんな事を辯じ出した。

「萬事この調子だから驚くです。かう云ふ事には最も理解がある可き文壇でさへ、イズムで人間を律しようとするんですからな。一度新技巧派と云ふ名が出來ると、その名をどこまでも人に抑しかぶせて、それで胡麻をする時は胡麻をするし、退治する時は退治しようとするんですからな。我々青年はまづこの弊風を打破しなければいかんです。僕はこの間博浪沙で始皇帝の車に鐵椎を

落させました。不幸にしてそれは失敗しましたが、まだ壯心が衰へた譯ではありません。」

かう云つて書生は、群衆を麾きながら、

「諸君、憲政の擁護の爲にあの交番を破壞しようではありませんか。」と絶叫した。

それに應じてどこからか石が一つ斜に空を切りながら、かちやりと音を立てて交番の窓硝子へ穴をあけた。その音で氣がつくと、自分は依然としてカツフエ・パウリスタのテエブルに坐つてゐる。かちやりと云つたのは、珈琲の匙が手から皿の上へ落ちた音らしい。自分は黑いモオニングを着た容貌魁梧な紳士と向ひ合つた儘、眼を明いて夢を見てゐたのである。紳士は自分が放心から覺めたのを見ると、

「新年の新聞に何か書いてくれませんか。」と云つた。

「この頃は何も書きたくないんだから駄目です。」

「そんな事を云はずに何か書いてくれ給へ。何でもいいのです。たとへば「新技巧派について」と云ふやうなものでも。」

自分はぎよつとした。事によるとこの紳士は自分の夢を知つてゐるのかも知れない。

「それでなければ、「舊技巧と新技巧と」はどうです。」

「駄目です。第一新技巧などと云ふ事は考へた事もありやしません。」自分はぶつけるやうに云つ

た。

「しかし何か書けるでせう。」

「書けば、あなたに頼まれて書くと云ふ事を書くだけです。」

「それでもいいから、書いてくれ給へ。」

紳士はポツケツトを探つて、原稿用紙と萬年筆とを出した。外では歳暮大賣出しの樂隊の音がする。隣のテエブルでは誰かがケレンスキイを論じ出した。珈琲の匂、ボイの註文を通す聲、夫からクリスマス樹――さう云ふ賑かな周圍の中に自分は苦い顏をして、いやいやその原稿用紙と萬年筆とを受取つた。それで書いたのが、この何枚かの愚にもつかない饒舌である。だから孟浪杜撰の責は寧ろ今自分の前に坐つてゐる、容貌魁梧な紳士にあつて、これを書いた自分にはない。

南瓜

何しろ南瓜が人を殺す世の中なんだから、驚くよ。どう見たつて、あいつがそんな大それた眞似をしようなんぞとは思はれないぢやないか。なにほんものの南瓜か？　冗談云つちやいけない。南瓜は綽號だよ。南瓜の市兵衛と云つてね。吉原ぢや下つぱの――と云ふよりや、まるで數にはいつてゐない太鼓持なんだ。

そんな事を聞く位ぢや、君はあいつを見た事がないんだらう。そりや惜しい事をしたね。もう今ぢや赤い着物を着てゐるだらうから、見たいつたつて、ちよいとは見られるもんぢやない。頭でつかちの一寸法師見たいなやつでね、夫がフロックに緋天鵞絨のチョツキと云ふ拵へなんだから、ふるつてゐたよ。おまけにその鉢の開いた頭へちよん髷をのつけてゐるんだ。それも粋な由兵衛奴か何かでね。だから君、始めて遇つたお客は誰でもまあ毒氣をぬかれる。すると南瓜のやつは、扇子で一つその鉢の開いた頭をぽんとやつて、「どうでげす。新技巧派の太鼓持もたまには

又乙でげせう」つて云ふんだ。惡い洒落さね。

洒落と云へば、南瓜にや何一つ藝らしい藝がない。唯お客をつかまへて、洒落放題洒落る丈なんだ。それが又「にはかに洒落られません」つて程にも行かないんだから、心細いやね。尤もそこはお客もお客で曲りなりにも洒落のめせば、それでもう多噯なく笑つてゐる。云はば洒落のわかつたのが、うれしくつてたまらないと云ふ連中ばかりなんだ。

あいつも始はそれが、味噌氣だつたんだらう。僕が知つてからも、隨分いい氣になつて、擽つたもんさ。所がいくら南瓜だつて、さう始終洒落てばかりゐる譯にや行きやしない。たまには改まつて、眞面目な事も云ふ時がある。が、お客の方ぢや南瓜は何時でも洒落るもんだと思つてゐるから、いくらあいつが眞面目な事を云つたつて、やつぱり腹を抱へて笑つてゐる。そこがこの頃になつて見ると、だんだんあいつの氣になり出したんだ。あれで君、見かけよりや存外神經質な男だからね。いくらフロツクに緋天鵞絨のチョツキを着て由兵衞奴の頭を扇子で叩いてゐたつて、云ふ事まで何時でも冗談だとは限りやしない。眞面目な事を云ふ時は、やつぱり眞面目な事を云つてゐるんだ、事によるとお客よりや、もつと眞面目な事を云つてたかも知れない。――とまあ、僕は思ふんだがね。だからあいつに云はせりや「笑ふ手前が可笑しいぞ」位な氣は、とうの昔からあつたんだ。今度のあいつの一件だつて、つまりはその不平が高じたやうなもんぢやたい

か。

そりや新聞に出てゐた通り、南瓜が薄雲太夫と云ふ華魁に惚れてゐた事はほんたうだらう。さうしてあの奈良茂と云ふ成金が、その又太夫に惚れてゐたのにも違ひない。が、なんぼあいつだつてそんな鞘當筋だけぢや人殺しにも及ぶまいぢやないか。それよりあいつが口惜しがつたのは、誰もあいつが薄雲太夫に惚れてゐると云ふ事を、眞にうける人間がゐなかつた事だ。成金のお客は勿論、當の薄雲太夫にした所で、そんな事は夢にもないと思つてゐる。尤もさう思つたのも可愛さうだが無理ぢやない。向うは仲の町でも指折りの華魁だし、こつちは片輪も同様な、ちんちくりんの南瓜だからね。かうならない前に聞いて見給へ。僕にしたつて嘘だと思ふ。それがあいつにやつらかつたんだ。別して惚れた相手の薄雲太夫が眞にうけないのを苦に病んだらしい――だからこその人殺しさ。

何でもその晩もあいつは醉つぱらつて薄雲太夫の側へ寄つちや、夫婦になつてくれとか何とか云つたんださうだ。太夫の方ぢや何時もの冗談と思ふから、笑つてばかりゐて相手にしない。しないばかりなら、よかつたんだが、何かの拍子に「市兵衛さんお前姿に惚れるなら、命がけで惚れなまし」つて云つたんださうだ。それがあいつの頭へぴんと來たんだらう。おまけに奈良茂がその後から、「かうなると汝と己とは仇同志や。今が今でも命のやりとりしてこまそ」つて、笑つ

たと云ふんだから機會が惡い。すると、南瓜に今まではしやいでゐたやつが、急に血相を變へながら坐り直して——それから君、何をやつたと思ふ。あいつがそのとろんこになつた眼を据ゑてハムレツトの聲色を使つたんだ。それも英語で使つたんだと云ふから、驚かあね。

これにや一座も、呆氣にとられた。——とられた筈さ。そこにゐた手合にや、遊扇にしろ、蝶兵衞にしろ、英語の英の字もわかりやしない。其角だつて、「奧の細道」の講釋はするだらうが、ハムレツトと來た日にや名を聞いた事もあるまいからね。唯その中でたつた一人、成金のお客にやこれがわかる——そこは亞米利加で皿洗ひか何かして來ただけに、日本の芝居はつまらないとあつて、オペラコミツクのミス何とかを贔屓にしてゐると云ふ御人體なんだ。がもとより洒落だと心得てゐたから、南瓜が妙な身ぶりをしながら、薄雲太夫をつかまへて、「You go not till I set you up a glass/Where you may see the inmost part of you.」とか何とか云つても、不相變げらげら笑つてゐたさうだがね。——そこまでは、まあよかつたんだ。それがハムレツトの臺辭よろしくあつて、だんだんあいつが太夫につめよつて來た時に、間の惡い時は又間の惡いもので、奈良茂の大將が一杯機嫌でどこで聞きかじつたか、「What, ho! help! help! help!」とポロニアスの聲色を使つたぢやないか。南瓜のやつはそれを聞くと、急に死人のやうな顏になつて、息がつまりさうな聲を出しながら「How, now! a rat? Dead for a ducat, dead!」と

云ふが早いか、いきなり奈良茂の側にあつた鮫鞘の脇差を引こぬいて、ずぶりと向うの胸へ突こんだんだ。そこでほんもののポロニアスなら「O! I am slain.」と云ふ所なんだが、刀は切れるし、急所だし、うんと云つたつきりお客は往生さ。その血の出た事つたらなかつたさうだよ。

「見やあがれ。己だつて出たらめばかりは云やしねえ。」――南瓜はさう云つて、脇差を抛り出したさうだがね。返り血もかかつたんだらうが、チョツキが緋天鵞絨なので、それがさほど目に立たない。人を殺したつて、殺さなくつたつて、見た所はやつぱりちんちくりんの、由兵衛奴にフロックを着た、あの南瓜の市兵衛が、それでもそこにゐた連中にや、別人のやうに見えたんだらう。――見えたんぢやない。まるで別人になつてしまつたんだ。だから、あいつが御用にたつて、茶屋の二階から引立てられる時にや、捕縄のかかつた手の上から、桐に鳳凰の繍のある目のさめるやうな綺麗な仕掛を羽織つてゐたと云ふぢやないか。なに誰の仕掛だ。勿論薄雲太夫のさ。

それ以來吉原は、今でもあいつの噂で持ちきつてゐるやうだ。兎に角これで見ても、何でも冗談だと思ふのは危險だよ。笑つて云つたつて、云はなくつたつて、眞面目な事はやつぱり眞面目な事にちがひないからね。

（大正七年二月）

京都日記

光悦寺

光悦寺へ行つたら、本堂の横手の松の中に小さな家が二軒立つてゐる。それがいづれも妙に納つてゐる所を見ると、物置きなんぞの類ではないらしい。らしい所か、その一軒には大倉喜八郎氏の書いた額さへも懸つてゐる。そこで案内をしてくれた小林雨郊君をつかまへて、「これは何です」と尋ねたら、「光悦會で建てた茶席です」と云ふ答へがあつた。

自分は急に、光悦會がくだらなくなつた。

「あの連中は光悦に御出入を申しつけた氣でゐるやうぢやありませんか。」

小林君は自分の毒口を聞いて、にやにや笑ひ出した。

「これが出來たので鷹ケ峯と鷲ケ峯とが續いてゐる所が見えなくなりました。茶席など造るより、あの邊の雜木でも拂へばよろしいにな。」

小林君が洋傘で指さした方を見ると、成程もぢやもぢや生え繁つた初夏の雜木の梢が、鷹ケ峯の左の裾を、鬱陶しく隱してゐる。あれがなくなつたら、山ばかりでなく、向うに光つてゐる大竹藪もよく見えるやうになるだらう。第一その方が茶席を造るよりは、手數がかからないのに違ひない。

それから二人で庫裡へ行つて、住職の坊さんに寶物を見せて貰つた。その中に一つ、銀の桔梗と金の薄とが入り亂れた上に美しい手蹟で歌を書いた、八寸四方位の小さな軸がある。これは薄の葉の垂れた工合が、殊に出來が面白い。小林君は專門家だけに、それを床柱にぶら下げて貰つて、「よろしいな。銀もよう燒けてゐる」とか何とか云つてゐる。自分は敷島を啣へて、まだ佛頂面をしてゐたが、やはりこの繪を見てゐると、落着きのある、朗な好い心もちになつて來た。

が、暫くすると住職の坊さんが、小林君の方を向いて、こんな事を云つた。

「もう少しすると、又一つ茶席が建ちます。」

小林君もこれには聊か驚いたらしい。

「又光悅會ですか」

「いいえ、今度は個人でございます。」

自分は忌々しいのを通り越して、へんな心もちになつた。一體光悅をどう思つてゐるのだか、

光悅寺をどう思つてゐるのだか、もう一つ序に鷹ケ峯をどう思つてゐるのだか、かうなると、到底自分には分らない。そんなに茶席が建てたければ、茶屋四郎次郎の邸跡や何かの麥畑でも、もつと買占めて、むやみに圍ひを並べたらよからう。さうしてその茶席の軒へ額でも提灯でもべた一面に懸けるが好い。さうすれば自分も始めから、わざわざ光悅寺などへやつて來はしない。さうとも。誰が來るものか。

後で外へ出たら、小林君が「好い時に來ました。この上茶席が建つたらどうもなりません」と云つた。さう思つて見れば確に好い時に來たのである。が、一つの茶席もない、更に好い時に來なかつたのは、返す返すも遺憾に違ひない。――自分は依然として佛頂面をしたがら、小林君と一しよに竹藪の後に立つてゐる寂しい光悅寺の門を出た。

竹

或雨あがりの晩に車に乘つて、京都の町を通つたら、暫くして車夫が、どこへつけますとか、どこへつけやはりますとか、何とか云つた。どこへつけるつて、宿へつけるのにきまつてゐるから、宿だよ、宿だよと桐油の後から、二度ばかり聲をかけた。車夫はその御宿がわかりませんと

云つて、往來のまん中に立ち止まつた儘、動かない。さう云はれて見ると、自分も急に當惑した。宿の名前は知つてゐるが、宿の町所は覺えてゐない。しかもその名前なるものが、甚平凡を極めてゐるのだから、それだけでは、いくら賢明な車夫にしても到底滿足に歸られなからう。困つたなと思つてゐると、車夫が桐油を外してこの邊ぢやおへんかと云ふ。提灯の明りで見ると、車の前には竹藪があつた。それが暗の中に萬竿の青をつらねて、重なり合つた葉が寒さうに濡れて光つてゐる。自分は大へんな所へ來たと思つたから、こんな田舍ぢやないよ、横町を二つばかり曲ると、四條の大橋へ出る所なんだと説明した。すると車夫が呆れた顏をして、ここも四條の近所どすがなと云つた。そこでへええ、さうかね、ぢやもう少し賑かな方へ行つて見てくれ、さうしたら分るだらうと、まあ一時を糊塗して置いた。所がその儘、車が動き出して、とつつきの横丁を左へ曲つたと思ふと、突然歌舞練場の前へ出てしまつたから奇體である。それも丁度都踊りの時分だつたから、兩側には祇園團子の赤い提灯が、行儀よく火を入れて並んでゐる。自分は始めてさつきの竹藪が、建仁寺だつたのに氣がついた。が、あの暗を拂つてゐる竹藪と、この陽氣な色町とが、向ひ合つてゐると云ふ事は、どう考へても、嘘のやうな氣がした。その後、宿へは無事に辿りついたが、當時の狐につままれたやうな心もちは、今日でもはつきり覺えてゐる。

……

それ以來自分が氣をつけて見ると、京都界隈にはどこへ行つても竹藪がある。どんな賑な町中でも、こればかりは決して油斷が出來ない。一つ家並を外れたと思ふと、すぐ竹藪が出現する。と思ふと、忽ち又町になる。殊に今云つた建仁寺の竹藪の如きは、その後も祇園を通りぬける度に、必ず棒喝の如く自分の眼前へとび出して來たものである。……

が、慣れて見ると、不思議に京都の竹は、少しも剛健な氣がしない。如何にも町慣れた、やさしい竹だと云ふ氣がする。根が吸ひ上げる水も、白粉の匂ひがしてゐさうだと云ふ氣がする。もう一つ形容すると、始めから琳派の畫工の筆に上る爲に、生えて來た竹だと云ふ氣がする。これなら町中へ生えてゐても、勿論少しも差支へはない。何なら祇園のまん中にでも、光悦の蒔繪にあるやうな太いやつが二三本、玉立してゐてくれたら、猶更以て結構だと思ふ。

裸根も　春雨竹の　青さかな

大阪へ行つて、龍村さんに何か書けと云はれた時、自分は京都の竹を思ひ出して、こんな句を書いた。それ程竹の多い京都の竹は、京都らしく出來上つてゐるのである。

舞妓

上木屋町のお茶屋で、酒を飲んでゐたら、そこにゐた藝者が一人、むやみにはしやぎ廻つた。それが自分には、どうも躁狂の下地らしい氣がした。少し氣味が悪くなつたから、その方の相手を小林君に一任して、隣にゐた舞妓の方を向くと、これはおとなしく、椿餅を食べてゐる。生際の白粉が薄くなつて、健康らしい皮膚が、黒く顔を出してゐる丈でも、こつちの方が遥に頼もしい氣がする。子供らしくつて可愛かつたから、體操を知つてゐるかいと訊いて見た。すると、體操は忘れたが、縄飛びなら覺えてゐると云ふ答へがあつた。ぢややつてお見せと云ひたかつたが、三味線の音がし出したから見合せた。尤もさう云つても、恐らくやりはしなかつたらう。

この三味線に合せて、小林君が大津繪のかへ唄を歌つた。何でも文句は半切に書いたのが内にしまつてあつて、それを見ながらでないと、理想的には歌へないのださうである。時々あぶなくなると、そこにゐた二三人の藝者が加勢をした。更にその藝者があぶなくなると、おまつさんなる老妓が加勢をした。その色々の聲が、大津繪を補綴して行く工合は、丁度張り交ぜの屏風でも見る時と、同じやうな心もちだつた。自分は可笑しくなつたから、途中であははと笑ひ出した。すると小林君もそれに釣りこまれて、とうとう自分で大津繪を笑殺してしまつた。後はおまつさんが獨りでしまひまで歌つた。

それから小林君が、舞妓に踊を所望した。おまつさんは、座敷が狭いから、唐紙を明けて、次

の間で踊ると好いと云ふ。そこで椿餅を食べてゐた舞妓が、素直に次の間へ行つて、京の四季を踊つた。遺憾ながらかう云ふ踊になると、自分にはうまいのだかまづいのだかわからない。が、花簪が傾いたり、だらりの帶が動いたり、舞扇が光つたりして、甚綺麗だつたから、鴨ロオスを突つきながら、面白がつて眺めてゐた。

しかし實を云ふと、面白がつて見てゐたのは、單に綺麗だつたからばかりではない。舞妓は風を引いてゐたと見えて、下を向くやうな所へ來ると、必ず恰好の好い鼻の奥で、春泥を踏むやうな音がかすかにした。それがひねつこびた敎坊の子供らしくなくつて、如何にも自然な好い心もちがした。自分は醉つてゐて、妙に嬉しかつたから、踊がすむと、その舞妓に羊羹だの椿餅だのをとつてやつた。もし舞妓にきまりの悪い思ひをさせる惧がなかつたなら、お前は丁度五度鼻洟を啜つたぜと、云つてやりたかつた位である。

間もなく躁狂の藝者が歸つたので、座敷は急に靜になつた。窓硝子の外を覗いて見ると、廣告の電燈の光が、川の水に映つてゐる。空は曇つてゐるので、東山もどこにあるのだか、判然しない。自分は反動的に氣がふさぎ出したから、小林君に又大津繪でも唄ひませんかと、云つた。小林君は脇息によりかかりながら、子供のやうに笑つて、いやいやをした。やはり大分醉がまはつてゐたのだらう。舞妓は椿餅にも飽きたと見えて、獨りで折鶴を拵へてゐる。おまつさんと外の

藝者とは、小さな聲で、誰かの噂か何かしてゐる。——自分は東京を出て以來、この派手なお茶屋の中で、始めて旅愁らしい、寂しい感情を味つた。

（大正七年六月）

惡魔

伴天連うるがんの眼には、外の人の見えないものまでも見えたさうである。殊に、人間を誘惑に來る地獄の惡魔の姿などは、ありありと形が見えたと云ふ、――うるがんの靑い瞳を見たものは、誰でもさう云ふ事を信じてゐたらしい。少くとも、南蠻寺の泥烏須如來を禮拜する奉敎人の間には、それが疑ふ餘地のない事實だつたと云ふ事である。

古寫本の傳ふる所によれば、うるがんは織田信長の前で、自分が京都の町で見た惡魔の容子を物語つた。それは人間の顏と蝙蝠の翼と山羊の脚とを備へた、奇怪な小さい動物である。うるがんはこの惡魔が、或は塔の九輪の上に手を拍つて踊り、或は四つ足門の屋根の下に日の光を恐れて蹲る恐しい姿を度々見た。いやそればかりではない。或時は山の法師の背にしがみつき、或時は内の女房の髮にぶら下つてゐるのを見たと云ふ。

しかしそれらの惡魔の中で、最も我々に興味のあるものは、なにがしの姫君の輿の上に、あぐ

らをかいてゐたと云ふそれであらう。古寫本の作者は、この惡魔の話なるものをうるがんの諷諭だと解してゐる。――信長が或時、その姫君に懸想して、たつて自分の意に從はせようとした。が、姫君も姫君の双親も、信長の望に應ずる事を喜ばない。そこでうるがんは姫君の爲に、言を惡魔に藉りて、信長の暴を諫めたのであらうと云ふのである。この解釋の當否は、元より今日に至つては、いづれとも決する事が容易でない。と同時に又我々にとつては、寧ろいづれにせよ差支へのない問題である。

うるがんは或日の夕、南蠻寺の門前で、その姫君の輿の上に、一匹の惡魔が坐つてゐるのを見た。が、この惡魔は外のそれとは違つて、玉のやうに美しい顏を持つてゐる。しかもこまねいた兩手と云ひ、うなだれた頭と云ひ、恰も何事かに深く思ひ惱んでゐるらしい。

うるがんは姫君の身を氣づかつた。双親と共に熱心な天主教の信者である姫君が、惡魔に魅入られてゐると云ふ事は、唯事ではないと思つたのである。そこでこの伴天連は、輿の側へ近づくと、忽尊い十字架の力によつて難なく惡魔を捕へてしまつた。さうしてそれを南蠻寺の内陣へ、襟がみをつかみながらつれて來た。

内陣には御主耶蘇基督の畫像の前に、蠟燭の火が煤ぶりながらともつてゐる。うるがんはその前に惡魔をひき据ゑて、何故それが姫君の輿の上に乘つてゐたか、嚴しく仔細を問ひただし

た。

「私はあの姫君を墮落させようと思ひました。が、それと同時に、墮落させたくないとも思ひました。あの淸らかな魂を見たものは、どうしてそれを地獄の火に穢す氣がするでせう。私はその魂をいやが上にも淸らかに曇りなくしたいと念じたのです。が、さうと思へば思ふ程、愈墮落させたいと云ふ心もちもして來ます。その二つの心もちの間に迷ひながら、私はあの輿の上で、しみじみ私たちの運命を考へて居りました。もしさうでなかつたとしたら、あなたの影を見るより先に、恐らく地の底へでも姿を消して、かう云ふ憂き目に遇ふ事は逃れてゐた事でせう。私たちは何時でもさうなのです。墮落させたくないもの程、愈墮落させたいのです。これ程不思議な悲しさが又と外にありませうか。私はこの悲しさを味ふ度に、昔見た天國の朗な光と、今見てゐる地獄のくら暗とが、私の小さな胸の中で一つになつてゐるやうな氣がします。どうかさう云ふ私を憐んで下さい。私は寂しくつて仕方がありません。」

美しい顏をした惡魔は、かう云つて、涙を流した。……

古寫本の傳說は、この惡魔のなり行きを詳にしてゐない。が、それは我々に何の關りがあらう。我々はこれを讀んだ時に、唯かう呼びかけたいやうな心もちを感じさへすれば好いのである。

……

うるがんよ。悪魔と共に我々を憐んでくれ。我々にも亦、それと同じやうな悲しさがある。

（大正七年六月）

窓

――澤木梢氏に――

おれの家の二階の窓は、丁度向うの家の二階の窓と向ひ合ふやうになつてゐる。向うの家の二階の窓には、百合や薔薇の鉢植が行儀よく幾つも並んでゐる。が、その後には黄いろい窓掛が大抵重さうに下つてゐるから、部屋の中の主人の姿は、未だ一度も見た事がない。おれの家の二階の窓際には、古ぼけた肱掛椅子が置いてある。おれは毎日その肱掛椅子へ腰を下して、ぼんやり往來の人音を聞いてゐる。

いつ何時おれの所へも、客が來ないものでもない。おれの家の玄關には、ちやんと電鈴がとりつけてある。今にもあの電鈴の愉快な音が、勢よく家中に鳴り渡つたら、おれはこの肱掛椅子から立上つて、早速遠來の珍客を迎へる爲に、兩腕を大きくひろげた儘、戸口の方へ歩いて行かう。

おれは時々こんな空想を浮べながら、ぼんやり往來の人音を聞いてゐる。が、いつまでたつても、おれの所へは訪問に來る客がない。おれの部屋の中には鏡にうつるおれ自身ばかりが、いつ

もおれの相手を勸めてゐる。

それが長い長い間の事であつた。

その内に或夕方、ふとおれが向うの二階の窓を見ると、黄いろい窓掛を後にして、私窩子のやうな女が立つてゐる。どうも見た所では混血兒か何からしい。頬紅をさして、目ぶちを黒くぬつて、絹のキモノをひつかけて、細い金の耳環をぶら下げてゐる。それがおれの顔を見ると、媚の多い眼を擧げて、慇懃におれへ會釋をした。

おれは何年にも人に會つた事がない。おれの部屋の中には、鏡にうつるおれ自身ばかりが、いつもおれの相手を勸めてゐる。だからこの私窩子のやうな女が會釋をした時、おれは相手を卑しむより先に、こちらも眼で笑ひながら、默禮を返さずにはゐられなかつた。

それから毎日夕方になると、必ず混血兒の女は向うの窓の前へ立つて、下品な嬌態をつくりながら、慇懃におれへ會釋をする。時によると鉢植の薔薇や百合の花を折つて、往來越しにこちらの窓へ投げてよこす事もある。

するとおれもいつの間にか、古ぼけた肱掛椅子に腰を下して、往來の人音を聞く事が懶いやうになり始めた。いくらおれが待ち暮した所で、客は永久に來ないかも知れない。おれはあまりに長い間、鏡にうつるおれ自身の相手を勸めてゐたやうな氣がする。もう遠來の客ばかり待つてゐ

るのは止めにしよう。

そこであの私窩子のやうな女が會釋をすると、おれの方でも必ず會釋をする。

それが又長い長い間の事であつた。

所が或朝、おれの所へ來た手紙を見ると、折角おれを尋ねたが、いくら電鈴の鈕を押しても、誰一人返事をしなかつたから、おれに會ふ事もやむを得ず斷念をしたと書いてある。おれは昨夜あの混血兒の女が拋りこんだ、薔薇や百合の花を踏みながら、わざわざ玄關まで下りて行つて、電鈴の具合を調べて見た。すると知らない間に電鈴の針金が、錆びたせゐか、誰かの惡戲か、二つに途中から切れてゐる。おれの心は重くなつた。おれがあの黃いろい窓掛の後に住んでゐる私窩子のやうな女を知らずにゐたら、おれの待ちに待つてゐた客の一人は、とうにこの電鈴の愉快な響を、おれの耳へ傳へたのに相違あるまい。

おれは靜に又二階へ行つて、窓際の肱掛椅子に腰を下した。

夕方になると、又向うの家の二階の窓には、絹のキモノを着た女が現れて、下品な嬌態をつくりながら、慇懃におれへ會釋をする。が、おれはもうその會釋には答へない。その代り人氣のない薄明りの往來を眺めながら、いつかはおれの戸口へ立つかも知れない遠來の客を待つてゐる。前のやうに寂しく。

（大正八年二月）

着物

こんな夢を見た。

何でも料理屋か何からしい。廣い座敷に一ぱいに大ぜい人が坐つてゐる。それが皆思ひ思ひに洋服や和服を着用してゐる。

着用してゐるばかりぢやない。互に他人の着物を眺めては、勝手な品評を試みてゐる。

「君のフロツクは舊式だね。自然主義時代の遺物ぢやないか。」

「その結城は傑作だよ。何とも云へない人間味がある。」

「何だい。君の御召しの羽織は、全然心の動きが見えないぢやないか。」

「あの紺サアヂの背廣を見給へ。宛然たるペツテイイ・ブルジョアだから。」

「おや、君が落語家のやうな帶をしめるのには驚いた。」

「やつぱり君が大島を着てゐると、山の手の坊ちやんと云ふ格だね。」

こんな事を盛に云ひ合つてゐる。

すると一番末席に、妙な痩せ男のゐるのが見えた。その男は古風な漆紋のついた、如何はしい黄びらを着用してゐる。この着物がどうもさつきから、散々槍玉に擧げられてゐるらしい。現に今も年の若い、髪を長くした先生が、

「君の着物は不相變遊んでゐるぢやないか」と喝破した。

その先生はどう云ふ氣か、ドミニク派の僧侶じみた白い法服を着用してゐる。何でもこんな着物はバルザツクが、仕事をする時に着てゐたやうだ。尤も着手はバルザツク程、脊も幅もないものだから、裾が大分餘つてゐる。

が、痩せ男は苦笑したぎり、やはり默然と坐つてゐる。

「君は始終同じ着物を着てゐるから話せないよ。」

これは銘仙だか大島だか判然しない着物を着た、やはり年少の豪傑が拋りつけた評語である。が、豪傑自身の着物も、餘程長い間着てゐると見えて、襟垢がべつとり食附いてゐる。

それでも黄びらを着た男は、何とも言葉を返さずにゐる。どうもその容子を見ると、よくよく意久地のない代物らしい。

所が三度目には肩幅の廣い、縞の粗い背廣を着た男が、にやりにやり笑ひながら、半ば同情の

ある評語を下した。

「君は何故この前の着物を着ないのだい。それぢや又逆戻りをした譯ぢやないか。しかし黄びらも似合はなくはないよ。——諸君、この男も一度は着換へをして出て來た事を思ひ出してやり給へ。さうして今後も着換へをするやうに、鞭撻の勞を執つてくれ給へ。」

大ぜいの中には「ヒイア、ヒイア」と聲援を與へた向きもある。「もつと手嚴しくやれ、仲間褒めをしてはいかん」と怒號する向きもある。

瘦せ男は頭を掻きながら、匆々この座敷を退却した。さうして風通しの惡るさうな、場末の二階家へ歸つて來た。

家の中は蟲干のやうに階上にも階下にも、いろいろな着物が吊り下げてある。何か蛇の鱗のやうに光る物があると思つたら、それは戰爭の時に使ふ鎖帷子や鎧だつた。

瘦せ男はこの着物の中に、傲慢不遜なあぐらを掻くと、恬然と煙草をふかし始めた。

その時何か云つたやうに思ふが、生憎眼のさめた今は覺えてゐない。折角夢の話を書きながら、その一句を忘れてしまつた事は、返す返すも遺憾である。

東京小品

鏡

自分は無暗に書物ばかり積んである書齋の中に蹲つて、寂しい春の松の内を甚だらしなく消光してゐた。本をひろげて見たり、好い加減な文章を書いて見たり、それにも飽きると出たらめな俳句を作つて見たり――要するにまあ太平の逸民らしく、のんべんだらりと日を暮してゐたのである。すると或日久しぶりに、よその奥さんが子供をつれて、年始旁々遊びに來た。この奥さんは昔から若くつてゐたいと云ふ事を、口癖のやうにしてゐる人だつた。だからつれてゐる女の子がもう五つになると云ふにも關らず、まだ娘の時分の美しさを昨日のやうに保存してゐた。

その日自分の書齋には、梅の花が活けてあつた。そこで我々は梅の話をした。が、千枝ちやんと云ふその女の子は、この間中書齋の額や掛物を上眼でぢろぢろ眺めながら、退屈さうに側に坐つてゐた。

暫くして自分は千枝ちやんが可哀さうになつたから、奥さんに「もうあつちへ行つて、母とでも話して御出でなさい」と云つた。母なら奥さんと話しながら、しかも子供を退屈させない丈の手腕があると思つたからである。すると奥さんは懐から鏡を出して、それを千枝ちやんに渡しながら「この子はかうやつて置きさへすれば、決して退屈しないんです」と云つた。

何故だらうと思つて聞いて見ると、この奥さんの良人が逗子の別荘に病を養つてゐた時分、奥さんは千枝ちやんをつれて、一週間に二三度宛東京逗子間を往復したが、千枝ちやんは汽車の中でその度に退屈し切つてしまふ。のみならず、その退屈を紛らしたい一心で、勝手な悪戯をして仕方がない。現に或時はよその御隠居様をつかまへて「あなた、佛蘭西語を知つていらつしやる」などとんでもない事を尋ねたりした。そこで奥さんも繪本を渡したり、ハモニカをあてがつたり、いろいろ退屈させない心配をしたが、とうとうしまひに懐鏡を持たせて置くと、意外にも道中おとなしく坐つてゐる事實を發見した。千枝ちやんはその鏡を覗きこんで、白粉を直したり、髪を掻いたり、或は又わざと顔をしかめて見たり、鏡の中の自分を相手にして、何時までも遊んでゐるからである。

奥さんはかう鏡を渡した因縁を説明して、「やつぱり子供ですわね。鏡さへ見てゐれば、それでもう何も忘れてゐられるんですから。」とつけ加へた。

自分は刹那の間、この奥さんに輕い惡意を働かせた。さうして思はず笑ひながら、こんな事を云つて冷評した。

「あなただつて鏡さへ見てゐれば、それでもう何も忘れてゐられるんぢやありませんか。千枝ちやんと違ふのは、退屈なのが汽車の中と世の中だけの差別ですよ。」

下足札

これも或松の内の事である。Hと云ふ若い亞米利加人が自分の家へ遊びに來て、いきなりポケットから下足札を一枚出すと、「何だかわかるか」と自分に問ひかけた。下足札はまだ木の匂がする程新しい板の面に、俗惡な太い字で「雪の十七番」と書いてある。自分はその書體を見ると、何故か兩國の橋の袂へ店を出してゐる甘酒屋の赤い荷を思ひ出した。が、元より「雪の十七番」の因緣なぞは心得てゐる筈がなかつた。だからこの蒟蒻問答の雲水めいた相手の顏を眺めながら、「わからないよ」と簡單な返事をした。するとHは鼻目鏡の後から妙な瞬きを一つ送りながら、急ににやにや笑ひ出して、

「これはね。或藝者の記念品なんだ。」

「へへえ、記念品にしちや又、妙なものを貰つたもんだな。」

自分たちの間には、正月の膳が並んでゐた。Ｈはちよいと顏をしかめながら、屠蘇の盃へ口をあてて、それから吸物の椀を持つた儘、娓々としてその下足札の因緣を辯じ出した。――何でもそれによると、Ｈの教師をしてゐる學校が昨日赤坂の或御茶屋で新年會を催したのださうである。日本に來て間もないＨは、まだ藝者に愛嬌を賣るだけの修業も積んでゐなかつたから、唯出て來る料理を片つぱしから平げて、差される猪口を片つぱしから飲み干してゐた。するとそこにゐた十人ばかりの藝者の中に、始終彼の方へ秋波を送る女が一人あつた。日本の女は踝から下を除いて悉く美しいと云ふＨの事だから、勿論この藝者も彼の眼には美人として映じたのに相違ない。そこで彼も牛飲馬食する傍には時々そつとその女の方を眺めてゐた。

しかし日本語の通じないＨにも、日本酒は遠慮なく作用する。彼は一時間ばかりたつ中に、文字通り泥醉した。その結果、殆ど座に堪へられなくなつたから、ふらふらする足を踏みしめてそつと障子の外へ出た。外には閑靜な中庭が石燈籠に火を入れて、ひつそりと竹の暗をつくつてゐる。Ｈは朦朧たる醉眼にこの景色を眺めると、如何にも日本らしい好い心もちに浸る事が出來た。が、この日本情調が彼のエキゾテイシズムを滿足させたのは、ほんの一瞬間の事だつたらしい。何故と云ふと彼が廊下へ出るか出ないのに、後を追つてするすると裾を引いて來た藝者の一人が、

突然彼の頸へ抱きついたからである。さうして彼の酒臭い脣へ潔い接吻をした。勿論それはさつきから、彼に秋波を送つてゐる藝者だつた。彼は大に嬉しかつたから、兩手でしつかりその藝者を抱いた。

ここまでは萬事が頗る理想的に發展したが、遺憾ながら抱くと同時に、急に胸がむかついて來て、Hはその儘その廊下へ甚だ尾籠ながら嘔吐を吐いてしまつた。しかしその瞬間に彼の鼓膜は「私はX子と云ふのよ。今度御獨りでいらしつた時、呼んで頂戴」と云ふ宛轉たる嬌聲を捕へる事が出來た。さうしてそれを耳にすると共に、彼は恰も天使の樂聲を聞いた聖徒のやうに昏々として意識を失つてしまつたのである。

Hは翌日の午前十時頃になつて、やつと正氣に返る事が出來た。彼はその御茶屋の一室で厚い絹布の夜具に包まれて、横になつてゐる彼自身を見出した時、すべてが恰も一世紀以前の出來事の如く感ぜられた。が、その中でも自分に接吻した藝者の姿ばかりは歴々として眼底に浮んで來た。今夜にもここへ來て、あの藝者に口をかけたら、きつと何を措いても飛んで來るのに違ひない。彼はさう思つて、勢ひよく床の中から躍り出た。が、酒に洗はれた彼の頭腦には、どうしてもその藝者の名が浮んで來ない。名前もわからない藝者に口がかけられないのは、まだ日本の土を踏んで間もない彼と雖も明白である。彼は床の上に坐つた儘、着換をする元氣も失つて、悵然

と徒らに長い手足を見廻した。――

「だから、その晩の下足札を一枚貰つて來たんだ。これだつてあの藝者の記念品にや違ひない。」

Hはかう云つて、吸物椀を下に置くと、松の内にも似合はしくない、寂しさうな顔をしながら、仔細らしく鼻眼鏡をかけ直した。

漱石山房の秋

夜寒の細い往來を爪先上りに上つて行くと、古ぼけた板屋根の門の前へ出る。門には電燈がともつてゐるが、柱に掲げた標札の如きは、殆ど有無さへも判然しない。門をくぐると砂利が敷いてあつて、その又砂利の上には庭樹の落葉が紛々として亂れてゐる。

砂利と落葉とを踏んで玄關へ來ると、これも亦古ぼけた格子戸の外は、壁と云はず壁板と云はず、悉く蔦に蔽はれてゐる。だから案内を請はうと思つたら、まづその蔦の枯葉をがさつかせて、呼鈴の鈕を探さねばならぬ。それでもやつと呼鈴を押すと、明りのさしてゐる障子が開いて、束髪に結つた女中が一人、すぐに格子戸の掛け金を外してくれる。玄關の東側には廊下があり、その廊下の欄干の外には、冬を知らない木賊の色が一面に庭を埋めてゐるが、客間の硝子戸を洩れ

る電燈の光も、今は其處までは照らしてゐない。いや、その光がさしてゐるだけに、向うの軒先に吊した風鐸の影も、反つて濃くなつた宵闇の中に隱されてゐる位である。

硝子戸から客間を覗いて見ると、雨漏りの痕と鼠の食つた穴とが、白い紙張りの天井に斑々とまだ殘つてゐる。が、十疊の座敷には、赤い五羽鶴の毯が敷いてあるから、疊の古びだけは分明でない。この客間の西側(玄關寄り)には、更紗の唐紙が二枚あつて、その一枚の上に古色を帶びた壁懸けが一つ下つてゐる。麻の地に黃色に百合のやうな花を繡つたのは、津田青楓氏か何かの圖案らしい。この唐紙の左右の壁際には、餘り上等でない硝子戸の本箱があつて、その何段かの棚の上にはぎつしり洋書が詰まつてゐる。それから廊下に接した南側には、殺風景な鐵格子の西洋窓の前に大きな紫檀の机を据ゑて、その上に硯や筆立てが、紙絹の類や法帖と一しよに、存外行儀よく並べてある。その窓を剩した南側の壁と向うの北側の壁とには、殆ど軸の挂かつてゐなかつた事がない。藏澤の墨竹が黃興の「文章千古事」と挨拶をしてゐる事もある。木庵の「花開萬國春」が吳昌碩の木蓮と鉢合せをしてゐる事もある。が、客間を飾つてゐる書畫は獨りこれらの軸ばかりではない。西側の壁には安井曾太郎氏の油繪の風景畫が、東側の壁には齋藤與里氏の油繪の艸花が、さうして又北側の壁には明月禪師の無絃琴と云ふ艸書の横物が、いづれも額になつて挂かつてゐる。その額の下や軸の前に、或は銅瓶に梅もどきが、或は青磁に菊の花がその時々

で投げこんであるのは、無論奥さんの風流に相違あるまい。

もし先客がなかつたなら、この客間を覗いた眼を更に次の間へ轉じなければならぬ。次の間と云つても客間の東側には、唐紙も何もないのだから、實は一つ座敷も同じ事である。唯此處は板敷で、中央に擴げた方一間あまりの古絨毯の外には、一枚の疊も敷いてはない。さうして東と北と二方の壁には、新古和漢洋の書物を詰めた、無暗に大きな書棚が並んでゐる。書物はそれでも詰まり切らないのか、ぢかに下の床の上へ積んである數も少くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも、軸だの法帖だの畫集だのが雜然と堆く盛り上つてゐる。だから中央に敷いた古絨毯も、四方に並べてある書物のおかげで、派手なるべき赤い色が僅ばかりしか見えてゐない。しかもそのまん中には小さな紫檀の机があつて、その又机の向うには座蒲團が二枚重ねてある。銅印が一つ、石印が二つ三つ、ペン皿に代へた竹の茶箕、その中の萬年筆、それから玉の文鎮を置いた一綴りの原稿用紙――机の上にはこの外に老眼鏡が載せてある事も珍しくない。その眞上には電燈が煌々と光を放つてゐる。傍には瀬戸火鉢の鐵瓶が蟲の啼くやうに沸つてゐる。もし夜寒が甚しければ、少し離れた瓦斯煖爐にも赤々と火が動いてゐる。さうしてその机の後、二枚重ねた座蒲團の上には、何處か獅子を想はせる、脊の低い半白の老人が、或は手紙の筆を走らせたり、或は唐本の詩集を飜したりしながら、端然と獨り坐つてゐる。……

漱石山房の秋の夜は、かう云ふ蕭條たるものであつた。

尾生の信

尾生は橋の下に佇んで、さつきから女の來るのを待つてゐる。

見上げると、高い石の橋欄には、蔦蘿が半ば這ひかかつて、時々その間を通りすぎる往來の人の白衣の裾が、鮮かな入日に照らされながら、悠々と風に吹かれて行く。が、女は未だに來ない。

尾生はそつと口笛を鳴しながら、氣輕く橋の下の洲を見渡した。

橋の下の黄泥の洲は、二坪ばかりの廣さを剩して、すぐに水と續いてゐる。水際の蘆の間には、大方蟹の棲家であらう、いくつも圓い穴があつて、其處へ波が當る度に、たぶりと云ふかすかな音が聞えた。が、女は未だに來ない。

尾生は稍待遠しさうに水際まで歩を移して、舟一艘通らない靜な川筋を眺めまはした。

川筋には青い蘆が、隙間もなくひしひしと生えてゐる。のみならずその蘆の間には、所々に川楊が、こんもりと圓く茂つてゐる。だからその間を縫ふ水の面も、川幅の割には廣く見えない。

唯、帶程の澄んだ水が、雲母のやうな雲の影をたつた一つ鍍金しながら、ひつそりと蘆の中にうねつてゐる。が、女は未だに來ない。

尾生は水際から歩をめぐらせて、今度は廣くもない洲の上を、あちらこちらと歩きながら、徐に暮色を加へて行く、あたりの靜かさに耳を傾けた。

橋の上には暫くの間、行人の跡を絕つたのであらう。沓の音も、蹄の音も、或は又車の音も、其處からはもう聞えて來ない。風の音、蘆の音、水の音、――それから何處かでけたたましく、蒼鷺の啼く聲がした。と思つて立止ると、何時か潮がさし出したと見えて、黃泥を洗ふ水の色が、さつきよりは間近に光つてゐる。が、女は未だに來ない。

尾生は險しく眉をひそめながら、橋の下のうす暗い洲を、愈足早に歩き始めた。その內に川の水は、一寸づつ、一尺づつ、次第に洲の上へ上つて來る。同時に又川から立昇る藻の匂や水の匂も、冷たく肌にまつはり出した。見上げると、もう橋の上には鮮かな入日の光が消えて、唯、石の橋欄ばかりが、ほのかに靑んだ暮方の空を、黑々と正しく切り拔いてゐる。が、女は未だに來ない。

尾生はとうとう立ちすくんだ。

川の水はもう沓を濡しながら、鋼鐵よりも冷やかな光を湛へて、漫々と橋の下に廣がつてゐる。

すると、膝も、腹も、胸も、恐らくは頃刻を出ない内に、この酷薄な滿潮の水に隱されてしまふのに相違あるまい。いや、さう云ふ内にも水嵩は益高くなつて、今ではとうとう兩脛さへも、川波の下に沒してしまつた。が、女は未だに來ない。

尾生は水の中に立つた儘、まだ一縷の望を便りに、何度も橋の空へ眼をやつた。

腹を浸した水の上には、とうに蒼茫たる暮色が立ち罩めて、遠近に茂つた蘆や柳も、寂しい葉ずれの音ばかりを、ぼんやりした靄の中から送つて來る。と、尾生の鼻を掠めて、鱸らしい魚が一匹、ひらりと白い腹を飜した。その魚の躍つた空にも、疎ながらもう星の光が見えて、蔦蘿のからんだ橋欄の形さへ、いち早い宵暗の中に紛れてゐる。が、女は未だに來ない。……

夜半、月の光が一川の蘆と柳とに溢れた時、川の水と微風とは靜に囁き交しながら、橋の下の尾生の死骸を、やさしく海の方へ運んで行つた。が、尾生の魂は、寂しい天心の月の光に、思ひ憧れたせゐかも知れない。ひそかに死骸を拔け出すと、ほのかに明るんだ空の向うへ、まるで水の匂や藻の匂が音もなく川から立ち昇るやうに、うらうらと高く昇つてしまつた。……

それから幾千年かを隔てた後、この魂は無數の流轉を閲して、又生を人間に託さなければなら

なくなつた。それがかう云ふ私に宿つてゐる魂なのである。だから私は現代に生れはしたが、何一つ意味のある仕事が出來ない。晝も夜も漫然と夢みがちな生活を送りながら、唯、何か來るべき不可思議なものばかりを待つてゐる。丁度あの尾生が薄暮の橋の下で、永久に來ない戀人を何時までも待ち暮したやうに。

（大正八年十二月）

沼

おれは沼のほとりを歩いてゐる。

晝か、夜か、それもおれにはわからない。唯、どこかで蒼鷺の啼く聲がしたと思つたら、蔦葛に掩はれた木々の梢に、薄明りの仄めく空が見えた。

沼にはおれの丈よりも高い蘆が、ひつそりと水面をとざしてゐる。水も動かない。藻も動かない。水の底に棲んでゐる魚も――魚がこの沼に棲んでゐるであらうか。

晝か、夜か、それもおれにはわからない。おれはこの五六日、この沼のほとりばかり歩いてゐた。寒い朝日の光と一しよに、水の匂や蘆の匂がおれの體を包んだ事もある。と思ふと又枝蛙の聲が、蔦葛に蔽はれた木々の梢から、一つ一つかすかな星を呼びさました覺えもあつた。

おれは沼のほとりを歩いてゐる。

沼にはおれの丈よりも高い蘆が、ひつそりと水面をとざしてゐる。おれは遠い昔から、その蘆

の茂つた向うに、不思議な世界のある事を知つてゐた。いや、今でもおれの耳には、Invitation au Voyage の曲が、絶え絶えに其處から漂つて來る。さう云へば水の匂や蘆の匂と一しよに、あの「スマトラの忘れな艸の花」も、蜜のやうな甘い匂を送つて來はしないであらうか。

晝か、夜か、それもおれにはわからない。おれはこの五六日、その不思議な世界に憧がれて、蔦葛に掩はれた木々の間を、夢現のやうに歩いてゐた。が、此處に待つてゐても、唯蘆と水とばかりがひつそりと擴がつてゐる以上、おれは進んで沼の中へ、あの「スマトラの忘れな艸の花」を探しに行かなければならぬ。見れば幸、蘆の中から半ば沼へさし出てゐる、年經た柳が一株ある。あすこから沼へ飛びこみさへすれば、造作なく水の底にある世界へ行かれるのに違ひない。

おれはとうとうその柳の上から、思ひ切つて沼へ身を投げた。

おれの丈よりも高い蘆が、その拍子に何かしやべり立てた。水が呟く。藻が身ぶるひをする。あの蔦葛に掩はれた、枝蛙の鳴くあたりの木々さへ、一時はさも心配さうに吐息を洩らし合つたらしい。おれは石のやうに水底へ沈みながら、數限りもない青い焔が、目まぐるしくおれの身のまはりに飛びちがふやうな心もちがした。

晝か、夜か、それもおれにはわからない。

おれの死骸は沼の底の滑な泥に横はつてゐる。死骸の周圍にはどこを見ても、まつ青な水があ

るばかりであつた。この水の下にこそ不思議な世界があると思つたのは、やはりおれの迷だつたのであらうか。事によると Invitation au Voyage の曲も、この沼の精が悪戯に、おれの耳を欺してゐたのかも知れない。が、さう思つてゐる内に、何やら細い茎が一すぢ、おれの死骸の口の中から、すらすらと長く伸び始めた。さうしてそれが頭の上の水面へやつと屆いたと思ふと、忽ち白い睡蓮の花が、丈の高い蘆に圍まれた、藻の匂のする沼の中に、的皪と鮮な蕾を破つた。

これがおれの憧れてゐた、不思議な世界だつたのだな。——おれの死骸はかう思ひながら、その玉のやうな睡蓮の花を何時までもぢつと仰ぎ見てゐた。

（大正九年三月）

東洋の秋

おれは日比谷公園を歩いてゐた。

空には薄雲が重なり合つて、地平に近い樹々の上だけ、僅にほの青い色を殘してゐる。そのせゐか秋の木の間の路は、まだ夕暮が來ない内に、砂も、石も、枯草も、しつとりと濡れてゐるらしい。いや、路の右左に枝をさしかはせた篠懸にも、露に洗はれたやうな薄明りが、やはり黄色い葉の一枚毎にかすかな陰影を交へながら、懶げに漂つてゐるのである。

おれは籐の杖を小脇にして、火の消えた葉卷を啣へながら、別に何處へ行かうと云ふ當もなく、寂しい散歩を續けてゐた。

そのうそ寒い路の上には、おれ以外に誰も歩いてゐない。路をさし挾んだ篠懸も、ひつそりと黄色い葉を垂らしてゐる。仄かに霧の懸つてゐる行く手の樹々の間からは、唯、噴水のしぶく音が、百年の昔も變らないやうに、小止みないさざめきを送つて來る。その上今日はどう云ふ譯か、

公園の外の町の音も、まるで風の落ちた海の如く、蕭條とした木立の向うに靜まり返つてしまつたらしい。――と思ふと鋭い鶴の聲が、しめやかな噴水の響を壓して、遠い林の奥の池から、一二度高く空へ擧つた。

おれは散歩を續けながらも、云ひやうのない疲勞と倦怠とが、重たくおれの心の上にのしかかつてゐるのを感じてゐた。寸刻も休みない賣文生活！ おれはこの儘たつた一人、悩ましいおれの創作力の空に、空しく黄昏の近づくのを待つてゐなければならないのであらうか。

さう云ふ内にこの公園にも、次第に黄昏が近づいて來た。おれの行く路の右左には、苔の匂や落葉の匂が、濕つた土の匂と一しよに、しつとりと冷たく動いてゐる。その中にうす甘い匂のするのは、人知れず木の間に腐つて行く花や果物の香りかも知れない。と思へば路ばたの水たまりの中にも、誰が摘んで捨てたのか、青ざめた薔薇の花が一つ、土にもまみれずに匂つてゐた。もしこの秋の匂の中に、困憊を重ねたおれ自身を名殘りなく浸す事が出來たら――

おれは思はず足を止めた。

おれの行く手には二人の男が、靜に竹箒を動かしながら、路上に明く散り亂れた篠懸の落葉を掃いてゐる。その鳥の巣のやうな髪と云ひ、殆ど肌も蔽はない薄墨色の破れ衣と云ひ、或は又獸にも紛ひさうな手足の爪の長さと云ひ、云ふまでもなく二人とも、この公園の掃除をする人夫の

類とは思はれない。のみならず更に不思議な事には、おれが立つて見てゐる間に、何處からか飛んで來た鴉が二三羽、さつと大きな輪を描くと、默然と箒を使つてゐる二人の肩や頭の上へ、先を爭つて舞ひ下つた。が、二人は依然として、砂上に秋を撒き散らした篠懸の落葉を掃いてゐる。おれは徐に踵を返して、火の消えた葉卷を啣へながら、寂しい篠懸の間の路を元來た方へ歩き出した。

が、おれの心の中には、今までの疲勞と倦怠との代りに、何時か靜な悅びがしつとりと薄明く溢れてゐた。あの二人が死んだと思つたのは、憐むべきおれの迷ひたるに過ぎない。寒山拾得は生きてゐる。永劫の流轉を閱しながらも、今日猶この公園の篠懸の落葉を掃いてゐる。あの二人が生きてゐる限り、懷しい古東洋の秋の夢は、まだ全く東京の町から消え去つてゐないのに違ひない。賣文生活に疲れたおれをよみ返らせてくれる秋の夢は。

おれは篠の杖を小脇にした儘、氣輕く口笛を吹き鳴らして、篠懸の葉ばかりきらびやかな日比谷公園の門を出た。「寒山拾得は生きてゐる」と、口の內に獨り呟きながら。

（大正九年三月）

動物園

象

象よ。キツプリングは昔お前の先祖が、鰐に鼻を啣へられたものだから、未だにお前まで長い鼻をぶら下げて歩いてゐると云つた。が、おれにはどうしても、あいつの云ふ事が信用出來ない。お前の先祖は佛陀御在世の時分、きつとガンヂス河の燈心草の中で、晝寢か何かしてゐたのだ。すると河の泥に隱れてゐた、途方もなく大きな蛭が、その頃はまだ短かつた、お前の先祖の鼻の先へ、吸ひついてしまつたのに違ひない。さもなければお前の鼻が、これ程大きな蛭のやうに、伸びたり縮んだりはしないだらう。象よ。お前は印度の名門の生れだ。どうかおれの云つた通り、あのキツプリングの說などは口から出放題の大法螺だと、先祖の寃を雪ぐ爲に、一度でも好いからその鼻をあげて、喇叭のやうな聲を轟かせてくれ。

鸛の鳥

あの頸をさ、襟飾のやうに結んでしまつたら、一體あいつはどうしてほどく氣なんだらう。

駱駝

お爺さん。もう萬年青の御手入はおすみですか。ではまあ一服おやりなさい。おや、あの菖蒲革の煙草入れは、どこへ忘れて御出でなすつた？

虎

虎よ。お前はコスモポリタンだ。豐干禪師を乘せたお前。和唐内に捕れたお前。それからウイルヤム・ブレエクの有名な詩に歌はれたお前。虎よ。お前は最大のコスモポリタンだ。

家鴨

子供が黒板へ白墨で悪戯に書いた算用數字。2、2、2、2、2、2。

白孔雀

これは年をとつた貴夫人だ。お眼が少し赤く爛れていらつしやる。鼈甲の柄のついた眼鏡を持

つて、一々見物人を御覧になれば好い。

大蝙蝠

お前の翼は仁木彈正の髪だ。面明りの蠟燭位は、一煽りにも消し兼ねない。さうしたら、鼻の尖つた、眼張りの強い、脣をへの字に曲げてゐる顏が、うす暗い雲母摺を後にして、愈氣味惡く浮き上るだらう。落款は東洲齋寫樂……

カンガルウ

腹の袋の中には子供が一匹はひつてゐる。あれを出してしまつても、まだ英吉利の國旗か何かが、手品のやうに出て來はしないか。

鸚哥

お前は古い唐畫の桃の枝に、ぢつと止つてゐるが好い。うつかり羽搏きでもしようものなら、體の繪の具が剝げてしまふから。

猿よ。お前は一體泣いてゐるのか、それとも亦笑つてゐるのか。お前の顏は悲劇の面のやうで、同時に又喜劇の面のやうだ。おれの記憶は緣日の猿芝居へおれを連れて行く。櫻の釣板、張子の鐘、それからアセチリン瓦斯の神經質な光。お前は金紙の烏帽子をかぶつて、緋鹿子の振袖をひきずりながら、恐るべく皮肉な白拍子花子の役を勤めてゐる。おれの胸に始めて疑團が萌したのは、正にその白拍子たるお前の顏へ、偶然の一瞥を投げた時だ。お前は一體泣いてゐるのか。それとも亦笑つてゐるのか。猿よ。人間よりもより人間的な猿よ。おれはお前程巧妙なトラヂツク・コメディアンを見た事はない。——おれが心の中でかう呟くと、猿は突然身を躍らせて、おれの前の金網にぶら下りながら、癇高い聲で問ひ返した。「ではお前は？ え、お前のそのしかめ面は？」

山椒魚

おれがね、お前は一體何物だと、頭に向つて尋ねたら、私は山椒魚ですよと、尻尾がおれに返事をしたぜ。

鶴

縣下第一の旅館の玄關、芍藥と松とを生けた花瓶、伊藤博文の大字の額、それからお前たちつがひの剝製……

狐

ふて寢だな。この襟卷め。

鴛鴦

胡粉の雪の積つた柳、銀泥の黑く燒けた水、その上に浮んでゐる極彩色のお前たち夫婦、――お前たちの畫工は伊藤若冲だ。

鹿

この見事な刀掛には、葵の御紋散らしの大小でも恭しく掛けて置くが好い。

波斯猫

日の光、茉莉花の匂、黄色い絹のキモノ、Fleurs du Mal, それからお前の手ざはり。……

鸚鵡

鹿鳴館には今日も舞踏がある。提灯の光、白菊の花、お前はロテイと一しよに踊つた、美しい「みやうごにち」令嬢だ。

日本犬

造り物の柳に灯入りの月が出る。お前は唯遠くで啼いてゐれば好い。

南京鼠

上衣は白天鵞絨、眼は柘榴石、それから手袋は桃色繻子。——お前たちは皆可愛らしい、支那美人にそつくりだ。後宮の佳麗三千人と云ふと、おれは何時もお前たちが、重なり合つた樓閣の中に、巣を食つた所を想像する。そら、西施が芋の皮を噛じつてゐると、楊貴妃は一生懸命に車

をまはしてゐるぢやないか。

猩々

あの猩々の鼻の上には、金縁の Pince-nez がかかつてゐる。あれが君に見えるかい？　もし見えなければ、今日限り、詩を作る事はやめにし給へ。

鷺

祥瑞の江村は暮れかかつた。藍色の柳、藍色の橋、藍色の茅屋、藍色の水、藍色の漁人、藍色の蘆荻。――すべてが稍黒ずんだ藍色の底に沈んだ時、忽ち白々と舞ひ上るお前たち三羽の翼の色。――皿の外までも飛び出さなければ好いが。

河馬

擧す。梁の武帝、達磨大師に問ふ。如何か是佛法。磨云ふ。水中の河馬。

ペングイン

お前は落魄した給仕人だ。悲しさうなお前の眼の中には、以前勤めてゐたホテルの大食堂が、今も Aurora australis のやうに、輝かしい過去の幻を浮き上らせる事がありはしないか？

馬

凩の吹く町の角には、青銅のお前に跨つた、やはり青銅の宮殿下が、寒むさうな往來の老若男女を、揚々と見下して御出でになる。さうしてその宮殿下の、軍服を召した御胸には、恐れながら白い鴉の糞が、……

梟

Brocken山へ！　箒に跨つた婆さんが、赤い月のかかつた空へ、煙突から一文字に舞ひ上る。と、その後から一羽の梟が、――いや、これは婆さんの飼ひ猫が、何時の間にか翼を生やしたのかも知れない。

金魚

うす日の光がさして來ると、藻に立つた秋も目立つやうになつた。おれは、――所々鱗の剝げ

た金魚は、やがてはこの冷たい水の上に、屍を曝す事になるのかも知れない。しかしさう云ふ最後の日までは、やはり先の切れた尾を振りながら、あの洒落者のブラムメルのやうに、悠々と泳いでゐようと思ふ。

兎

今昔物語巻五、三獣行菩薩道兎焼身語と云ふ Jātaka の中に、こんなお前の肖像畫がある。――「兎は勵みの心を發して、……耳は高く瘖せにして、目は大きく前の足短く、尻の穴は大きく開いて、東西南北求め歩けども、更に求め得たるものなし……」

雀

これは南畫だ。蕭々と靡いた竹の上に、消えさうなお前が揚つてゐる。黑ずんだ印の字を讀んだら、大明方外之人としてあつた。

麝香獸

梅紅羅の軟簾の中に、今夜も獨り眠つてゐる、淫婦潘金蓮の妖しい夢。

毎晩廊下へ出して置く、臺の物の殘りがなくなるんですよ。獺が引いて行くんですつて。昨夜も舟で歸る御客が、提灯の火を消されました。

黑豹

お前は齒の美しい Black Mary だ。南京玉の首飾りや毛糸の肩掛を持つて行つてやつたら、さぞ喉をならして喜ぶだらう。

蒼鷺

何でも雨上りの葉柳の匂が、川面を蒸してゐる時だつた。お前はその柳の梢に、たつた一羽止まつてゐたが、「夕燒け、小燒け、あした天氣になあれ。」――そんな唄を謠つて通つた、子供の時のおれを覺えてゐるかい？

栗鼠

亞歐堂田善の銅版畫の森が、時代のついた薄明りの中に、太い枝と枝とを交はしてゐる。その枝の上に蹲つた、可笑しい程悲しいお前の眼つき……

鴉

「今晩は。」「今晩は。この竹藪は風が吹くと、騒々しいのに閉口します。」「ええ、その上月のある晩は、餘計何だか落着きませんよ。――時に隱亡堀は如何でした？」「隱亡堀ですか？あすこには今日も不相變、戸板に打ちつけた死骸がありました。」「ああ、あの女の死骸ですか。おや、あなたの嘴には、髮の毛が何本も下つてゐますよ。」

ジラフ

これは玩具だ。黄色い繪の具と黒い繪の具とが、まだ乾かずにべたべたしてゐる。尤も人間の子供の玩具には、ちつと大きすぎるかも知れない。さしづめあの小ましやくれた、幼兒基督の玩具には持つて來いだ。

金絲雀

理髪店の店さきには、朝日の光がさわやかに、萬年青の鉢を洗つてゐる。鋏の音、水の音、新聞紙を擴げる音、——その音の中に交じるのは、籠一ぱいに飛びまはる、お前たちの囀り聲、——誰だい、今親方に挨拶した新造は？

羊

或日おれは檻の羊に、いろいろな本を食はせてやつた。聖書、Une Vie, 唐詩選、——何でも羊は食つてしまふ。が、その中にたつた一つ、いくら鼻の先へ出してやつても、食はない本があると思つたら、それはおれの小說集だつた。覺えてゐろよ。綿細工め。

（大正九年九月）

LOS CAPRICHOS

笑は量的に分てば微笑哄笑の二種あり。質的に分てば嬉笑嘲笑苦笑の三種あり。……予が最も愛する笑は嬉笑嘲笑苦笑を兼ねたる、爆聲の如き哄笑なり。アウエルバツハの穴藏に愚昧の學生を弄らせたる、メフイストフエレエスの哄笑たり。

――カアル・エミリウス――

ユダ

逾越と云へる「種入れぬ麵包の祭」近づけり。祭司の長學者たち、如何にしてかイエスを殺さんと窺ふ。但民を畏れたり。偖悪魔十二の中のイスカリオテと稱ふるユダに憑きぬ。ユダ橄欖の林を歩める時、悪魔彼に云ひけるは、「イエスを祭司の長たちに賣せ。然すれば三十枚の銀子を得べ

し。」されどユダ耳を蔽ひ、林の外に走り去れり。後又イエルサレムの町をさまよへる時、惡魔彼に云ひけるは、「イエスを祭司の長たちに賣せ。然らずば爾もイエスと共に、必十字架に釘けらるべし。」されどユダ耳を蔽ひ、イエスのもとに走り去れり。イエス彼に云ひけるは、「ユダよ。我誠に爾を知る。爾は荒野の獅子よりも強し。但小羊の心を忘るる勿れ。」ユダ、イエスの言葉を悅べり。されどその意味を覺らざりき。逾越の祭來りし時、イエス弟子と共に食に就けり。惡魔三度ユダに云ひけるは、「イエスを祭司の長たちに賣せ。然すれば爾の名、イエスの名と共に傳はらん。イエスの名太陽よりも光あれば、爾の名黑暗よりも恐怖あらん。爾は天國の奴隸たらざるも、必地獄の王たるべし。バビロンの淫婦は爾の妃、七頭の毒龍は爾の馬、火と煙と硫黃とは汝が黑檀の寶座の前に、不斷の香煙を上らしめん。」ユダこの聲を聞きし時、目のあたりに地獄の莊嚴を見たり。イエス忽ちユダに一撮の食物を與へ、靜かに彼に云ひけるは、「爾が爲さんとする事は速かに爲せ。」ユダ一撮の食物を受け、直ちに出でたり。時既に夜なりき。ユダ祭司の長カヤパの前に至り、イエスを彼に賣さんと云へり。カヤパ駭きて云ひけるは、「爾は何物なるか、イエスの弟子か、はたイエスの師か。」そはユダの姿、額は嵐の空よりも黑み、眼は焰よりも輝きつつ、王者の如く振舞ひしが故なり。……

眼

——中華第一の名庖丁　張肅臣の談——

眼をね、今日は眼を御馳走しようと思つたのです。何の眼？　無論人間の眼をですよ。そりや眼を召上がらなければ、人間を召上つたとは云はれませんや。眼と云ふやつはうまいものですぜ。脂があつて、齒ぎれがよくつて、——え、何にする？　まあ、湯へ入れるんですね。丁度鳩の卵のやうに、白眼と黑眼とはつきりしたやつが、香茶か何かぶちこんだ中に、ふはふは浮いてゐやうと云ふんです。どうです？　惡くはありますまい。私なんぞは話してゐても、自然と唾氣がたまつて來ますぜ。そりや清湯燕窩だとか清湯鴿蛋だとかとは、比べものにも何にもなりませんや。所が今日その眼を拔いて見ると、——これにや私も驚きましたね。まるで使ひものにやならないんです。何、男か女か？　男ですよ。男も男も、髭の生えた、フロツク・コオトを着てゐる男ですがね。御覽なさい。此處に名刺があります。Herr Stuffendpuff.　ちつとは有名な男ですか？　成程ね、つまりその新聞や何かに、議論を書いてゐる人間なんでせう。そいつの眼玉がこれぢやありませんか？　そら、壁へ叩きつけても、容易な事ぢや破れませんや。驚いたでせう。二つとに

もこの通り入れ眼ですよ。硝子細工の入れ眼ですよ。

疲勞

雨を孕んだ風の中に、龍騎兵の士官を乘せた、アラビア種の白馬が一頭、喘ぎ喘ぎ走つて行つた。と思ふと銃聲が五六發、續けさまに街道の寂寞を破つた。その時白楊の並木の根がたに、尿をしやんだ一頭の犬は、これも其處へ來かかつた、仲間の尨犬に話しかけた。

「どうだい、あの白馬の疲れやうは？」

「莫迦々々しいなあ。馬ばかりが獸ぢやあるまいし、――」

「さうとも、僕等に乘つてくれれば、地球の極へも飛んで行くのだが、――」

二匹の犬はかう云ふが早いか、龍騎兵の士官でも乘せてゐるやうに、昂然と街道を走つて行つた。

魔女

魔女は箒に跨りながら、片々と空を飛んで行つた。

それを見たものが三人あつた。

一人は年をとつた月だつた。これは又かと云ふやうに、默々と塔の上にかかつてゐた。

もう一人は風見の鷄だつた。これはびつくりしたやうに、ぎいぎい桿の上に啼きまはつた。

最後の一人は大學教授 Dundergutz 先生だつた。これはその後熱心に、魔女が空を飛んで行つたのは、箒が魔女を飛ばせたのか、魔女が箒を飛ばせたものか、どちらかと云ふ事を研究し出した。

何でも先生は今日でも、やはり同じ大問題を研究し續けてゐるさうである。

魔女は箒に跨りながら、昨夜も大きな蝙蝠のやうに、片々と空を飛んで行つた。

遊び

崖に臨んだ岩の隙には、一株の羊齒が茂つてゐる。トムはその羊齒の葉の上に、さつきから一匹の大土蜘蛛と、必死の格闘を續けてゐる。何しろ評判の渾名通り、親指位しかない男だから、蜘蛛と戰ふのも容易ではない。蜘蛛は足を擴げた儘、まつしぐらにトムへ殺到する。トムはその

度に身をかはせては、咄嗟に蜘蛛の腹へ一撃を加へる。……

それが十分程續いた後、彼等は息も絶え絶えに、どちらも其處へゐすくまつてしまつた。

羊齒の生えた岩の下には、深い谷底が開いてゐる。一匹の毒龍はその谷底に、白馬へ跨つた聖ヂョオヂと、もう半日も戰つてゐる。何しろ相手の騎士の上には、天主の冥護が加つてゐるから、毒龍も容易に勝つ事は出來ない。毒龍は火を吐きかけ、吐きかけ、何度も馬の鞍へ跳り上る。が、何時でも龍の爪は、騎士の鎧に辷つてしまつた。聖ヂョオヂは槍を揮ひながら、縱横に馬を跳らせてゐる。輕快な蹄の音、花々しい槍の閃き、それから毒龍の炎の中に、紛々と靡いた兜の亂れ毛、……

トムは遠い崖の下に、勇ましい聖ヂョオヂの姿を見ると、苦々しさうに舌打ちをした。

「畜生。あいつは遊んでゐやがる。」

Don Juan aux enfers

ドン・ジュアンは舟の中に、薄暗い河を眺めてゐる。時々古い舟べりを打つては、蒼白い火花を迸らせる、泊夫藍色の波の高さ。その舟の艫には巖のやうに、默々と今日も櫂を取つた、おお、

お前！　寂しいシヤアロン！

或靈は遠い浪の間に、高々と兩手をさし上げながら、舟中の客を呪つてゐる。又或靈は口惜しさうに、舟べりを煙らせた水沫の中から、ぢつと彼の顏を見上げてゐる。見よ！　あちらの舳に縋つた、或靈の腕の逞ましさを！　と思ふとこちらの艫にも、シヤアロンの櫂に拂はれたのか、眞逆樣に沈みかかつた、或靈の二つの足のうら！

妻を盜まれた夫の靈、娘を掠められた父親の靈、戀人を奪はれた若者の靈。――この河に浮き沈む無數の靈は、一人も殘らず男だつた。おお、わが詩人ボオドレエル！　君はこの地獄の河に、どの位夥しい男の靈が、泣き叫んでゐたかを知らなかつた！

しかしドン・ジュアンは冷然と、舟中に劍をついた儘、匂の好い葉巻へ火をつけた。さうして眉一つ動かさずに、大勢の靈を眺めやつた。何故彼はこの時でも、流俗のやうに恐れなかつたか？　それは一人も靈の中に彼程の美男がゐなかつたからである！

幽靈

或古本屋の店頭。夜。古本屋の主人は居睡りをしてゐる。かすかにピアノの音がするのは、近所にカフエのある證據らしい。

第一の幽靈（さもがつかりしたやうに、朦朧と店さきへ姿を現す。）此處にも古本屋が一軒ある。存外から云ふ所には、品物が揃つてゐるかも知れない。（熱心に棚の書物を檢べる。）近松全集、萬葉集略解、たけくらべ、アンナ・カレニナ、芭蕉句集、——ない。ない。やつぱりない。ないと云ふ筈はないのだが……

第二の幽靈（これもやはり大儀さうに、ふはりと店へはひつて來る。）おや、今晩は。

第一の幽靈　今晩は。どうだね、その後君の戯曲は？

第二の幽靈　駄目、駄目。何處の芝居でも御倉にしてゐる。やつてゐるのは不相變、黴の生えた舊劇ばかりさ。君の小説はどうなつたい？

第一の幽靈　これも御同樣絶版と來てゐる。もう僕の小説なぞは、誰も讀むものがなくなつたのだね。

第二の幽靈（冷笑するやうに。）君の時代も過ぎ去つたかね。

第一の幽靈（感傷的に。）我々の時代が過ぎ去つたのだよ。尤も僕等が往生したのは、もう五十年も前だからなあ。

第三の幽靈（これは燐火を飛ばせながら、愉快さうに漂つて來る。）今晩は。何だかいやにふさいでゐるぢやないか？ 幽靈が悄然としてゐるなんぞは、當節がらあんまりはやらないぜ。僕は批評家たる職分上、諸君の惡趣味に反對だね。

第一の幽靈　僕等がふさいでゐるのぢやない。君が幽靈にしては陽氣過ぎるのだよ。

第三の幽靈　そりや大きにさうかも知れない。しかし僕は今夜と云ふ今夜、始めて死に甲斐を感じたね。

第二の幽靈（冷笑すやうに。）君の全集でも出來るのかい？

第三の幽靈　いや、全集は出來ないがね。兎に角後代に僕の名前が、傳はる事だけは確になつたよ。

第二の幽靈（疑はしさうに。）へええ。

第一の幽靈（喜しさうに。）本當かい？

第三の幽靈。本當とも。まあ、これを見てくれ給へ。（書物を一册出して見せる。）これは今日出

來た本だがね。この本の中に僕の事が、ちやんと五六行書いてあるのだ。どうだい？ これぢやいくら幽靈でも、はしやぎまはらずにはゐられないぢやないか？

第二の幽靈　ちよいと借してくれ給へ。（一生懸命に頁をはぐる。）僕の名前は出てゐないかしら？

第一の幽靈　名前位は出てゐるだらう。僕のも次手に見てくれ給へ。

第三の幽靈（得意さうに獨り言を云ふ。）おれもとうとう不朽になつたのだ。サント・ブウヴやテエヌのやうに。――不朽と云ふ事も悪いものぢやないな。

第二の幽靈（第一の幽靈に。）どうも君の名は見えないやうだよ。

第一の幽靈　君の名も見えないやうだね。

第二の幽靈（第三の幽靈に。）君の事は何處に書いてあるのだ？

第三の幽靈　索引を見給へ。索引を。×××と云ふ所を引けば好いのだ。

第二の幽靈　成程、此處に書いてある。「當時數の多かつた批評家中、永久に記憶さるべきものは、××××と云ふ論客である。……」

第三の幽靈　まあ、ざつとそんな調子さ。其處まで讀めば澤山だよ。

第二の幽靈　次手にもう少し讀ませ給へ。「勿論彼は如何なる點でも、毛頭才能ある批評家では

ない。……」

第一の幽靈（滿足さうに。）それから？

第二の幽靈（讀み續ける。）「しかし彼は不朽になるべき、十分な理由を持つてゐる。……」

第三の幽靈　もうそれだけにして置き給へ。僕はちよいと行く所があるから。

第二の幽靈　まあ、しまひまで讀ませ給へ。（愈大聲に。）「何となれば彼は――」

第三の幽靈　ぢや僕は失敬する。

第一の幽靈　そんなに急がなくつても好いぢやないか？

第二の幽靈　もうたつた一行だよ。「何となれば彼は終始一貫――」

第三の幽靈（やけ氣味に。）ぢや勝手に讀み給へ。左樣なら。（燐火と共に消える。）

第一の幽靈　何だつてあんなに慌てたのだらう？

第二の幽靈　慌てる筈さ。まあ、これを聞き給へ。「何となれば彼は終始一貫、芥川龍之介の小說が出ると、勇ましい惡口を云ひ續けた。……」

第一の幽靈（笑ふ。）そんな事だらうと思つたよ。

第二の幽靈　不朽もかうなつちや禍だね。（書物を抛り出す。）

その音に主人が眼をさます。

主人　おや、棚の本が落ちたかしら。こりやまだ新しい本だが。
第二の幽靈（わざと物凄い聲をする。）それもぢきに古くなるぞ。
主人（驚いたやうに。）誰だい、お前さんは？
第一の幽靈（第二の幽靈に。）罪な事をするものぢやない。さあ、一しよに Hades へ歸らう。
（消える。）
第二の幽靈　ちつとは僕等の本も店へ置けよ。（消える。）
主人は呆氣にとられてゐる。

（大正十年十一月）

長崎小品

薄暗き硝子戸棚の中。繪畫、陶器、唐皮、更紗、牙彫、鑄金等種々の異國關係史料、處狹きまでに置き並べたるを見る。初夏の午後。遙にちやるめらの音聞ゆ。
久しき沈默の後、司馬江漢筆の蘭人、突然悲しげに歎息す。
古伊萬里の茶碗に描かれたる甲比丹、(蘭人を顧みつつ)どうしたね? 顏の色も大へん惡いやうだが――
蘭人、いえ、何でもありませんよ。唯ちつと頭痛がするものですから――
甲比丹、今日は妙に蒸暑いからね。
唐皮の花の間に止まれる鸚鵡、(横あひより甲比丹に)譃ですよ。甲比丹! あの人のは頭痛ではないのです。
甲比丹、頭痛ではないと云ふと?

鸚鵡、戀愛ですよ。
蘭人、(鸚鵡を嚇しつつ)餘計な事を云ふな!
甲比丹、(蘭人に)まあ默つてゐ給へ。(鸚鵡に)さうして誰に惚れてゐるのだい?
鸚鵡、あの女ですよ。ほら、あの阿蘭陀出來の皿の中にある。――
甲比丹、何時も扇を持つてゐる女か?
鸚鵡、ええ、あれです。あの女は顔こそ綺麗ですが、中々氣位が高いものですからね。
蘭人、(再び鸚鵡を嚇しつつ)こら、失禮な事を云ふな!
甲比丹、さうか? それは氣の毒だな。(金象嵌の小柄の伴天連に)どうしたものでせう? パアドレ!
伴天連、さあ、婚禮はわたしがさせても好いが、――何しろ阿蘭陀生れだけに、あの女の横柄なのは評判だからね。
蘭人、どうかもう御心配なさらずに下さい。(やけ氣味に)いざとなればあの種が島に、心臟を射拔いて貰ひますから。
種が島、(殘念さうに)駄目だよ。僕は錆びついてゐるから、――サアベル式の日本刀にでも賴み給へ。

牙彫の基督、（紫檀の十字架上に腕をひろげつつ）無分別な事をしてはいけない。ふだん云つて聞かせる通り、自殺などをしたものは波羅葦増の門にはひられないからね。（麻利耶觀音に）お母様！　どうかしてやる譯には參りませんか？

麻利耶觀音、さうだね。ではわたしが頼んで見て上げようか？

伴天連、さう願へれば仕合せでございます。

甲比丹、どうか御盡力を願ひたいと存じますが、――（蘭人に）君からもおん母に御頼みし給へ。

蘭人、（恥しげに）何分よろしく御願ひ申します。

鸚鵡、御恵深い麻利耶樣！　わたしからもひとへに御願ひ致します。

麻利耶觀音、（阿蘭陀の皿に描かれたる女に）あなた！

阿蘭陀の女、何か御用ですか？

麻利耶觀音、はい、實はこの若い方があなたを御慕ひ申してゐるのださうですが、――

阿蘭陀の女、まあ嫌です事。わたしはあの方は大嫌ひでございます。

麻利耶觀音、それでも體さへ窶れる程、思ひ惱んでゐるやうですから、――

阿蘭陀の女、それはあの方の御勝手ではありませんか？　一體わたしは日本出來や支那出來の方は蟲が好かないのです。

麻利耶觀音、そんな事を云ふものではありません。あの方もあなたと同じやうに、西洋文明の命の火を胸の中に宿してゐるのですもの。云はば兄弟のやうなものではありませんか？　どうかわたしたち親子も願ひますから、尠しは可哀さうだと思つてやつて下さい。

阿蘭陀の女、（腹立たしげに）餘計な事は仰有らずに下さい。第一あなたさへ平戸あたりの田舍生れではありませんか？　硝子繪の窓だの噴水だの薔薇の花だの、壁にかける氈だの、――そんな物は見た事もありますまい。顏もあなたはわたしの國のおん母麻利耶とは大違ひです。ましてあの方を御覽なさい。成程あの方もこの國では、阿蘭陀人と云ふかも知れません。しかしほんたうは阿蘭陀人どころか、日本人とも西洋人ともつかない、つまりこの國の畫描きの拵へた、黑ん坊よりも氣味の惡い人です。

蘭人、ああ、何と云ふ情ない言葉だ！（涕泣す）

阿蘭陀の女、（なほ怒の靜まらざる如く）それがわたしを慕つてゐる、――よくまあそんな事が云はれたものです。おまけにあの方の一家一族――長崎畫に出て來る紅毛人も皆同じ事ではありませんか？　あたしはあの人たちの顏を見てさへ胸が惡くなつて來る位です。

長崎畫の英吉利人、法朗西人、露西亞人等、（驚きし如く）おお！　おお！

麻利耶觀音、ではどうしてもあの方とは仲好く出來ないと云ふのですか？

阿蘭陀の女、當り前です。わたしはもう今日限り、あなたとも御つきあひは御免蒙りませう。

古伊萬里の甲比丹、小柄の伴天連、龜山燒の南蠻女、——いえ、いえ、それどころではありません。刀の鍔にゐる天使でさへ、二度と口を利いて貰ひますまい。あの人たちとわたしとは生れも育ちも違ふのですから、——

麻利耶觀音、（蘭人に）聞いてゐたらうね？　わたしの言葉さへ通らないのだから、所詮お前の願ひはかなはないよ。

蘭人、（涕泣しつつ）はい、もう仕方はございません。

甲比丹、男らしくあきらめるさ。（龜山燒の南蠻女に）しかし憎い女だね。

南蠻女、ほんたうに高慢な人です事。——ようございますよ。これからはわたしがあの女の代りにこの方の世話をして上げますから。——

伴天連、お前さんは何時もやさしい人だ。

基督、靜かに！　靜かに！　誰か人間が來たやうだから、——

鸚鵡、しつ！　しつ！

この家の主人、數人の客と共に戸棚の外に立つ。

主人、これがわたしのコレクションです。

客の一人、大分澤山ありますね。この江漢の蘭人は面白い。
主人、其處にあるのは龜山燒です。これはわたしの自慢の品ですが、——
客の一人、南蠻女ですね。阿蘭陀出來の皿の女より、餘程美人ではありませんか？
主人、これですか？（阿蘭陀の女のゐる皿を取り出す）おや、何か濡れてゐるが、——
客の一人、まさか阿蘭陀の女が泣いたと云ふ譯でもありますまい。
客の他の一人、いや、惡口を云はれたから、口惜し泣きに泣いたのかも知れません。（笑ふ）
客の一人、一體日本出來の南蠻物には西洋出來の物にない、獨得な味がありますね。
主人、其處が日本なのでせう。
客の一人、さうです。其處から今日の文明も生れて來た。將來はもつと偉大なものが生れるでせう。
客の他の一人、この蘭人や南蠻女も亦以て瞑すべしですか。——おや！
主人、どうしたのですか？
客の他の一人、何だかあの基督が笑つたやうな氣がしたのです。
客の一人、わたしは麻利耶觀音が笑つたやうに見えた。
主人、氣のせゐでせう。

主客静かに硝子戸棚の前を去る。再びかすかにちやるめらの音。

（大正十一年五月）

漱石山房の冬

わたしは年少のＷ君と、舊友のＭに案内されながら、久しぶりに先生の書齋へはひつた。

書齋は此處へ建て直つた後、すつかり日當りが惡くなつた。それから支那の五羽鶴の毯も何時の間にか大分色がさめた。最後にもとの茶の間との境、更紗の唐紙のあつた所も、今は先生の寫眞のある佛壇に形を變へてゐた。

しかしその外は不相變である。洋書のつまつた書棚もある。「無絃琴」の額もある。先生が毎日原稿を書いた、小さい紫檀の机もある。瓦斯煖爐もある。屛風もある。縁の外には芭蕉もある。芭蕉の軒を拂つた葉うらに、大きい花さへ腐らせてゐる。銅印もある。瀨戸の火鉢もある。天井には鼠の食ひ破つた穴も、……

わたしは天井を見上げながら、獨り言のやうにかう云つた。

「天井は張り換へなかつたのかな。」

「張り換へたんだがね。鼠のやつにははかなはないよ。」

Mは元氣さうに笑つてゐた。

十一月の或夜である。この書齋に客が三人あつた。客の一人はO君である。O君は綿抜瓢一郎と云ふ筆名のある大學生であつた。あとの二人も大學生である。しかしこれはO君が今夜先生に紹介したのである。その一人は袴をはき、他の一人は制服を着てゐる。先生はこの三人の客に二んなことを話してゐた。「自分はまだ生涯に三度しか萬歳を唱へたことはない。最初は、……二度目は、……三度目は、……」制服を着た大學生は膝の邊りの寒い爲に、始終ぶるぶる震へてゐた。それが當時のわたしだつた。もう一人の大學生、——袴をはいたのはKである。Kは或事件の爲に、先生の歿後來ないやうになつた。同時に又舊友のMとも絶交の形になつてしまつた。これは世間も周知のことであらう。

又十月の或夜である。わたしはひとりこの書齋に、先生と膝をつき合せてゐた。話題はわたしの身の上だつた。文を賣つて口を餬するのも好い。しかし買ふ方は商賣である。それを一々註文通り、引き受けてゐてはたまるものではない。貧の爲ならば兎も角も、愼むべきものは濫作である。先生はそんな話をした後、「君はまだ年が若いから、さう云ふ危險などは考へてゐまい。それを僕が君の代りに考へて見るとすればだね」と云つた。わたしは今でもその時の先生の微笑を覺

えてゐる。いや、暗い軒先の芭蕉の戰ぎも覺えてゐる。しかし先生の訓戒には忠だつたと云ひ切る自信を持たない。

更に又十二月の或夜である。わたしはやはりこの書齋に、瓦斯煖爐の火を守つてゐた。Mとわたしと一しよに坐つてゐたのは先生の奥さんとMとである。先生はもう物故してゐた。わたしは奥さんにいろいろ先生の話を聞いた。先生はあの小さい机に原稿のペンを動かしながら、床板を洩れる風の爲に惱まされたと云ふことである。しかし先生は傲語してゐた。「京都あたりの茶人の家と比べて見給へ。天井は穴だらけになつてゐるが、兎に角僕の書齋は雄大だからね。」穴は今でも明いた儘である。先生の歿後七年の今でも……

その時若いW君の言葉はわたしの追憶を打ち破つた。

「和本は蟲が食ひはしませんか？」

「食ひますよ。そいつにも弱つてゐるんです。」

Mは高い書棚の前へW君を案内した。

×　×　×　×　×　×

三十分の後、わたしは埃風に吹かれながら、W君と町を歩いてゐた。

「あの書齋は冬は寒かつたでせうね。」

Ｗ君は太い杖を振り振り、かうわたしに話しかけた。同時にわたしは心の中にありありと其處を思ひ浮べた。あの蕭條とした先生の書齋を。

「寒かつたらう。」

わたしは何か興奮の湧き上つて來るのを意識した。が、何分かの沈默の後、Ｗ君は又話しかけた。

「あの末次平藏ですね、異國御朱印帳を檢べて見ると、慶長九年八月二十六日、又朱印を貰つてゐますが、……」

わたしは默然と歩き續けた。まともに吹きつける埃風の中にＷ君の輕薄を憎みながら。

（大正十一年十二月）

わが散文詩

秋夜

火鉢に炭を繼がうとしたら、炭がもう二つしかなかつた。炭取の底には炭の粉の中に、何か木の葉が乾反つてゐる。何處の山から來た木の葉か？——今日の夕刊に出てゐたのでは、木曾のおん岳の初雪も例年よりずつと早かつたらしい。

「お父さん、お休みなさい。」

古い朱塗の机の上には室生犀星の詩集が一冊、假綴の頁を開いてゐる。「われ筆とることを憂しとなす」——これはこの詩人の歎きばかりではない。今夜もひとり茶を飲んでゐると、しみじみと心に沁みるものはやはり同じ寂しさである。

「貞や、もう表をしめておしまひなさい。」

この呉須の吹きかけの湯のみは十年前に買つたものである。「われ筆とることを憂しとなす」——

――さう云ふ歎きを知つたのは爾來何年の後であらう。湯のみにはとうに罅が入つてゐる。茶も亦すつかり冷えてしまつた。

「奥様、湯たんぽを御入れになりますか？」

すると何時か火鉢の中から、薄い煙が立ち昇つてゐる。何かと思つて火箸にかけると、さつきの木の葉が煙るのであつた。何處の山から來た木の葉か？――この匂を嗅いだだけでも、壁を塞いだ書棚の向うに星月夜の山山が見えるやうである。

「そちらにお火はございますか？　わたしもおさきへ休ませて頂きますが。」

椎の木

椎の木の姿は美しい。幹や枝はどんな線にも大きい底力を示してゐる。その上枝を鎧つた葉も鋼鐵のやうに光つてゐる。この葉は露霜も落すことは出來ない。たまたま北風に煽られれば一度に褐色の葉裏を見せる。さうして男らしい笑ひ聲を擧げる。

しかし椎の木は野蠻ではない。葉の色にも枝ぶりにも何處か落着いた所がある。傳統と教養とに培はれた士人にも恥ぢないつつましさがある。樫の木はこのつつましさを知らない。唯冬との

鬩ぎ合ひに荒荒しい力を誇るだけである。同時に又椎の木は優柔でもない。小春日と戯れる樟の木のそよぎは椎の木の知らない氣輕さであらう。椎の木はもつと憂鬱である。その代りもつと着實である。

椎の木はこのつつましさの爲に我我の親しみを呼ぶのであらう。又この憂鬱な影の爲に我我の浮薄を戒めるのであらう。「まづたのむ椎の木もあり夏木立」——芭蕉は二百餘年前にも、椎の木の氣質を知つてゐたのである。

椎の木の姿は美しい。殊に日の光の澄んだ空に葉照りの深い枝を張りながら、靜かに聳えてゐる姿は莊嚴に近い眺めである。雄雄しい日本の古天才も皆この椎の老い木のやうに、悠悠としかも嚴肅にそそり立つてゐたのに違ひない。その太い幹や枝には風雨の痕を殘した儘。……

なほ最後につけ加へたいのは、我我の祖先は杉の木のやうに椎の木をも神と崇めたことである。

虫干

この水淺黄の帷子はわたしの祖父の着た物である。祖父はお城のお奥坊主であつた。わたしは祖父を覺えてゐない。しかしその命日毎に酒を供へる畫像を見れば、黑羽二重の紋服を着た、何

處か一徹らしい老人である。祖父は俳諧を好んでゐたらしい。現に古い手控への中にはこんな句も幾つか書きとめてある。――「脇差しも老には重き涼みかな」

（おや。何か映つてゐる！　うつすり日のさした西窓の障子に。）

その小紋の女羽織はわたしの母が着た物である。母もとうに歿してしまつた。が、わたしは母と一しよに汽車に乘つた事を覺えてゐる。その時の羽織はこの小紋か、それともあの縞の御召しか？――兎に角母は窓を後ろにきちりと膝を重ねた儘、小さい煙管を啣へてゐた。時時わたしの顏を見ては、何も云はずにほほ笑みながら。

（何かと思へば竹の枝か、今年生えた竹の枝か。）

この白茶の博多の帶は幼いわたしが締めた物である。わたしは脾弱い子供だつた。同時に又早熟な子供だつた。わたしの記憶には色の黑い童女の顏が浮んで來る。なぜその童女を戀ふやうになつたか？　現在のわたしの眼から見れば、寧ろ醜いその童女を。さう云ふ疑問に答へられるものはこの一筋の帶だけであらう。わたしは唯樟腦に似た思ひ出の匂を知るばかりである。

（竹の枝は吹かれてゐる。娑婆界の風に吹かれてゐる。）

線香

わたしは偶然垂れ布を掲げた。……
妙に薄曇つた六月の或朝。
八大胡同の妓院の或部屋。
垂れ布を掲げた部屋の中には大きい黒檀の圓卓に、美しい支那の少女が一人、白衣の兩肘をもたせてゐた。
わたしは無躾を恥ぢながら、もと通り垂れ布を下さうとした。が、ふと妙に思つた事には、少女は默然と坐つたなり、頭の位置さへも變へようとしない。いや、わたしの存在にも全然氣のつかぬ容子である。
わたしは少女に目を注いだ。すると少女は意外にも幽かに瞼をとざしてゐる。年は十五か十六であらう。顏はうつすり白粉を刷いた、眉の長い瓜實顏である。髮は水色の紐に結んだ、日本の少女と同じ下げ髮、着てゐる白衣は流行を追つた、佛蘭西の絹か何からしい。その又柔かな白衣の胸には金剛石のブロオチが一つ、水水しい光を放つてゐる。

少女は明を失つたのであらうか？　いや、少女の鼻のさきには、小さい銅の蓮華の香爐に線香が一本煙つてゐる。その一本の線香の細さ、立ち昇る煙のたよたよしさ、――少女は勿論目を閉ぢたなり、線香の薫りを嗅いでゐるのである。

わたしは足音を盗みながら、圓卓の前へ歩み寄つた。少女はそれでも身ぢろぎをしない。大きい黒檀の圓卓は丁度澄み渡つた水のやうに、ひつそりと少女を映してゐる。顏、白衣、金剛石のブロオチ――何一つ動いてゐるものはない。その中に唯線香だけは一點の火をともした先に、ちらちらと煙を動かしてゐる。

少女はこの一炷の香に清閑を愛してゐるのであらうか？　いや、更に氣をつけて見ると、少女の顏に現れてゐるのはさう云ふ落着いた感情ではない。鼻翼は絶えず震へてゐる。脣も時時ひき攣るらしい。その上ほのかに靜脈の浮いた、華奢な顳顬のあたりには薄い汗さへも光つてゐる。

……

わたしは咄嗟に發見した。この顏に漲る感情の何かを！

妙に薄曇つた六月の或朝。

八大胡同の妓院の或部屋。

わたしはその後、幸か不幸か、この美しい少女の顏程、病的な性慾に惱まされた、いたいたし

い顔に遇つたことはない。

日本の聖母

山田右衛門作は天草の海べに聖母受胎の油畫を作つた。するとその夜聖母「まりや」は夢の階段を踏みながら、彼の枕もとへ下つて來た。

「右衛門作！　これは誰の姿ぢや？」

「まりや」は畫の前に立ち止まると、不服さうに彼を振り返つた。

「あなた様のお姿でございます。」

「わたしの姿！　これがわたしに似てゐるであらうか、この顔の黄色い娘が？」

「それは似て居らぬ筈でございます。――」

右衛門作は叮嚀に話しつづけた。

「わたしはこの國の娘のやうに、あなた様のお姿を描き上げました。しかもこれは御覧の通り、田植の裝束でございます。けれども圓光がございますから、世の常の女人とは思はれますまい。

「後ろに見えるのは雨上りの水田、水田の向うは松山でございます。どうか松山の空にかかつた、

かすかな虹も御覽下さい。その下には聖靈を現す爲に、珠數懸け鳩が一羽飛んで居ります。
「勿論かやうなお姿にしたのは御意に入らぬことでございませう。しかしわたしは御承知の通り、日本の畫師でございます。日本の畫師はあなた樣さへ、日本人にする外はございますまい。何とさやうではございませんか？」
「まりや」はやつと得心したやうに、天上の微笑を輝かせた。それから又星月夜の空へしづしづとひとり昇つて行つた。……

玄關

わたしは夜寒の裏通りに、あかあかと障子へ火の映つた、或家の玄關を知つてゐる。玄關を、――が、その蝦夷松の格子戸の中へは一遍も足を入れたことはない。まして障子に塞がれた向うは全然未知の世界である。

しかしわたしは知つてゐる。その玄關の奧の芝居を。涙さへ催させる人生の喜劇を。

去年の夏、其處にあつた老人の下駄は何處へ行つたか？

あの古い女の下駄とあの小さい女の子の下駄と――あれは何時も老人の下駄と履脱ぎの石にあ

つたものである。

しかし去年の秋の末には、もうあの靴や薩摩下駄が何處からか其處へはひつて來た。いや、履き物ばかりではない。幾度もわたしを不快にした、あの一本の細卷きの洋傘！　わたしは今でも覺えてゐる。あの小さい女の子の下駄には、それだけ又同情も深かつたことを。

最後にあの乳母車！　あれはつい四五日前から、格子戸の中にあるやうになつた。見給へ、男女の履き物の間におしやぶりも一つ落ちてゐるのを。

わたしは夜寒の裏通りに、あかあかと障子へ火の映つた、或家の玄關を知つてゐる。丁度まだ讀まない本の目次だけざつと知つてゐるやうに。

（大正十一年十二月）

教訓談

あなたはこんな話を聞いたことがありますか? 人間が人間の肉を食つた話を。いえ、ロシヤの飢饉の話ではありません。日本の話、——ずつと昔の日本の話です。食つたのは爺さんですし、食はれたのは婆さんです。

どうして食つたと云ふのですか? それは狸の惡企みです。婆さんを殺した古狸はその婆さんに化けた上狸の肉を食はせる代りに婆さんの肉を食はせたのです。

あなたも勿論知つてゐるでせう。ええ、あの古いお伽噺です。かちかち山の話です。おや、あなたは笑つてゐますね。あれは恐ろしい話ですよ。夫は妻の肉を食つたのです。それも一匹の獸の爲に、——こんな恐ろしい話があるでせうか?

いや恐ろしいばかりではありません。あれは巧妙な教訓談です。我々もうつかりしてゐると、人間の肉を食ひかねません。我々の内にある獸の爲に。

しかし最後は幸福です。狸は兎に亡されるのですから。

火になつた焚き木を負つてゐる狸、泥舟と共に溺れる狸、――あの狸の死を御覽なさい。狸を亡すのは兎です。やはり一匹の獸です。この位意味の深い話があるでせうか？

わたしはあの話を思ひ出す度に、何か莊嚴な氣がするのです。獸は獸の爲に亡され、其處に人間は榮えました。ツアラトストラでもこの話を聞けば、きつと微笑を浮べたでせう。

あなたはまだ笑つてゐますね。お笑ひなさい。お笑ひなさい。あなたの耳は狸の耳なのでせう。

（大正十一年十二月）

鷺と鴛鴦

二三年前の夏である。僕は銀座を歩いてゐるうちに二人の女を發見した。それも唯の女ではない。はつと思ふほど後ろ姿の好い二人の女を發見したのである。

一人は鷺のやうにすらりとしてゐる。もう一人は――この説明はちよつと面倒である。古來姿の好いと云ふのは揚肥よりも趙痩を指したものらしい。が、もう一人は肥つてゐる。中肉以上に肥つてゐる。けれども體の吊り合ひは少しもその爲に損はれてゐない。殊に腰を振るやうに悠々と足を運ぶ容子は鴛鴦のやうに立派である。對の縞あかしか何かの着物にやはり對の絽の帶をしめ、當時流行の網をかけた對のパラソルをさした所を見ると、或は姉さんに妹かも知れない。僕は丁度この二人をモデル臺の上へ立たせたやうに、あらゆる面と線とを鑑賞した。由來夏の女の姿は着てゐるものの薄い爲に、――そんなことは三十年前から何度も婦人雜誌に書かれてゐる。

僕はなほ念の爲にこの二人を通り越しながら、ちらりと顏を物色した。確かにこの二人は姉妹

である。のみならずどちらも同じやうにスペイド形の髪に結つた二十前後の美人である。唯鴛鴦は鷺よりも幾分か器量は悪いかも知れない。僕はそれぎりこの二人を忘れ、ぶらぶら往來を歩いて行つた。往來は前にも云つた通り、夏の日の照りつけた銀座である。僕の彼等を忘れたのは必ずしも僕に內在する抒情詩的素質の足りない爲ではない。寧ろハンケチに汗をふいたり、夏帽子を扇の代りにしたり、爍金の暑と闘ふ爲に心力を費してゐたからである。

しかし彼是十分の後、銀座四丁目から電車に乘ると、直に又彼等も同じ電車へ姿を現したのは奇遇である。電車はこみ合つてはゐなかつたものの、空席はやつと一つしかない。しかもその空席のあるのは丁度僕の右隣である。鷺は姉さん相當にそつと右隣へ腰を下した。鴛鴦は勿論姉の前の吊り革に片手を托してゐる。僕は持つてゐた本をひろげ、夏讀まずとも暑苦しいマハトマ・ガンディ傳を征服し出した。いや、征服し出したのではない。征服し出さうと思つただけである。僕は電車の動きはじめる拍子に、鴛鴦の一足よろめいたのを見ると、忽ち如何なる紳士よりも慇懃に鴛鴦へ席を讓つた。同時に彼等の感謝するのを待たず、さつさと其處から遠ざかつてしまつた。利己主義者を以て任ずる僕の自己犧牲を行つたのは偶然ではない。鴛鴦は顏を下から見ると、長ながと鼻毛を伸してゐる。鷺も亦無精をきめてゐるのか、髮の臭さは一通りではない。それ等はまだ好いとしても、彼等の熱心に話してゐたのはメンスラティオンか何かに關する臨床醫科的

の事實である。

爾來「夏の女の姿」は不幸にも僕には慘澹たる幻滅の象徵になつてゐる。日盛りの銀座の美人などは如何に嬋娟窈窕としてゐても、うつかり敬意を表するものではない。少くとも敬意を表する前には匂だけでも嗅いで見るものである。……

（大正十三年六月）

雪

或冬曇りの午後、わたしは中央線の汽車の窓に一列の山脈を眺めてゐた。山脈は勿論まつ白だつた。が、それは雪と言ふよりも山脈の皮膚に近い色をしてゐた。わたしはかう言ふ山脈を見ながら、ふと或小事件を思ひ出した。——

もう四五年以前になつた、やはり或冬曇りの午後、わたしは或友だちのアトリエに、——見すぼらしい鑄もののストオヴの前に彼やそのモデルと話してゐた。アトリエには彼自身の油畫の外に何も裝飾になるものはなかつた。卷煙草を啣へた斷髮のモデルも、——彼女は成程混血兒じみた一種の美しさを具へてゐた。しかしどう言ふ量見か、天然自然に生えた睫毛を一本殘らず拔きとつてゐた。……

話はいつかその頃の寒氣の嚴しさに移つてゐた。彼は如何に庭の土の季節を感ずるかと言ふこ

とを話した。就中如何に庭の土の冬を感ずるかと言ふことを話した。

「つまり土も生きてゐると言ふ感じだね。」

彼はパイプに煙草をつめつめ、我々の顔を眺めました。わたしは何とも返事をしずに匂のない珈琲を啜つてゐた。けれどもそれは断髪のモデルに何か感銘を与へたらしかつた。彼女は赤い瞼を擡げ、彼女の吐いた煙の輪にぢつと目を注いでゐた。それからやはり空中を見たまま、誰にともなしにこんなことを言つた。――

「それは肌も同じだわね。あたしもこの商売を始めてから、すつかり肌を荒してしまつたもの。……」

或冬曇りの午後、わたしは中央線の汽車の窓に一列の山脈を眺めてゐた。山脈は勿論まつ白だつた。が、それは雪と言ふよりも人間の鮫肌に近い色をしてゐた。わたしはかう言ふ山脈を見ながら、ふとあのモデルを思ひ出した、あの一本も睫毛のない、混血児じみた日本の娘さんを。

（大正十四年四月）

詩集

彼の詩集の本屋に出たのは三年ばかり前のことだつた。彼はその假綴ぢの處女詩集に「夢みつつ」と言ふ名前をつけた。それは卷頭の抒情詩の名前を詩集の名前に用ひたものだつた。

夢みつつ、夢みつつ、
日もすがら、夢みつつ……

彼はこの詩の一節ごとにかう言ふリフレエンを用ひてゐた。

彼の詩集は何册も本屋の店に並んでゐた。が、誰も買ふものはなかつた。誰も？——いや、必しも「誰も」ではない。彼の詩集は一二册神田の古本屋にも並んでゐた。しかし「定價一圓」と言ふ奧附のあるのにも關らず、古本屋の値段は三十錢乃至二十五錢だつた。

一年ばかりたつた後、彼の詩集は新らしいまま、銀座の露店に並ぶやうになつた。今度は「引けシ三十錢」だつた。行人は時々紙表紙をあけ、卷頭の抒情詩に目を通した。（彼の詩集は幸か不幸か

紙の切つてない裝幀だつた。）けれども滅多に賣れたことはなかつた。そのうちにだんだん紙も古び、假綴ぢの背中もいたんで行つた。

　夢みつつ、夢みつつ、
　日もすがら、夢みつつ……

三年ばかりたつた後、汽車は薄煙を殘しながら、九百八十六部の「夢みつつ」を北海道へ運んで行つた。

九百八十六部の「夢みつつ」は札幌の或物置小屋の砂埃の中に積み上げてあつた。が、それは暫くだつた。彼の詩集は女たちの手に無數の紙袋に變り出した。紙袋は彼の抒情詩を横だの逆様だのに印刷してゐた。

　夢みつつ、夢みつつ、
　日もすがら、夢みつつ……

半月ばかりたつた後、是等の紙袋は點々と林檎畠の葉かげにかかり出した。それからもう何日になることであらう。林檎畠を綴つた無數の林檎は今は是等の紙袋の中に、――紙袋を透かした日の光の中におのづから甘みを加へてゐる、青あをとかすかに匂ひながら。

　夢みつつ、夢みつつ、

日もすがら、夢みつつ……

（大正十四年四月）

ピアノ

或雨のふる秋の日、わたしは或人を訪ねる爲に橫濱の山手を步いて行つた。この邊の荒廢は震災當時と殆ど變つてゐなかつた。若し少しでも變つてゐるとすれば、それは一面にスレエトの屋根や煉瓦の壁の落ち重なつた中に藜の伸びてゐるだけだつた。現に或家の崩れた跡には蓋をあけた弓なりのピアノさへ、半ば壁にひしがれたまま、つややかに鍵盤を濡らしてゐた。のみならず大小さまざまの譜本もかすかに色づいた藜の中に桃色、水色、薄黃色などの橫文字の表紙を濡らしてゐた。

わたしはわたしの訪ねた人と或こみ入つた用件を話した。話は容易に片づかなかつた。わたしはとうとう夜に入つた後、やつとその人の家を辭することにした。それも近々にもう一度面談を約した上のことだつた。

雨は幸ひにも上つてゐた。おまけに月も風立つた空に時々光を洩らしてゐた。わたしは汽車に

乘り遲れぬ爲に（煙草の吸はれぬ省線電車は勿論わたしには禁もつだつた。）出來るだけ足を早めて行つた。

すると突然聞えたのは誰かのピアノを打つた音だつた。いや、「打つた」と言ふよりも寧ろ觸つた音だつた。わたしは思はず足をゆるめ、荒涼としたあたりを眺めまはした。ピアノは丁度月の光に細長い鍵盤を仄めかせてゐた、あの藜の中にあるピアノは。――しかし人かげはどこにもなかつた。

それはたつた一音だつた。が、ピアノには違ひなかつた。わたしは多少無氣味になり、もう一度足を早めようとした。その時わたしの後ろにしたピアノは確かに又かすかな音を出した。わたしは勿論振りかへらずにさつさと足を早めつづけた、濕氣を孕んだ一陣の風のわたしを送るのを感じながら。……

わたしはこのピアノの音に超自然の解釋を加へるには餘りにリアリストに違ひなかつた。成程人かげは見えなかつたにしろ、あの崩れた壁のあたりに猫でも潜んでゐたかも知れない。若し猫ではなかつたとすれば、――わたしはまだその外にも鼬だの蟇がへるだのを數へてゐた。けれども兎に角人手を借らずにピアノの鳴つたのは不思議だつた。

五日ばかりたつた後、わたしは同じ用件の爲に同じ山手を通りかかつた。ピアノは不相變ひつ

そりと藜の中に蹲つてゐた。桃色、水色、薄黄色などの譜本の散亂してゐることもやはりこの前に變らなかつた。只けふはそれ等は勿論、崩れ落ちた煉瓦やスレエトも秋晴れの日の光にかがやいてゐた。

わたしは譜本を踏まぬやうにピアノの前へ歩み寄つた。ピアノは今目のあたりに見れば、鍵盤の象牙も光澤を失ひ、蓋の漆も剝落してゐた。殊に脚には海老かづらに似た一すぢの蔓草もからみついてゐた。わたしはこのピアノの前に何か失望に近いものを感じた。

「第一これでも鳴るのかしら。」

わたしはかう獨り語を言つた。するとピアノはその拍子に忽ちかすかに音を發した。それは殆どわたしの疑惑を叱つたかと思ふ位だつた。しかしわたしは驚かなかつた。のみならず微笑の浮んだのを感じた。ピアノは今も日の光に白じらと鍵盤をひろげてゐた。が、そこにはいつの間にか落ち栗が一つ轉がつてゐた。

わたしは往來へ引き返した後、もう一度この廢墟をふり返つた。やつと氣のついた栗の木はスレエトの屋根に押されたまま、斜めにピアノを蔽つてゐた。けれどもそれはどちらでも好かつた。わたしは只藜の中の弓なりのピアノに目を注いだ。あの去年の震災以來、誰も知らぬ音を保つてゐたピアノに。

（大正十四年四月）

臘梅

わが裏庭の垣のほとりに一株の臘梅あり。ことしも亦筑波おろしの寒きに琥珀に似たる數朶の花をつづりぬ。こは本所なるわが家にありしを田端に移し植ゑつるなり。嘉永それの年に鐫られたる本所繪圖をひらきたまはば、土屋佐渡守の屋敷の前に小さく「芥川」と記せるを見たまふらむ。この「芥川」ぞわが家なりける。わが家も德川家瓦解の後は多からぬ扶持さへ失ひければ、朝あさのけむりの立つべくもあらず、父ぎみ、叔父ぎみ道に立ちて家財のたぐひすら賣りたまひけるとぞ。おほぢの脇差しもあとをとどめず。今はただひと株の臘梅のみぞ十六世の孫には傳はりたりける。

臘梅や雪うち透かす枝の丈

（大正十四年五月）

沙羅の花

沙羅木は植物園にもあるべし。わが見しは或人の庭なりけり。玉の如き花のにほへるもとには太湖石と呼べる石もありしを、今はた如何になりはてけむ、わが知れる人さへ風のたよりにただありとのみ聞えつつ。

　また立ちかへる水無月の
　歎きをたれにかたるべき。
　沙羅のみづ枝に花さけば、
　かなしき人の目ぞ見ゆる。

（大正十四年五月）

微笑

僕が大學を卒業した年の夏、久米正雄と一緒に上總の一ノ宮の海岸に遊びに行つた。それは遊びに行つたといつても、本を讀んだり、原稿を書いたりしてゐたには違ひないが、まあ一日の大部分は海にはひつたり、散步したりして暮してゐた。

或暮方、僕等は一ノ宮の町へ散步に行き、もう人の顏も見えない頃、ぶらぶら宿の方へ歸つて來た。道は宿へ辿り着くためには、弘法麥や防風の生えた砂山を一つ越えなければならぬ。丁度、その砂山の上に來た時、久米は何か叫ぶが早いか一目散に砂山を驅け降りて行つた。僕はどうしたのだかわからなかつたが、兎に角、何か驅けなければならぬ必要があるのだらうと思つたから、矢張、その後から驅け出すことにした。それは人目のない砂山の上に、たつた獨り取殘されるのは薄氣味惡いといふことも手傳つてゐたのに違ひない。しかし、久米は何といつても中學の野球の選手などをしたことのある男である。僕はまだ一町と驅けないうちに、忽ち久米の姿を見失つ

てしまつた。

十分ばかり經つた後、僕は息を切らしながら、當時僕等の借りてゐた、宿の離室に歸つて來た。離室はたつた二間しかない。だから見透かし同樣なのだが、どこにも久米の姿は見えなかつた。しかし、下駄のぬいであるところを見ると、兎に角、歸つて來てゐるのには違ひない。そこで僕は大きな聲を出して、

「おい、久米。」

と呼んでみた。するとどこかで、

「何ンだ。」

といふ返事があつた。けれどもどこにゐるんだか、矢張、見當はつかなかつた。

「おい、久米。」

僕はもう一度から聲をかけた。

「何ンだよう。」

久米ももう一度返事をした。今度は久米のゐるところも大體僕にあきらかになつた。僕は緣側傳ひに後架の前に行き、

「何ンだつてあんなに驅け出したんだ。」

と言つた。僕の聲は疑ひもなく多少の怒りを含んでゐた。すると久米も腹をたてたやうに、かう中から返事をした。

「だつて、驅け出さなくちやあ、間に合はないぢやないか。」

爾來、七八年の日月は河のやうに流れ去つた。僕はもう何時の間にか額の禿上るのを嘆じてゐる。久米も、今ではあの時のやうに驅け出す勇氣などはないに違ひない。

（大正十四年）

虎の話

師走の或夜、父は五歳になる男の子を抱き、一しよに炬燵へはひつてゐる。

子　お父さん何かお話しをして！

父　何の話？

子　何でも。……うん、虎のお話が好いや。

父　虎の話？　虎の話は困つたな。

子　よう、虎のお話をさあ。

父　虎の話と。……ぢや虎の話をして上げよう。昔、朝鮮のいつぱい卒がね、すつかりお酒に醉つ拂らつて、山路にぐうぐう寢てゐたとさ。すると顏が濡れるもんだから、何かと思つて目をさますと、いつの間にか大きい虎が一匹、尻つ尾の先に水をつけてはいつぱい卒の顏を撫でてゐたとさ。

子　どうして？

父　そりやらつぱ卒が酔つぱらつてゐたから、お酒つ臭い臭ひをなくなした上、食べることにしようと思つたのさ。

子　それから？

父　それかららつぱ卒は覺悟をきめて、力一ぱい持つてゐたらつぱを虎のお尻へ突き立てたとさ。虎は痛いのにびつくりして、どんどん町の方へ逃げ出したとさ。

子　死ななかつたの？

父　そのうちに町のまん中へ來ると、とうとうお尻の傷の爲に倒れて死んでしまつたとさ。けれどもお尻に立つてゐたらつぱは虎の死んでしまふまで、ぶうぶう鳴りつづけに鳴つてゐたとさ。

子　（笑ふ）らつぱ卒は？

父　らつぱ卒は大へん褒められて虎退治の御褒美を貰つたつて……さあ、それでおしまひだよ。

子　いやだ。何かもう一つ。

父　今度は虎の話ぢやないよ。

子　ううん、今度も虎のお話をして。

父　そんなに虎の話ばかりありやしない。ええと、何かなかつたかな？……ああ、ぢやもう一

つして上げよう。これも朝鮮の獵師がね、或山奥へ狩をしに行つたら、丁度目の下の谷底に虎が一匹歩いてゐたとさ。

子　大きい虎？

父　うん、大きい虎がね。獵師は好い獲物だと思つて早速鐵砲へ玉をこめたとさ。

子　打つたの？

父　ところが打たうとした時にね、虎はいきなり身をちぢめたと思ふと、向うの大岩へ飛びあがつたとさ。けれども宙へ躍り上つたぎり、生憎大岩へとどかないうちに地びたへ落ちてしまつたとさ。

子　それから？

父　それから虎はもう一度もとの處へ歸つて來た上、又大岩へ飛びかかつたとさ。

子　今度はうまく飛びついた？

父　今度もまた落ちてしまつたとさ。すると如何にも羞しさうに長い尻つ尾を垂らしたなり、何處かへ行つてしまつたとさ。

子　ぢや虎は打たなかつたの？

父　うん、あんまりその容子が人間のやうに見えたもんだから、可哀さうになつてよしてしま

つたつて。

子　つまらないなあ、そんなお話。何かもう一つ虎のお話をして。

父　もう一つ？　今度は猫の話をしよう。長靴をはいた猫の話を。

子　ううん、もう一つ虎のお話をして。

父　仕かたがないな。……ぢや昔大きい虎がね、子虎を三匹持つてゐたとさ。虎はいつも日暮になると、三匹の子虎と遊んでゐたとさ。それから夜は洞穴へはひつて三匹の子虎と一しよに寢たとさ。……おい、寢ちまつちやいけないよ。

子（眠むさうに）うん。

父　ところが或秋の日の暮、虎は獵師の矢を受けて、死なないばかりになつて歸つて來たとさ。何にも知らない三匹の子虎は直に虎にじやれついたとさ。すると虎はいつものやうに躍つたり跳たりして遊んだとさ。それから又夜もいつものやうに洞穴へはひつて一しよに寢たとさ。けれども夜明けになつて見ると、虎は、いつか三匹の子虎のまん中へはひつて死んでゐたとさ。子虎は皆驚いて、……おい、おきてゐるかい？

子（寢入つて答へをしない）……

父　おい、誰かゐないか？　こいつはもう寢てしまつたよ。

遠くで「はい、唯今」といふ返事が聞える。

（大正十四年十二月）

二人の友

僕は一高へはひつた時、福間先生に獨逸語を學んだ。福間先生は鷗外先生の「二人の友」の中のF君である。「二人の友」は當時はまだ活字になつてはゐなかつたであらう。少くとも僕などのそんなことを全然知らなかつたのは確かである。

福間先生は常人よりも寧ろ脊は低かつたであらう。何でも金縁の近眼鏡をかけ、可成長い口髭を蓄へてゐられたやうに覺えてゐる。

僕等は皆福間先生に或親しみを抱いてゐた。それは先生も青年のやうに諧謔を好んでゐられたからである。先生は一學期の或時間に久米正雄にかう言はれた。

「君にはこの言葉の意味がクメとれないんですか？」

久米も亦忽ち洒落を以て酬いた。

「ええ、ちよつとわかりません。どう言ふ意味がフクマつてゐるか――」

福間先生は二學期からいきなり僕等にゲラアデ・アウスと云ふギズキイの警句集を教へられた。僕等の新單語に惱まされたことは言ふを待たないのに違ひない。僕は未だにその本にあつた、シユタアツ・ヘモロイダリウスと云ふ、不可思議な言葉を記憶してゐる。この言葉は恐らくは一生の間、薄暗い僕の腦味噌のどこかに木の子のやうに生えてゐるであらう。僕はそんなことを考へると、いつも何か可笑しい中に儚い心もちも感じるのである。

福間先生の死なれたのは僕等の二年生になつた時か、それとも三年生になつた時か、生憎はつきりと覺えてゐない。が、その一週間か二週間か前に今の恒藤恭――當時の井川恭と一しよにお見舞に行つたことは覺えてゐる。先生はベッドに仰臥されたまま、たつた一言「大分好い」と言はれた。しかし實際は「大分好い」よりも寧ろ大分惡かつたのであらう。現に先生の奧さんなどは愁はしい顏をしてゐられたものである。

或曇つた冬の日の午後、僕等は皆福間先生の柩を今戸のお寺へ送つて行つた、お葬式の導師になつたのはやはり鷗外先生の「二人の友」の中の「安國寺さん」である。「安國寺さん」は式をすませた後、本堂の前に並んだ僕等に寂滅爲樂の法を說かれた。「北邙山頭一片の煙となり、」――僕は度たび「安國寺さん」のそんなことを言はれたのを覺えてゐる。同時に又丁度その最中に椎雨の降り出したのも覺えてゐる。

僕はこの短い文章に「二人の友」と云ふ題をつけた。それは勿論鷗外先生の「二人の友」を借用したのである。けれども今讀み返して見ると、僕も亦偶然この文章の中に二人の友だちの名を擧げてゐた。福間先生にからかはれたのは必しも久米に限つたことではない。先生はむづかしい顏をされながら、井川にもやはりから言はれた。

「そんな言葉がわからなくてはイカハ。」

（大正十五年一月）

横須賀小景

カフェ

僕は或カフェの隅に半熟の卵を食べてゐた。するとぼんやりした人が一人、僕のテエブルに腰をおろした。僕は驚いてその人をながめた。その人は妙にどろりとした、薄い生海苔の洋服を着てゐた。

虹

僕はいつも煤の降る工廠の裏を歩いてゐた。どんより曇つた工廠の空には虹が一すぢ消えかかつてゐた。僕は踵を擡げるやうにし、ちよつとその虹へ鼻をやつて見た。すると――かすかに石油の匂がした。

五分間寫眞

僕は或晩春の午後、或若い海軍中尉と五分間寫眞を映しに行つた。寫眞はすぐに出來上つた。しかし印畫に映つたのは大きいVIといふ羅馬數字だつた。

小さい泥

僕は或十二三のお孃さんの後ろを歩いて行つた。お孃さんは空色のフロックの下に裸の脚を露してゐた。その叉脚には小さい泥がたつた一つかすかに乾いてゐた。

僕はこのお孃さんの脚の上の泥を眺めて行つた。すると泥はいつの間にかアメリカ大陸に變つてゐた。山脈や湖や鐵道も一々はつきり盛り上つてゐた。

僕はおやと思つてお孃さんを探した。が、お孃さんは見えなかつた。僕の前には横須賀軍港がひろがり、唯一面に三角の波が立つたり倒れたりしてゐるだけだつた。

（大正十五年四月）

囈語

一

僕の胃袋は鯨です。コロムブスの見かけたと云ふ鯨です。時々潮も吐きかねません。吼える聲を聞くのには飽き飽きしました。

二

僕の舌や口腔は時々熱の出る度に羊齒類を一ぱいに生やすのです。

三

一體下痢をする度に大きい蘇鐵を思ひ出すのは僕一人に限つてゐるのかしら？

四

僕は腹鳴りを聞いてゐると、僕自身いつか鮫の卵を產み落してゐるやうに感じるのです。

五

僕は憂鬱になり出すと、僕の腦髓の襞ごとに虱がたかつてゐるやうな氣がして來るのです。

（大正十五年五月）

O君の新秋

僕は膝を抱へながら、洋畫家のO君と話してゐた。赤シャツを着たO君は疊の上に腹這ひになり、のべつにバットをふかしてゐた。その又O君の傍らには妙にものものしい義足が一つ、白足袋の足を仰向かせてゐた。

「まだ殘暑と云ふ感じだね。」

O君は返事をする前にちよつと眉をひそめるやうにし、緣先の紫苑へ目をやつた。何本かの紫苑はいつの間にか細かい花を簇らせたまま、そよりともせずに日を受けてゐた。

「おや、こいつはもう咲いてゐらあ。この……何と云つたつけ、團扇の畫の中にゐる花の野郎は。」

×

海の音の聞えない、空氣の澄んだ日の暮だつた。僕はやはりO君と一しよに廣い砂の道を散歩

してゐた。すると向うからお孃さんが一人、生け垣に沿うて歩いて來た。白地の絣に赤い帶をしめた、可也脊の高いお孃さんだつた。

「あ、あのお孃さんは氣の毒だなあ。長い脚を持て扱つてゐる。」

實際その又お孃さんの態度はO君の言葉にそつくりだつた。

×

O君は杖を小脇にしたまま、或大きい別莊の裏のコンクリイトの塀に立ち小便をしてゐた。そこへ近眼鏡か何かかけた巡査が一人通りかかつた。巡査は勿論咎めたかつたと見え、白扇でO君を指さすやうにした。

「これです。これです。」

O君は多少吃りながら、杖で二三度右の脚を打つた。右の脚は義足だつたから、かんかん云つたのに違ひなかつた。

「僕の家はそこなんですが、……」

巡査はにやにや笑つたぎり、何も言はずに通りすぎてしまつた。

×

家々の屋根や松の梢に西日の殘つてゐる夕がただつた。僕はキヤンディイ・ストアアの前に偶

然O君と顔を合せた。O君は久しぶりに和服に着換へ、松葉杖をついて來たのだつた。

「けふは松葉杖だね。」

O君は白い齒を見せて笑つた。

「ああ、けふはオオル(櫂)にしたよ。」

×

僕はO君の家へ遊びに行き、四疊半の電燈の下にいろいろのことを話し合つた。が、大抵は神經とかテレパシイとかの話だつた。Uと云ふ僕の友だちの一人はコップに水を入れて枕もとへ置き、暫くたつてそのコップを見ると、いつか水が半分になつてゐる。或晩などはうとうとしてゐると、いきなり顏へ水がかかつた。しかし驚いて飛び起きて見ると、コップだけは倒れずにちやんとしてゐる、——そんな話も出たものだつた。

それから僕等は散步かたがた、町まで買ひものに出かけることにした。するとO君はいつもに似合はず、肘掛け窓の戶などをしめはじめた。のみならず僕にかう言つて笑つた。

「この窓に明りがさしてゐるとね、どうもそとから歸つて來た時に誰か一人ここに坐つて、湯でも飮んでゐさうな氣がするからね。」

O君は勿論この家に自炊生活をしてゐるのである。

×

Ｏ君はけふも不相變赤シャツに黒いチョッキを着たまま、午前十一時の裏庭の下に七輪の火を起してゐた。焚きつけは枯れ松葉や松蓋だつた。僕は裏木戸へ顔を出しながら、「どうだね？　飯は炊けるかね？」と言つた。が、Ｏ君はふり返ると、僕の問には答へずにあたりの松の木へ頤をやつた。

「かうやつて飯を炊いてゐるとね、松は皆焚きつけの木――だよ。」

×

パナマ帽をかぶつたＯ君は小高い砂丘に腰をおろし、せつせとブラッシュを動かしてゐた。柱だけの白いバンガロオが一軒、若い松の群立つた中にひつそりと鎧戸を下してゐる。――それを寫生してゐるのだつた。松は僕等の居まはりにも二三尺の高さに伸びたまま、さすがに秋らしい風の中に青い松かさを實のらせてゐた。

「松ぼつくりと云ふものはこんな松にもなるものなんだね。」

Ｏ君はブラッシュを動かしながら、僕の方へ向かずに返事をした。

「女の子が姙娠したと云ふ感じだなあ。」

×

Ｏ君は本職の仕事の間にせつせと發句を作つてゐる。ちよつとＯ君を寫生した次手にそれ等の發句もつけ加へるとすれば――

らん竹に鋏入れたる曇り哉
夜具綿は絲瓜の棚に干しもせよ
わくら葉は蝶となりけり糸すすき
うすら日を糸瓜かはむけ井戸端に
ひときはにあをきは草の松林
大つぶもまじへて栗のはしり哉
鳳仙花種をわりてぞもずのこゑ

（十五・十・十一鵠沼）

夢

夢の中に色彩を見るのは神經の疲れてゐる證據であると云ふ。が、僕は子供の時からずつと色彩のある夢を見てゐる。いや、色彩のない夢などと云ふものはあることも殆ど信ぜられない。現に僕はこの間も夢の中の海水浴場に詩人のH・K君とめぐり合つた。H・K君は麥藁帽をかぶり、美しい紺色のマントを着てゐた。僕はその色に感心したから、「何色ですか？」と尋ねて見た。すると詩人は砂を見たまま、極めて無造作に返事をした。――「これですか？　これは札幌色ですよ。」

それから又夢の中には嗅覺は決して現れないと云ふ。しかし僕は夢の中にゴムか何かを燃やしてゐるらしい惡臭を感じたのを覺えてゐる。それは何でも川の見える、日の暮らしい場末の町を歩いてゐる時の出來事だつた。その又川にはどう云ふ訣か、材木のやうに大きい鰐が何匹も泳いでゐたものである。僕はこの町を歩きながら、「ははあ、これはスウェズの運河の入り口だな」な

どと考へてゐた。(尤も嗅覺のある夢を見たのは前後を通じてこの時だけである。)

最後に僕は夢の中でも歌だの發句だのを作つてゐる。が、名歌や名句は勿論、體を成したものさへ、出來たことはない。その癖いつも夢の中では駄作ではないやうに信じてゐる。僕はこれも四五日前に夢の中の野道を佇んでゐた。そこにはいづれも田舍じみた男女が大勢佇んでをり、その中を小さいお神輿が一臺ワツショワツショとかつがれて行つた。僕はかう云ふ景色を見ながら、一生懸命に發句を作り、大いに得意になつたりした。しかし後に思ひ出して見ると、それは無殘にもこんなものだつた。――「お神輿の渡るを見るや爪立ちて。」

(大正十五年十月)

鴉片

クロオド・フアレエルの作品を始めて日本に紹介したのは多分堀口大學氏であらう。僕はもう六七年前に「三田文學」の爲に同氏の譯した「キツネ」艦の話を覺えてゐる。

「キツネ」艦の話は勿論、フアレエルの作品に染みてゐるものは東洋の鴉片の煙である。僕はこの頃矢野目源一氏の譯した、やはりフアレエルの「靜寂の外に」を讀み、もう一度この煙に觸れることになつた。尤もこの「靜寂の外に」は芳しい鴉片の匂の外にも死人の匂をも漂はせてゐる。「ポオとボオドレエル」兄弟商會の造つた死人の匂をも漂はせてゐる。

「おや、聞えたぞ。いや、空耳だらう。己にはわからない。死人の土地から洩れて來るにしてはあんまり音が大き過ぎる。一體ここで物の割れる音なんかするわけがない。泥溜の中で棺桶が嚏をする。――一枚の板が搖ぶられる。頑丈な釘がうちつけてあるのを恐しい音をさせて軋ませる。……」

これはポオの「Premature Burial」が大西洋の彼岸に傳へた幾多の反響の一つである。が、そんなことはどうでも好い。僕にちよつと面白かつたのは下に引用する一節である。――

「ところで已に佛蘭西の土地で阿片を造らうとして失敗をつづけ乍らさまざまに苦心した。東京から持つて來た罌粟の種子を死骸で肥えた墓地に植ゑて見ると思ひの外に成績がよくてその特徴を發揮させることが出來た。今では、その毒汁で脹らんだ芥子坊主を切りさへすれば、望み通りに茶色の涙のやうなものがぼろぼろと滴り落ちて來る。……」

鴉片に死人を想はせるのはフアレエルの作品に始まつたのではない。僕はこの頃漫然と兪樾の「右台仙館筆記」を讀んでゐるうちにかう云ふ俗傳は支那人の中にもあつたと云ふことを發見した。それは同書の中に揭げた「賈愼庵」の話に出合つたからである。

賈愼庵は何でも乾隆の末の老諸生の一人だつたと云ふことである。それが或夜の夢の中に大きい役所らしい家の前へ行つた。家は重門盡く掩ひ、闃としてどこにも人かげは見えない。「正に徘徊の間、俄かに數人あり、一婦を擁して遠きより來り、この門の外に至る。」それから彼等はどう云ふ量見か、婦人の上下衣を奪つてしまつた。婦人はまだ年少である。のみならず姿色もない訣ではない。「瑩然として裸立す、羞愧の狀、殆ど堪ふ可からず。」氣を負うた賈は直ちに進んで彼等の無狀を叱りつけた。

「汝輩、何びとぞ。敢て無禮を肆する？」

しかし彼等は微笑したまま、かう云ふ返答をしただけである。

「此れ何ぞ異とするに足らん。」

「言、未だ畢らず。門忽ち啓く。數人有り。一巨桶を扛して出づ。一吏文書を執つてその後に隨つて去る。衆卽ち裸婦を擁して入る。賈も亦隨つて入る。」それから數門を過ぎて一廣庭に至ると、

「男女數百を見る。或は立ち、或は坐し、或は臥す。而して皆裸にして寸縷無し。堂上に一官坐す。其前に一大搾牀を設く。健夫數輩、大鐵叉を執り、任意に男婦を將つて槽内に叉置し、大石を用つて之を壓搾す。膏血淋漓たり。下に承くるに盆を以てす。盆滿つれば卽ち巨桶中に挹注す。是の如きもの十余次。巨桶乃ち滿つ。數人之を扛して出づ。官文書を判して一吏に付し、與に同じく出づ。」そこで賈が吏の顏を見ると、これはとうに墓の下へはひつた昔の鄰人の周達夫である。賈は進んで周の名を呼んだ。

「子胡んぞ此に在るか？　此れ豈久しく留る可けんや。速に我に從つて出でよ。」

周は驚いてから言つた。が、賈は更に桶中の物の何であるかを尋ねて見た。

「鴉片煙膏なり。」

鴉片はまだ乾隆の末には今日のやうに流行しなかつた。從つて賈も亦鴉片とは何ものであるか

を知らなかつた。

「鴉片煙とは何物ぞ？」

「方今承平日に久しく、人口過剰に苦しんでゐる。宜しく大刧の銷除する有るべし。元來大刧なるものは水火刀兵の災に過ぐるものはない。この刧に遇ふものは賢愚倶に滅びてしまふ。福善禍淫の說も往往此に至つて窮まるものである。そこで天帝は諸神の會議を召集し、特に鴉片煙刧を創めることにした。鴉片煙刧とは世間の罌粟の花汁を借り、熬錬して膏と成し、人の吸食に任ずるものである。この煙を食ふものは刧中に在り、この煙を食はざるものは刧中に在らず。その人の自ら取るに任かせて造物の不仁を咎めさせないのである。この刧有りて以て人口過剰の數を銷除すれば、則ち水火刀兵の諸刧は十の五六を減ずるであらう。けれどもこの罌粟と云ふものは草花に屬するものであり、古來世間には多いものである。その又汁も淡薄であるから、熬して膏とすることは出來ない。故に九幽の主に命じ、無間地獄中に不忠不孝無禮義破廉恥諸罪の魂を選び取つてこの間に錄送し、膏血を搾取して地上山陵原隰墳衍の神に轉付し、この膏血をして罌粟の花根内に灌ぎ入らしめ、根よりして上は花苞に達せしむれば、則ちその汁も自然に濃郁にして、一たび熬錬を經れば、光色黝然たらん。子試みに之を識れ。數十年の後、この煙天下に遍からん。」

賈は更に尋ねようとした。「忽ち又人有り。數十の男婦を驅りて至る。鞭策甚だ苦。聲を齊うして呼號す。」賈は悸いて目を醒ました。それからこの夢を人に語つた。けれども誰一人信ずるものはない。そのうちに道光の中葉頃に至り、鴉片煙は果して流行し出した。尤も賈はそれよりも前に故人の數にはひつてゐる。しかし賈の夢の話は未だに人の耳に殘つてゐる。そこでその頃誰からともなしに「鴉片煙中死人の膏血有り」などと口々に言ひ囃すやうになつた。……

墓地に植ゑた罌粟の花から絶好の鴉片が得られると云ふのはフアレエルの想像の生んだものであらうか？　それとも又上に揭げた支那の俗傳の生んだものであらうか？　僕は勿論どちらとも斷言する資格を持つてゐない。唯この俗傳を生じたのも或は虞美人の血の化して虞美人艸となつた話に根ざしてゐるかと思ふだけである。

なほ最後につけ加へたいのは鴉片の煙は煙草のそれよりも、——殊に紙卷や葉卷のそれよりも東洋的香氣の强いことである。若し鴉片の煙の匂に近い匂を求めるとすれば、それは人氣のない墓地の隅に寺男か何かの掃き集めた樒の葉を焚いてゐる匂であらう。從つて鴉片の煙の匂は淸朝の支那人は暫く問はず、僕等現代の日本人にも墓、——死人、——死などと云ふ聯想を伴ひ易いものである。が、それ等の聯想は必しもあの「惡の華」の色彩を帶びてゐるとは限つてゐない。僕はこの文章を艸しながら、寧ろいつか讀んだことのある靑々の發句を思ひ出してゐる。——

初冬や谷中あたりの墓の菊

（大正十五年十月）

槐

槐と云ふ樹の名前を覺えたのは「石の枕」と云ふ一中節の淨瑠璃を聞いた時だつたであらう。僕は勿論一中節などを稽古するほど通人ではない。唯親父だのお袋だのの稽古してゐるのを聞き覺えたのである。その文句は何でも觀世音菩薩の「庭に年經し槐の梢」に現れるとか何とか云ふのだつた。

「石の枕」は一つ家の婆さんが石の枕に旅人を寢かせ、路用の金を奪ふ爲に上から綱に吊つた大石を落して旅人の命を奪つてゐる、そこへ美しい稚兒が一人、一夜の宿りを求めに來る、婆さんはこの稚兒も石の枕に寢かせ、やはり殺して金をとらうとしてゐる、すると婆さんの眞名娘が私かにこの稚兒に想ひを寄せ、稚兒の身代りになつて死んでしまふ、それから稚兒は觀世音菩薩と現れ、婆さんに因果應報を教へる、この婆さんの身を投げて死んだ池は未だに淺草寺の境内に「姥の池」となつて殘つてゐる、――大體から云ふ淨瑠璃である。僕は少時國芳の浮世繪にこの話を

書いたのを見てゐたから、「吉原八景」だの「黒髪」だのよりも「石の枕」に興味を感じてゐた。それからその又國芳の浮世繪は觀世音菩薩の衣紋などに西洋畫風の描法を應用してゐたのも覺えてゐる。

僕はその後槐の若木を見、そのどこか圖案的な枝葉を如何にも觀世音菩薩の出現などにふさはしいと思つたものである。が、四五年前に北京に遊び、のべつに槐ばかり見ることになつたら、いつか詩趣とも云ふべきものを感じないやうになつてしまつた。唯青い槐の實の莢だけは未だに風流だと思つてゐる。

北京

灰捨つる路は槐の莢ばかり

（大正十五年十月）

鬼ごつこ

彼は或町の裏に年下の彼女と鬼ごつこをしてゐた。まだあたりは明るいものの、丁度町角の街燈には瓦斯のともる時分だつた。

「ここまで來い。」

彼は樂々と逃げながら、鬼になつて來る彼女を振りかへつた。彼女は彼を見つめたまま、一生懸命に追ひかけて來た。彼はその顏を眺めた時、妙に眞劍な顏をしてゐるなと思つた。

その顏は可也長い間、彼の心に殘つてゐた。が、年月の流れるのにつれ、いつかすつかり消えてしまつた。

それから二十年ばかりたつた後、彼は雪國の汽車の中に偶然、彼女とめぐり合つた。窓の外が暗くなるのにつれ、沾めつた靴や外套の匂ひが急に身にしみる時分だつた。

「暫くでしたね。」

彼は巻煙草を銜へながら、(それは彼が同志と一しよに刑務所を出た三日目だつた。)ふと彼女の顔へ目を注いだ。近頃夫を失つた彼女は熱心に彼女の兩親や兄弟のことを話してゐた。彼はその顔を眺めた時、妙に眞劒な顔をしてゐるなと思つた。と同時にいつの間にか十二歳の少年の心になつてゐた。

彼等は今は結婚して或郊外に家を持つてゐる。が、彼はその時以來、妙に眞劒な彼女の顔を一度も目のあたりに見たことはなかつた。(大正一五・一二・一)

僕は

誰でもわたしのやうだらうか？——ジュウル・ルナアル

僕は屈辱を受けた時、なぜか急には不快にはならぬ。が、彼是一時間ほどすると、だんだん不快になるのを常としてゐる。

×

僕はロダンのウゴリノ伯を見た時、——或はウゴリノ伯の寫眞を見た時、忽ち男色を思ひ出した。

×

僕は樹木を眺める時、何か我々人間のやうに前後ろのあるやうに思はれてならぬ。

×

僕は時々暴君になつて大勢の男女を獅子や虎に食はせて見たいと思ふことがある。が、膿盆の中に落ちた血だらけのガアゼを見ただけでも、肉體的に忽ち不快になつてしまふ。

×

僕は度たび他人のことを死ねば善いと思つたことがある。その又死ねば善いと思つた中には僕の肉親さへゐないことはない。

×

僕はどう云ふ良心も、——藝術的良心さへ持つてゐない。が、神經は持ち合せてゐる。

×

僕は滅多に憎んだことはない。その代りには時々輕蔑してゐる。

×

僕自身の經驗によれば、最も甚しい自己嫌惡の特色はあらゆるものに譃を見つけることである。しかもその又發見に少しも滿足を感じないことである。

×

僕はいろいろの人の言葉にいつか耳を傾けてゐる。たとへば肴屋の小僧などの「こんちはア」と云ふ言葉に。あの言葉は母音に終つてゐない、ちよつと羅馬字に書いて見れば、Konchiwaas と云ふのである。なぜ又あの言葉は必要もないsを最後に伴ふのかしら。

×

僕はいつも僕一人ではない。息子、亭主、牡、人生觀上の現實主義者、氣質上のロマン主義者、哲學上の懷疑主義者等、等、等、――それは格別差支へない。しかしその何人かの僕自身がいつも喧嘩するのに苦しんでゐる。

×

僕は未知の女から手紙か何か貰つた時、まづ考へずにゐられぬことはその女の美人かどうかである。

×

あらゆる言葉は錢のやうに必ず兩面を具へてゐる。僕は彼を「見えばう」と呼んだ。しかし彼はこの點では僕と大差のある訣ではない。が、僕自身に從へば、僕は唯「自尊心の強い」だけである。

×

僕は醫者に容態を聞かれた時、まだ一度も正確に僕自身の容態を話せたことはない。從つて譃をついたやうな氣ばかりしてゐる。

×

僕は僕の住居を離れるのに從ひ、何か僕の人格も曖昧になるのを感じてゐる。この現象が現れるのは僕の住居を離れること、三十哩前後に始まるらしい。

×

僕の精神的生活は滅多にちやんと歩いたことはない。いつも蚤のやうに跳ねるだけである。

×

僕は見知越しの人に會ふと、必ずこちらからお時宜をしてしまふ。從つて向うの氣づかずにゐる時には「損をした」と思ふこともないではない。（大正一五・一二・四）

或社會主義者

彼は若い社會主義者だつた。或小官吏だつた彼の父はそのためにかれを勘當しようとした。が、彼は屈しなかつた。それは彼の情熱が烈しかつたためでもあり、又一つには彼の友だちが彼を激勵したためでもあつた。

彼等は或團體をつくり、十ペエジばかりのパンフレットを出したり、演說會を開いたりしてゐた。彼も勿論彼等の會合へ絶えず顏を出した上、時々そのパンフレットへ彼の論文を發表した。彼の論文は彼等以外に誰も餘り讀まないらしかつた。しかし彼はその中の一篇、――「リイプクネヒトを憶ふ」の一篇に多少の自信を抱いてゐた。それは緻密な思索はないにしても、詩的な情熱に富んだものだつた。

そのうちに彼は學校を出、或雜誌社へ勤めることになつた。けれども彼等の會合へ顏を出すことは怠らなかつた。彼等は相變らず熱心に彼等の問題を論じ合つてゐた。のみならず地下水の石

を窺つやうにじりじり實行へも移らうとしてゐた。

彼の父も今となつては彼に干渉を加へなかつた。彼は或女と結婚し、小さい家に住むやうになつた。彼の家は實際小さかつた。が、彼は不滿どころか、可なり幸福に感じてゐた。妻、小犬、庭先のポプラア、――それ等は彼の生活に何か今まで感じなかつた或親しみを與へたのだつた。

彼は家庭を持つたために、一つには又寸刻を爭ふ勤め先の仕事に追はれたために、いつか彼等の會合へ顏を出すのを怠るやうになつた。しかし彼の情熱は決して衰へた訣ではなかつた。少くとも彼は現在の彼も決して數年以前の彼と變らないことを信じてゐた。が、彼等は――彼の同志は彼自身のやうには考へなかつた。殊に彼等の團體へ新にはひつて來た青年たちは彼の怠惰を非難するのに少しも遠慮を加へなかつた。

それは勿論いつの間にか一層彼等の會合から彼を遠ざけずには措かなかつた。そこへ彼は父親になり、愈家庭に親しみ出した。けれども彼の情熱はやはり社會主義に向つてゐた。彼は夜更の電燈の下に彼の勉强を怠らなかつた。同時に又彼が以前書いた十何篇かの論文には、――就中「リイプクネヒトを憶ふ」の一篇にはだんだん物足らなさを感じ出した。

彼等も又彼に冷淡になつた。彼はもう彼等には非難するのにも足らないものだつた。彼等は彼を殘したまま、――或は大體彼に近い何人かの人々を殘したまま、著々と仕事を進めて行つた。

彼は舊友に會ふたびに今更のやうに愚痴をこぼしたりしてゐた。が、實は彼自身もいつかただ俗人の平和に滿足してゐたのに違ひなかつた。

それから何年かたつた後、彼は或會社へ勤め、重役たちの信用を得るやうになつた。從つて今では以前よりも兎も角大きい家に住み、何人かの子供を育てるやうになつた。しかし彼の情熱は、——そのどこにあるかといふことは神の知るばかりかも知れなかつた。彼は時々籐椅子により、一本の葉卷を樂しみながら、彼の青年時代を思ひ出した。それは妙に彼の心を憂鬱にすることもない訣ではなかつた。けれども東洋の「あきらめ」はいつも彼を救ひ出すのだつた。

彼は確に落伍者だつた。が、彼の「リイプクネヒトを憶ふ」は或青年を動かしてゐた。それは株に手を出した擧句、親讓りの財産を失つた大阪の或青年だつた。その青年は彼の論文を讀み、それを機緣に社會主義者になつた。が、勿論そんなことは彼には全然わからなかつた。彼は今でも籐椅子により、一本の葉卷を樂しみながら、彼の青年時代を思ひ出してゐる、人間的に、恐らくは餘りに人間的に。（大正一五・一二・一〇）

塵勞

或春の午後であつた。私は知人の田崎に面會する爲に彼が勤めてゐる出版書肆の狹い應接室の椅子に倚つてゐた。

「やあ、珍しいな。」

間もなく田崎は忙しさうに、萬年筆を耳に挾んだ儘、如何はしい背廣姿を現した。

「ちと君に頼みたい事があつてね、――實は二三日保養旁、修善寺か湯河原へ小說を書きに行きたいんだが、……」

私は早速用談に取りかかつた。近々私の小說集が、この書肆から出版される。その印稅の前借が出來るやうに、一つ骨を折つて見てはくれまいか。――これがその用談の要點であつた。

「そりや出來ない事もないが、――しかし溫泉へ行くなぞは贅澤だな。僕はまだ臍の緒切つて以來、旅行らしい旅行はした事がない。」

田崎は「朝日」へ火をつけると、その生活に疲れた顔へ、無邪氣な羨望の色を漲らせた。
「何處へでも旅行すれば好いぢやないか。君なぞは獨身なんだし。」
「所が貧乏暇なしでね。」
私はこの舊友の前に、聊か私の結城の着物を恥ぢたいやうな心もちになつた。
「だが君は隨分長い間、この店に勤めてゐるぢやないか。一體今は何をしてゐるんだ。」
「僕か。」
田崎は「朝日」の灰を落しながら、始めて得意さうな返事をした。
「僕は今旅行案内の編纂をしてゐるんだ。まづ今までに類のない、大規模な旅行案内を拵へて見ようと思つてね。」

貝殼

一 猫

彼等は田舍に住んでゐるうちに、猫を一匹飼ふことにした。猫は尾の長い黒猫だつた。彼等はこの猫を飼ひ出してから、やつと鼠の災難だけは免れたことを喜んでゐた。

半年ばかりたつた後、彼等は東京へ移ることになつた。勿論猫も一しよだつた。しかし彼等は東京へ移ると、いつか猫が前のやうに鼠をとらないのに氣づき出した。「どうしたんだらう？ 肉や刺身を食はせるからかしら？」「この間Rさんがさう言つてゐましたよ。猫は鹽の味を覺えると、だんだん鼠をとらないやうになるつて。」——彼等はそんなことを話し合つた末、試みに猫を餓ゑさせることにした。

しかし、猫はいつまで待つても、鼠をとつたことは一度もなかつた。そのくせ鼠は毎晩のやうに天井裏を走りまはつてゐた。彼等は、——殊に彼の妻は猫の横着を憎み出した。が、それは横着ではなかつた。猫は目に見えて瘦せて行きながら、掃き溜めの魚の骨などをあさつてゐた。「つ

まり都會的になつたんだよ。」——彼はこんなことを言つて笑つたりした。

そのうちに彼等はもう一度田舎住ひをすることになつた。けれども猫は不相變少しも鼠をとらなかつた。彼等はとうとう愛想をつかし、氣の强い女中に言ひつけて猫を山の中へ捨てさせてしまつた。

すると或晩秋の朝、彼は雜木林の中を歩いてゐるうちに偶然この猫を發見した。猫は丁度雀を食つてゐた。彼は腰をかがめるやうにし、何度も猫の名を呼んで見たりした。が、猫は鋭い目にぢつと彼を見つめたまま、寄りつかうとする氣色も見せなかつた。しかもパリパリ音を立てて雀の骨を噛み碎いてゐた。

二　河鹿

或溫泉にゐる母から息子へ人傳てに屆けたもの、——櫻の實、笹餅、土瓶へ入れた河鹿が十六匹、それから土瓶の蔓に結びつけた走り書きの手紙が一本。

その手紙の一節はかうである。——「この河鹿は皆雄に候。雌はあとより屆け候。尤も雌雄とも一つ籠に入れぬやうに。雌は皆雄を食ひ殺し候。」

三　或女の話

わたしは丁度十二の時に修學旅行に直江津へ行きました。（わたしの小學校は信州のXと云ふ町にあるのです。）その時始めて海と云ふものを見ました。それから又汽船と云ふものを見ました。汽船へ乘るには棧橋からはしけに乘らなければなりません。私達のゐた棧橋にはやはり修學旅行に來たらしい、どこか外の小學校の生徒も大勢わいわい言つてゐました。その外の小學校の生徒がはしけへ乘らうとした時です。黑い詰襟の洋服を着た二十四五の先生が一人、（いいえ、わたしの學校の先生ではありません。）いきなりわたしを抱き上げてはしけへ乘せてしまひました。それは勿論間違ひだつたのです。その先生は暫くたつてから、わたしの學校の先生がわたしを受けとりにやつて來た時、何度もかう言つてあやまつてゐました。――「どうもうちの生徒にそつくりだもんですから。」

その先生がわたしを抱き上げてはしけへ乘せた時の心もちですか？　わたしはずゐぶん驚きましたし、怖いやうにも思ひましたけれども、その外にまだ何となく嬉しい氣もしたやうに覺えてゐます。

四　或運轉手

銀座四丁目。或電車の運轉手が一人、赤旗を青旗に見ちがへたと見え、いきなり電車を動かしてしまつた。が、間違ひに氣づくが早いか、途方もないおほ聲に「アヤマリ」と言つた。僕はその聲を聞いた時、忽ち兵營や練兵場を感じた。僕の直覺は當つてゐたかしら。

五　失敗

あの男は何をしても失敗してゐた。最後にも――あの男は最後には壯士役者になり白瀨中尉を當てこんだ「南極探險」と云ふ芝居へ出ることになつた。勿論それは夏芝居だつた。あの男は唯ペングイン鳥になり、氷山の間を歩いてゐた。そのうちに烈しい暑さの爲にとうとう悶絶して死んでしまつた。

六　東京人

或待合のお上さんが一人、懇意な或藝者の爲に或出入りの呉服屋へ帯を一本賴んでやつた。扨その帯が出來上つて見ると、それは註文主のお上さんには勿論、若い呉服屋の主人にも派手過ぎ

ると思はずにはゐられぬものだつた。そこでこの呉服屋の主人は何も言はずに二百圓の帶を百五十圓にをさめることにした。しかしこちらの心もちは相手のお上さんには通じてゐた。

お上さんは金を拂つた後、格別その帶を藝者にも見せずに簞笥の中にしまつて置いた。が、藝者は暫くたつてから、「お上さん、あの帶はまだ？」と言つた。お上さんはやむを得ずその帶を見せ、實際は百五十圓拂つたのに藝者には値段を百二十圓に話した。それは藝者の顏色でも、やはり派手過ぎると思つてゐることは、はつきりお上さんにわかつた爲だつた。が、藝者も亦何も言はずにその帶を貰つて歸つた後、百二十圓の金を屆けることにした。

藝者は百二十圓と聞いたものの、その帶がもつと高いことは勿論ちやんと承知してゐた。それから彼女自身はしめずに妹にその帶をしめさせることにした。何、莫迦莫迦しい遠慮ばかりしてゐる？——東京人と云ふものは由來かう云ふ莫迦莫迦しい遠慮ばかりしてゐる人種なのだよ。

七　幸福な悲劇

彼女は彼を愛してゐた。彼も亦彼女を愛してゐた。が、どちらも彼等の氣もちを相手に打ち明けるのに臆病だつた。

彼はその後彼女以外の——假に3と呼ぶとすれば、3と云ふ女と馴染み出した。彼女は彼に反

感を生じ、彼以外の――假に4と呼ぶとすれば、4と云ふ男に馴染み出した。彼は又急に嫉妬を感じ、彼女を4から奪はうとした。彼女も彼と馴染むことは本望だつたのに違ひなかつた。しかしもうその時には幸福にも――或は不幸にもいつか4に愛を感じてゐた。のみならず更に幸福だつたことには――或はこれも不幸だつたことには彼もいざとなつて見ると、冷かに3と別れることは出來ない心もちに陷つてゐた。

彼は3と逢ひながら、時々彼女のことを思ひ出してゐる。彼女も亦4と遠出をする度に耳慣れない谷川の音などを聞き、時々彼のことを思ひ出してゐる。……

八　實感

或殺人犯人の言葉。――「わたしはあいつを殺しました。あいつが幽靈に出て來るのは尤も過ぎる位尤もです。唯わたしが殺した通りの死骸になつて出て來るならば、恐ろしいことも何もありません。けれどもあいつが生きてゐる時と少しも變らない姿をして立つてゐたり何かするのが恐しいのです。ほんたうにどうせ幽靈に出るならば、死骸になつて出て來やがれば好いのに。」

九　車力

僕は十一か十二の時、空き箱を積んだ荷車が一臺、坂を登らうとしてゐるを見、後ろから押してやらうとした。するとその車を引いてゐた男は車越しに僕を見返るが早いか、「こら」とおほ聲に叱りつけた。僕は勿論この男の誤解を不快に思はずにはゐられなかつた。

それから五六日たつた後、この男は又荷車を引き、前と同じ坂を登らうとしてゐた。今度は積んであるのは炭俵だつた。僕は「勝手にしろ」と思ひ、唯道ばたに佇んでゐた。すると車の搖れる拍子に炭俵が一つ轉げ落ちた。この男はやつと梶棒を下ろし、元のやうに炭俵を積み直した。それは僕には何ともなかつた。が、この男は前こごみになり、炭俵を肩へ上げながら、誰か人間にでも話しかけるやうに「こん畜生、いやに氣を利かしやがつて。車から下りるのはまだ早いや」と言つた。僕はそれ以來この男に、――この黑ぐろと日に燒けた車力に或親しみを感ずるやうになつた。

十　或農夫の論理

或山村の農夫が一人、隣家の牝牛を盜んだ爲に三箇月の懲役に服することになつた。獄中の彼は別人のやうに神妙に一々獄則を守り、模範的囚人と呼ばれさへした。が、免役になつて歸つて來ると、もう一度同じ牝牛を盜み出した。隣家の主人は立腹し、今度も亦警察權を借りることに

した。彼等の村の駐在所の巡査は早速彼を拘引した上、威丈高に彼を叱りつけた。

「貴様は性も懲りもない奴だな。」

すると彼は佛頂面をしたまま、かう巡査に返事をした。

「わしはあの牛を盗んだから、三箇月も苦役をして來たのでせう。して見ればあの牛はわしのものです。それが家へ歸つて見ると、やつぱり隣の小屋にゐましたから、（尤も前よりは肥つてゐました。）わしの小屋へ曳いて來ただけですよ。それがどこが惡いのです？」

十一　嫉妬

「わたしはずゐぶん嫉妬深いと見えます。たとへば宿屋に泊まつた時、そこの番頭や女中たちがわたしに愛想よくお時宜をするでせう。それから又外の客が來ると、やはり前と同じやうに愛想よくお時宜をしてゐるでせう。わたしはあれを見てゐると何だか後から來た客に反感を持たずにはゐられないのです。」――その癖僕にかう言つた人は僕の知つてゐる人々のうちでも一番溫厚な好紳士だつた。

十二　第一の接吻

彼は彼女と夫婦になつた後、彼女に今までの彼に起つた、あらゆる情事を打ち明けることにした。その結果は彼の豫想したやうに彼等の幸福を保證することになつた。しかし彼は彼女にもたつた一つの情事だけは打ち明けなかつた。それは彼が十八の時、或年上の宿屋の女中と接吻したと云ふことだつた。彼は何もこの情事だけは話すまいと思つた訣ではなかつた。唯ちよつとしたことだつた爲に話さずとも善いと思つただけだつた。

それから二三年たつた後、彼は何かの話の次手にふと彼女にこの情事を話した。すると彼女は顔色を變へ、「あなたはあたしを欺ましてゐた」と言つた。それは小さい刺のやうにいつまでも彼等夫婦の間に波瀾を起す種になつてしまつた。彼は彼女と喧嘩をした後、何度もひとりこんなことを考へなければならなかつた。――「俺は餘り正直だつたのかしら。それとも又どこか内心には正直になり切らずにゐたのかしら。」

十三　「いろは字引」にない言葉

彼はエディンバラに留學中、電車に飛び乗らうとして轉げ落ち、人事不省になつてしまつた。が、病院へかつぎこまれる途中も譫語に英語をしやべつてゐた。彼の健康が恢復した後、彼の友だちは何げなしに彼にこのことを話して聞かせた。彼はそれ以來別人のやうに彼の語學力に確信

を持ち、とうとう名高い英語學者になつた。――これは彼の立志譚である。しかし僕に面白かつたのは彼の留守宅に住んでゐた彼の母親の言葉だつた。

「うちの息子は學問をして日本語はすつかり知り悉してしまひましたから、今度はわざわざ西洋へ行つて『いろは字引』にない言葉を習つてゐます。」

十四　母と子と

彼は近頃彼の母が藝者だつたことを知るやうになつた。しかも今は彼の母が北京の羊肉胡同に料理屋を出してゐることも知るやうになつた。彼は商賣上の用向きの爲に二三日北京に滯在するのを幸ひ、久しぶりに彼女に會つて見ることにした。

彼はその料理屋へ尋ねて行き、未だに白粉の厚い彼女と一時間ばかり話をした。が、彼女の空しいお世辭に幻滅を感ぜずにはゐられなかつた。それは彼女が几帳面な彼に何かケウトイ心もちを感じた爲にも違ひなかつた。しかし又一つには今の檀那に彼女の息子が尋ねて來たことを隱したかつた爲にも違ひなかつた。

彼女は彼の歸つた後、肩の凝りの癒つたやうに感じた。が、翌日になつて見ると、親子の情などと云ふことを考へ、何か彼に素つ氣なかつたのをすまないやうにも感じ出した。彼がどこに泊

つてゐるかは勿論彼女にはわかつてゐた。彼女は日暮れにならないうちにと思ひ、薄汚い支那の人力車に乘つて彼のゐる旅館へ尋ねて行つた。けれどもそれは不幸にも彼が漢口へ向ふ爲に旅館を出てしまつたところだつた。彼女は妙に寂しさを覺え、やむを得ず又人力車に乘つて砂埃りの中を歸つて行つた。いつか彼女も白髮を拔くのに追はれ出したことなどを考へながら。

彼はその日も暮れかかつた頃、京漢鐵道の客車の窓に白粉臭い母のことを考へてゐた。すると何か今更のやうに多少の懷しさも感じないではなかつた。が、彼女の金齒の多いのはどうも彼には愉快ではなかつた。

十五　修辭學

東海道線の三等客車の中。大工らしい印絆纏の男が一人、江尻あたりの海を見ながら、つれの男にかう言つてゐた――「見や。浪がチンコロのやうだ。」

（大正十五年十二月）

春の夜は

一

僕はコンクリイトの建物の並んだ丸の内の裏通りを歩いてゐた。すると何か匂を感じた。何か、？――ではない。野菜サラドの匂である。僕はあたりを見まはした。が、アスファルトの往來には五味箱一つ見えなかつた。それは又如何にも春の夜らしかつた。

二

U――「君は夜は怖くはないかね？」

僕――「格別怖いと思つたことはない。」

U――「僕は怖いんだよ。何だか大きい消しゴムでも噛んでゐるやうな氣がするからね。」

これも、――このUの言葉もやはり如何にも春の夜らしかつた。

三

僕は支那の少女が一人、電車に乘るのを眺めてゐた。それは季節を破壞する電燈の光の下だつたにもせよ、實際春の夜に違ひなかつた。少女は僕に後ろを向け、電車のステップに足をかけようとした。僕は卷煙草を銜へたまま、ふとこの少女の耳の根に垢の殘つてゐるのを發見した。その又垢は垢と云ふよりも「よごれ」と云ふのに近いものだつた。僕は電車の走つて行つた後もこの耳の根に殘つた垢に何か暖さを感じてゐた。

四

或春の夜、僕は路ばたに立ち止つた馬車の側を通りかかつた。馬はほつそりした白馬だつた。僕はそこを通りながら、ちよつとこの馬の頸すぢに手を觸れて見たい誘惑を感じた。

五

これも或春の夜のことである。僕は往來を歩きながら、鮫の卵を食ひたいと思ひ出した。

六

春の夜の空想。――いつかカツフエ・プランタンの窓は廣い牧場に開いてゐる。その又牧場のまん中には丸焼きにした鷄が一羽、首を垂れて何か考へてゐる。……

七

春の夜の言葉。――「やすちやんが青いうんこをしました。」

八

或三月の夜、僕はペンを休めた時、ふとニツケルの懷中時計の進んでゐるのを發見した。隣室の掛け時計は十時を打つてゐる。が、懷中時計は十時半になつてゐる。僕は懷中時計を置き火燵の上に置き、丁寧に針を十時へ戻した。それから又ペンを動かし出した。時間と云ふものはかう云ふ時ほど、存外忽に過ぎることはない。掛け時計は今度は十一時を打つた。僕はペンを持つたまま、懷中時計へ目をやると、――今度は不思議にも十二時になつてゐた。懷中時計は暖まると、針を早くまはすのかしら？

九

誰か椅子の上に爪を磨いてゐる。誰か窓の前にレエスをかがつてゐる。誰かやけに花をむしつてゐる。誰かそつと鸚鵡を絞め殺してゐる。誰か小さいレストランの裏の煙突の下に眠つてゐる。誰か帆前船の帆をあげてゐる。誰か柔い白パンに木炭畫の線を拭つてゐる。誰か瓦斯の匂の中にシヤベルの泥をすくひ上げてゐる。誰か、――ではない。まるまると肥つた紳士が一人、「詩韻含英」を擴げながら、未だに春宵の詩を考へてゐる。……（昭和二・二・五）

輕井澤で

黒馬に風景が映つてゐる。

×

朝のパンを石竹の花と一しよに食はう。

×

この一群の天使たちは蓄音機のレコオドを翼にしてゐる。

×

町はづれに栗の木が一本。その下にインクがこぼれてゐる。

×

青い山をひつ掻いて見給へ。石鹸が幾つもころげ出すだらう。

×

英字新聞には黄瓜を包め。

×

誰かあのホテルに蜂蜜を塗つてゐる。

×

M夫人——舌の上に蝶が眠つてゐる。

×

Fさん——額の毛が乞食をしてゐる。

×

Oさん——あの口髭は駝鳥の羽根だらう。

×

詩人S・Mの言葉——芒の穂は毛皮だね。

×

或牧師の顔——臍！

×

レエスやナプキンの中へずり落ちる道。

碓氷山上の月、――月にもかすかに苔が生えてゐる。

×

老夫人の死、――霧は佛蘭西の幽靈に似てゐる。

×

馬蠅は水星にも群つて行つた。

×

ハムモツクを額に感じるうるささ。

×

雷は胡椒よりも辛い。

×

「巨人の椅子」と云ふ岩のある山、――瞬かない顔が一つ見える。

×

あの家は桃色の齒齦をしてゐる。

×

羊の肉には羊歯の葉を添へ給へ。

×

さやうなら。手風琴の町、さやうなら、僕の抒情詩時代。

（大正十四年稿）

都會で

——或は千九百十六年の東京——

一

風に靡いたマッチの炎ほど無氣味にも美しい青いろはない。

二

如何に都會を愛するか？——過去の多い女を愛するやうに。

三

雪のふつた公園の枯芝は何よりも砂糖漬にそつくりである。

四

僕に中世紀を思ひ出させるのは厳めしい赤煉瓦の監獄である。若し看守さへゐなければ、馬に乗つたジアン・ダアクの飛び出すのに遇つても驚かないかも知れない。

五

或女給の言葉。――いやだわ。今夜はヽヽヽナイホクなんですもの。

註。ヽヽヽナイホクはナイフだのフォオクだのを洗ふ番に當ることである。

六

並み木に多いのは篠懸である。橡も三角楓も極めて少ない。しかし勿論派出所の巡査はこの木の古典的趣味を知らずにゐる。

七

令孃に近い藝者が一人、僕の五六歩前に立ち止まると、いきなり擧手の禮をした。僕はちよつと狼狽した。が、後ろを振り返つたら、同じ年頃の藝者が一人、やはりちやんと擧手の禮をしてゐた。

八

最も僕を憂鬱にするもの。——カアキイ色に塗つた煙突。電車の通らない線路の錆び。屋上庭園に飼はれてゐる猿。……

九

僕は午前一時頃或町裏を通りかかつた。すると泥だらけの土工が二人、瓦斯か何かの工事をしてゐた。狹い路は泥の山だつた。のみならずその又泥の山の上にはカンテラの火が一つ靡いてゐた。僕はこのカンテラの爲にそこを通ることも困難だつた。すると若い土工が一人、穴の中から半身を露したまま、カンテラを側へのけてくれた。僕は小聲に「ありがたう」と言つた。が、何か僕自身を憐みたい氣もちもない訣ではなかつた。

十

夜半の隅田川は何度見ても、詩人S・Mの言葉を越えることは出來ない。——「羊羹のやうに流れてゐる。」

十一

「××さん、遊びませう」と云ふ子供の聲、——あれは音の高低を示せば、×× San Asobi-ma show である。あの音はいつまで殘つてゐるかしら。

十二

火事はどこか祭禮に似てゐる。

十三

東京の冬は何よりも漬け菜の莖の色に現れてゐる。殊に場末の町々では。

十四

何かものを考へるのに善いのはカツフエの一番隅の卓子、それから孤獨を感じるのに善いのは人通りの多い往來のまん中、最後に靜かさを味ふのに善いのは開幕中の劇場の廊下、……

（昭和二年一月）

女仙

昔、支那の或田舍に書生が一人住んでゐました。何しろ支那のことですから、桃の花の咲いた窓の下に本ばかり讀んでゐたのでせう。すると、この書生の家の隣に年の若い女が一人、――それも美しい女が一人、誰も使はずに住んでゐました。書生はこの若い女を不思議に思つてゐたのはもちろんです。實際又彼女の身の上をはじめ、彼女が何をして暮らしてゐるかは誰一人知るものもなかつたのですから。

或風のない春の日の暮、書生はふと外へ出て見ると、何かこの若い女の罵つてゐる聲が聞えました。それは又どこかの庭鳥がのんびりと鬨を作つてゐる中に、如何にも物ものしく聞えるのです。書生はどうしたのかと思ひながら、彼女の家の前へ行つて見ました。すると眉を吊り上げた彼女は、年をとつた木樵りの爺さんを引き据ゑ、ぽかぽか白髮頭を擲つてゐるのです。しかも木樵りの爺さんは顏中に涙を流したまま、平あやまりにあやまつてゐるではありませんか！

「これは一體どうしたのです？　何もかう云ふ年よりを、擲らないでも善いぢやありませんか！
――」

書生は彼女の手を抑へ、熱心にたしなめにかかりました。

「第一年上のものを擲ると云ふことは、修身の道にもはづれてゐる訣です。」

「年上のものを？　この木樵りはわたしよりも年下です。」

「冗談を言つてはいけません。」

「いえ、冗談ではありません。わたしはこの木樵りの母親ですから。」

書生は呆氣にとられたなり、思はず彼女の顔を見つめました。やつと木樵りを突き離した彼女は美しい、――と云ふよりも凛々しい顔に血の色を通はせ、目ぢろぎもせずにかう言ふのです。

「わたしはこの倅の爲に、どの位苦勞をしたかわかりません。けれども倅はわたしの言葉を聞かずに、我儘ばかりしてゐましたから、とうとう年をとつてしまつたのです。」

「では、……この木樵りはもう七十位でせう。その又木樵りの母親だと云ふあなたは、一體いくつになつてゐるのです？」

「わたしですか？　わたしは三千六百歳です。」

書生はかう云ふ言葉と一しよに、この美しい隣の女が仙人だつたことに氣づきました。しかし

もうその時には、何か神々しい彼女の姿は忽ちどこかへ消えてしまひました。うらうらと春の日の照り渡つた中に木樵りの爺さんを殘したまま。……（昭和二・二・二十五）

耳目記

×

僕等の性格は不思議にも大抵頸すぢの線に現はれてゐる。この線の鈍いものは敏感ではない。

×

それから又僕等の性格は聲にも現れてゐる。聲の堅いものは必ず強い。

×

筍、海苔、蕎麥、――かう云ふものを猫の食ふことは僕には驚嘆する外はなかつた。

×

或狂信者のポルトレエ――彼は皮膚に光澤を持つてゐる。それから熱心に話す時にはいつも片眼をつぶり、銃でも狙ふやうにしないことはない。

×

僕は話に熱中する度に左の眉だけ擧げる人と話した。ああいふ眉は多いものかしら。

×

僕は教育なり趣味なりの大抵同程度と思ふ人々に何枚かの女の寫眞を見せ、一番美人と思ふのを選んで貰つた。が、二十五人中同じ女を美人と言つたのはたつた二人ゐただけだつた。即ち女の美醜を定めるのさへ百分の四以上を超えないらしい。しかもこれは前に言つたやうに教育なり趣味なりの程度の似よつた人びとの間だけである。

×

或果物問屋の娘の話。――川に西瓜が一つ浮いてゐると思つたら、土左衞門の頭だつたのです。

×

僕は肥つた人の手を見ると、なぜか海豹の鰭を思ひ出してゐる。

×

僕は女の人生の戰利品を三つ記憶してゐる。
一つは長女に後を向けて次男に乳をのませてゐる女親。
一つは或女給の胸に下つたいろいろの學校のメダルの一ふさ。
一つは或玄人上りの細君の必ず客の前へ抱いて來る赤兒。

（昭和二年四月）

素描三題

一　お宗さん

お宗さんは髮の毛の薄いためにどこへも緣づかない覺悟をしてゐた。が、髮の毛の薄いことはそれ自身お宗さんには愉快ではなかつた。お宗さんは地肌の透いた頭へいろいろの毛生え藥をたすつたりした。

「どれも廣告ほどのことはないんですよ。」

かういふお宗さんも聲だけは善かつた。そこで賃仕事の片手間に一中節の稽古をし、もし上達するものとすれば師匠になるのも善いと思ひ出した。しかし一中節はむづかしかつた。のみならず酒癖の惡い師匠は、時々お宗さんをつかまへては小言以上の小言を言つたりした。

「お前さんなんどは肥たご桶を叩いて甚句でもうたつてお出でなさりや善いのに。」

師匠は酒の醒めてゐる時には決してお宗さんにも粗略ではなかつた。しかし一度言はれた小言はお宗さんをひがませずには措かなかつた。「どうせあたしは檀那衆のやうによくする訣には行

かないんだから。」――お宗さんは時々兄さんにもそんな愚痴などをこぼしてゐた。

「曾我の五郎と十郎とは一體どつちが兄さんです？」

四十を越したお宗さんは「形見おくり」を習つてゐるうちに眞面目にかういふことを尋ねたりした。この返事には誰も當惑した。誰も？――いや「誰も」ではない。やつと小學校へはひつた僕はすぐに「十郎が兄さんですよ」といひ、反つてみんなに笑はれたのを羞しがらずにはゐられなかつた。

「何しろああいふお師匠さんぢやね。」

一中節の師匠になることはとうとうお宗さんには出來なかつた。お宗さんはあの震災のために家も何も燒かれたとかいふことだつた。のみならず一時は頭の具合も妙になつたとかいふことだつた。僕はお宗さんの髮の毛も何か頭の病氣のために薄いのではないかと思つてゐる。お宗さんの使つた毛生え藥は何も賣藥ばかりではない。お宗さんはいつか蝙蝠の生き血を一面に頭に塗りつけてゐた。

「鼠の子の生き血も善いといふんですけれども。」

お宗さんは圓い目をくるくるさせながら、きよとんとしてこんなことも言つたものだつた。

二　裏畠

それはＫさんの家の後ろにある二百坪ばかりの畠だつた。Ｋさんはそこに野菜のほかにもポンポン・ダリアを作つてゐた。その畠を塞いでゐるのは一日に五、六度汽車の通る一間ばかりの堤だつた。

或夏も暮れかかつた午後、Ｋさんはこの畠へ出、もう花もまれになつたポンポン・ダリアに鋏を入れてゐた。すると汽車は堤の上をどつと一息に通りすぎながら、何度も鋭い非常警笛を鳴らした。同時に何か黒いものが一つ畠の隅へころげ落ちた。Ｋさんはそちらを見る拍子に「又庭鳥がやられたな」と思つた。それは實際黒い羽根に青い光澤を持つてゐるミノルカ種の庭鳥にそつくりだつた。のみならず何か鷄冠らしいものもちらりと見えたのに違ひなかつた。

しかし庭鳥と思つたのはＫさんにはほんの一瞬間だつた。Ｋさんはそこに佇んだまま、あつけにとられずにはゐられなかつた。その畠へころげこんだものは實は今汽車に轢かれた二十四五の男の頭だつた。

三　武さん

武さんは二十八歳の時に何かにすがりたい欲望を感じ、(この欲望を生じた原因は特にここに言はずともよい。)當時名高い小說家だつたK先生を尋ねることにした。が、K先生はどう思つたか、武さんを玄關の中へ入れずに格子戸越しにかう言ふのだつた。

「御用向きは何ですか?」

武さんはそこに佇んだまま、一部始終をK先生に話した。

「その問題を解決するのはわたしの任ではありません。Tさんのところへお出でなさい。」

T先生は基督教的色彩を帶びた、やはり名高い小說家だつた。武さんは早速その日のうちにT先生を訪問した。T先生は玄關へ顏を出すと「わたしがTです。ではさやうなら」と言つたぎり、さつさと奥へ引きこまうとした。武さんは慌ててT先生を呼びとめ、もう一度あらゆる事情を話した。

「さあ、それはむづかしい。……どうです、Uさんのところへ行つて見ては?」

武さんはやつと三度目にU先生に辿り着いた。U先生は小說家ではない。名高い基督教的思想家だつた。武さんはこのU先生により、次第に信仰へはひつて行つた。同時に又次第に現世には珍らしい生活へはひつて行つた。

それは唯はた目には石鹼や齒磨きを賣る行商だつた。しかし武さんは飯さへ食へれば、滅多に

荷を背負つて出かけたことはなかつた。その代りにトルストイを讀んだり、蕪村句集講義を讀んだり、就中聖書を筆寫したりした。武さんの筆寫した新舊約聖書は何千枚かにのぼつてゐるであらう。兎に角武さんは昔の坊さんの法華經などを筆寫したやうに勇猛に聖書を筆寫したのである。

或夏の近づいた月夜、武さんは荷物を背負つたまま、ぶらぶら行商から歸つて來た。すると家の近くへ來た時、何か柔かいものを踏みつぶした。それは月の光に透かして見ると、一匹の蟇がへるに違ひなかつた。武さんは「俺は惡いことをした」と思つた。それから家へ歸つて來ると、寢床の前に跪き、「神樣、どうかあの蟇がへるをお助け下さい」と十分ほど熱心に祈禱をした。(武さんは立ち小便をする時にも草木のない所にしたことはない。尤もその爲に一本の若木の枯れてしまつたことは確かである。)

武さんを翌朝起したのはいつも早い牛乳配達だつた。牛乳配達は武さんの顏を見ると、紫がかつた壜をさし出しながら、晴れやかに武さんに話しかけた。

「今あすこを通つて來ると、踏みつぶされた蟇がへるが一匹向うの草の中へはひつて行きましたよ。蟇がへるなどといふやつは強いものですね。」

武さんは牛乳配達の歸つた後、早速感謝の祈禱をした。――これは武さんの直話である。僕は現世にもかういふ奇蹟の行はれるといふことを語りたいのではない。唯現世にもかういふ人のゐ

るといふことを語りたいのである。僕の考へは武さんの考へとは、——僕にこの話をした武さんの考へとは或は反對になるであらう。しかし僕は不幸にも武さんのやうに信仰にはひつてゐない。從つて考への喰ひ違ふのはやむを得ないことと思つてゐる。（昭和二・五・六）

機關車を見ながら

……わたしの子供たちは、機關車の眞似をしてゐる。尤も動かずにゐる機關車ではない。手をふつたり、「しゆつしゆつ」といつたり、進行中の機關車の眞似をしてゐる。これはわたしの子供たちに限つたことではないであらう。ではなぜ機關車の眞似をするか？　それはもちろん機關車に何か威力を感じるからである。或は彼等自身も機關車のやうに激しい生命を持ちたいからである。かういふ要求を持つてゐるのは子供たちばかりに限つてゐない。大人たちもやはり同じことである。

ただ大人たちの機關車は言葉通りの機關車ではない。しかしそれぞれ突進し、しかも軌道の上を走ることもやはり機關車と同じことである。この軌道は或は金錢であり、或は又名譽であり、最後に或は女人であらう。我々は子供と大人とを問はず、我々の自由に突進したい欲望を持ち、その欲望を持つ所におのづから自由を失つてゐる。それは少しも逆說ではない。逆說的な人生の

事實である。が、我々自身の中にある無數の我々の祖先たちや一時代の一國の社會的約束は多少かういふ要求に齒どめをかけないことはない。しかしかういふ要求は太古以來我々の中に潜んでゐる。……

わたしは高い土手の上に立ち、子供たちと機關車の走るのを見ながら、こんなことを思はずにはゐられなかつた。土手の向うには土手が又一つあり、そこにはなかば枯れかかつた椎の木が一本斜になつてゐた。あの機關車――3271號はムツソリニである。ムツソリニの走る軌道は或は光に滿ちてゐるであらう。しかしどの軌道もその最後に一度も機關車の通らない、さびた二三尺のあることを思へば、ムツソリニの一生も恐らくは我々の一生のやうに老いてはどうすることも出來ないかも知れない。のみならず――

のみならず我々はどこまでも突進したい欲望を持ち、同時に又軌道を走つてゐる。この矛盾は善い加減に見のがすことは出來ない。我々の悲劇と呼ぶものは正にそこに發生してゐる。マクベスはもちろん小春治兵衛もやはり畢に機關車である。小春治兵衛は、マクベスのやうに强い性格を持つてゐないかも知れない。しかし彼等の戀愛のためにやはりがむしやらに突進してゐる。（紅毛人たちの悲劇論はここでは不幸にも通用しない。悲劇を作るものは人生である。美學者の作るわけではない。）この悲劇を第三者の目に移せば、あらゆる動機のはつきりしないために（あらゆ

る動機のはつきりすることは悲劇中の人物にも望めないかも知れない。）ただいたづらに突進し、いたづらに停止、――或は顛覆するのを見るだけである。從つて喜劇になつてしまふ。即ち喜劇は第三者の同情を通過しない悲劇である。畢竟我々は大小を問はず、いづれも機關車に變りはない。わたしはその古風な機關車――煙突の高い３２３６號にわたし自身を感じてゐる。トランス・テエブルの上に乘つて徐に位置を換へてゐる３２３６號に。

　しかし一時代の一國の社會や我々の祖先はそれ等の機關車にどの位齒どめをかけるであらう？わたしはそこに齒どめを感じると共にエンヂンを、――石炭を、――燃え上る火を感じないわけにも行かないのである。我々は我々自身ではない。實はやはり機關車のやうに長い歴史を重ねて來たものである。のみならず無數のピストンや齒車の集まつてゐるものである。しかも我々を走らせる軌道は、機關車にはわかつてゐないやうに我々自身にもわかつてゐない。この軌道も恐らくはトンネルや鐵橋に通じてゐることであらう。あらゆる解放はこの軌道のために絶對に我々には禁じられてゐる。かういふ事實は恐ろしいかも知れない。が、いかに考へて見ても、事實に相違ないことは確である。

　もし機關手さへしつかりしてゐれば、――それさへ機關車の自由にはならない。或機關手を或機關車へ乘らせるのは氣まぐれな神々の意志によるのである。ただ大抵の機關車は兎に角全然さ

びはてるまで走ることを斷念しない。あらゆる機關車の外見上の莊嚴はそこにかがやいてゐるであらう。丁度油を塗つた鐵のやうに。……

我々はいづれも機關車である。我々の仕事は空の中に煙や火花を投げあげる外はない。土手の下を歩いてゐる人々もこの煙や火花により、機關車の走つてゐるのを知るであらう。或はとうに走つて行つてしまつた機關車のあるのを知るであらう。煙や火花は電氣機關車にすれば、ただその響きに置き換へても善い。「人は皆無、仕事は全部」といふフロオベエルの言葉はこのためにわたしを動かすのである。宗教家、藝術家、社會運動家、――あらゆる機關車は彼等の軌道により、必然にどこかへ突進しなければならぬ。もつと早く、――その外に彼等のすることはない。

我々の機關車を見る度におのづから我々自身を感ずるのは必しもわたしに限つたことではない。齋藤綠雨は箱根の山を越える機關車の「ナンダ、コンナ山、ナンダ、コンナ山」と叫ぶことを記してゐる。しかし碓氷峠を下る機關車は更に歡びに滿ちてゐるのであらう。彼はいつも輕快に「タカポコ高崎タカポコ高崎」と歌つてゐるのである。前者を悲劇的機關車とすれば後者は喜劇的機關車かも知れない。

（昭和二年七月）

紀行

松江印象記

一

松江へ來て、先自分の心を惹いたものは、此市を縱橫に貫いてゐる川の水と其川の上に架けられた多くの木造の橋とであつた。河流の多い都市は獨松江のみではない。しかし、さう云ふ都市の水は、自分の知つてゐる限りで大抵は其處に架けられた橋梁によつて少からず、その美しさを殺がれてゐた。何故と云へば、其都市の人々は必其川の流に第三流の櫛形鐵橋を架けてしかも其醜い鐵橋を彼等の得意な物の一つに數へてゐたからである。自分は此間にあつて愛す可き木造の橋梁を松江のあらゆる川の上に見出し得た事をうれしく思ふ。殊に其橋の二三が古日本の版畫家によつて、屢々其構圖に利用せられた青銅の擬寶珠を以て主要なる裝飾としてゐた一事は自分をして愈々深く是等の橋梁を愛せしめた。松江へ着いた日の薄暮雨にぬれて光る大橋の擬寶珠を、灰色を帶びた綠の水の上に望み得た懷しさは事新しく此處に書き立てる迄もない。是等の木橋を有する松江に比して、朱塗の神橋に隣る可く、醜惡なる鐵の釣橋を架けた日光町民の愚は、誠に

嗤ふ可きものがある。

橋梁に次いで、自分の心を捉へた物は千鳥城の天主閣であつた。天主閣は其名の示すが如く、天主教の渡來と共に、はるばる南蠻から輸入された西洋築城術の產物であるが、自分達の祖先の驚く可き同化力は、殆何人も之に對してエキゾテイツクな興味を感じ得ない迄に、其屋根と壁とを悉日本化し去つたのである。寺院の堂塔が王朝時代の建築を代表するやうに、封建時代を表象すべき建築物を求めるとしたら天主閣を除いて自分達は何を見出す事が出來るだらう。しかも明治維新と共に生まれた卑む可き新文明の實利主義は全國に亙つて、此大いなる中世の城樓を、何の容赦もなく破壞した。自分は、不忍池を埋めて家屋を建築しようと云ふ論者をさへ生んだ嗤ふべき時代思想を考へると、此破壞も唯微笑を以て許さなければならないと思つてゐる。何故と云へば、天主閣は、明治の新政府に參與した薩長土肥の足輕輩に理解せらる可く、餘りに大いなる藝術の作品であるからである。今日に至る迄、是等の幼稚なる偶像破壞者の手を免がれて、記憶すべき日本の騎士時代を後世に傳へむとする天主閣の數は、僅に十指を屈するの外に出ない。自分は其一つに此千鳥城の天主閣を數へ得る事を、松江の人々の爲に心から祝したいと思ふ。さうして蘆と藺との茂る濠を見下して、かすかな夕日の光にぬらされながら、かいつぶり鳴く水に寂しい白壁の影を落してゐる、あの天主閣の高い屋根瓦が何時までも、地に落ちないやうに祈り

たいと思ふ。

しかし、松江の市が自分に與へた物は滿足ばかりではない。自分は天主閣を仰ぐと共に「松平直政公銅像建設之地」と書いた大きな棒杭を見ない譯にはゆかなかつた。否、獨、棒杭のみではない。其傍の鐵網張りの小屋の中に古色を帶びた幾面かのうつくしい青銅の鏡が、銅像鑄造の材料として積重ねてあるのも見ない譯にはゆかなかつた。梵鐘を以て大砲を鑄たのも、危急の際には止むを得ない事かもしれない。しかし泰平の昭代に好んで、愛す可き過去の美術品を破壞する必要が何處にあらう。まして其目的は、藝術的價値に於て卑しかる可き區々たる小銅像の建設にあるのではないか。自分は更に同じやうな非難を嫁ケ島の防波工事にも加へる事を禁じ得ない。防波工事の目的が、波浪の害を防いで嫁ケ島の風趣を保存せしめる爲であるとすれば、かくの如き無細工な石垣の築造は、其風趣を害する點に於て、正しく當初の目的に矛盾するものである。「一幅淞波誰剪取　春潮痕似嫁時衣」と唱つた詩人石埭翁をしてあの臼を連ねたやうな石垣を見せしめたら、果して何と云ふであらう。

自分は松江に對して同情と反感と二つながら感じてゐる。唯、幸にして此市の川の水は、一切の反感に打勝つ程、強い愛惜を自分の心に喚起してくれるのである。松江の川に就いては又、此稿を次ぐ機會を待つて語らうと思ふ。

二

自分が前に推賞した橋梁と天主閣とは二つながら過去の産物である。しかし自分が是等の物を愛好する所以は決して單にそれが過去に屬するからのみではない。所謂「寂び」と云ふやうな偶然的な屬性を除き去つても、尙是等の物がその藝術的價値に於いて、沒却すべからざる特質を有してゐるからである。この故に自分は獨り天主閣に止まらず松江の市内に散在する多くの神社と梵刹とを愛すると共に(殊に月照寺に於ける松平家の廟所と天倫寺の禪院とは最も自分の興味を惹いたものであつた。)新なる建築物の增加をも決して忌憚しようとは思つてゐない。不幸にして自分は城山の公園に建てられた光榮ある興雲閣に對しては索莫たる嫌惡の情以外に何物も感ずる事は出來ないが、農工銀行を始め、二三の新なる建築物に對しては寧ろその功果に於いて認む可きものが少くないと思つてゐる。

全國の都市の多くは悉くその發達の規範を東京乃至大阪に求めてゐる。しかし東京乃至大阪の如くになると云ふ事は、必しも是等の都市が踏んだと同一な發達の徑路に緣ると云ふ事ではない。否寧ろ先達たる大都市が十年にして達し得た水準へ五年にして達し得るのが後進たる小都市の特權である。東京市民が現に腐心しつゝあるものは、屢々外國の旅客に嗤笑せらるゝ小人の銅像を

建設する事でもない。ペンキと電燈とを以て廣告と稱する下等なる裝飾を試みる事でもない。唯道路の整理と建築の改善とそして街樹の養成とである。自分はこの點に於いて、松江市は他のいづれの都市よりも優れた便宜を持つてゐはしないかと思ふ。堀割に沿うて造られた街衢の井然たる事は、松江へ入ると共に先づ自分を驚かしたものの一つである。しかも處々に散見する白楊の立樹は、如何に深くこの幽鬱な落葉樹が水郷の土と空氣とに親しみを持つてゐるかを語つてゐる。そして最後に建築物に關しても、松江はその窓と壁と露臺とをより美しく眺めしむ可き大いなる天惠――ヴェネティアをしてヴェネティアたらしむる水を有してゐる。

松江は殆ど、海を除いて「あらゆる水」を持つてゐる。椿が濃い紅の實をつづる下に暗くよどんでゐる濠の水から、灘門の外に動くともなく動いてゆく柳の葉のやうに青い川の水になつて、滑な硝子板のやうな光澤のある、どことなく LIFELIKE な湖水の水に變るまで、水は松江を縱橫に貫流して、その光と影との限りない調和を示しながら、隨所に空と家とその間に飛交ふ燕の影とを映して、絕えず懶い呟きを此處に住む人間の耳に傳へつゝあるのである。この水を利用して、所謂水邊建築を企畫するとしたら、恐らくアアサア・シマンズの歌つたやうに「水に浮ぶ睡蓮の花のやうな」美しい都市が造られる事であらう。水と建築とはこの町に住む人々の常に顧慮すべき密接なる關係に立つてゐるのである。決して調和を一松崎水亭にのみ委ぬべきものではない。

自分は、此盂蘭盆會に水邊の家々にともされた切角燈籠の火が樒の匂にみちた黄昏の川へ靜な影を落すのを見た人々は容易くこの自分の語に首肯する事が出來るだらうと思ふ。

自分は最後にこの二篇の蕪雜な印象記を井川恭氏に獻じて自分が同氏に負つてゐる感謝を僅でも表したいと思ふ事を附記して置く（をはり）

（大正四年八月）

軍艦金剛航海記

一

暑いフロックを夏の背廣に着換へて外の連中と一しよに上甲板へ出てゐると、年の若い機關少尉が三人やつて來て、いろんな話をしてくれた。僕は新米だから三人とも初對面だが、外の連中は皆、教室で一度は講義を聞かせた事のある間柄である。だから、僕は圏外に立つておとなしく諸君子の話を聞いてゐた。すると其少尉の一人が横須賀でSとSの細君と二人で散歩してゐるのに遇つたら、よくよく中てられたと見えて、其晩から腹が下つたと云ふ話をした。外の連中はそれを聞くと、あははと大きな聲を出した。唯新婚後間のないSだけはその仲間にはいらなかつた。これは嬉しさうに、にやにや笑つたのである。自分は、夕日の光を一ぱいに浴びた軍港を眺めながら、新らしい細君を家に殘して來たSに對して憐憫に近い同情を感じた。さうしたら、何故か急に旅らしい心細い氣もちになつた。

標的を曳いてゐる艦は、さつきから二隻の小蒸汽に艦尾を曳かれて、方向を右に轉じようとし

てゐる。素人眼には、小蒸汽の艫に推進機が起してゐる、白い泡を見ても、どれほどその爲にこの二萬九千噸の巡洋艦が動いてゐるかわからない。先に錨をあげた榛名は旣に煙を吐き乍ら徐に港口を西に向つて、離れようとしてゐる。それがまた、梅雨晴れの空の下に起伏してゐる山々の鮮な綠と、眩ゆく日の光を反射してゐる水銀のやうな海面とを背景にして、美しいパノラミツクな景色をつくつてゐる。この光景を眺めた僕には、金剛の容易に出航しさうもないのが聊かもどかしく思はれた。そこで、又外の連中の話に加はつて、このもどかしさを紛らせようとした。

　すると、すぐ側のハツチの下でぢやんぢやんと、夕飯を知らせる銅鑼の音がした。その音は軍艦の中とは思はれない程、古めかしいものであつた。僕はそれを聞くと同時に長谷にある古道具屋を思ひ出した。そこには朱塗の棒と一緒に、怪しげな銅鑼が一つ、萬年靑の鉢か何かの上にぶら下つてゐる。僕は急に軍艦の銅鑼が見たくなつたから、ほかの連中より先にハツチを下りて、それを叩いて行く水兵に追ひついた。所が追ひついて見るとぢやんぢやんの正體は銅鑼と云ふ名を與へるのが僭越な程、平凡なうすべつたい、けちな金盥にすぎなかつた。僕は滑稽な失望を感じて、すごすご士官室の海老茶色のカアテンをくぐつた。

　士官室では大きな扇風器が幾つも頭の上でまはつてゐた。その下に白いテエブル掛をかけた長い食卓が二側にならんで、つきあたりの、鏡を入れた大きなカツプボオドには、銀の花瓶が二つ

置いてあつた。食卓につくと、すぐにボイが食事を持つて來てくれる。さうして靜に、しかも敏活に、給仕をしてくれる。僕は生鮭の皿を突つきながら、Sに「軍艦のボイは氣が利いてますね」と云つた。Sは「ええ」とか何とか氣のない返事をした。事によると、これは軍艦のボイより、細君の方が氣が利いてゐると思つたからかも知れない。外の連中は皆同じ食卓についた八田機關長を相手にして、小林法雲の氣合術の事なんぞを話してゐた。

元來この士官室なるものへは、副長以下大尉以上の將校が皆な來て、飯を食ふ。そこで僕はこの際、いろんな人の顏を覺えた。さうしてそれと同時にシイメンの顏には、一種のタイプがある事を發見した。

二

夕飯をしまつた後で、上甲板から最上甲板へ上ると、どこかから男ぶりの好い少尉が一人やつて來て、僕たちを前部艦橋へつれて行つてくれた。軍艦の中で艦首から艦尾を一目に見渡す所と云ふと、先づここの外にない。僕たちは司令塔の外に立つて何時か航行を始め出した艦の前後に眼を落した。眼分量にして、凡そ十五六呎の高さにゐるのだから、甲板の上にゐる水兵や將校も、可成小さく見える。僕にはその小さな水兵の一人が、測鉛臺の上に立つて靑い海に向ひながら、

長い綱の先につけた分銅を、水の中へ投げこんでゐるのが殊に面白かつた。投げこんでゐると云ふだけでは、甚だ振はないが、實はまるで昔の武藝者が鎖鎌でも使ふやうな調子で、その分銅のついた長い綱をびゆうびゆう頭の上でふり廻しながら、艦の進むのに從つて出來る丈け遠くへ勢ひよく拋りこむのである。上から見てゐると、拋りこむ度にその細い綱が生きもののやうに海の上でうねくつた。その先につけてある分銅が、まだ殘つてゐる日脚に光つて、魚の跳ねるやうに白く見えた。僕はへえ危いねと思ひながら、暫の間は感心して、それぱかり眺めてゐた。

　それから司令塔の內部や海圖室を見て、又中甲板へひき返した。すると、狹い通路にはもうハムモツクを釣つて、眠つてゐる水兵が大勢ある。中にはその中で、うす暗い電燈の光をたよりに、本を讀んでゐるものも二三人あつた。僕たちは皆な背をかがめてそのハムモツクの下を這ふやうにして歩いた。その時僕は痛切に「軍艦の臭ひ」を嗅いだ。これはペンキの臭ひでもなければ、炊事場の流しの臭ひでもない。さうかと云つて又機械の油の臭ひでもなければ、人間の汗の臭ひでもない。恐らくそれらのすべてが混合した、――要するにまあ「軍艦の臭ひ」である。これは決して高等な臭ひではない。こんな事を考へながらふと頭をあげると、一人の水兵の讀んでゐる本の表紙が、突然僕の鼻の先へ出た。それには、「天地有情」と云ふ字が書いてある。――僕は一瞬の間、「軍艦の臭ひ」を忘れた。さうして妙に小說めいた心持になつた。

それでもハムモツクの下を通りぬけたあとで、バスにはいつたら、生れかはつたやうな氣になつた。バスは海水で沸かしてある。それが白い陶器の湯槽の中で、明礬のやうに青く見えた。Tの語を借りると、「軀が染まりさうな氣がする位青い。」僕は湯槽の中で手足をのばしながら、Tに京都の湯屋の講釋を聞いた。それからこつちでは淺草の蛇骨湯の話をしてやつた。――それ程僕たちのバスのはいり心は泰平なものだつたのである。

湯から上ると副長の巡見がすんでゐたから、浴衣に着かへて、又士官室へ行つた。軍艦では夕飯の外に、もう一つ晩飯がある。その晩はそれが索麪だつた。僕はそこで酒をすすめられた。元來下戸だから、酒の善惡は更にわからない。が、二三杯飲むとすぐ顏が熱くなつた。すると僕の隣へ來て、「二十年前の日本と今日の日本とは非常な相違です」と云ふ人がある。その人はシイメンのタイプに屬さない、甚だ感じの好い顏をしてゐた。さうしてその顏がまつ赤になつてゐた。何でも國防計畫か何かを論じてゐるらしい。

三

僕はいい加減に「さうでせう」とか何とか尤もらしい返事をした。「さうです。それは僕がですな、僕が確に保證します。いいですか、確にですな。」と、その人は、醉はない者にはわからない

熱心さを以て、僕の杯と自分の杯とに代る代る酒をつぎながら、大分獨りで氣焰をあげた。が、生憎僕もさつきから、醉はない者には解らない眠氣に襲はれてゐた所だから、聞いてゐる中にだんだん返事も怪しくなつて來た。それがどうにか、かうにか、會話らしい體裁を備へて進行したのは、全く僕がイエスともノオともつかない返事をして、巧に先方の耳目を瞞著したおかげである。その瞞著した相手の憂國家が、山本大尉とわかつた今になつて見ると、默つてゐるのも可笑しいから、白状してしまふが、僕には、二十年以前の日本と今日の日本と、何がどうちがふんだか、實は少しも分らなかつた。尤もこれは山本大尉自身も醉がさめた後になつて見ると、あんまりよくは分らなかつたかも知れない。

そこで好い加減に話を切りあげて、僕は外の連中と一しよに、士官室をひき上げた。さうしてMと二人で又上甲板へ出て見た。外では暗い空と海との間に榛名の探照燈が彗星のやうな光芒をうす白く流してゐる。艦は多分相模灘を航行してゐるのであらう。僕はハンドレエルにつかまつて、遙か下の海面を覗込んだ。が、微かに青く浪が光る丈で、何も見えない。「かうやつて下を見てゐると、ちよいと飛込みたくなるぜ。」僕はかう聲をかけた。するとMはそれに答へないで、近眼鏡をかけた顏を僕の側へ持つて來ながら、「おい、俳句が一つ出來た」と云つた。「どんな句が出來た？」「遠流びと舟に泣く夜や子規。」と云ふんだ。S君の事をよんだんだがね。」二人は低い聲

で笑つた。さうしてもう一度海を見て、空を見て、それから靜にケビンへ寢に下りて行つた。

エレヴエタアが止つたと思ふと、先へ來てゐた八田機關長が外から戸を開けてくれた。その開いた戸の間から汽罐室の中を見た時に、僕が先づ思ひ出したのは「パラダイス・ロスト」の始めの一章である。かう云ふと誇張の樣に聞えるかも知れないが、決してさうではない。眼の前には恐しく大きな罐が幾つも、噴火山の樣な音を立てて並んでゐる。罐の前の通路は、甚だ狹い。その狹い所に、煤煙でまつ黑になつた機關兵が色硝子をはめた眼鏡を頸へかけながら忙しさうに動いてゐる。或る者はショヴルで、罐の中へ石炭を拋りこむ。或者は石炭桝へ石炭を積んで押して來る。それが皆罐の口からさす灼熱した光を浴びて、恐ろしいシルエツトを描いてゐる。しかも、エレヴエタアを出た僕たちの顏には、絶えず石炭の粉がふりかかつた。其上暑い事も亦一通りではない。僕は半ば呆氣にとられて、この人間とは思はれない、すさまじい勞働の光景を見渡した。

その中に機關兵の一人が、僕にその色硝子の眼鏡を借してくれた。それを眼にあてて、罐の口を覗いて見ると、硝子の綠色の向うには、太陽がとろけて落ちたやうな火の塊が、嵐のやうな勢で燃え立つてゐる。それでも重油の燃えるのと、石炭の燃えるのとが素人眼にも區別がついた。唯、如何にもやり切れないのは、火氣である。ここで働いてゐる機關兵が、三時間の交代時間中

に、各々何升かの水を飲むと云ふのも更に無理はない。

四

すると、機關長が僕たちの側へ來て「これが炭庫です」と云つた。さうしてさう云ふかと思ふと、急にどこかへ見えなくなつてしまつた。よく見ると、側面の鐵の板に、人一人がやつと這ひこめる位な穴が明いてゐる。そこで僕たちは皆一人づつ、床を嘗めないばかりにして、その穴から中へもぐりこんだ。中は高い所に電燈が一つともつてゐるだけだから、殆ど夜のやうな暗さである。まづ坑山の竪坑の底に立つてゐるやうな心もちだと思へば間違ひない。僕はごろごろする石炭を踏んで、その高い所にある電燈を見上げた。ぼんやりした光の輪の中に、蟲のやうなものが紛々と黑く動いてゐる。雪の降る日に空を見ると、雪が灰をまくやうに黑く見える――あれのやうな具合である。僕はすぐに、それが宙に舞つてゐる石炭の粉だと云ふ事に氣がついた。此中で働いてゐる機關兵の事を考へると殆ど僕と同じ肉體を持つてゐる人間だとは思はれない。

現にその時も二三人、その暗い炭庫の中で、石炭をショヴルで下してゐる機關兵の姿が見えた。彼等は皆默々として運命のやうに働いてゐる。外に海があつて、風が吹いて、日があたつてゐる事も知らない人間のやうに働いてゐる。僕は妙に不安になつた。さうして、誰よりも先きに、元

の入口をボイラアの前へ這ひ出した。が、ここでもやはり、すさまじい勞働が、鐵と石炭との火氣の中に、未練未釋なく續けられてゐる。海の上の生活は、陸の上の生活に變りなく苦しい。

　エレヴエタアで艦の底から天上して中甲板の自分のケビンへ歸つて、カアキイ色の作業服を脫いだら、漸くもとの人間になつたやうな心もちがした。今日は朝から、ぐるぐる艦の中ばかり步いてゐる。砲塔、水雷室、無線電信室、機械室、汽罐室——勘定するばかりでも、容易な事ではない。それがどこへ行つても、空氣が息苦しい位生暖かくつて、いろんな機械が猛烈に動いてゐて、鐵の床や手すりが油でぴかぴか光つてゐて、僕のやうな勞働に緣の遠いものは、五分とそこにゐると、神經にこたへてしまふ。が、その間に絕えず或る考へが僕の頭にこびりついてゐた。それは歐洲の戰爭が始まつて以來、僕位の年齡のものが大抵考へるやうになつた、或る理想的な考へである。今このケビンの寢臺の上にころがつて、くたびれた足をのばしながら、持つて來たオオベルマンの頁をはぐつてゐる間もやはりその考へは、僕をはなれない。

　これは其の後の事だが、夕飯をすませて、士官室の諸君と話してゐると、上甲板でわあと云ふ聲が聞こえた事がある。何だらうと思つて、ハッチを上つて見ると、第四砲塔のうしろに艦中の水兵が黑山のやうに集まつてゐた。さうしてそれが皆、大きな口をあいて、「勇敢なる水兵」の軍歌を唱つてゐた。ケエプスタンの上に、甲板士官がのつてゐるのは、音頭をとつてゐるのであら

う。こつちから見ると、その士官と艦尾の軍艦旗とが、千人あまりの水兵の頭の上に、曇りながら夕焼けのした空を切りぬいて、墨を塗つたやうに黒く見えた。下では皆が、鹽辛い聲をあげて、「煙も見えず雲もなく」とうたつてゐる。僕はこの時も亦、その或る考へに襲はれた。勇ましかる可き軍歌の聲が、僕には寧ろ、凄壯な調子を帶びて聞えたからである。

僕はオオベルマンを拋り出して眼を閉つた。艦は少し搖れ始めたらしい。

五

主計長の案内で吃水線下二十何呎の倉庫へはいつたり、軍醫長の案内で蒸し暑い戰時治療室を見たりしたら、大分足がくたびれた。そこで上甲板へ出て、水兵の柔道を見てゐると、機關長が氣合術をやつて見せるから來いと云つて人をよこした。

その後で、士官次室へ招待されて皆で出かけたら、浴衣がけで、ソフアにゐた連中が皆立つて、僕たちの健康とSの結婚とを祝してくれた。このケビンにゐるのは、中少尉ばかりである。だから、甚だ元氣が好い。中でも、色の黑い、眼の大きい、鼻のつんと高い關西辯の先生の如きは、赤木桁平君を想起するやうな勢ひで、盛んにメエトルをあげた。僕に自來也と云ふ渾名をつけたのも、この先生である。これは僕の髮の毛が百日鬘の樣だからださうだが、もし夫れ人相に至つ

ては、夫子自身の方が遙かによく自來也の俤を備へてゐた。これは決して、僕のひが眼ぢやない。鏡にさへ向へば、先生自身にもすぐにわかる事である。

この先生は、僕にハムだのパインアップルだの色んな物を吳れた。さうしてその合ひ間には、「自來也はん」とか何とか云つて、僕のコツプへ無暗にビイルを注いだ。「今日靴下一つになつて、檣樓へ上つたのはあんたですか。」「僕ですよ。僕と此の人です。」僕はUを指さした。彼と僕とは今朝雨の晴れ間を見て、前部艦橋からマストを攀のぼつて、檣樓へ上つて來たのである。「はあ。あんたですか。靴下一つは面白い。やつぱり自來也はんや。」――先こんな調子である。僕はこの先生とこんな話をしながら、ニコチンとアルコオルとをちやんぽんに使つた。さうしたら、しくしく胃が痛くなり始めた。

所が、その痛みは士官次室を失敬した後でも、まだ執拗く水おちの下に盤桓してゐる。そこで僕はTに仁丹を貰つて、それを嚙みながらケビンのベツドの上へ這ひ上つた。さうして寢た。僕が檣の上へ帽子をかぶつてゐる軍艦の夢を見たのは、その晚だつたやうに記憶する。

明くる朝、飯も食はずに上甲板へ出て見たら、海の色がまるで變つてゐるのに驚いた。昨日までは濃い藍色をしてゐたのが、今朝はどこを見ても美しい綠靑色になつてゐる。そこへ一面に淡い靄が下りて、其靄の中から、圓い山の形が茶碗を伏せたやうに浮き上つてゐる。僕は丁度來合

せた機關長に聞いて、艦が既に豐後水道を瀨戶內海へはいつた事を知つた。して見ると遲くも午後の二時か三時には山口縣下の由宇の碇泊地へ入るのに相違ない。

僕は妙に氣が輕くなつた。僅か何日かの海上生活が、僕に退屈だつたと云ふのではない。が、陸に近いと云ふ事は何となく愉快である。僕は砲塔の近所で、機關長と法華經の話をした。

やがて、何氣なく眼を上げると、眼の前にある十四吋砲の砲身に、黃いろい褄黑蝶が一つとまつてゐる。僕は文字通りはつと思つた。驚いたやうな、嬉しいやうな妙な心もちではつと思つた。が、それが人に通じる筈はない。機關長は相變らずしきりにむづかしい經義の話をした。僕は——唯だ、蝶を見てゐたと云つたのでは、云ひ足りない。陸を、畠を、人間を、町を、さうして又それらの上にある初夏を蝶と共に懷しく、思ひやつてゐたのである。

（大正六年八月）

槍ヶ嶽紀行

一

――島々と云ふ町の宿屋へ着いたのは、午過ぎ――もう夕方に近い頃であつた。宿屋の上り框には、三十恰好の浴衣の男が、青竹の笛を鳴らしてゐた。

私はその癇高い音を聞きながら、埃にまみれた草鞋の紐を解いた。其處へ婢が淺い盥に、洗足の水を汲んで來た。水は冷たく澄んだ底に、粗い砂を沈めてゐた。

二階の縁側の日除けには、日の光が強く殘つてゐた。そのせゐか疊も襖も、殘酷な程むさくるしく見えた。夏服を浴衣に着換へた私は、括り枕を出して貰つて、長長と仰向けに寢ころんだ儘、昨日東京を立つ時に買つた講談玉菊燈籠を少し讀んだ。讀みながら、浴衣の糊の臭ひが、始終氣になつて仕方がなかつた。

日がかげるとさつきの婢が、塗りの剝げた高盆に湯札を一枚のせて來た。さうして湯屋は向う側にあるから、一風呂浴びて來てくれと云つた。

それから繩の緒の下駄をはいて、石高な路の向うにある小さな錢湯へはひりに行つた。湯屋は着物を脱ぐ所が、やつと二疊ばかりしかなかつた。

客は私一人ぎりであつた。もう薄暗い湯壺に浸つてゐると、ぽたりと何かが湯の上へ落ちた。手に掬つて、流しの明りに見たら、馬陸と云ふ蟲であつた。手のひらの水の中に、その褐色の蟲がはつきりと、伸びたり縮んだりするのを見る事は、妙に私を寂しくさせた。

湯屋から歸つて、晩飯の膳に向つた時、私は婢に槍ケ嶽の案內者を一人賴んでくれと云つた。婢は早速承知して、竹の臺のランプに火をともしてから、一人の男を二階に呼び上げた。それは先刻上り口で、靑竹の笛を吹いてゐた男であつた。

「槍ケ嶽の事なら、この人は緣の下の五味まで知つて居ります。」

婢はこんな常談を云ひながら、荒らされた膳を下げて行つた。

私はその男にいろいろ山の事を尋ねた。槍ケ嶽を越えて、飛驒の蒲田溫泉へ出る事が出來るかどうか。近頃噴火の噂がある、燒嶽へも登山出來るかどうか。槍ケ嶽の峯傳ひに穗高山へ行く事が出來るかどうか。——さう云ふ事が主な問題であつた。男は窮屈さうに畏りながら、無造作にそれらは容易だと答へた。

「旦那さへ御歩けになれりや、何處でも譯はありません。」

私は苦笑した。上州の三山、淺間山、木曾の御嶽、それから駒ヶ嶽――その外山と名づくべき山には、一度も登つた事のない私であつた。

「さうさな。まづ山岳會の連中並みに歩ければ、見つけものと思つて貰はう。」

男が階下へ去つた時、私はすぐに床を敷いて貰つて、古蚊帳の中に横になつた。戸を明け放つた縁側の外には、暗い山に唯一點、赤い炭燒きの火が動いてゐた。それがかすかながら、私の心に、旅愁とも云ふべき寂しさを運んで來た。

やがて婢が戸をしめに來た。戸の走る度に山の上の星月夜が、私の眼界から消えて行つた。間もなく私の寢てゐるまはりは、古蚊帳に四方を遮られた、行燈ばかりの薄暗がりになつた。私は大きな眼をあきながら、古蚊帳の天井を眺めてゐた。するとあの青竹の笛の音が、かすかに又階下から聞えて來た。

二

――山の岨を一つ曲ると、突然私たちの足もとから、何匹かの獸が走り去つた。

「畜生、鐵砲さへあれば、逃しはしないのだが。」

案内者は足を止めて、忌々しさうに舌打ちをしながら、路ばたの橡の大木を見上げた。

橡の若葉が重なり合つて、路の上の空を遮つた枝には、二匹の仔猿をつれた親猿が、靜に私たちを見下してゐた。

私は物珍しい眼を擧げて、その三匹の猿が徐に、梢を傳つて行く姿を眺めた。が、猿は案内者にとつては、猿であるよりも先に獲物であつた。彼は立ち去り難いやうに、橡の梢を仰ぎながら、礫を拾つて投げたりした。

「おい、行かう。」

私はかう彼を促した。彼はまだ猿を見返りながら、澁々又歩き出した。私は多少不快であつた。

路は次第に險しくなつた。が、馬が通ると見えて、馬糞が所々に落ちてゐた。さうしてその上には、蛇の目蝶が、澁色の翅を合せた儘、何羽もぎつしり止まつてゐた。

「これが德本の峠です。」

案内者は私を顧みて云つた。

私は小さな雜嚢の外に、何も荷物のない體であつた。が、彼は食器や食糧の外にも、私の毛布や外套などを堆く肩に背負つてゐた。それにも關らず峠へかかると、彼と私との間の距離は、だんだん遠く隔たり始めた。

三十分の後、とうとう私はたつた一人、山路を喘いで行く旅人になつた。うす日に蒸された峠

の空氣は、無氣味な靜寂を孕んでゐた。馬糞にたかつてゐる蛇の目蝶と虻を煽つて行く私と、——それがこの急な路の上に、生きて動いてゐるすべてであつた。と思ふと鈍い翅音がして、青黑い一匹の馬蠅が、ぺたりと私の手の甲に止まつた。さうして其處を鋭く刺した。私は半ば動顚しながら、一打ちにその馬蠅を打ち殺した。「自然は私に敵意を持つてゐる。」——そんな迷信じみた心もちが一層私をわくわくさせた。

私は痛む手を抱へながら、無理やりに足を早め出した。……

三

その日の午後、私たちは水の冷たい梓川の流を徒渉した。川を埋め殘した森林の上には、飛驒信濃境の山々が、——殊にうす曇つた穗高山が、巉岏と私たちを見下してゐた。私は水を渡りながら、ふと東京の或茶屋を思ひ出した。その軒に懸つてゐる岐阜提灯も、ありありと眼に見えるやうな氣がした。しかし私を繞つてゐるものは、人煙を絶つた谿谷であつた。私は妙な矛盾の感じを頭一ぱいに持ちながら、無愛想な案内者の尻について、漸く對岸を蔽つてゐる熊笹の中へ辿り着いた。

對岸には大きな山毛欅や樅が、うす暗く森々と聳えてゐた。稀に熊笹が疎になると、雁皮らし

い花が赤く咲いた、濕氣の多い草の間に、放牧の牛馬の足跡が見えた。

程なく一軒の板葺の小屋が、熊笹の中から現れて來た。これが小島烏水氏以來、屢槍ヶ嶽の登山者が一宿する、名高い嘉門治の小屋であつた。

案内者は小屋の戸を開けると、背負つてゐた荷物を其處へ下した。小屋の中には大きな圍爐裡が、寂しい灰の色を擴げてゐた。案内者はその天井に懸けてあつた、長い釣竿を取り下してから、私一人を後に殘して、夕飯の肴に供すべく、梓川の山女を釣りに行つた。

私は蓙や雜嚢を捨てて暫く小屋の前をぶらついてゐた。すると熊笹の中から、大きな黑斑らの牛が一匹、のそのそ側へやつて來た。私は稍不安になつて小屋の戸口へ退却した。牛は沾んだ眼を擧げて、じつと私の顏を眺めた。それから首を横に振つて、もう一度熊笹の中へ引き返した。私はその牛の姿に愛と嫌惡とを同時に感じながら、ぼんやり卷煙草に火をつけた。……

曇天の夕燒が消えかかつた時、私たちは圍爐裡の火を圍んで、竹串に炙つた山女を肴に、鍋で炊いた飯を貪り食つた。それから毛布に寒氣を凌いで、白樺の皮を卷いて造つた、原始的な燈火をともしながら、夜が戸の外に下つた後も、いろいろ山の事を話し合つた。

白樺の火と榾の火と、——この明暗二種の火の光は、既に燈火の文明の消長を語るものであつた。私は小屋の板壁に、濃淡二つの私の影が動いてゐるのを眺めながら、山の話の途切れた時に

は、今更のやうに原始時代の日本民族の生活なぞを想像せずにはゐられなかつた。……

四

――雜木の重なり合つたのを押し開いて、もう一度天日の光を浴びると、案内者は私を顧みながら、

「此處が赤澤です」と云つた。

私は鳥打帽を阿彌陀にして、眼の前にひらけた光景を眺めた。

私の前に横はるものは、立體の數を盡した大石であつた。それが狹い峽谷の急な斜面を滿たしながら、空を劃つた峯々の向うへ、目のとどく限り連つてゐた。もし形容の言葉を着ければ、正に小さな私たち二人は、遠い山巓から漲り落ちる大石の洪水の上にゐるのであつた。

私たちはこの大石に溢れた谷を、――「黄花駒の爪」の咲いてゐる谷を、蟲の這ふやうに登り出した。

暫く苦しい歩みを續けた後、案内者は突然杖を擧げて、私たちの左手に續いてゐる絶壁の上を指さしながら、

「御覽なさい。あすこに青猪がゐます」と云つた。

私は彼の杖に沿うて、視線を絶壁の上に投げた。すると荒削りの山の肌が、頂に近く偃ひ松の暗い緑をなすつた所に、小さく一匹の獸が見えた。それが青猪と云ふ異名を負つた、日本アルプスに棲む羚羊であつた。

やがてその日も暮れかかる頃、私たちの周圍には、次第に殘雪の色が多くなつて來た。それから石の上に枝を擴げた、寂しい偃ひ松の群も見え始めた。

私は時々大石の上に足を止めて、何時か姿を露し出した、槍ケ嶽の絶巓を眺めやつた。絶巓は大きな石鏃のやうに、夕燒の餘炎が消えかかつた空を、何時も黒々と切り拔いてゐた。「山は自然の始にして又終なり。」――私はその頂を眺める度に、かう云ふ文語體の感想を必心に繰返した。それは確か以前讀んだ、ラスキンの中にある言葉であつた。

その内に寒い霧の一團が、もう暗くなつた谷の下から、大石と偃ひ松との上を這つて、私たちの方へ上つて來た。さうしてそれがあたりを包むと、俄に小雨交りの風が私たちの顏を吹き始めた。私は漸く山上の高寒を肌に感じながら、一分も早く今夜宿る無人の岩室に辿り着くべく、懸命に急角度の斜面を登つて行つた。が、ふと異樣な聲に驚かされて、思はず左右を見廻すと、あまり遠くない偃ひ松の茂みの上を、流れるやうに飛んで行く褐色の鳥が一羽あつた。

「何だい、あの鳥は。」

「雷鳥です。」

小雨に濡れた案内者は、剛情な歩みを続けながら、相不変無愛想にかう答へた。

（大正九年六月）

東北・北海道・新潟

一

上野――東海道線の汽車に乘るのは何でもない。が、東北本線の汽車に乘るのは何か僕を意氣地のない感傷主義者に變らせてしまふ。それは唯僕のゐる田端を――一度僕のあとにして來た田端をもう一度汽車の通る爲である。これは誰にでもあることかしら?

仙臺――病院の廊下を押して來る、大きい氷を積んだ手車。その又氷に窓の外の木の芽や牛も映つてゐる。尤も幾分か歪んだまま。

盛岡――停車場はカアキイ色の服を着た青年何とか所の人々に一ぱいになつてゐる。おまけに外はどしや降りになつてゐる。僕等の言葉は通用しても、彼等の言葉はもうはつきりはしない。何と云ふもの寂しさ。……

又――僕等の宿の三階には疲れ切つた女中が一人、ぐつたり椅子によりかかつたまま、芽吹いた柳などを眺めてゐる。生暖かい風にでも溶けなければ善いが、……

津輕海峽――もう少し船にでも醉はなければ、折角ここへ來た甲斐もありはしない。

函館――僕等は煤煙の中をくぐり、それから干し魚の匂を嗅ぎ、最後にもう暮れかかつた櫻桃の花の中へ辿り着いた。つまり君、「天路歷程」だね。……

又――「櫻もまだ咲いてゐますね。空の色も何だか變つてゐる、……」

「ちよつと瓶のぞきと云ふ色だわね。」

札幌――クリストは上に、大學生は下に、……「すすき野」と云ふ遊廓はどこですか？

又――あの植物園全體へどろりとマヨネエズをかけてしまへ。（傍白。――「里見君、野菜だけ

はうまいでせう。」）

又――孔雀は丁度キヤンデイイの様に藍色の銀紙に包まれてゐる。

又――有島武郎氏はポケツトの中にいつも北海道の地圖を持つてゐる。

旭川――この聯隊のラツパはしつ切りなしに同じ言葉を繰り返してゐる。――「冬は零下三十五度になります。」

又――アイヌの女は谷に似てゐる。だんだん暮れかかつて來る山の火登に。

石狩平原――雪解けの中にしだるゝ柳かな。

小樽――起重機は海を吊り上げようとしてゐる。定めしホツキ貝の多い海を。

ら。

青森——公會堂は海と話してゐる。白じらと壁を聳ば立ててゐるものの、内心は海を恐れながら。

又——もう十分早かつたら、林檎の花の咲いた中にほのぼのと鮭を食つてゐたものを。

羽越線の汽車中——「改造社の宣傳班と別る。……」

あはれ、あはれ、旅びとは
いつかはこころやすらはん。
垣ほを見れば「山吹や
笠にさすべき枝のなり。」

新潟——明治時代の東京はここの柳の並み木だの木橋だのに殘つてゐる。まだどこかに北清事件の石版刷りの畫位は賣つてゐるかも知れない。……

又——午もはやするめ燒かせよ藤の花。

新潟高等學校——誰かこの中原悌次郎氏のブロンズの「若者」に惚れるものはゐないか？　この「若者」は未だに生きてゐるぞ。

信越線の汽車中——新潟の藝者らしい女が一人、電燈の光の中に巻煙草をすつてゐる。卵の殼に似た顔をしながら。

上野——黄金蟲よりも多いタクシイはいつか僕を現實主義者にしてゐる。

（昭和二・六・二十一）

観劇記

「結婚の前」の評判

前置き

ルクレテイア・ヘエルの短篇だつたと思ふ。但し間違つても、小言を云つてはいけない。兎に角、誰か亞米利加人の書いたものに、元來ホイスパリング・ガレリイと云ふものがあつて、或位置へ耳をやりさへすれば、向うで云つてゐる事は、どんなに小聲でも分るものだから、氣のつけ次第で、どの部屋でも、すべて音の集まつて來る一點が見つかるのに相違ない。と思つてゐたら、その後芝居へ行くと、偶然さう云ふ點が見つかつたので、それからどうとかしたとか、かうとかしたとか云ふ話があつた。

勿論これは小說の事だから、自分は今日に至るまで、好い加減な出たらめに違ひないと、私に高を括つてゐた。所が此間、玄文社員長谷川巳之吉君の辣腕に懷柔されて、はるばる鎌倉から、帝劇へ、ズウデルマン原作松居松葉氏飜案の「結婚の前」なるものを見に行くと、偶然自分はこの不思議な一點が帝劇にもある事を發見した。ヘエルの小說のはオオケストラの中か何かであるが、

自分のはそんな後暗い所ではない。堂々たる一等席のまん中で、しかもちやんと椅子に腰をかけてゐて、三階四階の話し聲が、手にとるやうに聞えるのである。いや、それ所か、自分がそこに坐つてゐた時の如きは、うす暗い天井の上の方から、漆喰の鳩の羽ばたきさへ、銀箔を剝す音のやうに、かすかながらはつきり聞えて來た。

嘘だと思つたら、行つてごらんなさい。場所は——と書きは書いたが、さてかう云ふ事を公にしてよいものかどうか、その邊は帝劇の專務取締役か何かに一應問ひ合せた上でないと、判然しない。が、今假に大體の見當を云ふと、向つて一番右の入口と、舞臺の向つて左の端とを直線に繫いで、更に向つて左から二つ目の入口と舞臺の向つて右の端とを又直線に繫いだ、その二つの直線の交叉する所だと思へば確である。自分はそこへ坐つたおかげで、自分が何か書く可き義務のあつた「結婚の前」のいろいろの批評を、一階二階三階四階の見物の口から、親しく幕間の十分間に聞く事が出來た。だからこの下に掲げる評判記のやうなものは、全く公衆の下した批評であつて、自分は唯それに一定の順序を與へたのに過ぎない。

本文

伯父　あの韮山惣右衞門と云ふ老爺も、頑固な奴だな。いくら田舍でも當世は、もうあんな分

らずやは一人も居るまい。

甥　ゐますよ。事によると、この見物の中にもゐるかも知れません。

作家　僕はあの老爺は好きだね。無邪氣で可愛いい所があるよ。殊に死んだ妹に對する愛情などは、美しいと云つても好い位だ。ズウデルマンはこの悲劇の原因の一つに、あの老爺の舊弊な考を算へてゐるかも知れないが、それは單に作者のおめでたい色眼鏡に過ぎない。

娘　お母樣。あの人はちよいとうちのお父樣に似てゐやしなくつて。

母　まさか、お前。

娘　でも、ああ氣むづかしくつては、お上さんのお玉さんが可哀さうね。

母　ああ、さうだとも。お母樣なぞも、ああ云ふ事では隨分、お前、心配したあね。

甲の學生　頑迷固陋それ自身のやうな老爺だな。

乙の學生　新思想の敵だよ。「古きものよ、汝の名は韮山惣右衞門なり」か。

劇評家　加藤は藥が利きすぎるよ。ああまで「俄」じみちまつては打毀しだね。あんな男ぢやなかつたのだが。

新聞記者　殊に引つ込みと云ふと、惡く芝居をやるやうですね。

劇評家　素質の許す限りに於ては、出來る丈の事をやつてゐるね。だから文句を云へば、律子

にどうする事も出來ない所まで云はなければならない。それはちと殘酷だらう。しかし一幕目の幕ぎれで、泣き倒れる所なぞは、もう少しどうにか工夫のつきさうなものぢやないか。

娘　お母樣、私お粂が可哀さうで、可哀さうで仕方がないわ。だけれども健太郎がお粂と一しよになつてしまへば、お里だつて可哀さうだわね。私どうしたら好いんでせう。

母　そりやお前ああなれば又ああなるで、外に仕方がないやね。

作家　僕はお粂と云ふ奴は嫌だね。ああ云ふヒステリツクな女位、始末の惡いものはありやしない。健太郎に對する愛と云ふやうなものでも、あの女が泣いたり笑つたりして、廣告してゐる程、大したものだかどうか疑問だぜ。それから母親の女乞食に對する心もちになると、あれの更に輪をかけたものだよ。兎に角感傷家で、感傷家に獨特な誇張癖を持つてゐるのだから油斷がならない。

甲の藝者　つまされるわね。皆世の中は思ふ通りにはならないのだから。

乙の藝者　まつたくね。あら、あなた、眠ちまつたの。

紳士　ああ、ああ、もう幕か。

甲の會社員　ああ云ふ女がゐたらいいだらうな。

乙の會社員　さうして持參金があれば、申し分なしだらう。

甲の會社員　冗談云つちやいけない。僕だつて、健太郎の如く持參金位は拒絶する勇氣があるさ。

劇評家　森の健太郎も香しい出來ぢやないね。一體にもう少し落着きがあつて欲しいものだ。あれぢやまるで伯父と喧嘩をするのを、商賣にしてゐるやうな氣がするぢやないか。尤も慈妙と云ふつき役を控へてゐるのだから、そこに同情も出來ると云ふものだが。

新聞記者　少し大向から秋月つて聲がかかりさうな氣がしますね。

伯父　あの健太郎と云ふ男も亦、極端すぎる。あれでは萬事出來かかつた物を自分からぶち壞して了ふやうなものだ——。

甥　それが若い中は、誰でもああやりたいものですよ。僕なんぞも何時か——

伯父　それだから、わしが、あの男を前車の覆轍にしろと云ふのだよ。

作家　あいつもいかん。僕はああ云ふやつは大嫌ひだ。あらゆる點で自惚ればかり強くつて、その癖自信らしい自信は一つも持合せてゐない。苦學をして大學を卒業した位な事を、鼻にかけるのも傍痛ければ、如何に義理とは云へ自分が愛してゐないと公言してゐるお里と結婚するのも薄情ぢやないか。その上又怪しげな詩人根性を持合せて、百合の花を持つて歩いたり舟に腰をかけて、考へこんだりするのだから、愈手がつけられない。あれに比べれば、いくら我儘だつ

て、子供だつて、遙にお里の方が高等だよ。そのお里をつかまへて、我健太郎氏は意志も感情もない女だとか何とか、盛に氣焔を擧げてゐるがね。あれはまあ性さへ換へれば、その儘夫子自身に當て嵌ると思つて差支へない。

甲の藝者　お里つて子もあんまり多愛がなさすぎるぢやないの。

乙の藝者　でもみんな、あんなものよ。

甲の會社員　日本の女は皆、あの位なものだらうな。さう思ふと、いやになつてしまふ。

乙の會社員　どうして、この頃は滅多にあんな女はゐやしない。大抵はあれとお粂と寄せて、二で割つたやうなのばかりだよ。

新聞記者　早苗のお里も惡くはないやうですね。

劇評家　まづ可もなく不可もないとして置くか。

甲の學生　實際今の世の中には、慈妙のやうな考を持つてゐる、青年僧侶も多いだらうな。

乙の學生　そりやゐるだらう。僕等だつて、職業こそ違ふが一種の慈妙だつたのだから。

甥　慈妙もやつぱり、伯父さんには氣に入らないでせう。

伯父　さうさ。あれもまあ困り者さな。それにあの男の師匠は、惣右衛門より人間が好ささうだから、餘計可哀さうな氣がしないでもない。

劇評家　横川の慈妙も失敗だね。尤も横川でなくつても、誰がやつても、失敗しさうな役は役だが。

新聞記者　何しろ臺辭が生硬なので、隨分損をしてゐるやうです。

劇評家　兎に角惡い籤を引いたものだ。しかしやつぱりそればかりぢやないね。「韮山家の外部」か。あの場で、お粂に戀を打明る所などは、強ひて率直がつた爲に、全然自然味を害してゐる。

新聞記者　一體坊主が俗人の服裝に變つただけでも、滑稽な感じを伴ひ易いのですから、餘計率直なのが反つて惡落ちの種になつたのでせう。

甲の藝者　坊さんの癖に、何だつてあんなむづかしい理窟を云ふんでせう。可笑しいつたらありやしない。

乙の藝者　あら、だつてこの節の坊さんは、そりや開けてゐるわ。

作家　いやな坊主だ。どうせ寺をとび出す位なら、女乞食のお小夜の伴でもして、托鉢に行けばいいのに。あのお小夜の方が、まだ遙に可愛げがある。

娘　御母様。私あの乞食が憎らしいわ。あんなにお粂が親切にしてやるのに、まだいろんな物を盗むのですもの。

母　ああ云ふ人がゐるのだから、お前さんなんぞもお氣をつけなさいよ。此間もお前さんは――

劇評家　かく子のお小夜が一等の出來だね。はひつて來てお粂と抱きあふ所の呼吸もよかつたし、盗みが露顯してそら笑ひをするまでの段どりもよかつた。概して今度は女優の方が成功してゐるが、かく子なぞはその優なるものだらう。國民協會の連中はまつたく緊褌一番せざる可らずだね。

新聞記者　そんな事は時事新報で、南部修太郎君もさう云つてゐましたよ。――おや、なにか思ひ出し笑ひをしてゐますね。

劇評家　何、かね子の女中頭が大に肩をしよなしよなやつて、女中ぶりを發揮したのが目についてゐるからさ。あれも愛嬌があつて、よかつたよ。

紳士　ああ、ああ、まだ幕が開かないのか。

（大正七年七月）

有樂座の「女殺油地獄」

有樂座で女殺油地獄の芝居を見たから、序に近松門左衛門の同じ名前の淨瑠璃をちよいと讀んで見た。さうしたら前に芝居を見た時と同樣、甚だ浮ばれない心もちがした。

何故かと云ふと、あの主人公の河内屋與兵衛は、元祿だか享保だかの純然たる不良少年である。天王寺屋の小菊が外の客と野崎參りをしてゐると云つて亂暴狼藉を働く。義理ある親父が身代を渡さないからと云つてその親父さんを踏んだり蹴たりする。擧句の果が金に困つて、罪もない油屋の細君を殺してしまふ。しかしその細君を殺す時に何と云ふかと思ふと、「おお死にともない筈、尤も尤も。こなたの娘が可愛い程、おれもおれを可愛がる親父がいとしい。金拂うて男立てねばならぬ。あきらめて死んでくだされ」と甚だ手前勝手な理窟を竝べてゐる。こんな理窟をいくら聞かされた處で、天下に「あきらめて死んで」やれる人間がある譯のものぢやない。それをさも尤もらしく述べ立てた上に、御苦勞にも油に辷つて轉んだり起きたりするのだから、誰が考へたつ

て、與兵衞の如きは狂人同樣の取扱ひを受けて然る可き金箔附きの不良少年である。

處で女殺油地獄なるものを見ると、あの中に有りとあらゆる悲劇は悉く此與兵衞の一人の病的悖德性から起つてゐる。與兵衞がもう少し健全な、さうしてもう少し教育のある人間だつたら、何も實直な油屋の御亭主にあんな歎きをかけずにすむばかりぢやない。侍氣質の伯父さんや兄思ひの妹も大して迷惑はしなかつたらうし、生みのお袋や義理ある親父も先づ先づ安らかに餘生を送ることは出來たのに相違なからうと思ふ。すると女殺油地獄の悲劇は與兵衞と云ふ例外的人格さへなかつたなら決して起らなかつたらうと云つても好い譯である。而も其與兵衞は前に書いた通り、何時どんな事をしでかすか分らない頗る物騷な半狂人なのだから、その限りに於て女殺油地獄の悲劇はよしんば悲劇にした所で、已むを得ずして起つた悲劇だと云ふ心もちはしない。已むを得ずして起つた悲劇にした所で、千に一つも向う三軒兩隣には起りさうもない悲劇だと云ふ心もちがする。だからあの芝居を見たりあの淨瑠璃を讀んだりすると、飛んでもない事になつたものだとは思ふが、何とも御愁傷の至りに堪へないと云ふ氣にはなれない。不良少年は早く懲治監へ入れろと云ふ教訓劇だとは受取れるが、我我ノオマルな人間が自ら省みて戰慄すべき悲劇だとはちと考へられない。

と云つた處で何も近松門左衞門が全然駄目だと云ふ次第ぢや勿論ない。女殺油地獄にしても

前後を通じてテクニイクは大の字のつく戯曲家たるに恥ぢない程、如何にも手に入つたものである。いや寧ろ如何にも手に入つてゐる結果、不良少年たる河内屋與兵衛の性格が餘りに活潑潑地に躍動してゐるものだから、自分の如きものには最後の與兵衛の悔恨でどの程度まで本當だか聊か判然しない憾がある。さう云へばあの人殺しの動機にしても、金を盗む心算だつたと云ふのは與兵衛の出たらめで、實はあの油屋の細君を口說きそくなつた一時の腹立ち紛れか何かだつたかも知れない。要するに恐るべきものは唯不良少年である。

（大正八年二月）

劇評一束

九年一月明治座評

明治座を見た。一番目の「信長記」は綺堂氏の作である。脚本は決して拙くはない。いや、寧ろ巧妙に纏りがついてゐる。が、遺憾ながら深さが足りない。この芝居だけで見ると、信長の叡山を焼く理由が餘りに簡單明瞭すぎる。(史實は問題でない。戲曲としての效果の上から云ふのである。)よしその理由があれだけで好いとしても、愈山門破却となるまでには、もつといろいろな葛藤がなければならぬ。更に又一歩を讓つて、あれだけの葛藤で好いとしても、その葛藤にはもう少し内面的な機微がなければならぬ。左團次の信長が一度眼を瞋らせて叱咤すると、造作なく解決されてしまふやうな葛藤では、どうも僕等には物足りない。

それからもう一つ氣附いた事を云ふと、この芝居の中で一番莫迦な目を見るのは、小團次の漁師六右衞門で、娘を山法師に攫はれた上に、自分は流れ矢に中つて死んでしまふ。如何にも莫

湖の漁師らしく、ぢぢむさく成功した小團次にも御氣の毒の至りであるが、由來戰爭と云ふものは、てんで個人の運命などを問題にしないのだから仕方がない。聊か皮肉の言葉を弄するなら、之からの芝居の語つてゐる最も大いなる眞實である。

役者では猿之助の悪僧善仕坊が、就中樂々と成功してゐた。尤も餘り樂すぎると云ふ非難もあれば――何、ついでに吉野山へまはつて、横川の禪師覺範を兼帶すれば好い。

中幕の上は大藏卿である。中車の大藏卿の作り阿呆は、殆ど入神の妙技だつた。僕は未嘗あの位現實的な作り阿呆を見た事はない。あれでは好人物の悪人たる八劍勘解由如きものが、計る計ると思ひながら、反つて計られるなどは當然である。その代り愈本性を現すと、どうも一條大藏卿とは假の名まことは阿部の貞任か何かの觀があつた。だから大藏卿は阿呆になる事に成功したが、中車は大藏卿になる事に失敗したと云はなければならぬ。

中幕の下は關の小唄である。が、これは脚本そのものが、到底東京明治座の舞臺へ載るべき代物ではない。壽三郎の手代和助を始め、自由劇場の名優たちが愚昧な臺辭を並べてゐるのは、實際聞くに堪へぬ程悲慘を極めた光景だつた。殊に京屋内の場の幕切れの如きは、御店の若者以下である。斯るすき切れのした錦繪の如き、乃至落丁の多い情話新集の如き拙作を演じさせるには、新劇團の下廻りたる青生と雖も勿體ない。況んや壽美藏、松蔦、秀調等を登場させるに至つては、

殆ど一種の人權蹂躙である。

二番目の「小猿七之助」は、岡鬼太郎氏の作ださうである。手際よく纏めた上に、新しみもあつて面白いと思つたのは、何も關の小唄に惱まされた後だつたからばかりでもあるまい。唯、この芝居に纏綿する因果の氣味惡さを感じさすべく、概してどの幕の舞臺面も陽氣すぎるのは遺憾である。だから燈明の丁子がはねて御幸の眼が痛んだと云つても、一向陰慘たる心もちになれない。折角暮六つの鐘が何だとか云つて、車輪になつてゐる左團次の七之助にも甚だ氣の毒な心もちがした。その外秀調のお瀧、猿之助の白旗金太いづれも惡くはなかつたが、中でも中車の網打の七藏は、今度こそはほんたうに敬服すべき入神の技だつたと云つて差支へない。大切の鞘當は御免を蒙つた。

九年十月市村座評

市村座を見た。

一番目の「伊達安藝盡忠錄」は、碧瑠璃園氏の小說を脚本に直した物である。その小說を知らないから、直し方の巧拙は暫く措く。が、舞臺の上で見た脚本の出來は、義理にも結構とは評され

ない。第一筋の運び方が、殆ど出鱈目そのものである。米升の腰元おすぎ實は高尾妹おすぎと云ふ御轉婆女が、突然姿を現すなどは、結局悪い洒落としか思はれない。殊に伊三郎の松川要に至つては、これが大正の昭代だから好いが、さもなければ見物の國侍が途まどひをして舞臺へ上つたかとも疑はれさうな人物である。第二に一幕一幕が、如何にも芝居にならなすぎる。と云ふのは何も新趣向らしいリアリズムを認めてゐないのぢやない。あんな安値なリアリズムでは、到底幕毎の締りの無さが救はれないと云ふのである。第三には臺詞が莫迦に拙い。殊にそれがどうかすると、恐るべき新しさに富んでゐるのだから、愈見物は災難である。菊五郎の綱宗曰「如何なればまがつみはわれをさいなむ。おのれに出でておのれに還る。又も寂しき閉居となるか。」とか何とかこれぢや原田甲斐でなくつても、綱宗は精神に異狀があると云ひ觸らしたくなるに違ひない。

　脚本がかう云ふ調子だから、役々も更に感服出來ない。まづ最も無難なのは、菊三郎の酒井雅樂頭である。尤もこの役は一幕中まるで一言も口を利かない。唯陰險無双な顏をして高い所にちやんと坐つてゐる。その人相が何となく御大老らしいのに感服した。次は菊五郎の二役原田甲斐である。嚴密にいふと評定所に坐つてゐる時の原田甲斐である。立つと短い袴の下から、素足がぬつと出てゐるせゐか、江戸家老上席は本職で內職は髪結新三ぢやないかと、三宅周太郎君にで

も聞いて見たくなつた。それから三津五郎の松波辰之丞は勇猛精進の氣に富んでゐるのが取り柄である。但しああ何時もせきこんでゐちや、いくら緣の下に隱れてゐても、すぐに猶助補十郎たどの善良愛すべき奸臣ばらに見つけられてしまふのに違ひない。さて肝腎の吉右衞門だが、この人の主人公伊達安藝は、どうも大向うが、息を呑む程難有い出來ではなささうである。勿論拙い譯ぢやない。僕の如き歌舞伎に無神經な人間でも、あの無氣味な震へ聲を聞くと、或程度までは心が動かされる。が、次の瞬間には、もうマンネリズムが鼻についてしまふ。少くとも今度の伊達安藝などになると、不快な印象は受けないまでも、やはりその臭味に祟られて、敬禮しようと云ふ心もちになれない。

二番目の「御金藏破り」は幕が拔いてあるのは勿論、一幕の中にも刈りこみが多い。それにも關らず舞臺の上の感じは、一番目よりも遙に上等である。唯僕に云はせると、四谷見附濠端の書割などは、全然不服と云ふ外はない。あんなパノラマじみた舞臺にかけちや、默阿彌の芝居の味などは、八割方は確に消えてしまふ。大道具小道具の進歩も結構だが、それは飽くまでも演ぜらるべき芝居の成立ちを考へた上、その芝居の書かれた當時の舞臺と、同方向に進んで行くべきである。背景は遠慮なく油繪じみて來る。が、七五調の渡り臺詞は昔と更に變りがない。――と云ふやうな始末ぢや、古人鏤骨の名作に糞をなするのも同じ事である。背廣に三尺をしめて似合ふか

どうか、ちつとはその邊も考へて見るが好い。もし僕が菊五郎だつたら、おでん燗酒の荷の代りに支那蕎麥の屋臺をかついで出て、作者や役者を尊重しない俗物に泡を吹かせてやる。

役者は菊五郎の富藏が、やはり一番面白かつた。熊谷土手の別れの場も惡黨らしい人間味が流露してゐたのは愉快である。唯召捕られても御手當てが好いと見えて、健康さうに丸々肥つてゐた。吉右衛門の藤十郎は感服出來ない。富藏の度量が怖くなつて、突然殺さうとする心もちも、もつと細にしこなさなければ、吉右衛門でなくともすむ事である。

序ながら書き添へるが、一しよに見物した大通人の説によると、二番目の序幕へ出て來る駕籠屋は、駕籠屋の作法に通曉しない素人だと云ふ事である。折助でさへ六代目が味噌をつけたおでんを食ふ以上、播磨屋たるものも心を用ひて、後棒前棒の區別も辨へない素人の駕籠屋などにはのらないが好い。

九年十一月明治座評

明治座を見た。

一番目の「明治維新」は、彰義隊奮闘之圖の石版畫と大差ない趣味の戯曲である。幕々では、や

はり三幕目三本木藝子屋の場が、最も芝居になつてゐるらしい。が、桂小五郎が藝子君勇の剛愎を試みる一段は、役者にとつては必要でも、見物にとづては無用である。役者は猿之助の桂や壽三郎の大山二役船頭の角藏などが、兎も角も健氣に努めてゐる。が、端役の連中になると、惰氣漫漫としてゐるのも少くない。自由劇場の名優左升の如きは、正にその一人である。殊に滑稽な氣がしたのは、序幕蛤御門前合戰の場へ出る仕出しの中に、彈丸雨飛の下を逃げまはりながら、にやにや笑つてゐる町人があつた。

中幕の上は「關取千兩幟」である。壽三郎の鐵ケ嶽は無難の出來、壽美藏の稻川も惡くはない。が、かう云ふ役になると、どうも藝の細さが目に立つて、淨瑠璃めいた味ひがしんみり出ないのは遺憾である。尤もこれは壽美藏が近松半二の作つた人間より、神經の鋭い結果なのだから、或は責める方が間違ひかも知れない。秀調のおとはも結構である。特にあの滴る如き色氣を見ては、何人もおとはの身賣りの決心は、選擇宜しきを得たものだと感服したに相違ない。序ながらつけ加へるが、夫の爲に細君が勸めをすると云ふ事は、芝居や艸双紙では何でもないが、バルザックでは悲劇中の悲劇である。これを東西の相違だと云つてしまへば、勿論面倒が省け――急ぐから、議論は後日にする。まだ中幕の下と二番目とを嫌でも批評しなければならない。

中幕の下は岡鬼太郎氏作「義貞の使者」である。出來はあまり宜しくない。と云ふ意味は卋秀梅

ケ枝父子の葛藤が、いろいろ持つて廻りながらも、結局發展の趣に乏しいと云ふ事である。が、この人の戯曲には、何處か藝術家らしい細心さが、感じられるだけでも頼母しい氣がする。左團次の入道聖秀は、僕の知人の坊主に生寫しだものだから、巧いのか拙いのかよくわからなかつた。それから聖秀が馬を愛する餘り、娘の梅ケ枝に對すべく、松風と名づけたと云ふ所は、如何にも鎌倉時代の父親らしい、天空海濶の氣象に富んでゐる。當世の軍人多しと雖も、馬に宮城野、令孃に信夫と命名する程、慓悍な親父は一人もあるまい。

二番目は「毛剃」である。左團次の毛剃は元船の場が好い。奥田屋へ來ると、どうも若々しい氣がする。事によると毛剃の弟かも知れない。松蔦の小女郎は、或は秀調の梅ケ枝と換つた方が好いのかも知れないと思つた。壽美藏の宗七は、稻川よりも遙に嵌り役である。これも序ながらつけ加へるが、宗七が毛剃に仲間入りを勸められる時、宗七により添つた小女郎が、男の懐へ手をやつて「おお、この汗はい」と一言云ふ。あの一言が舞臺で見ると、面憎い程よく利いてゐる。近松先生なぞは何と云つても、心得たものだと云ふ氣がした。

大切りは所用の爲、「小栗栖長兵衛」も御免を蒙つた。

十年一月帝國劇場評

帝劇へ行つた。

一番目の「雪女五枚羽子板」は、近松の原作を綺堂氏が書き直した物である。錦繪のやうに綺麗だから、見てゐるとやつぱり悪い氣はしない。梅幸の腰元中川が松助の赤松入道の爲に、無殘な凍死をとげてしまふ。さうしてその魂が雪女になる。但し凍死と云つた所が、僕が目測した所によると、まづ二三十坪の庭に閉ぢこめられた結果、いろいろ振りがあつて往生するのだから、至極可愛らしい死に方である。それから中川の夫たる幸四郎の藤内太郎が宗之助勘彌宗十郎長十郎の四人兄弟と共に、各雪女に化けながら、まんまと仇の屋敷へ忍びこんで、赤松の坊主首を申し受ける。この時赤松が變裝した藤内太郎に、してその方は何奴なるぞと云ふが、藤内太郎實は松本幸四郎だから、すぐに女の聲色を使つて汝が爲に最後を遂げし腰元中川が亡靈なるわとか何とか云ふ。これも至極愉快である。共に五人の雪女が、結局雪男五枚羽子板になるのは――こんな事はもう竹の屋主人が、とうに云つてゐるかも知れない。序ながら書き加へるが、もし中川が凍死をせずに、藤内太郎と結婚すると、藤内中川となつたに違ひない。が、中川藤内と云ふ人間

はあつても、藤内中川と云ふ人間は、どうも滅多にゐなさうである。ゐればきつと、ヨネ・ノグチ氏の亜流か何かだらうと思ふ。――此處までは大概冗談だが、さて眞面目に考へると、二幕目の幕開きに、まだ幕が開かない內、雪を降らしたのは面白かつた。あの爲に二階の我々までが寒さを想つたのは事實である。尤も實際は大切の最中、ステイムのそろそろさめ出した時が、帝劇にもあるまじき寒さだつたが……。

二番目は大村嘉代子氏の「柳橋新話」と云ふ物である。これも草双紙のやうな芝居だから、見てゐるとやつぱり惡い氣はしない。僕の隣りにゐた何處かの奥さんなぞは、頻りに旦那樣を顧ては、好いわねえ、好い幕だわねえと感服してゐた。あの中には梅幸の藝者小靜が女の戀は眞劍だが、男の戀は浮氣だと、大いに氣焔を揚げる所があるから、其處が奥さんには氣に入つたのかも知れない。小靜は立派な藝者だが、何時でもたつた一人になると、「音しめやかな春雨に」なぞと、端唄集の中にでもありさうな獨り語を云ふ惡癖がある。あの點はどうも感服出來ない。其處へ行くと宗之助の珊瑚珠おきわは、小靜程安値な詩人でないから、きびきびしてゐて痛快である。しかし宗十郎の田之助は、結局そのおきわよりも、小靜の方が好きなのださうだ。勿論蓼食ふ蟲も好き好きだから、――いや、田之助は愈足を切りに、横濱へ行くと云ふ間際になつても、「お前の事は一刻でも忘れた時はありやしねえ」なぞと芝居ばかりしてゐる人間だから、本氣だかどうだか

當てにならない。

之を要するに正月の帝劇は、錦繪のやうな、草双紙のやうな、頗る綺麗な芝居である。又一等五圓八十錢と云ふのは、その決して安からざる點に於ても、やはり錦繪や草双紙の相場に、恥ぢない。と云つても過言ではない。しかも連日滿員だと云ふから、世間はこの高い觀劇料も、幸四郎や梅幸の妙技を見る爲には、惜しくないと思つてゐるのだらう。して見れば僕なぞは何も云はずに、まづこんな劇評でも書いてゐる方が好ささうである。それが怪からんと云ふ人があつたら、――もう書くのが嫌になつたから、ない事にして置かうぢやないか。

十年二月歌舞伎座評

「南都炎上」は凡作である。それを縮めたり伸ばしたりして演ずるのだから、愈面白くも何ともない。殊に東大寺燒跡の場の如きは歌右衞門の刈藻と云ふ女が、惡鬼羅刹の幻を相手に、見るも氣の毒な立廻りなぞやる。尤も青や赤の電燈の光に、源平時代の不良少年のやうな風體の惡い鬼どもが、美しい女を追ひ廻す所は、多少觀客のサディズムを滿足させる趣がないでもない。が、そんな事を云ひ出せば、左團次の荒法師永覺坊が、重衡を救ひに駈け出す所も、活動寫眞の警官

隊が、悪漢の逮捕に向ふが如き、勇壯な興味があるやうである。唯歌右衛門の重衡卿が、悠揚この品位に富んでゐたのは、何と云つてもこの人以外に、見る事の出來ない立派さだつた。

「船辨慶」は一番目なぞとは、比較にならぬ程面白かつた。一體所作と云ふ物は、思想めいた邪魔物がないだけに、大抵どれも悪い氣はしない。就中梅幸の靜や知盛は、いづれも堂々たる妙藝である。あの位ちやんと出來上つた小説は、月々發行される雜誌の中にも、滅多に見當らないのに違ひない。但しその爲に多見藏の義經の如きが、全然有れども無きにひとしいのは、やむを得ない藝の相違とは云へ、聊か氣の毒な心もちがした。段四郎の辨慶も結構である。もつと氣品の高い所があれば、勿論もつと結構である。それからあの辨慶を見てゐる内に段四郎がちよいと僕の友人に似てゐる事を發見した。僕の友人も年をとると、きつとああ云ふ叔父さんになつて、後進の九郎判官に靜御前とは手を切れなぞと意見をするのに相違ない。僕の友人とは「反射する心」の著者、中戸川吉二君の事を云ふのである。

「鎌倉三代記」は見てゐる内に、こんな事を考へさせた。歌右衛門のやうな老人が、時姫のやうな役をするのは、不自然な氣がしていかんと云ふ説がある。しかし歌右衛門の時姫を見てゐたら、僕はやはり年少美貌の役者よりも、歌右衛門に勤めて貰ひたい氣がした。つまりあの位の時姫になると、僕には歌右衛門の頽齡が、藝の陰に隱れてしまふのである。さうしてその藝は氣品だけ

でも、まだ賣出しの青年諸君には、眞似難くはないかと思ふのである。多見藏の佐々木高綱は、どう考へても江戸向きではない。しかも今代の悪臭を放つてゐるのは、歌右衛門と好い對照である。羽左衛門の三浦之助は、評を加へるだけ野暮かも知れない。序に無駄事を少し書くが、この芝居は古いやうでも、時代を今に持つて來ると、すぐに新劇になつてしまふ。と云ふのはざつとかうやるのである。何とか會社社長北條時政、同會社の職工長兼同盟罷工の首領三浦義村、北條家の令孃兼義村の意中人時姫、社會主義者佐々木高綱、國粹會員富田六郎。――まづこんな役を振り當た後、寢覺丸の短刀の代りに、ピストルか手形を出しさへすれば好い。さうして佐々木高綱が、勞働者の服を脱ぎ捨てると、「働かざる者は食ふべからず、レニン」と書いたシャツでも着てゐるとすれば、見物の喝采疑ひなしである。いや、決して冗談でない。見物はきつと「鎌倉三代記」よりも、その方が感激するだらうと思ふ。劇壇は實際今代の民心と、餘りに接觸を忘れ過ぎてゐる。民衆藝術家はまづこの方面へ、新しい活力を吹きこまなければならん。しかも所謂勞働文學は、これ程安値に出來る物ではないか。

「御祭佐七」は何度見ても、結局佐七の愚昧なるを憐れむ外はない狂言である。が、一體から云ふ二番目物が、兎も角も見物出來ると云ふのは、多少にもせよ人間情痴の心が、髣髴され得るせゐかも知れない。羽左衛門の佐七は殺し場になると、輕過ぎるのが何より眼障りだつた。梅幸の小

糸は佳妓の名に恥ぢない。但し聲を聞くと莫連である。

新富座の「一谷嫩軍記」

「一谷嫩軍記」と云ふ芝居を見た。

わたしは支那の芝居を見た時、餘り蟲の好い約束の多いのに、成程これでは門外漢には、何だかわかるまいと思つた事がある。處が日本の芝居を見ると、快い(?)理性の痲痺のない限り、到底享樂の出來ない事は、殆ど支那の芝居と變りはない。たとへばあの序幕にしても、作事場の矢來に似たものを見たら、一の谷の木戸だと思はなければならぬ。又立つつけに鉢巻きをした飄逸愛すべき何人かを見たら、粟餅屋の一揆だと思はずに、平家の軍兵だと思ふべきである。その外臺辭を考へれば、愈變痴氣論にかぶれてしまふ。わたしはそれを責めるのではない。が、久しぶりに芝居を見た門外漢のわたしの印象は、正にこの驚嘆に始まつたのである。

その次の場、——熊谷と敦盛と組討ちをする所は、紺屋の張り場へ行つたやうに、紺絞りがすつと干してある。が、實際は海のつもりらしい。これは約束の問題よりも、大道具の天才の然ら

しむる所である。此處へ出る熊谷次郎直實は、坂東武者と思はれぬ程、風流氣に富んでゐるらしい。敦盛や玉織姫の死骸の上に、ちやんと幌をかけた上、楯にのせて流すなどは、如何にも氣の利いたものである。しかし敦盛や玉織姫は、勿論命のある役者の事だから、熊谷のひろげる幌のかげに、そつと楯の上へ這ひ上つてしまふ。それを見物に見せないやうに、幌に蔽はうとする熊谷の姿は、宛然子供が風呂敷か何かで、螢をつかまへる時の恰好に似てゐる。わたしも四方の見物と同樣、思はず噴き出してしまつたが、あれは笑ふのも不思議ではない。日本の芝居には黑衣がある。勿論一の谷の海邊に、黑裝束の人間が出て來た上、死骸取片附の役を勤めるのは、餘り見好い物ではないかも知れない。しかしひろげた幌のかげに、死骸がのそのそと這ひまはるよりは、少くともあれ程見物の眼には、可笑しくない事も確かである。出來る限り黑衣は使ひたくない。——それも成程御尤もである。が、「その出來る限り」に無理算段があると、なほ更滑稽に墮してしまふ。人間の足を持つた馬の出て來る以上、昔の約束は輕んずるよりも、重んずる方が寧ろ無事のやうである。約束の多いのに驚嘆したわたくしは、まだ第二場の終らない内に、この通り約束を尊敬し出した。殊に組討ちにならない前、一度波幕をふり落した所へ、敦盛の乘つてゐた鞍置き馬が、主人も乘せずに走つて來るのは、何時見てもわたしには愉快である。

熊谷陣屋の場になると、この芝居を作つた人、——勿論誰だか知らないが、兎に角その人の技

巧家なのに、重重敬意を拂はざるを得ない。いや、敬意を拂ひすぎる結果、實はその人は作者たる傍ら、巾着切りだつたかも知れないと云ふ失禮な推測さへした位である。藤の方に青葉の笛を吹かせる。障子に敦盛の姿が映る、障子をあけると敦盛の鎧がある、——ざつとこんな事で持ち切るのだから、何しろしたたか者には違ひない。しかし浮世を捨てた熊谷に、浮世を捨てない宗清を配したのは淺露でないだけに手がらである。まだその外にもう一つ、敦盛の死を歎いた藤の方に、未練だなどと云つた相模自身が、小次郎の死を知るが早いか、忽ち大愁歎に沈むなども、好い見つけ所と云はなければならぬ。この芝居を作つた昔の人も、いろいろ長短を思ひ合せば、確かに凡骨ではなかつたやうである。もし不同意の君子があれば、この一幕三場の芝居に、昔の思想や感情が生きてゐる程、現代の精神を筆端に捉へた、新しい芝居を書いて見るが好い。それが容易に出來ない限り、たとひ辨當を食ひながらでも、この芝居に敬意を拂ふべきである。わたしは何年か知らない昔、「一谷嫩軍記」の書き下しを見た、髷のある人人を想像すると、少くとも當時は現代よりも、幸福ではなかつたかと考へさへした。

その次に役者を評する筈だが、讀者にもわたしにも困つた事は、わたしの鑑賞眼の問題である。わたしにも藝のうまいのはわかる。それから藝のまづいのもわかる。が、うまいともまづいともつかない、まづ中位の藝になると、どの位うまいか(或はまづいか)判然しない。たとへば三升の

義經は明白にまづい。吉右衞門の熊谷は明白にうまい。しかし勘彌の敦盛になると、御世辭を云へばうまいとも云へるし、喧嘩をする氣ならばまづいとも云へる。だから讀者に警告するが、あまり役者の評は當てにならない。とは云ふものの徹頭徹尾、出たらめだと思はれるのも不愉快である。

わたしは吉右衞門をうまいと云つた。が、吉右衞門の熊谷を見てゐると、悲しみだけは感じられるが、のみこめない所もないではない。熊谷はあの芝居によると、何時も平山武者所に祟られてゐる。何しろ敦盛實は小次郎の首を打つ時にも、平山に意地の惡い事を喚かれる結果、少くとも打つ時機を早めたのだから、並み大抵の祟られ方ではない。わたしならばあの場合、悲しい事は悲しいにしても、同時に平山武者所に對する、大嗔恚の念を發する筈である。處が吉右衞門の熊谷は、少しも腹を立てた氣色がない。これがわたしの不滿の一つである。それから熊谷改め蓮生坊になると餘り蓮生坊らしい心もちがしない。輕みがあり過ぎて、氣が利いてゐて、鉢叩きか何かにでもなりさうである。あれが原作の趣意だと云へば、勿論引き下る外はないが、風聞によればこの人の藝は、近代味に富んでゐると云ふのだから、必しもそんな事にこだはる必要はあるまい。これがわたしの不滿の二つである。

吉右衞門の事を一つ書いたら、もう何も云ふ事はなささうであるが、次手に一言すれば、熊谷

の馬の前足もうまい。あれは如何なる人か知らないが、何もせずに立つてゐる間、首を振つたり足掻きをしたり、さう云ふ些細の動き方に、人知れないうまさを示してゐる。わたしはこの數年來、幾つか芝居の馬を見たが、この如き馬は一度も見ない。

もう一つ次手につけ加へれば、時藏の相模と玉織姫である。相模はまづいのに違ひない。如何に武家の女房にしても、あんなに臂を張らずともであらう。一體にこの人は相模である間、手の扱ひが始終不自由だつた。が、玉織姫はまづくはない。思ふにこの玉織姫と云ふ女は、平山武者所に殺されながらも、誰か强い人が來て、こいつを殺してくれれば好いなどと、子供のやうな事を云ふ令孃である。しかも熊谷に遇つたと思へば、小次郎の首を敦盛と思ひながら、悲しい幻の中に死んでしまふ。（この垂死の御姫樣にさへ、小次郎を敦盛と思はせるのは、赦し難い熊谷の不德である。殊にあの時は見渡した所、平山などの姿は何處にも見えない。わたしならばそつと玉織姫の耳へ、敦盛が助かつた事を囁いてやる。さうすれば冥土へ行つた上、一しよになる望みはかなはなくとも、あんなに悲しみはしなかつたかも知れない。幻の爲に慰められてゐるのはまだ好いが、幻の爲に苦しんでゐる者を見せられるのは、芝居でもわたしには不愉快である。）時藏の玉織姫には、さう云ふ令孃に扮すべき、相當の工夫があつたらしい。これはこの芝居には緣のない事だが、時藏或は時藏の年配の役者の藝には、在來の歌舞伎劇だけでは律されない、新しい動

き方がはひつて來たやうである。時藏は人氣のある役者かどうか、それはわたしにはとんとわからない。しかし相模は窮屈さうでも、何時かはもつと自由な世界にのびのびと立ち上る時がありさうである。

最後につけ加へて置きたいのは、子供の役者の事である。わたしはやはりショオのやうに、やむを得ない場合の外は、子供に芝居はやらせたくない。遠見の熊谷や敦盛は、まだ好いが、中幕の「阿波の鳴戸」のお鶴になると、ああ云ふ役を勤めさせる事は、――まだ年も行かないものに、表情の技巧を覺えさせる事は、子供の魂を毒するものではないか？ わたしは役者になつたとしても、子供にお鶴などは勤めさせない。況や人の子供のお鶴を見ながら、喝采してやまない見物の一人には、到底なる事は出來なかつた。ああ云ふ見物が半世紀以前には、子供の輕業に喝采したのである。又一世紀以前には、佐倉宗五郞の子供の死刑にさへ喝采する事を辭さなかつたのである。

（大正十一年三月）

帝劇の露西亜舞踊

僕はロシア舞踊の何たるかを知らない。實は少し知つてゐたが、帝劇の中へはひると同時に一つ殘らず忘れてしまつた。少くとも忘れようと努力した。努力すれば忘れられるかと理窟責めにされればそれ迄である。しかし僕の知つてゐた「少し」は言葉通り少しだから、忘れてゐないでも大した事はない。だから僕の印象は全然素人の印象である。たとへば昔華魁を見た阿蘭陀人の印象に似たものである。僕の印象が正しいかどうか、それは僕自身も保證しない。唯幾分でも取り柄があれば、かぶれてゐないと云ふ事だけである。それを又感じた通り正直に書いたと云ふ事だけである。

僕の見たロシア舞踊は、「アマリイラ」「ショピニアアナ」及び「瀕死の白鳥」を加へた七種の舞踊等である。

「アマリイラ」には辟易した。第一に背景が不愉快である。森の色も空の色も石欄の色も唯事で

はない。第二に芝居がかつた筋も不愉快である。何しろ美しいジプシイの娘と伯爵との戀と云ふのだから、如何にワットオのやうだとか何とか云つても、妙な甘さに中てられてしまふ。オペラは舞臺に降參したら、目さへつぶつてしまへば好い。しかし舞踊は目をつぶれば、それこそ萬事休してしまふ。第三にはアンナ・パヴロワの扮するジプシイの娘も不愉快である。大袈裟で、肉感的で、ヒステリックで――一言に云へばデカダンに過ぎない。ああ云ふ物を生んだ社會、ああ云ふ物を愛する社會は、如何に割引きして考へて見ても、性慾的に變態な世界である。僕は人よりも道德家ではない。殊に旺盛なる性慾などには敬意を表したいと思つてゐる。しかし病的な、弱弱しい、卑劣な性慾には同情出來ない。「アマリイラ」の一幕には――少くともジプシイの娘の舞踊には、さう云ふ性慾が漲つてゐる。僕は幕が下りるが早いか、アンナ・パヴロワと帝劇と僕に批評を賴んだ「新演藝」とを內心一つに呪ひながら、猛然と廊下へ飛び出した。すると三島章道君に遇つた。三島君は紳士である。僕のやうなボエムではない。「どうです?」――三島君は僕に云つた。「嫌ですね」――僕はさう考へながら、何年か前の事を思ひ出した。何年か前もこの廊下に同じやうな惡罵を發した事がある。その時はロシアのグランド・オペラだつた。一體僕とロシアとは氷炭相容れない仲なのだらうか? いや、僕は「アマリイラ」にも、――この事は後に述べて見たい。「アマリイラ」の次は「ショピニアアナ」である。これにも僕は冷淡だつた。舞臺の感じ

は手巾の箱か、西洋小說のカヴアの畫に似てゐる。しかし幸ひにこの舞踊は題名の通り芝居ではない。その上藍がかつたスポット・ライトの中に、白い踊り子の隱見するのは兎に角綺麗な眺めである、僕は冷淡だつたとは云へ、この前「アマリイラ」を見た時のやうな積極的な不快は感じなかつた。――と云ふのは精神的にはである。肉體的には見てゐる內に、二三度輕い眼まひを感じた。一體西洋の舞踊なるものは獨樂のやうにぐるぐる廻つたり、空中へひらりと飛び上つたりする。あれは衞生上には、――少くとも看客の衞生上には餘り好結果を與へないらしい。仕合せにも僕は眼まひだけだつたが、幕合ひに廊下へ出て見たら、喫煙室のテエブルの下に、うんうん呻つてる紳士があつた。この紳士などは聞いて見ると、丁度船に醉つたやうに、ロシア舞踊に醉つたのだと云ふ。――が、眞面目に驚かないでも好い。これは僕の小說である。

しかし「瀕死の白鳥」等七種の舞踊が始まつた時、僕は忽ち快活になつた。藝術はいつか舞臺の上から、たとへば霧の中の月のやうにかすかな光を放ち出したのである。

「瀕死の白鳥」は美しい。少くとも「瀕死の白鳥」と云ふ日本譯の名よりも美しい。一體アンナ・パヴロワの舞踊は巧妙とか何とか思ふ前に、骨無しの感じを與へるものである。實際我我日本人は骨無しと稱するもの以外に、ああ云ふ屈曲自在を極めた、しなやかな體を見る事はない。骨無しは勿論グロテスクである。僕はこの感じの爲に、無氣味になつたり、滑稽になつたり、角兵衞

獅子を思ひ出したり、パヴロワもロシアの酢を飲むかなどと下らない事を考へたり、要するに純一無雑なる鑑賞の態度にはひれなかつた。が、「瀕死の白鳥」になると、突然この骨無しの感じも消滅してしまつたのは不思議である。僕は唯パヴロワの腕や足に白鳥の頸や翼を感じた。同時に又澪やさざ波を感じた。更に僕自身呆れた事には、耳に聞えない聲も感じた。パヴロワもかうなれば見事である。たとひデカダンスの匂はあつても、それは目をつぶれぬ事はない。僕は兎に角、美しいものを見た。この上の不平は僭上である。パヴロワも善い。帝劇も善い。僕に批評を頼んだ「新演藝」も好い。

僕を快活にしたものは獨り「瀕死の白鳥」のみではない。ヴォリニインのピエロオもその一つである。彼とパヴロワとの「バックスの祭」もやはりその一つである。が、今は殘念ながら、一一それを述べる暇はない、唯最後に書きたいのはロシア舞踊全體の印象である。

僕はロシア舞踊の中に得體の知れない何物かを感じた。それは「瀕死の白鳥」などとは全然違つた何物かである。もつと若若しい、もつと野蠻な、もつと太陽の光に滿ちた、もつと燕麥の匂のする、もつと東洋に近い何物かである。それはまだどう云ふ譯か「瀕死の白鳥」などのやうに、力強い表現に廻り合はない。唯いろいろの舞踊の中に、時時ちらちら顔を出してゐる。僕は「瀕死の白鳥」を褒めた。しかし「瀕死の白鳥」は未だ僕を不安にはしない。僕はフランスの詩人と一しよに、

あの世界の風には吹かれてゐる。が、もう一つの何物かはさう云ふ生柔しい代物ではない。恐るべきロシアの天才どもは皆その太い血管の中にこの何物かを藏してゐた。ロシア舞踊も此處へ來れば、途方もない可能性を持ちさうである。僕はさう考へた時、前に辟易した「アマリイラ」さへ、迂濶に莫迦には出來ない氣がした。ロシアと僕とは必しも氷炭相容れぬ仲ではない。

（大正十一年九月）

市村座の「四谷怪談」

——附　御所五郎藏——

議論を製造することは容易である。「四谷怪談」を評するにしても、何とか理窟をつけさへすれば、どんな議論でも出來ないことはない。

第一に「四谷怪談」は鼠害の恐るべきことを教へた芝居である。あの夥しい鼠を御けることは石見銀山鼠取りの藥や何かの能くするところではない。「猫入らず」よりも進步した最新の殺鼠劑を用ふべきである。しかし化政度の應用化學は不幸にも頗る幼稚だつた。その爲に幾多の惡人は法廷に立つ前に嚙み殺され、又貴重なる證據書類も堙滅に歸することを免れなかつた。これはゆゆしい大事である。すると殺鼠劑の研究は火藥や毒瓦斯の研究よりも下位に居るべきものではない。一國の司法權を確立する爲にも重大な役目を勤めるのである。——かう云ふ議論も出來ないことはない。

第二に「四谷怪談」はスピリテュアリズムの問題に解答を與へる芝居である。お岩はどう考へて

も、面白い性格の持ち主ではない。殊に甚だ氣の毒なのは諧謔の妙がわからないことである。もし譃だと思ふ人は宅悦との應對に徴するが好い。諸君の隣家の細君ならば、如何に窮厄の間とは云へ、ああ云ふ按摩との應對には常談の一つ位は云ひさうなものである。ところが幽靈になるが早いか、蠢愚に近いお岩樣は忽ちヒユウモリストに變つてしまふ。提灯から顏を出したり、盥から手を出したり、御亭主に石地藏を抱かせたりする。即ち、人間たるお岩の性格は死の刹那に消滅し、幽靈たるお岩の性格は新たに呱呱の聲を擧げたのである。すると個人の性格は必しも不變のものではない。死、――殊に殘酷なる死は急劇なる變化を起させるのである。――から云ふ議論も出來ないことはない。

第三に「四谷怪談」は封建時代の道德に反旗を飜した芝居である。封建時代の道德によれば君父の仇を報じないものは人間の皮を着た畜生に過ぎない。だからお岩だのお袖だのは彼等の貞操を犧牲にしても、一門の仇を報じようとした。その結果はどうなつたか？　唯無意味なる流血である。それも彼等ばかりではない。繫がる緣の善男善女も大抵非命の死を遂げたのである。一人の命を償ふ爲に他の一人の命をとることは如何に恐るべき悲劇を產むか、如何に人天の怒を買ふか、如何に地上を暗黑にするか、――それはこの奇怪なる戲曲の中に描き盡されたと云つても好い。我我は「四谷怪談」の前に復讐の惡を思ふべきである。遠くは封建時代のかたき打ちから近くは現

代の死刑に至るまで、あらゆる復讐の惡を思ふべきである。——かう云ふ議論も出來ないことはない。

第四に「四谷怪談」は宿命主義者の書いた芝居である。宿命は何ものをも顧みない。唯氣の違つた象のやうに、或は齒止めの利かない自動車のやうに、冷然と我我を蹂躙してしまふ。惡人たる伊右衛門も、善人たる源四郎も、お岩も、お袖も、直助權兵衛も、是非を辨じない宿命の前には遂に憐むべき傀儡である。善人は善人たるが故に、惡人は惡人たるが故に、男は男たるが故に、女は女たるが故に、嫌でも應でも血を流さなければならない。偉大なる鶴屋南北は黑幕の黑とのり紅の赤と藪疊みの綠とにこの殘酷なる宿命圖を描いた。——かう云ふ議論も出來ないことはない。

第五に「四谷怪談」は——まあ、好い加減に切り上げれば、どう云ふ議論でも出來ないことはない。(況や化政度のデカダン趣味とか鶴屋南北の寫實主義とか、登錄ずみの議論を持ち出すことは中學の生徒にも出來ることである。)どう云ふ議論でも出來ると云ふことはどう云ふ辯護でも出來ると云ふことである。同時に又云ひ換へればどう云ふ非難でも出來ると云ふことである。たとへば化政度のデカダン趣味にしても、流血やエロティシズムを喜ぶのはデカダンスかどうか疑問である。ことによればデカダンスどころか、最も健全なる趣味かも知れない。現に文明の呪ひを受けない、古代の詩歌や繪畫などは殘酷と猥褻とを極めてゐる。又南北の寫實主義にしても、幽靈

の出沒するのは寫實主義ではない。もしあれを寫實主義とすればヨハネ默示錄も寫實主義である。

……

しかし此處に唯一つ、議論の餘地を許さないことがある。「四谷怪談」は陽氣かも知れない。或は又滑稽かも知れない。が、兎に角あの芝居は非凡なる才能の產物である。云はば時代の煤のかげに名人の極印の見える芝居である。これだけは何人も否定することは出來ない。たまたま五月の市村座は「四谷怪談」を上場すると共に、「御所五郎藏」をも上場した。「御所五郎藏」は種彥の小說を默阿彌が芝居に直したものである。この芝居も勿論不出來ではあるまい。が、御所五郎藏を始め、星影土右衞門も逢州も錦繪を切り拔いた人物である。と云ふ意味は、後ろを向ければ裏打ちの反古の見える人物である。かう云ふ人物に比べると、「四谷怪談」の人物は綺麗にも高等にも出來上つてゐない。その代りにずつと潑溂としてゐる。尤も唯かう云つただけでは諸君の首肯を得ないかも知れない。由來名人の描いた人物はおのづから時代を超越するものである。卽ち如何なる時代の空氣――たとへば現代の空氣にもながらへることの出來るものである。ハムレットは中折をかぶりさへすれば「銀ぶら」位はやり兼ねない。ゲッツも赤いチョッキさへ着れば必ず刑事に尾行されるであらう。だから或作者に描かれた人物の出來映えをためす爲には、少時現代の空氣の中に勝手の行動をとらせて見るが好い。それでも影が薄れなければいか物でないことは確かで

ある。ところが種彦默阿彌の人物はかう云ふ實驗に堪へることが出來ない。ちよいと江戸を東京にすると、あんな人物のゐないことは一目瞭然になつてしまふ。五郎藏はインバネスを羽織つたところが、カフエのテエブルには坐れさうもない。土右衛門もピストルを持つた日には活動寫眞の常連さへ莫迦にするのに決つてゐる。逢州も西洋髮になつた位では女給の試驗に落第するであらう。しかし南北の描いた人物は兎に角現代にも生きることが出來る。直助權兵衛は自動車に乘れば一かどの實業家に變るかも知れない。お岩も白襟紋附を着れば愛國婦人會に列しさうである。殊にわが伊右衛門の如きは不良少年團の團長になつても、殆ど不自然とは思はれない。いや、アブサントか何か飲めば、「お岩、迷つたな」と叫びながら、短刀を振りまはすことは請合ひである。

名人の極印の打つてあるのはひとり人物ばかりではない。情景の描きかたも獨得である。南北は滅多にむだ石を打たない。打つ石は殆ど一石毎に全局の效果を強めてゐる。しかしこれは云ひ古されてゐるから、今更說明を加へる必要はない。又云ひ古されてゐないにしろ、「四谷怪談」の今度の序幕、――伊右衛門浪宅の場さへ見れば誰にも容易にわかることである。

「四谷怪談」はこの通り、名人の筆になつた戲曲である。しかも現代の名優は「御所五郎藏」に成功しながら、「四谷怪談」には成功してゐない。少くとも成功してゐるのは梅幸のお岩と新十郎の秋山長兵衛とばかりである。菊五郎の宅悅や權兵衛も今後の大成を待つ外はない。が、羽左衛門の

伊右衛門に比べれば遙かに立ち勝つた出來映えである。思ふに、羽左衛門の伊右衛門程、伊右衛門らしからざる伊右衛門はない。あれは伊右衛門の名を竊んだ旗本の次男か何かである。友右衛門の與茂七は——一一役者の批評をするのは忠實なる劇評家の義務かも知れない。又それは多少にしろ、現代の名優竝びに大マネエジャアに敬意を表する所以かも知れない。しかし僕は不忠實なる劇評上の素人である。のみならず天成の懷疑主義者である。現代の名優竝びに大マネエジャアの中、一人でも僕の劇評に目を通すものがあるかどうか、どうも僕には疑ひなきを得ない。だから僕は專門家のやうに、或は善良なる通人のやうに、一一役者の批評をすることだけは御免を蒙りたいと思つてゐる。どうか役者を愛する諸君は僕の劇評にぶつかつたのも何かの因緣とあきらめ下さい。

僕は現代の名優は「四谷怪談」に失敗したと書いた。その失敗は何に依つたか？　成程「四谷怪談」は封建時代の芝居である。この芝居を現代の名優に立派に演じろと註文するのは恰も向うのタクシイのたまりに三枚の駕籠を註文し、或は隣の支那料理屋に鯉の洗ひを註文するのと大した變りはないかも知れない。しかし「御所五郎藏」もやはり過去の芝居である。のみならず役者は羽左衛門を除き、寧ろ「御所五郎藏」よりも「四谷怪談」に力を注いでゐた。少くも菊五郎の宅悅の如き、或は直助權兵衛の如き、もし成功しなかつたとすれば力窮まつた後に已んだ、——云はば名

譽ある不成功だつた。すると、前者に成功しながら、後者に成功しなかつた理由はそれらの外に求めなければならない。もう一度同じ問を繰返せば、では何の爲に失敗したか？　僕の答は簡單である。「四谷怪談」は「御所五郎藏」よりもむづかしい芝居だつたからである。

「四谷怪談」は「御所五郎藏」よりも格段にむづかしい芝居である。第一にお岩や伊右衛門は前にも長ながと書いた通り、型に嵌つた人形ではない。何處かに生きた血が流れてゐる。かう云ふ人物を活躍させることは勿論手輕に出來るものではない。第二に鶴屋南北は忠實に時代を寫してゐる。それだけに一つ時代が變ると、微妙な甲どころを捉へ惡い。第三に「四谷怪談」は正に四谷の怪談である。しかも極度に味をつけた怪談中の怪談である。だから現代の我我には完全なイリュウジョンを與へ難い。――その外にもまだ數へ立てたら、いろいろな理由が出て來るであらう。が、大體これだけでも「四谷怪談」のむづかしい所以は直に會得が出來る筈である。しかし「御所五郎藏」には殆どそんなむづかしさがない。舞臺は昨日不破名古屋の鞘當てがあつた仲の町である。人物は星影土右衛門の代りに逸見鐵心齋を頼んで來ても好い。筋は宛然たる草双紙である。現代の名優の成功したのは當然――も何もあつたものではない。第一この芝居に成功したなどと云ふのは飯を喫すること三碗の後、腹を脹らせるのに成功したと吹聽するやうなものである。

現代の名優は殘念ながら、かう云ふ理由のあつた爲に「四谷怪談」には失敗し、「御所五郎藏」に

は成功した。が、もしどちらが面白かつたかと云へば、失敗した「四谷怪談」は、成功した「御所五郎藏」よりも面白かつたと答へざるを得ない。ではその面白さは何から來たか？　この間の消息を語るものは僕自身經驗した怪談である。古來「四谷怪談」を演ずる時にはいろいろ不思議が起ると云ふ。これも或はその一つかも知れない。つい昨日の午過ぎである。丁度この稿を續けてゐたら、僕の部屋へ女中が一人、來客の名刺を示しに來た。僕はその名刺を見るが早いか、あたふた玄關へ飛んで行つた。が、玄關には誰もゐない。唯白い霧島躑躅が格子戸の外に咲き滿ちてゐる。僕は女中をふり返つた。

「お客様はどうした？」

「おや、どうなすつたんでございませう？　今しがた其處に立つていらつしやいましたが、……」

女中はけげんさうにうろうろしてゐる。

「どんなかただつた？」

「お年寄でございます。大へんに意氣ななりをなすつた、——」

僕はもう一度名刺を見た。名刺にはちやんと勘亭流に「鶴屋南北」と印刷してある！　僕は咄嗟に了解した。鶴屋南北はどう云ふ譯か、現代迄命を保つてゐる。「四谷怪談」の面白いのは偶然ではない。

（大正十二年五月）

金春會の「隅田川」

僕は或早春の夜、富士見町の細川侯の舞臺へ金春會の能を見に出かけた。と云ふよりも寧ろ櫻間金太郎氏の「隅田川」を見に出かけたのである。

僕の棧敷へ通つたのは「花筐」か何かの濟んだ後、「隅田川」の始まらない前のことである。僕は如何なる芝居を見ても、土間棧敷に滿ちた看客よりも面白い芝居に出合つたことはない。尤も僕の友達の書いた、新らしい芝居は例外である。さう云ふ芝居を見る時には、大抵看客などは忘れてしまふ。なぜと云へば同じ枡に彼自身の芝居を見てゐる作者は看客よりも面白い見ものだからである。――が、そんなことはどうでも好い。兎に角芝居の看客は芝居よりも面白いのを常としてゐる。能もやはりこの例に洩れない。この頃の能の看客はお孃さんを大勢まじへてゐる。その又お孃さんは一人殘らず、小さい欠伸を嚙み殺しながら、莊嚴なる威儀を正してゐる。おまけに今夜の看客はお孃さんの多いばかりではない。僕の左右にはまるまると肥つた佛蘭西の大使クロ

オデル氏を始め、男女の西洋人も五六人、オペラ・グラスなどを動かしてゐる。僕は「隅田川」を見ないうちに、かう云ふドオミヱの一枚じみた看客を見ることに滿足した。勿論僕自身も諷刺畫の中の一人になることは覺悟の前である。

「隅田川」は靜かに始まつた。この「靜かに」は有無を問はない通り一遍の形容詞ではない。「是は武藏の國隅田川の渡し守にて候」と云ふ寶生新氏の詞と共に、天さかる鄙の大川の縹渺と目の前に浮び上がる所は如何にも靜かに出來上がつてゐる。僕は一陣の風の中に餌ものを嗅ぎつけた獵犬のやうに、かすかな戰慄の傳はるのを感じた。——と云ふと偉らさうに聞えるかも知れない。が、實は謠も習はず、能に關する智識なども全然持ち合はせてゐないのだから、當てにならないのは勿論である。しかし短い新氏の詞は確かに僕に戰慄を與へた。のみならずそれは經驗によれば、藝術的興奮の襲來を豫め警告する烽火だつた。これだけは誰が何と云つても、僕にだけは間違ひのない事實である。

その次には、若い旅人が一人、そろそろ橋がかりへかかり出した。この人は何と云ふ能役者か、覺えてゐないのは殘念である。が、如何にも「雲霞、あと遠山に越えなして〳〵、いく關々の道すがら、國々過ぎて」來たやうに、肉づきの惡い青年だつた。新氏の渡し守は堂々としてゐる。ああ云ふ妙に男ぶりの好い、でつぷり肥つた渡し守は古往今來隅田川に舟などを漕いでゐた筈はな

い。しかもその堂々とした渡し守を不調和とも何とも感じないのは丁度歌舞伎の火入りの月を不調和と感じないのも同じことである。能は歌舞伎よりも又一層寫實の世界にこだはつてゐない。紛々たる現實性の不足などは忽ち詩の中に消滅してしまふ。けれども現實性の過剩だけは逆に舞臺のイリュウジョンを破壞する力を具へてゐる。僕はこの瘦せた旅人の姿に聊か現實性の過剩を感じた。つまり旅人は業平以來の隅田川の渡りの水にも、犬の土左衞門の流れ得る事實をちよつと思ひ出させ過ぎたのである。これは勿論旅人になつた能役者の罪でも何でもない。唯この役を勤めさせられた薄命の致す所である。僕は僕自身も瘦せてゐるから、不滿に感ずる一面には大いに旅人に同情した。

尤もこの旅人は瘦せたりと雖も、尋常一樣の旅人ではない。隅田川の渡りを求めに來た、寂しい何人かの旅人を一身に代表する名譽職である。のみならず又「都より女物狂ひの下り候」を我々看客へ廣告に來た藝術上の先ぶれ役である。僕は「まづまづ御出で候」跡の、けしからず物騷に候は何事にて候ぞ」と云ふ渡し守の詞と共に、武藏野の草の靡いた中に一條の道の現れるのを感じた。昔の日の光りはその道の向うに模糊たる人ざわめきを照してゐる。都より下り候、女物狂ひもあの中にまじつてゐるのかも知れない。いや、もう狂女はいつの間にか、電燈の明るい橋がかりをしづしづと舞臺へかゝつてゐる。

狂女は櫻間金太郎氏である。僕は二の松へかかつた金太郎氏の姿を綺麗な氣違ひだなと感心した。黑い塗り笠がちらりと光つて、面に仄かな影がさして、薄靑い着つけが細つそりして、――まあ當麻寺の畫卷か何かの女房に會つたやうな心もちである。狂女は「げにや人の親の心は」と徐ろに歎きを傳へ出した。その聲も、――聲はちよいと說明出來ない。が、强ひて說明すれば、花やかに寂び澄ました聲である。僕の隣にゐた英吉利人も細君と顏を見合せながら、ワンダアフル・ヴオイスとか何とか云つた。聲だけは異人にもわかるのに違ひない。のみならずしをりの細かいことも小面の憎い位である。僕はもう一度シヤツの下にかすかな戰慄の傳はるのを感じた。

狂女は地謠の聲の中にやつと隅田川の渡りへ着いた。けれども男ぶりの好い渡し守は唯では舟へ乘せようとしない。「都の人と云ひ、狂人と云ひ、面白う狂うて見せ候へ」などと蟲の好い註文を竝べてゐる。僕はこの二人の問答の中に、天才の悲劇を發見した。天才もこの狂女のやうに何ものかを探す爲に旅をしてゐる。が、我々は不幸にもかう云ふ情熱を理解しない。同じ道に志した旅人さへ冷然とその苦痛を看過してゐる。況や妻子を養ふ以外に人生の意味を捉へ得ない、幸福なる天下の渡し守は恰も天才の情熱を犬の曲藝とでも間違へたやうに、三千年來恬然と「狂うて見せ候へ」を繰り返してゐる。天才も口を餬する爲には苦痛を見世物にする外はない。狂女は、――狂女も今は渡し守の前に隱し藝の舞を披露してゐる。

狂女の舞ぶりも綺麗だつた。殊に白足袋を穿いた足は如何にも微妙に動いてゐた。あの足だけは今思ひ出しても、確かに氣味の悪い代物である。僕は實際あの足へさはつて見たい欲望を感じた。少くとも白足袋を脱がせた上、つらつら眺めたい欲望を感じた。どうもあの足は平凡なる肉體の一部と云ふ氣はしない。必ず足の裏の皺の間に細い眼か何かついてゐさうである。しかし(僕もあらゆる批評家のやうに「しかし」を加へることを忘れなかつた)難を云はせれば、金太郎氏の藝は心もち綺麗過ぎる所があるかも知れない。それだけに一歩を誤れば、纖巧の病を生じさうである。古人は必ずこの境に安住することはしなかつたであらう。更に蒼古の意を得る爲に捨命することを辭さなかつたであらう。――さう思つた途端である。「乘せさせ給へ渡し守、さりとては乘せてたび給へ」と云ふ地謠の聲のをさまると共に、狂女は片膝をつきながら、立ちはだかつた渡し守の前に、消え入りさうに合掌した。僕は先代の秀調以來、名高い女形も少しは見てゐる。が、まだこの時の金太郎氏ほど、美しいと思つた記憶はない。古意を得るのは勿論結構であらう。けれども古意を得ないにもしろ、この位綺麗になりさへすれば、少くとも不足は云はれない筈である。

その後の「隅田川」を云々することは無用の辯を費すだけである。成程子役を使はなかつたのは注目に價する試みかも知れない。が、素人の僕などには論ずる資格もないと共に、論ずる興味も

ないことである。唯僕は梅若丸の幽靈などの出ないことを少しも不服に思はなかつた。いや、實はかう云ふ時にもわざわざ子役を使つたのは何かの機會に美少年を一人登場させることを必要とした足利時代の遺風かとも思つてゐる。僕は兎に角「隅田川」に美しいものを見た滿足を感じた。——それだけ云ひさへすれば十分である。

もし次手につけ加へるとすれば、それは最初に興味を惹いた能の看客のことである。バアナアド・シヨウはバイロイトのワグナアのオペラを鑑賞するには仰向けに寢ころんだなり、耳だけあけてゐるのに限ると云つた。かう云ふ忠告を必要とするのは遠い西洋の未開國だけである。日本人は皆、學ばずとも鑑賞の道を心得てゐるらしい。その晩も能の看客は大抵謠本を前にしたまゝ、滅多に舞臺などは眺めなかつた！

（大正十三年二月）

寄席

或春の夜、僕は獨逸から歸つて來た高等學校以來の友だちと或寄席の二階へ上つた。寄席へは何年にもはひつたことはない。のみならず高座を眺めるのも古往今來七八遍目である。それを今夜はひつたのは――寄席に藝を賣る藝術家諸君には甚だ失禮には違ひない。が、實は生憎ふり出した雨の晴れ間を待つ爲にはひつたのである。

この寄席の天井は合天井である。高座も昔見た高座のやうに塗り緣の杉戶のあるばかりではない。お神樂堂を數寄屋にしたらばかうなるに違ひないと思つた位、甚だ瀟洒に出來上つてゐる。僕は寄席の高座と雖も、一藝を天下に示す舞臺は莫迦に出來ないのを發見した。

かう云ふ高座に上つてゐるのは何とか云ふ年少の落語家である。落語家?――實は落語家と云ふものかどうか、その邊は頗る判然しない。もし藝を以て判斷すれば正に物眞似の藝人である。彼はやつと二分ばかり、何か辯舌を弄したと思ふと、忽ち座布團を向うへはねのけ、操り人形の

眞似をし出した。それも日本の操り人形ではない。活潑なる西洋の操り人形である。僕は再び如何なる藝術も勞働を伴ふのを發見した。

その次に現れたのは女琵琶師である。これは綠色の袴の上へ桃色の被布を一着してゐたから、田園の春のやうに美しかつた。琵琶も亦甚だ小さい。まづ臺所の鑵の子笊よりも幾分か大きいぐらゐである。彼女は情緒纏綿と那須の與一の扇の的を語つた。昔天德寺了伯はこの琵琶の一曲に涙を落したと云ふことである。僕は幸ひに泣かなかつた。――と云ふよりも寧ろ那須の與一に名狀すべからざる可愛さを感じた。彼女の曲中の與一は鞦置いたる木馬に跨り、五六間離れたる扇の的へ握り細の楊弓を引絞つてゐる。

その次に現れたのは落語家である。これは落語家に違ひない。正に落語を一席辯じた。但し一席か半席か或は又四半席か、その點は保證出來ない。のみならず落語家には違ひないにしろ頗る騷々しい落語家である、ハイネは徒らなる饒舌を「舌の戰ぎ」と形容した。これは「舌の戰ぎ」所ではない。盛なる舌の鳴動である。僕は活力に充滿した彼の顏を眺めながら、僅かに七八遍足を入れた昔の寄席を思ひ出した。――

僕の最初に聞いたのは柳橋と云ふ落語家である。ぼんやりした記憶を正しいとすれば、柳橋は色の蒼白い才槌頭の落語家だつた。當時まだ小學校の生徒だつた僕が孝行鍛冶の名を覺えたのは

柳橋を聞いたおかげである。その次に聞いた落語家は――必しもその次ぎには聞かなかつたかも知れない。しかしその次に思ひ出すのは圓喬と云ふ落語家である。彼は人間と云ふよりも火喰鳥に近い顔の持ち主だつた。その上又話をはじめる時には高座の直前に坐つてゐたにもしろ、到底はつきりと聞えない位、小聲を出す技巧の持ち主だつた。その次に記憶に殘つてゐるのは「彌太つぺい」と稱する落語家である。僕は後に「彌太つぺい」の馬樂なることを發見した。馬樂は吉井勇君の俳諧亭句樂に違ひない。彼は酒燒けのした胸をいつも懷に覗かせてゐる毬栗坊主の落語家だつた。その次には全然身動きもせずに滔々としやべり立てる圓藏である。或は高座へ脫いだ羽織に赤い色の見える遊三である。或は又枯骨にも舌のあるかと思ふ芝居話の桂小文治である。彼等は今日の落語家よりも悉く上品ではなかつたかも知れない。たとへば遊三は年少の僕をも辟易させることは確かである。しかし彼等は悉く今日の落語家よりも上手だつた。少くとも西洋人の言葉を借りれば、彼等自身のビズネスをちやんとのみこんでゐたやうである。が、あの高座にゐる落語家は――いや、もう高座に上つてゐるのは盛なる舌の鳴動業者ではない、嬋娟たる男裝の女劍舞である。

女劍舞はその後ろに羽織袴を着用した八字髭の紳士を從へてゐる。彼は劍舞のはじまる前に――

――讀者はこの一條を信じないかも知れない。少くとも僕の老父などは「莫迦を云へ」と一笑に附し

たものである。が、これは譃ではない。彼は劍舞のはじまる前に雲井龍雄の詩の講義をした！事の民衆に關するものは一として莊嚴ならざるはない。俗惡も勿論莊嚴である。寄席は百年の洗練に成つた江戸の風流を失却した。しかし風流は滅んだにしろ、莊嚴なる俗惡の存する限りは、必しも絶望に及ばずとも好い。俗惡は僕の脣に多少の嘲笑を浮べさせるであらう。が、俗惡を憎むことは、天の成せる通人は知らず、少くとも僕には出來ないことである。けれども公然と高座の上に雲井龍雄の詩の講義をするのは俗惡どころの不量見ではない。まづ贋物の天國の劍を田舍の成金へ賣りつけるのと類を同うした罪惡である。僕はこの講義を聞いてゐるうちに、いつかあの八字髭の紳士を射殺したい誘惑を感じ出した。

この誘惑を實行に移さなかつたのは一つには平生ピストルをポケツトに入れて置かない爲である。しかしまだその外にも全然理由のなかつた譯ではない。女劍舞をする女史は詩の講義の終つた後、朗々たる紳士の吟聲と共に勇ましい劍舞を演じ出した。僕は如何なる劍舞にも危險以外の感銘を受けたことのない臆病者である。が、この一場の女劍舞は忽ち僕に幸福なる少年時代を想起させた。何でも明治三十年頃の「牛の御前」のお祭などには屢かう云ふ女劍舞の見世物小屋がかかつてゐたものである。其處まで無事だつたのに違ひない。けれども劍舞を終つた女史は刀や襷をとつてしまふと、今度は雲井龍雄からお龍さんか何かになつたやうに娘手踊りを演じ出した。

これはもう善惡の問題ではない。善惡を超越した悲劇である。（我我の生活に共通した二重職業の悲劇である。）僕はこの悲劇的感銘のもとにあらゆる意志を失却した。同時に又あの八字髭の紳士を射殺したい誘惑をも失却した。悲劇は美學者の教へるやうにまことに人間を淨化するものである！

「おい、出よう。」

僕は匆々立ち上つた。

「出るか？　まだ降つてゐるだらう？」

友だちも雨だけ氣にしてゐるのはさすがにあきらめの好い江戸つ兒である。二人は廣い木戸を出た後、蕭々と降る春雨の中を軒下も傳はらずに歩きつづけた。兎に角今日の寄席と云ふものは雨宿りの役にも立たないらしい。

（大正十三年五月）

Gaity座の「サロメ」

——「僕等」の一人久米正雄に——

……切符は横濱の原さんに買つて貰つたやうに記憶してゐる。少くとも特に切符を買ひに横濱へ行つたと言ふ記憶はない。しかし僕等は當夜よりも確か一日か二日前に二等の切符を手に入れてゐた。切符は何でも二圓だか二圓五十錢だかだつたと覺えてゐる。

僕等四人の一高の生徒は日暮れがたの汽車に乘り、七時何分かに横濱へ着いた。それから何町をどう歩いたかはやはり判然と覺えてゐない。唯何處かの坂へかかると、屋並みも見えない闇の中に明るい硝子窓がたつた一つあり、その又窓の中に菊の花が澤山咲いてゐたのを覺えてゐる。それは或は西洋人相手の花屋か何かの店だつたであらう。が、ちよつと覗きこんだ所では誰も窓の中にゐる樣子は見えない。しかも菊の花の群がつた上には煙草の煙の輪になつたのが一つ、ちやんと空中に漂つてゐる。僕はこの窓の前を通る時に妙に嬉しい心もちがした。勿論僕等はかう言ふことにも The Land of Heart's Desire の税關の旗を感ずるほど、健氣な羅曼主義者の一群

だつたのである。

開場前のゲイティイ座の前には西洋人が七八人、静かに話したり歩いたりしてゐる。僕等もその間にまじりながら、暗い劇場のまはりをまはつて見た。劇場は如何にもひつそりしてゐる。どうも僕の記憶によれば、漆食塗りか何かの劇場の壁には火かげのさした窓も見えなかつたらしい。從つて僕は目の前の壁にばたんと言ふ音の聞えるが早いか、印半纏を着た男が一人、電燈のともつた扉口から往來へ姿を露はした時には少からず吃驚した。が、それよりも僕の目を――恐らくは僕等の目を惹いたのはその扉口に立ち上つた、年の若い西洋の女である。彼女は電燈を後ろにしてゐたから、顏かたちの美醜は明かではない。しかし兎に角青い着ものを着た、世にも姿の好い女である。僕は忽ちこの女に或悲劇の女主人公を感じた。彼女は勿論二三週間のうちに誰かを愛して、罪惡を犯して、その爲に毒を嚥んで死んでしまふのである。けれども彼女の口から出たのは、――僕は未だにありありと如何に僕の幻滅の甚しかつたかを覺えてゐる、羅曼的な彼女の口から出たのは唯喉もとに癇癪を抑へた、鸚鵡よりも拙劣な日本語だつた。

「それから、お前、ギタアを借りる、忘れる、いけませんよ！　ギタアですよ！　ヴァイオリンと間違へる、借りる、いけませんよ！」

この何處かへ借りにやつたギタアは、――僕はそれから二十分の後にもう一度烈しい幻滅を感

じた。アラン・ウィルキイ一座の舞臺監督は「サロメ」と共に上演した「フロレンスの悲劇」の色男にこのギタアを持たせてゐたのである。……

僕等は「フロレンスの悲劇」の幕が下りてから、薄暗い二階の後ろのベンチに熱心に「サロメ」を待ち焦れてゐた。尤も前後左右の西洋人は神妙に坐つて待つてなどはゐない。大抵は廊下へ煙草をのみに出たり、バアへ一杯やりに行つたりしてゐる。僕は「フロレンスの悲劇」を見ながら、絶えず僕の左に坐つた老異人の腋臭に辟易してゐた。薔薇色に頭の禿げた彼は幸ひもう席には坐つてゐない。しかし香水の匂に交つた、何とも彼とも言はれぬ腋臭の匂は未だに僕の鼻に殘つてゐる。僕はこの匂を驅逐する爲に何度も馬のやうに鼻を鳴らした。すると其處へ漂つて來たのはゴムの燃えるのに似た匂である。それも始は僕の嗅覺を刺戟するかしないかだつた。が、少時するうちにだんだん噎せかへるほどの匂になつた。のみならず二階から下を見ると、西洋人に埋まつたオオケストラ・ストオルもいつの間にかぼんやりと煙つてゐる。僕はやつとこの匂も何かこれから始まる「サロメ」に縁のあると言ふことを發見した。

しかし如何なる縁があるか、はつきりと僕にもわかつたのは突然落ちて來た闇の中に正面の幕の破れた時である。四角に薄明るい舞臺の奥には一段高い臺を設け、後ろに黑幕を垂らした外に全然背景と言ふものを使つてゐない。唯舞臺の左の前に金紙を貼つた井戸が一つ、フツト・ライ

トにぴかぴか光つてゐる。それから一段高い左右にそれぞれ怪しげな香爐が一つ、まつ直に煙を立ち昇らせてゐる。あのゴムの燃えるのに似た、野蠻極まる惡臭はこの何よりも烽火に近い香爐の煙の産物だつた。それは勿論嗅覺的に東洋の幻想を與へようとした舞臺監督の仕業に違ひない。けれども僕はこの煙に咳を生じたばかりだつた。或は必然の聯想として、セルロイド工場の大火事を思ひ浮べたばかりだつた。のみならず、——

のみならず僕は役者たちにも、——「若きシリア人」や小姓にも殘酷な何度目かの幻滅を感じた。「若きシリア人」は肉附きの好い裸の手足を露はしたまま、一段高い舞臺の奧に反り身になつて佇んでゐる。が、脊は目分量にすると、やつと四尺七八寸しかない。この小男を猶太の王ヘロド・アンティパスの寵遇を受けた護衞兵の大尉と思へと言ふのは金鶴香水をナルドの油と思へと言ふのも同じことである。いや、思へと言ふのかも知れない。現に小姓に扮した女優は明かに近代の文明が産んだ、一脚時價六圓か七圓ぐらゐの椅子に腰をかけてゐる。が、衣裳道具の整はないこととや役者に適材を缺いてゐることは必ずしも不平を言はないでも好い。若しサロメさへ美しければ、——サロメに扮する女優さへ「銀の鏡に影を映した白薔薇の花のやうに」美しければ、僕等は五分もたたないうちに「若きシリア人」の身の丈や小姓の椅子などは忘れてしまふであらう。若しサロメさへ美しければ、——僕は How beautiful とか或は又 How strange とか兎角 How を離

れない臺辭の斷片を捉へながら、妃へロディアスの娘、猶太の王女、美しいサロメの出て來るのにあらゆる希望を託してゐた。

サロメは畢に舞臺の右からしづしづと黒幕の前へ進んで來た。「若きシリア人」の臺辭を借りれば、正に「水仙の花のやうに、銀の花のやうに」進んで來たのである。僕は早速双眼鏡を擧げ――これはオペラ・グラスの誤りではない。明治十二年か十三年かに伊豆七島を測量した僕の叔父讓りの双眼鏡である。僕はこの大きい双眼鏡を擧げ、はるかに舞臺の上のサロメを眺めた。サロメはジョカナアンの首を斬らせた時に何歳になつてゐたか不明である。が、兎に角養老院よりも女學校にはひるのに近かつたであらう。よし又年をとつてゐたにもしろ、少くとも女子大學の生徒ぐらゐの若さだけはあつたと思はなければならぬ。けれどもこのサロメは明かに粉黛を裝つたお婆さんである。顔や頸の皺は勿論、頬のこけてゐることも一通りではない。殊に猶太の月明りに、大理石と白さを競ふべき腕は干し大根のやうに瘦せ細つてゐる。ああ、サロメさへ美しければ！――僕は圓いレンズの中にはつきりと彼女を眺めた時にとうとう僕の羅曼主義も偉大なる羅馬帝國のやうに沒落しなければならぬことを感じた。しかし――

しかし火を吹いて滅せしめる風は同時に又火を吹いて熾ならしめる風である。俗惡を極めた現實は僕の羅曼主義に一擊を與へた。けれども僕の羅曼主義は反つてその一擊の爲に燃え上つた。

と言ふのは外でもない、僕はこの「老いたる猶太の王女」に忽ちかう言ふ森先生の名文の一節を思ひ起したのである。

「……女王は身の丈甚だ高からず、面の輪郭鋭くして、黑き目は稍〻陷りたり、衣裳つきはいと惡し。無遠慮に評せば、擬人せる貧窶の妃嬪の裝束したるとやいふべき。さるを怪しむべきは此女優の擧止のさま都雅にして、いたく他の二人と殊なる事なり。われは心の中に、若し少き美しき娘に此行儀あらば奈何ならんとおもひぬ。既にして女王は進みて舞臺の縁に點し連ねたる燈火の處に到りぬ。此時我心は我目を疑ひ、我胸は劇しき動悸を感じたり。われは暫くの間、傍なる紳士に其名を問ふことを敢てせざりき。われ。此女優の名をば何とかいふ。紳士。アヌンチヤタといへり。……」

僕は何度も双眼鏡を擧げて舞臺の上のサロメを眺めた。サロメを？——いや、サロメではない。あれは「卽興詩人」のアヌンチヤタである。少くともアヌンチヤタの姉妹である。殘骸に脂粉を裝つた西班牙生まれのアヌンチヤタは氣の毒にも「燈燭の數少き、薄暗き」ヴェニスの小劇場に往年の戀人と邂逅した。が、ヴェニスの小劇場は東洋の日本の横濱の小劇場のあはれなるに若かない。あのサロメに扮した女優も肉の落ちた彼女の乳の下には何本かの古手紙を持つてゐるであらう。或はホテルの彼女の部屋にも何年か前にディドオに扮した彼女自身の油畫——でなければ繪端書

ぐらゐは持つてゐるかも知れない。……

「……アヌンチヤタは再び口を開きぬ。我と君と再會せり。再會していよ〳〵君が情ある人なることを知る。されど薔薇は既に凋れ、白鵠は復た歌はずなりぬ。おもふに君は聖母の恩澤に浴して、我に殊なる好き運命に逢ひ給ふなるべし。今はわれは唯〻一つの願あり。アントニオよ、能くそを憾へ給はんかといふ。われ手に接吻して、いかなるおん望にもあれ、身にかなふ事ならばといふに、アヌンチヤタ、さらばこよひの事をば夢とおぼし棄て給ひて、いまより後いついづくにて相見んとも、おん身と我とは識らぬ人となりなんこと、是れわが唯〻一つの願ぞ、さらば、アントニオ、これより善き世界に生れ出でなば、また相見ることもあらんとて、我手を握りぬ。……」

サロメは香爐の煙の中にI will kiss thy mouthとか何とか叫びながら、やつと金紙の井戸から出て來た豫言者ジョカナアンに手を伸べてゐる。が、僕は小姓の椅子を忘れ、「若きシリア人」の身の丈を忘れ、唯僕の前に展開した羅曼主義の世界に見入つてゐた。其處には「サロメ」の戯曲家ワイルドもなければワイルドの戯曲「サロメ」もない。唯寂しいアヌンチヤタが一人、燈火もともさぬ屋根裏の小窓に今しがた悄然と歸つて行つたアントニオのことを考へてゐる。ヴェネティアの宮殿や寺院を照らした、薄ら寒い月光を眺めながら。……

これは僕等の十四五年前に見た最初の「サロメ」の印象である。同時に又日本の舞臺に上つた最初の「サロメ」の印象である。僕は後に松井須磨子のやはり「サロメ」を演ずるのを見た。須磨子のサロメは美しい――よりも兎に角若かつたのに違ひない。が、僕のいつになつても忘れることの出來ないのはあの年をとつたサロメである。あの横濱へ流れて來た無名の英吉利の女優である。

……

（大正十四年七月）

日録抄

田端日記

〔八月〕二十七日

朝床の中でぐづついてゐたら、六時になつた。何か夢を見たと思つて考へ出さうとしたが思ひつかない。

起きて顔を洗つて、にぎり飯を食つて、書齋の机に向つたが、一向ものを書く氣にもならない。そこで讀みかけの本をよんだ。何だかへんな議論が綿々と書いてある。面倒臭くなつたから、それもやめにして腹んばひになつて、小説を讀んだ。土左衛門になりかゝつた男の心もちを、多少空想的に誇張して、面白く書いてある。こいつは話せると思つたら、こなひだから頭に持つてゐる小説が、急に早く書きたくなつた。

バルザツクか、誰かが小説の構想をする事を「魔法の巻煙草を吸ふ」と形容した事がある。僕はそれから魔法の巻煙草とほんものの巻煙草とを、ちやんぽんに吸つた。さうしたらぢきに午にた

つた。

午飯を食つたら、更に氣が重くなつた。かう云ふ時に誰か來ればいゝと思ふが、生憎誰も來ない。さうかと云つてこつちから出向くのも厄介である。そこで仕方がないから、籐の枕をして、又小說を讀んだ。さうして讀みながら、いつか午睡をしてしまつた。

眼がさめると、階下に大野さんが來てゐる。起きて顏を洗つて、大野さんの所へ行つて、骨相學の話を少しした。骨相學の起源は動物學の起源と關係があると云ふやうな事を聞いてゐる中にアリストテレスがどうとかかと云ふむづかしい話になつたから、話の方は御免を蒙つて、一つ僕の顏を見て貰ふ事にした。すると僕は、直覺力も推理力も甚圓滿に發達してゐると云ふのだから大したものである。尤もこれは、あとで「動物性も大分あります。」とか何か云はれたので、結局帳消しになつてしまつたらしい。

大野さんが歸つたあとで湯にはひつて、飯を食つて、それから十時頃まで、調べ物をした。

二十八日

涼しいから、かう云ふ日に出なければ出る日はないと思つて、八時頃うちを飛び出した。動坂から電車に乘つて、上野で乘換へて、序に琳瑯閣へよつて、古本をひやかして、やつと本郷の久

米の所へ行つた。すると南町へ行つて、留守だと云ふから本鄕通りの古本屋を根氣よく一軒々々まはつて歩いて、横文字の本を二三冊買つて、それから南町へ行くつもりで三丁目から電車に乘つた。

所が電車に乘つてゐる間に、又氣が變つたから今度は須田町で乘換へて、丸善へ行つた。行つて見ると狆を引張つた妙な異人の女が、ジエコブの小說はないかと云つて、探してゐる。其女の顏をどこかで見たやうだと思つたら、四五日前に鎌倉で泳いでゐるのを見かけたのである。あんな崔嵬たる段鼻は日本人にもめつたにない。それでも小僧さんは、レデイ・オヴ・ザ・バアヂならございますとか何とか、丁寧に挨拶してゐた。大方此段鼻も涼しいので東京へ出て來たのだらう。

丸善に一時間ばかりゐて、久しぶりで日吉町へ行つたら、淸がたつた一人で、留守番をしてゐた。入學試驗はどうしたいと尋いて見たら、「えゝ、まあ。」と云ひながら、坊主頭を撫でて、にやにやしてゐる。それから暇つぶしに淸を相手にして、五目ならべをしたら、五番の中四番ともまかされた。

その中に皆歸つて來たから、一しよに飯を食つて、世間話をしてゐると、八重子が買ひたての夏帶を、いいでせうと云つて見せに來た。面倒臭いから、「うんいゝよ、いゝよ。」と云つてゐると、

わざわざしめてゐた帶をしめかへて、「あゝしめにくい。」と顏をしかめてゐる。「しめにくければ、買はなければいゝのに。」と云つたら、すぐに「大きなお世話だわ。」とへこまされた。

日暮方に、南町へ電話をかけて置いて、歸らうとしたら、清が「今夜皆で金春館へ行かうつて云ふんですがね。一しよに行きませんか。」と云つた。八重子も是非一しよに行けと云ふ、これは僕が新橋の藝者なるものを見た事がないから、その序に見せてやらうと云ふ厚意なのださうである。僕は八重子に「お前と一しよに行くと、御夫婦だと思はれるからいやだよ。」と云つて外へ出た。さうしたら、うしろで「いやあだ。」と云ふ聲と、猪口の糸底ほどの脣を、反らせて見せるらしいけはひがした。

外濠線へ乘つて、さつき買つた本をいゝ加減にあけて見てゐたら、その中に春信論が出て來て、ワツトオと比較した所が面白かつたから、いゝ氣になつて讀んでゐると、うつかりしてゐる間に、飯田橋の乘換へを乘越して新見附まで行つてしまつた。車掌にさう云ふのも業腹だから、下りて、萬世橋行へ乘つて、七時すぎにやつと滿足に南町へ行つた。

南町で晩飯の御馳走になつて、久米と謎々論をやつてゐたら、忽ち九時になつた。歸りに矢來から江戸川の終點へ出ると、明き地にアセチリン瓦斯をともして、催眠術の本を賣つてゐる男がある。そいつが中々踔厲風發してゐるから、面白がつて前の方へ出て聞いてゐると、あなたを一

つかけて上げませうと云はれたので、匆々退却した。こつちの興味に感ちがひをする人間ほど、人迷惑なものはない。

家へ歸つたら、留守に來た手紙の中に成瀨のがまじつてゐる。紐育は暑いから、加奈陀へ行くと書いてある。それを讀んでゐると久しぶりで成瀨と一しよにあげ足のとりつくらでもしたくなつた。

二十九日

朝から午少し前まで、仕事をしたら、へとへとになつたから、飯を食つて、水風呂へはひつて、漫然と四角な字ばかり並んだ古本をあけて讀んでゐると、赤木桁平が、帷子の上に絹絽の羽織か何かひつかけてやつて來た。

赤木は昔から李太白が贔屓で、將進酒にはウエルトシユメルツがあると云ふやうな事を云ふ男だから、僕の讀んでゐる本に李太白の名がないと、大に僕を輕蔑した。そこで僕も默つてゐると負けた事にされるから暑いのを我慢して、少し議論をした。どうせ暇つぶしにやる議論だから勝つても負けても、どつちでも差支へない。その中に赤木は「一體支那人は本へ朱で圈點をつけるのが皆うまい。日本人にやとてもあゝ圓くは出來ないから、不思議だ。」と、つまらない事を感心

し出した。朱でまるを描く位なら、已だつて出來ると思つたが、うつかりそんな事を云ふと、すぐ「ぢや、やつて見ろ。」位な事になり兼ねないから、「成程さうかね。」とまづ敬して遠ざけて置いた。

日の暮れ方に、二人で湯にはひつて、それから、自笑軒へ飯を食ひに行つた。僕はそこで一杯の酒を持ちあつかひながら、赤木に大倉喜八郎と云ふ男が作つた小唄の話をしてやつた。何がどうとかしてござりんすと云ふ、大へんな小唄である。文句も話した時は覺えてゐたが、もうすつかり忘れてしまつた。赤木は、これも二三杯の酒で赤くなつて、へえゝ、聞けば聞くほど愚劣だねと、大にその作者を罵倒してゐた。

かへりに、女中が妙な行燈に火を入れて、門まで送つた來たら、その行燈に白い蛾が何匹もとんで來た。それが甚、うつくしかつた。

外へ出たら、この儘家へかへるのが惜しいやうな氣がしたから、二人で電車へ乘つて、櫻木町の赤木の家へ行つた。見ると石の門があつて、中に大きな松の木があつて、赤木には少し勿體ないやうな家だから、おい家賃はいくらすると訊いて見たが、なに存外安いよとか何とか、大に金のありさうな事を云つてすましてゐる。それから、籐椅子に尻を据ゑて、勝手な氣焔をあげてゐると、奥さんが三つ指で挨拶に出て來られたのには、少からず恐縮した。

すると、向うの家の二階で、何だか樂器を彈き出した。始はマンドリンかと思つたが、中ごろから、赤木があれは琴だと道破した。僕は琴にしたくなかつたから、いや二絃琴だよと異を樹てた。しばらくは琴だ二絃琴だと云つて、喧嘩してゐたが、その中に樂器の音がぴつたりしなくなつた。今になつて考へて見ると、どうもあれはこつちの議論が、向うの人に聞えたのに相違ない。さう思ふと、僕はいゝが、赤木は向う同志と云ふ關係上、もつと恐縮して然る可き筈である。

歸りに池の端から電車へ乘つたら、左の奥齒が少し痛み出した。舌をやつてみると、ぐらぐら動くやつが一本ある。どうも赤木の雄辯に少し祟られたらしい。

三十日

朝起きたら、齒の痛みが昨夜よりひどくなつた。鏡に向つて見ると、左の頰が大分腫れてゐる。いびつになつた顔は、確にあまり體裁の好いものぢやない。そこで右の頰をふくらせたら、平均がとれるだらうと思つて、そつちへ舌をやつて見たが、やつぱり顔は左の方へゆがんでゐる。少くとも今日一日、こんな顔をしてゐるのかと思つたら、甚不平な氣がして來た。

所が飯を食つて、本郷の齒醫者へ行つたら、いきなり奥齒を一本ぬかれたのには驚いた。聞いて見ると、この齒醫者の先生は、未嘗齒痛の經驗がないのださうである。それでなければ、と

てもこんなに顏のゆがんでゐる僕をつかまへて辣腕をふるへる筈がない。

かへりに區役所前の古道具屋で、青磁の香爐を一つ見つけて、いくらだと云つたら、色眼鏡をかけた亭主が開闢以來のふくれつ面をして、こちらは十圓と云つた。誰がそんなふくれつ面の香爐を買ふものか。

それから廣小路で、煙草と桃とを買つてうちへ歸つた。齒の痛みは、それでも前と殆ど變りがない。

午飯の代りに、アイスクリイムと桃とを食つて、二階へ床をとらせて、横になつた。どうも氣分がよくないから、檢溫器を入れて見ると、熱が八度ばかりある。そこで枕を氷枕に換へて、上からもう一つ氷嚢をぶら下げさせた。

すると二時頃になつて、藤岡藏六が遊びに來た。到底起きる氣がしないから、横になつた儘、いろいろ話してゐると、彼が三分ばかりのびた髭の先をつまみながら、僕は明日か明後日御嶽へ論文を書きに行くよと云つた。どうせ藏六の事だから僕がよんだつてわかるやうなものは書くまいと思つて、又カントかとか何とかひやかしたら、そんなものぢやないと答へた。それから、ちやデカルトだらう。君はデカルトが船の中で泥棒に遇つた話を知つてゐるかと、自分でも譯のわからない事をえらさうにしやべつたら、そんな事は知らないさと、あべこべに輕蔑された。大方

僕が熱に浮かされてゐるとでも思つたのだらう。このあとで僕の寫眞を見せたら、一體君の顏は三角定規を倒にしたやうな顏だのに、から髮の毛を長くしちや、愈々エステティツシュな趣を損ふよ。と、入らざる忠告を聞かされた。

藏六が歸つた後で夕飯に粥を食つたが、更にうまくなかつた。體中がいやにだるくつて、本を讀んでも欠伸ばかり出る。その中に何時か、うとうと眠つてしまつた。

眼がさめて見ると、知らない間に、蚊帳が釣つてあつた。さうして、それにあけて置いた窓から月がさしてゐた。無論電燈もちやんと消してある。僕は氷枕の位置を直しながら、蚊帳ごしに明るい空を見た。さうしたらこの三年ばかり逢つた事のない人の事が頭に浮んだ。どこか遠い所へ行つて恐らくは幸福にくらしてゐる人の事である。

僕は起きて、戸をしめて電燈をつけて、眠くなるまで枕もとの本を讀んだ。

（大正六年）

我鬼窟日録

五月二十五日　晴

今村隆氏菊池の本の裝幀の見本を持つて來る。出來思はしからず。裝幀なぞ引受けなければよかつたと思ふ。午後塚本八洲來る。一高の入學試驗を受ける由。

五月二十六日　陰晴定らず

手水鉢の上の椎の樹、今年は無暗に花をつける。今朝手を洗ひながら、その匂の濃いのに驚かされた。小說一向捗らず。新聞で菊池の「雜感三則」を讀む。同感なり。午後谷崎潤一郎來る。赤いタイをしてゐた。夕方一しよに菊池を訪ふ。留守なり。ミカドにて夕飯、それから神田の古本屋を門並ひやかす。神保町のカフエエへはいつたら、給仕女が谷崎のタイを褒めた。白山まで步いて分れる。歸つたら十二時半。

五月二十八日　晴

午後南部修太郎來る。T子の寫眞を貸してやる。夕方一しよに鉢の木で飯を食ふ。それから菊池の所へ行く。後から小島政二郎來る。菊池剃刀負けがして繃帶を頭から顋へ巻いてゐる事、クリスマス・キヤロルへ出る幽靈の如し。歸りに牡丹を買ふ。

五月二十九日　晴

今日よりトオデのミケルアンジエロを讀み出す。午後社に行き、松内氏と文藝欄の打合せをなす。序にロイテルへ行き、ジヨオンズを尋ねたが留守なり。受附の男東洋軒にゐられるかも知れませんと云ふ。新橋驛の東洋軒へ行く。二階の窓から見ると、驛前の甘栗屋が日の下に見えて、赤い提灯と栗をかきまぜる男とが甚だ風流だつた。食後白山の笹川へ行き、俳書五六冊購ふ。夜月評を書き出す。

三十日　晴

午後畑耕一、菊池寛來る。夕方谷崎潤一郎來る。皆の歸つたのは九時なり。今日猫を貰ふ。

五月三十一日

客を謝して小說を書く。第一回から改めて出直す。午すぎはトオデ。夕方ミカドのホイツトマン百年祭に行く。始めて有島武郎氏、與謝野鐵幹氏夫妻に會ふ。齋藤勇氏と有島氏とホイツトマンの詩を朗讀す。列席の諸君子わかつたやうな顏をして聞いてゐれど、大半はわからないのに相違なし。勿論ボクにも分らず。食卓演說をなす。生まれて二度目なり。歸途室生犀星、多田不二の兩氏と一しよに歸る。雷雨大いに催す。

六月一日　晴

朝室生犀星來る。「愛の詩集」第二を貰ふ。長崎で買つた阿蘭陀の茶碗を見せると本物だらうと云ふ。午後野口功造來る。柳橋で御馳走になる。御嬢様のやうな藝者を見て、甚だ敬意を生じた。昔の藝者の質素なりし話、やきもちの話、松の鮨の話。

六月二日　晴

西村熊雄氏より來翰、「猿」を英譯して發表したいが好いかと云つて來る。好いと答へる。前に

「貉」の英譯あり。今又「猿」の英譯成る。ボクの小說の英譯せられる爲には、獸の名を題とせざる可らざるに似たり。午頃中根氏來る。「羅生門」の表紙、扉等を見せる。里見弴の土藏の話。〇〇大將全國を騎馬旅行し、大いに青年の志氣を鼓舞する傍、女中に子を產ませる由、敬服至極。午後弟と淺草へ活動寫眞を見に行く。見ながら活動寫眞論を考へる。寫眞——現實——假感——藝術。

六月五日　雨後晴

午後菊池來る。一しよに中戶川の所へ行く。夕飯後小柳へ伯山を聞きに行く。伯山の藝なるもの、派手すぎて蒼勁の趣なし。菊池大いに伯山を辯護す。

六月六日　晴

月評今日でおしまひ。夕方久米の所へ行く。湯河原より歸り立てなり。山本有三と落合ふ。久しぶりなり。今日華氏八十四度、庭の土にある日色、既に盛夏の如し。

六月七日　陰

朝瀧田樗陰君大きな書畫帳を二冊かつぎこみ、句と歌とを書かせる。字も句も歌ものにならず。午後木村幹來る。一しよに平塚雷鳥さんを訪ひ、序に「叔父ワーニヤ」の稽古を見る。畫室の中には大勢の男女。戸口の外には新綠の庭。隅の椅子に腰を掛けて見てゐると、好い加減の芝居より面白い。「大觀」大隈侯の名で茶話會に招待する。斷る。

六月八日　陰

午前高等工業學校の中原虎男氏來る。俳談を少々やる。しまひに例の講演を賴まれ、トウトウ承諾す。午後赤木桁平、小島政二郞、富田碎花、室賀文武の諸氏來る。桁平先生例の如く氣焰萬丈なり。先生常にその卓勵風發を以て僕と相當ると做す。豈敢て當らんや。富田氏に「草の葉」の飜譯を貰ふ。皆十時頃歸る。今夜牡丹悉く散つてしまふ。下女散つた花片を掃かうとする。その儘にして置けと云ふ。

六月九日　陰後雨

大阪より原稿催促の電報來る。モウ送ツタと返電する。午後木村幹來る。一しよに谷崎の家へ行く。久米、中戸川、今東光の三人が來てゐた。夕方雨の中を谷崎、久米、木村と四人づれで烏

森の古今亭へ飯を食ひに行く。谷崎例の如くよく食ふ。久米食前に飲む藥を忘れ、手を束ねて我我の食ふのを見てゐる。夜タキシで谷崎の所まで行き、それから又俥で歸る。谷崎の說によれば、香水を澤山集めて、匂を嗅ぎ分けようとしたら、判然しないばかりか頭痛がして來た由。日本や支那の香の事も調べて見たら面白からう。

六月十日　雨

頭の調子非常によし。イバネスの長篇卒業。夕方八田先生を訪ふ。留守なり。十日會へ行く。始めてなり。岩野泡鳴氏と一元描寫論をやる。それから室生犀星の「愛の詩集」の會へ顏を出す。もう會が散じた所で、北原白秋氏等と平民食堂百萬石へ行く。白秋醉つて小笠原島の歌をうたふ。歸りに夏帽子を買つた。この頃夜往來を歩くと、若葉の匂、花の匂、苔の匂、樹の肌の匂などが盛にする。その中で錢湯の匂などがすると、急に人間臭い氣がして不愉快になる。

六月十四日　雨

午後成瀬來る。一しよに晚飯を食ふ。ロオラン曰、藝術の窮る所無限の靜なり。プウサンを見よ。ミシヱルアンジュの如きは未しと。又曰年長じて愈ゲエテの大を知ると。いづれも至極御

尤なり。九時頃成瀬歸る。

六月十五日　陰

午前御客四人。夜瀧井折柴が來て又俳論を鬪はせる。海紅句集を一册呉れる。細君の齒痛未癒えず。大に齒醫者を輕蔑してゐた。細君のこの態度は甚だ月評家の態度に似てゐる。

六月十六日　陰後雨

夜成瀬と有樂座へ「叔父ワニヤ」を見に行く。玄關で岩淵の奥さんに遇つた。ワニヤは戲曲國小說郡の產物なり。二幕目四幕目殊に感服した。但し見物の諸先生存外冷靜なり。僕と感服を同くしたのは、唯久保田万太郎氏のみ。幕合ひに廊下を步いてゐると、妙に戲曲が書いて見たくなる。はねてから成瀬、岡其他の諸氏と牛肉を食ふ。

六月十七日　陰

今日トオデ一册だけ卒業。夕方久米の風見舞に行く。關根正二氏葬式に出かけた由にて、留守なり。暫くの後黑絽の紋附で、大いに男振りをあげながら歸つて來る。關根は死ぬまで畫を書く

眞似をしてゐたと云ふ。今宗教畫のやうな物が大半出來てゐると云ふ。病氣は風邪だつたと云ふ。二十一位で死んだのぢや、死に切れない。關根に君の體は強さうだなと云つた事を思ひ出す。あの時は確、一週間位は徹夜しても平氣だと云ふ答があつた。關根が死んでボクが生きてゐるのは偶然も甚しい氣がする。夜うちへ歸つたら、留守に土田善章君がピアストロの音樂會の切符を屆けてくれた。

六月十八日　雨

姉、弟、細君、「ワニヤ」見物。紫陽花を澤山剪つて瓶にさす。橋場のどこかの別莊に紫陽花が澤山咲いてゐたのを思ひ出す。丸善より本來る。コンラツド二、ジヨイス一。

六月二十日　陰

朝香取先生の所へ行く。雲坪の話、奈良の大佛の話、左千夫の話。歸ると今村隆氏が來て「バルタザアル」を新小説にくれと云ふ。仕方なく承知する。又大阪から電報で原稿の催促あり。

六月二十一日　晴

夜折柴來る。忙しいから玄關で歸つて貰ふ。折柴「我等の句境」をくれる。いろいろ貰つてばかりゐて恐縮なり。

六月二十二日　雨

午から「赤い鳥」の音樂會へ行く。澤木梢、井汲清治の諸氏に會ふ。オオケストラの連中練習足らず。甚危ふげなり。三重吉氏「赤い鳥」の羽根を胸にさして得意になつてゐる。尤も紅茶と菓子とを我々に御馳走してくれたから、あの位得意になつても差支へない。風月で夕飯、慶應へ行き、ピアストロ、ミロウイツチ兩氏の演奏を聞く。休憩時間南部と外へ出て煙草をのむ。安倍能成氏に遇ふ。能成氏ミロウイツチの公衆を眼中に置かない所が偉いと云つて褒める。

六月二十三日　晴後陰

先考百ケ日なり。但寺へは行かず。芝の家にて夕飯。歸りに龍泉堂で詩箋を貰ふ。

六月二十四日　晴

午後菊池を誘つて、久米の所へ行く。久米の前の下宿の婆さん等、一人は發狂して既に歸國し、

もう一人はその世話をする爲これから歸國すると云ふ。但し東京を去るのがいやだと云つて泣く由。氣の毒千萬なり。一しよに鉢の木へ行く。淺倉屋で方秋崖詩鈔を買ふ。留守に中原虎男來り、櫻ん坊を一箱くれる。

（大正八年）

長崎日錄

五月十一日

微雨あり。僕の宿、雨の至らんとする毎に厠の臭氣二階に滿つ。僕の長崎に客となるや、上野屋に泊らず、みどり屋に泊らず、わざわざ本五島町の旅籠に投ず。聊か風流の志あればなり。されどこの厠の臭氣の油雲と共に至る時は殆ど風流を忘れんとす。終日獨り海藏樓詩集を讀む。

五月十二日

渡邊與茂平來る。共に寺町の道具屋を覗き歩く。如何はしき逸雲鐵翁あるのみ。路に枇杷を商ふものあり。既に夏の來れるを感ず。

五月十三日

早朝往來より聲をかくるものあり。二階の障子をあけて見れば、馬に乘れる永見夏汀、馬丁と共に佇みゐつ。午飯を食ひに來ませんかと云ふ。宿の飯には辟易せる際なり、後刻參上の旨を答ふ。午頃夏汀の家に行けば、夫人、今朝は御宿へ參りましたらうと云ふ。昨日も參らうと致したのださうですが、馬が參らなかつたさうでございますと云ふ。それから馬丁を呼びましてあちらへ馬の參るやうに馴らせて置けと申して居りましたと云ふ。夏汀は馬を驅るに非ず。馬に驅らるるものの如し。夏汀の家に馬逵の手長猿、王若水の錦鷄等を觀る。若水は剝落甚し。

五月十四日

與茂平、蒲原春夫の二人と梅若の謠の會に至る。長崎に萬三郎や六郎を見んとは思ひかけざりし所なり。會場の庭の躑躅の花、紅將に褪せなんとす。(會場は富久屋)

庭芝に小みちまはりぬ花つつじ

素謠大原御幸、勸進帳等、處處に感心す。年少の能役者たち、世話役の妓などの往來に眼を轉ずる事屢なり。終始眉だに動かさざるもの、唯萬三郎一人のみ。與茂平大いに萬三郎に敬服す。但し彼は竹田同樣、西邊に生れたる悲しさには音律を解せざる一人なり。

五月十五日

蒲原春夫來り、僕の爲に佐賀の俗を談る。佐賀の人、兄はゐるかと云ふを「あんじやいもんはをんさるかんた」と云ふよし。殆ど南蠻鴃舌の感あり。又破落戸を「いけばよし」と云ふよし。一笑するに堪へたり。今日暑氣盛夏の如し。

五月十六日

與茂平と大音寺、清水寺等を見る。今日天晴、遙かに鯨凧の飛揚するあり。歸途まりや觀音一體を得、古色頗る愛すべし。

五月十七日

夏汀の家に竹田、逸雲、梧門、鐵翁、熊斐、仙崖等の日本畫家、江稼圃、沈南蘋、宋紫石、胡公壽等の支那畫家を觀る。竹田は丸山のエスキス。この畫によれば當年の廓は甚だ野趣を存せしに似たり。夏汀又鐵翁の硯を藏す。もと竹田の贈る所。石薄うして反りかへれるさま、如何にも洒落たる硯なり。僕大いに欲しがれども、夏汀更に讓る氣なし。

五月十八日

丸山の待合「たつみ」に至る。高島秋帆の妾宅なりし家なり。金張付け金襖、皆剝落見るに堪へず。前山の麥黃、後園の竹翠、共に往時を想はしむるものあり。行を同うするもの三人、與茂平、春夫、妓照菊。照菊、結城縮みに八反の帶を締む。東京の藝者と異なる事多し。

五月十九日

中川鄉の松尾氏別莊に遊ぶ。庭に靑芝あり、櫻あり。潺湲を絕たざる細流あり、光琳の屛風一雙を見る。未だその佳否を明らかにせず。

五月二十日

拂曉、與茂平、春夫の二人と「日本の聖母の寺」に至る。彌撒の禮拜式に列せん爲なり。松ケ枝橋を過ぐる頃、未だ天に星光あり。天主堂の內陣に入れば、耶蘇受難の色硝子畫、薄暗き中に仄めけるを見る。參詣の男女四五十人、僕等の傍らに混血兒の女あり。與茂平、その顏を窺ひてやまず。式終りて後、門前の受附の男を欺き、念珠祈禱の書等を購ふ。奉教人にあらざれば購がざればなり。

五月二十一日

古袷の尻破れたれば、やむを得ずセルの着物をつくる。再び唐寺に詣る。

　　唐寺の玉巻芭蕉肥りけり

薄暮、與茂平と松本家に至り、唐畫數幅を觀る。沈南蘋の蓮花圖、寫生の妙を得たり。

五月二十二日

夏汀の家に雙樹園主人と遇ふ。夜、數人と鶴の家に飲む。林泉の布置、東京の料理屋に見ざる所なり。春夫醉ふ事泥の如し。妓の侍するもの、照菊、菊千代、伊達奴等。戯れに照菊に與ふ。

　　萱艸も咲いたばつてん別れかな

（大正十一年）

澄江堂日録

六月六日
蒲原君に枇杷を貰ふ。午後、永日莊にペルシヤの古陶を觀る。價高うして購ふべからず。

六月七日
午前、香取先生、鹿島氏と共に來訪、澄江堂の印を贈らる。鹿島氏、大雅書と稱する一軸を示さる。「衆芳搖落獨鮮妍」とあり。落款は九霞山樵。黑木欽堂氏の極めあり。但し何の爲の極めたるかを明かにせず。

六月八日
「サンデイ毎日」の小說を起稿す。多加志、消化不良の氣味あり。夜下島先生、往診せらる。又藤

澤氏來訪。

六月九日

菅藤氏と「エキジリエル・デス・トイフェルス」を讀む。第二章はおほむね面白からず。事件も不自然に過ぎ、妖婦オイフェミイの性格も説明に過ぎたるものの如し。多加志の病、よろしからず。下島先生、診斷せらるること三度。

六月十日

午前、多加志を宇津野病院に入院せしむ。室生、伊藤、池田、田沼、和田、成瀬、渡邊の諸氏來訪。夜、宇津野博士を訪ふ。多加志の命、必ずしも絶望すべからざるが如し。「サンデイ毎日」の小説を斷念す。

六月十一日

早朝、多加志の容體稍よろしとの電話あり。薄暮、病院に至る。又一游亭を訪ふ。座に古原草君あり、話熟、深更に及ぶ。再び病院に至れば門既に閉ぢたり。唯多加志の病室の燈火を見しの

み。

（大正十二年）

輕井澤日記

八月三日。晴。室生犀星來る。午前四時輕井澤に着せし由。「汽車の中で眠られなくつてね。麥酒を一本飲んだけれども、やつぱりちよつとも眠られなくつてね。」と言ふ。今日より舊館の階下の部屋を去り、犀星と共に「離れ」に移る。窓前の池に噴水あり。鬼ぜんまい、葱などの簇れる岩に一條の白を吐けるを見る。緣側に卷煙草を吸ひ居たる犀星、倏ち歎を發して曰「噴水と云ふものは小便によく似てゐるものだね。」又曰「あんなに出續けに出てゐると、腹か何か痛くなりさうだね。」

犀星と共に晩涼を逐ひ、骨董屋、洋服屋などを覗き步く。微月天にあり。日曜學校の前に至れば、分別臭き亞米利加人兩三人、日本語の讚美歌を高唱するを見る。

八月四日。晴。堀辰雄來る。暮に及んで白雨あり。犀星、辰雄と共に輕井澤ホテルに赴き、久

しぶりに西洋風の晩餐を喫す。客に獨逸人多し。食堂の壁に佛畫兩三幀を挂く。電燈の光暗うして、その何たるかを辨ずる能はず。隣卓に禿頭の獨逸人あり。卓上四合入の牛乳一罎を置き、英字新聞に目を曝しつつ、神色自若として牛乳を飲み、五分ならざるに一罎を盡す。食後サロンに閑談すること少時。雨を侵して鶴屋に歸る。

夜半「僻見」の稿を了す。

八月五日。陰。村幸主人、土屋秀夫來訪。辰雄、二時の汽車にて東京に歸る。

薄暮、散歩の途次、犀星と共に萬平ホテルに至り、一杯のレモナアデに渇を癒す。客多くは亞米利加人。露臺に金髮紅衣の美人あり。籐椅子に倚つて郎君と語る。憾らくは郎君の鼻、鷲の嘴に似たることを。ホテルを去つてオウデイトリアムの前に至れば音樂會の最中なり。堂前樹下、散策の客少からず。偶御亭主と腕を組みたる黄面短軀の奥様を見る。月を仰いで嘆じて曰「蒼白い月だわねえ。」窮巷に文を賣ること十年、未だ甚だ多幸ならざれども、斯の如き夫人の毒手に入るを免る、亦一幸たるに近かるべし。

夜、オニイルの「水平線の彼方」を讀む。淺俗、映畫劇を見るに似たり。

八月六日。晴。感興頓に盡き、終日文を艸する能はず。或は書を讀み、或は庭を歩し、犀星の憫笑する所となる。この庭に植ゑたる草木花卉、大體下に掲ぐるが如し。松、落葉松、五葉松、榧、檜葉、枝垂れ檜葉、白槇、楓、梅、矢竹、小でまり、山吹、萩、躑躅、霧島躑躅、菖蒲、だりあ、凌霄はれん、紅輪草、山百合、姫向日葵、小町草、花魁草、荵、針金草、鬼ぜんまい、雪の下、秋田蕗、山蔦、五葉、——五葉の紋章めきたるは愛すべし。

午頃、田中純來る。運動服を調へ、チルデン愛用ラケツトを買ひ、毎日テニスしつつありと言ふ。

（大正十三年）

晩春賣文日記

四月三十日。土曜。晴。

題未定の短篇をつづける。藤澤古實氏來る。「大東京繁昌記」の插し畫の件なり。それから關口廣庵老に療治をして貰ふ。平松ます子さん來る。けふは平松さんの引越しなり。いつか八疊の床の間に五月人形が飾つてある。夕がた「東日」の沖本常吉君來る。插し畫の件につき、小穴君を尋ねる。生憎留守なれば、勝手に押入れより花札を出し、沖本君と六百ケンをする。小穴君、義敏(甥)と一しよに歸る。何とか云ふ劍劇の映畫を見に行つてゐたよし。十一時頃、家へ歸り、又藤澤氏や沖本君と插し畫の件を相談し、とうとう午前三時に至る。この分にては插し畫も作者自身描かなければならず。十五回も插し畫を作ることはどう考へても難澁なり。沖本君曰、「それでもやつて頂く外はないのであります。」

五月一日。日曜。晴。

堀辰雄、堀川寛一、小穴隆一等の諸君、お客に來る。堀君に出來かけの短篇を讀んで貰ふ。夜、小穴君や義敏と展覽會論を鬪はし、とうとう小穴君は泊ることになつた。

五月二日。月曜。曇。

妻也寸志と鵠沼へ行く。「大東京繁昌記」の插し畫も描かなければならぬ羽目になりたる爲に久しぶりに窮技(?)を試む。師匠番は小穴君。沖本君來る。やつと第一回、第二回の插し畫を作り、沖本君に渡す。午後二時頃、小穴君歸る。今日は春陽會の晩餐會のよし。沖本君、四時頃に又來り、插し畫は小穴君に賴んでもよろしと言ふ。雲霧破れて靑天を見るの感あり。吉報とは正にこの事なるべし。藤澤古實、薄田淳介等の諸氏より手紙來る。「メイデイ」の檢束者百四十餘名。「繁昌記」第七回脫稿。

こぶこぶの乳も霞むや枯れ銀杏

五月三日。雨。

題未定の小說を一二枚書いて見る。小穴君、「繁昌記」の第一回の插し畫を見せに來る。若侍が

一人新徵組の侍の一人に鞘當てをしかけられし所なり。沖本君、內田百閒君、前後して來る。沖本君に待つてゐて貰ひ、內田君と自笑軒にて夕食す。ランケの小說にペットを共にしたる亭主の魂鼠となりて水を飮みに行くを細君の目擊する小說あるよし。「繁昌記」第八回脫稿。疲るること甚し。ホミカ、カスカラ錠、ヴェロナアル等を服用。

五月四日。晴。
妻鵠沼より歸る。小穴君義敏をモデルにして土佐衞門の圖を作る。終日快々。宮地嘉六君より「累」、宇野浩二君より「高天ケ原」を贈られる。來書五六通。

五月五日。晴。
內田百閒君來る。內田君と一しよに興文社に至る。二月ぶりなり。やつと內田君の爲に用談をすまし、倜々玄關を出でんとすれば活動寫眞を映さんとするが如し。脫兎の如くタクシイに乘りて遁走す。帝國ホテルの新潮座談會に至る。德田、近松、佐藤、久米等の諸氏、並びに下村、太田、鈴木等の諸氏に會す。晩來雨あり。中村武羅夫氏に引率せられ、前掲の作家諸氏と銀座のカツフエ・タイガアに至る。これも亦二月ぶりなり。歸り來つて明日の講演の艸稿を作り、更に又

「文藝的な、餘りに文藝的な」を脱稿す。深夜に至つて瀉す。柱時計の三時を打つを聞けども、便門痛んで眠ること能はず。ヴェロナアル二回量を用ふ。夢に一匹の虎あり、塀の上を通ふを見る。

（昭和二年）

追憶

一　埃

僕の記憶の始まりは数へ年の四つの時のことである。と言つても大した記憶ではない。唯廣さんと言ふ大工が一人、梯子か何かに乗つたまま玄能で天井を叩いてゐる、天井からはぱつぱつと埃が出る――そんな光景を覚えてゐるのである。

これは江戸の昔から祖父や父の住んでゐた古家を毀した時のことである。僕は数へ年の四つの秋、新らしい家に住むやうになつた。従つて古家を毀したのは遅くもその年の春たつたであらう。

二　位牌

僕の家の佛壇には祖父母の位牌や叔父の位牌の前に大きい位牌が一つあつた。それは天保何年かに歿した曾祖父母の位牌だつた。僕はもの心のついた時から、この金箔の黒づんだ位牌に恐怖に近いものを感じてゐた。

僕の後に聞いた所によれば、曾祖父は奥坊主を勤めてゐたものの、二人の娘を二人とも花魁に

賣つたと言ふ人だつた。のみならず又曾祖母も曾祖父の夜泊りを重ねる爲に家に焚きもののない時には鉈で縁側を叩き壞し、それを薪にしたと言ふ人だつた。

三　庭木

新らしい僕の家の庭には冬青、榧、木斛、かくれみの、臘梅、八つ手、五葉の松などが植わつてゐた。僕はそれ等の木の中でも特に一本の臘梅を愛した。が、五葉の松だけは何か無氣味でたらなかつた。

四　「てつ」

僕の家には子守りの外に「てつ」と云ふ女中が一人あつた。この女中は後に「源さん」と言ふ大工のお上さんになつた爲に「源てつ」と言ふ渾名を貰つたものである。

何でも一月か二月の或夜、(僕は數へ年の五つだつた。)地震の爲に目をさました「てつ」は前後の分別を失つたと見え、枕もとの行燈をぶら下げたなり、茶の間から座敷を走りまはつた。僕はその時座敷の疊に油じみの出來たのを覺えてゐる。それから又夜中の庭に雪の積もつてゐたのを覺えてゐる。

五　猫の魂

「てつ」は源さんへ緣づいた後も時々僕の家へ遊びに來た。僕はその頃「てつ」の話した、かう云ふ怪談を覺えてゐる。――或日の午後、「てつ」は長火鉢に頰杖をつき、半睡半醒の境にさまよつてゐた。すると小さい火の玉が一つ「てつ」の顏のまはりを飛びめぐり始めた。「てつ」ははつとして目を醒ました。火の玉は勿論その時にはもうどこかへ消え失せてゐた。しかし「てつ」の信ずる所によればそれは四五日前に死んだ「てつ」の飼ひ猫の魂がじやれに來たに違ひないと云ふのだつた。

六　草双紙

僕の家の本箱には草双紙が一ぱいつまつてゐた。僕はもの心のついた頃からこれ等の草双紙を愛してゐた。殊に「西遊記」を飜案した「金毘羅利生記」を愛してゐた。「金毘羅利生記」の主人公は或は僕の記憶に殘つた第一の作中人物かも知れない。それは岩裂の神と云ふ、兜巾鈴懸けを裝つた、目なざしの恐しい大天狗だつた。

七　お狸様

僕の家には祖父の代からお狸様と云ふものを祀つてゐた。それは赤い布團にのつた一對の狸の土偶だつた。僕はこのお狸様にも何か恐怖を感じてゐた。お狸様を祀ることはどう云ふ因縁によつたものか、父や母さへも知らないらしい。しかし未だに僕の家には薄暗い納戸の隅の棚にお狸様の宮を設け、夜は必ずその宮の前に小さい蠟燭をともしてゐる。

八　蘭

僕は時々狹い庭を歩き、父の眞似をして雜草を拔いた。實際庭は水場だけにいろいろの草を生じ易かつた。僕は或時冬青の木の下に細い一本の草を見つけ、早速それを拔きすててしまつた。僕の所業を知つた父は「折角の蘭を拔かれた」と何度も母にこぼしてゐた。が、格別、その爲に叱られたと云ふ記憶は持つてゐない。蘭は何處でも石の間に特に一二莖植ゑたものだつた。

九　夢中遊行

僕はその頃も今のやうに體の弱い子供だつた。殊に便祕しさへすれば、必ずひきつける子供だ

つた。僕の記憶に殘つてゐるのは僕が最後にひきつけた九歳の時のことである。僕は熱もあつたから、床の中に横たはつたまま、伯母の髪を結ふのを眺めてゐた。そのうちにいつかひきつけたと見え、寂しい海邊を歩いてゐた。その又海邊には人間よりも化物に近い女が一人、腰巻き一つになつたなり、身投げをする爲に合掌してゐた。それは「妙々車」と云ふ草双紙の中の插畫だつたらしい。この夢うつつの中の景色だけは未だにはつきりと覺えてゐる。正氣になつた時のことは覺えてゐない。

十　「つうや」

僕が一番親しんだのは「てつ」の後にゐた「つる」である。僕の家はその頃から經濟狀態が惡くなつたと見え、女中もこの「つる」一人ぎりだつた。僕は「つる」のことを「つうや」と呼んだ。「つうや」は當り前の女よりもロマンテイツク趣味に富んでゐたのであらう。僕の母の話によれば、法界節が二三人編笠をかぶつて通るのを見ても「敵討ちでせうか？」と尋ねたさうである。

十一　郵便箱

僕の家の門の側には郵便箱が一つとりつけてあつた。母や伯母は日の暮になると、代る代る門

の側へ行き、この小さい郵便箱の口から往來の人通りを眺めたものである。封建時代らしい女の氣もちは明治三十二三年頃にもまだかすかに殘つてゐたであらう。僕は又かう云ふ時に「さあ、もう雀色時になつたから」と母の言つたのを覺えてゐる。雀色時と云ふ言葉はその頃の僕にも好きな言葉だつた。

十二　灸

僕は何かいたづらをすると、必ず伯母につかまつては足の小指に灸をすゑられた。僕に最も怖ろしかつたのは灸の熱さそれ自身よりも灸をすゑられると云ふことである。僕は手足をばたばたさせながら「かちかち山だよう。ぼうぼう山だよう」と怒鳴つたりした。これは勿論火がつく所から自然と聯想を生じたのであらう。

十三　剝製の雉

僕の家へ來る人々の中に「お市さん」と云ふ人があつた。これは代地かどこかにゐた柳派の「五りん」のお上さんだつた。僕はこの「お市さん」にいろいろの畫本や玩具などを貰つた。その中でも僕を喜ばせたのは大きい剝製の雉である。

僕は小學校を卒業する時、その尾羽根の切れかかつた雉を寄附して行つたやうに覺えてゐる。が、それは確かではない。唯未だに可笑しいのは雉の剝製を貰つた時、父が僕に言つた言葉である。

「昔、うちの隣にゐた××××(この名前は覺えてゐない)と云ふ人は丁度元日のしらしら明けの空を白い鳳凰がたつた一羽、中洲の方へ飛んで行くのを見たことがあると言つてゐたよ。尤も出たらめを云ふ人だつたがね。」

十四　幽靈

僕は小學校へはひつてゐた頃、どこの長唄の女師匠は亭主の怨靈にとりつかれてゐるとか、この仕事師のお婆さんは嫁の幽靈に責められてゐるとか、いろいろの怪談を聞かせられた。それを又僕に聞かせたのは僕の祖父の代に女中をしてゐた「おてつさん」と云ふ婆さんである。僕はそんな話のためか、夢とも現ともつかぬ境にいろいろの幽靈に襲はれ勝ちだつた。しかもそれ等の幽靈は大抵は「おてつさん」の顏をしてゐた。

十五　馬車

僕が小學校へはひらぬ前、小さい馬車を驢馬に牽かせ、その又馬車に子供を乘せて、町内をまはる爺さんがあつた。僕はこの小さい馬車に乘つて、お竹倉や何かを通りたかつた。しかし僕の守りをした「つうや」はなぜかそれを許さなかつた。或は僕だけ馬車へ乘せるのを危險にでも思つた爲めかも知れない。けれども青い幌を張つた、玩具よりも僅かに大きい馬車が小刻みにことこと歩いてゐるのは幼な目にもハイカラに見えたものである。

十六　水屋

その頃はまだ本所も井戸の水を使つてゐた。が、特に飲用水だけは水屋の水を使つてゐた。僕は未だに目に見えるやうに、顏の赤い水屋の爺さんが水桶の水を水甕の中へぶちまける姿を覺えてゐる。さう言へばこの「水屋さん」も夢現の境に現はれて來る幽靈の中の一人だつた。

十七　幼稚園

僕は幼稚園へ通ひ出した。幼稚園は名高い回向院の隣の江東小學校の附屬である。この幼稚園の庭の隅には大きい銀杏が一本あつた。僕はいつもその落葉を拾ひ、本の中に挾んだのを覺えてゐる。それから又或圓顏の女生徒が好きになつたのも覺えてゐる。唯如何にも不思議なのは今に

なつて考へて見ると、なぜ彼女を好きになつたか、僕自身にもはつきりしない。しかしその人の顔や名前は未だに記憶に殘つてゐる。僕はつい去年の秋、幼稚園時代の友だちに遇ひ、その頃のことを話し合つた末、「先方でも覺えてゐるかしら」と言つた。

「そりや覺えてゐないだらう。」

僕はこの言葉を聞いた時、かすかに寂しい心もちがした。その人は少女に似合はない、萩や芒に露の玉を散らした、袖の長い着物を着てゐたものである。

十八　相撲

相撲も亦土地がらだけに大勢近所に住まつてゐた。現に僕の家の裏の向うは年寄りの峯岸の家だつたものである。僕の小學校にゐた時代は丁度常陸山や梅ケ谷の全盛を極めた時代だつた。僕は荒岩龜之助が常陸山を破つた爲め、大評判になつたのを覺えてゐる。一體ひとり荒岩に限らず、國見山でも逆鉾でもどこか錦繪の相撲に近い、男ぶりの人に優れた相撲は悉く僕の贔屓だつた。併し相撲と云ふものは何か僕には漠然とした反感に近いものを與へ易かつた。それは僕が人並みよりも體が弱かつた爲かも知れない。又平生見かける相撲が――髮を藁束ねにした褌かつぎが相撲膏を貼つてゐた爲かも知れない。

十九　宇治紫山

僕の一家は宇治紫山と云ふ人に一中節を習つてゐた。この人は酒だの遊藝だのにお藏前の札差しの身上をすつかり費してしまつたらしい。僕はこの「お師匠さん」の酒の上の悪かつたのを覺えてゐる。又小さい借家にゐても、二三坪の庭に植木屋を入れ、冬などは實を持つた青木の下に枯松葉を敷かせたのを覺えてゐる。

この「お師匠さん」は長命だつた。何でも晩年味噌を買ひに行き、雪上りの往來で轉んだ時にも、やつと家へ歸つて來ると、「それでもまあ褌だけ新しくつて好かつた」と言つたさうである。

二十　學問

僕は小學校へはひつた時から、この「お師匠さん」の一人息子に英語と漢文と習字とを習つた。が、どれも進歩しなかつた。唯英語はTやDの發音を覺えた位である。それでも僕は夜になると、ナショナル・リイダアや日本外史をかかへ、せつせと相生町二丁目の「お師匠さん」の家へ通つて行つた。It is a dog――ナショナル・リイダアの最初の一行は多分かう云ふ文章だつたであらう。しかしそれよりはつきりと僕の記憶に殘つてゐるのは、何かの拍子に「お師匠さん」の言つた「誰

とかさんもこの頃ぢや身なりが山水だな」と云ふ言葉である。

二十一　活動寫眞

僕が始めて活動寫眞を見たのは五つか六つの時だつたであらう。僕は確か父と一しよにさう云ふ珍しいものを見物しに大川端の二州樓へ行つた。活動寫眞は今のやうに大きい幕に映るのではない。少くとも畫面の大きさはやつと六尺に四尺位である。それから寫眞の話も亦今のやうに複雜ではない。僕はその晩の寫眞の中に魚を釣つてゐた男が一人、大きい魚が針にかかつたため、水の中へまつ逆樣にひき落される畫面を覺えてゐる。その男は何でも麥藁帽をかぶり、風立つた柳や蘆を後ろに長い釣竿を手にしてゐた。僕は不思議にその男の顏がネルソンに近かつたやうな氣がしてゐる。が、それはことによると、僕の記憶の間違ひかも知れない。

二十二　川開き

やはりこの二州樓の棧敷に川開きを見てゐた時である。大川は勿論鬼灯提燈を吊つた無數の船に埋まつてゐた。するとその大川の上にどつと何かの雪崩れる音がした。僕のまはりにゐた客の中には龜淸の棧敷が落ちたとか、中村樓の棧敷が落ちたとか、いろいろの噂が傳はり出した。し

かし事實は木橋だつた兩國橋の欄干が折れ、大勢の人々の落ちた音だつた。僕は後にこの椿事を幻燈か何かに映したのを見たこともあるやうに覺えてゐる。

二十三　ダアク一座

僕は當時回向院の境内にいろいろの見世物を見たものである。風船乘り、大蛇、鬼の首、何とか云ふ西洋人が非常に高い桿の上からとんぼを切つて落ちて見せるもの、――數へ立ててゐれば際限はない。しかし一番面白かつたのはダアク一座の操り人形である。その中でも又面白かつたのは道化た西洋の無頼漢が二人、化けもの屋敷に泊る場面である。彼等の一人は相手の名前をいつもカリフラと稱してゐた。僕は未だに花キャベツを食ふ度に必ずこの「カリフラ」を思ひ出すのである。

二十四　中洲

當時の中洲は言葉通り、蘆の茂つたデルタアだつた。僕はその蘆の中に流れ灌頂や馬の骨を見、氣味惡がつたことを覺えてゐる。それから小學校の先輩に「これはアシかヨシか？」と聞かれて當惑したことも覺えてゐる。

二十五　壽座

本所の壽座が出來たのもやはりその頃のことだつた。僕は或日の暮れがた、或小學校の先輩と元町通りを眺めてゐた。すると亜鉛の海鼠板を積んだ荷車が何臺も通つて行つた。

「あれはどこへ行く？」

僕の先輩はかう言つた。が、僕はどこへ行くか見當も何もつかなかつた。

「壽座！　ぢやあの荷車に積んであるのは？」

僕は今度は勢ひ好く言つた。

「ブリツキ！」

しかしそれは徒らに先輩の冷笑を買ふだけだつた。

「ブリツキ？　あれはトタンと云ふものだ。」

僕はかう云ふ問答の爲、妙に悄氣たことを覺えてゐる。その先輩は中學を出た後、忽ち肺を犯されて故人になつたとか云ふことだつた。

二十六　いぢめつ子

幼稚園にはひつてゐた僕は殆ど誰にもいぢめられなかつた。尤も本間の德ちやんには度たび泣かされたものである。しかしそれは喧嘩の上だつた。從つて僕も三度に一度は德ちやんを泣かせた記憶を持つてゐる。德ちやんは確か總武鐵道の社長か何かの次男に生れた、負けぬ氣の強い餓鬼大將だつた。

しかし小學校へはひるが早いか僕は忽ち世間に多い「いぢめつ子」と云ふものにめぐり合つた。「いぢめつ子」は杉浦譽四郎である。これは僕の隣席にゐたから何か口實を拵へては度々僕をつねつたりした。おまけに杉浦の家の前を通ると狼に似た犬をけしかけたりもした。(これは今日考へて見れば Greyhound と云ふ犬だつたであらう。)僕はこの犬に追ひつめられた揚句、とうとう或疊屋の店へ飛び上つてしまつたのを覺えてゐる。

僕は今漫然と「いぢめつ子」の心理を考へてゐる。あれは少年に現れたサアド型性慾ではないであらうか？　杉浦は僕のクラスの中でも最も白皙の少年だつた。のみならず或名高い富豪の妾腹に出來た少年だつた。

二十七　畫

僕は幼稚園にはひつてゐた頃には海軍將校になるつもりだつた。が、小學校へはひつた頃から

いつか畫家志願に變つてゐた。僕の叔母は狩野勝玉と云ふ芳崖の乙弟子に緣づいてゐた。僕の叔父も亦裁判官だつた雨谷に南畫を學んでゐた。併し僕のなりたかつたのはナポレオンの肖像だのライオンだのを描く洋畫家だつた。

僕が當時貰ひ集めた西洋名畫の寫眞版は未だに何枚か殘つてゐる。僕は近頃何かの次手にそれ等の寫眞版に目を通した。するとそれ等の一枚は、樹下に金髮の美人を立たせたウヰスキイの會社の廣告畫だつた。

二十八　水泳

僕の水泳を習つたのは日本水泳協會だつた。水泳協會に通つたのは作家の中では僕ばかりではない。永井荷風氏や谷崎潤一郎氏もやはりそこへ通つた筈である。當時は水泳協會も蘆の茂つた中洲から安田の屋敷前へ移つてゐた。僕はそこへ二三人の同級の友達と通つて行つた。淸水昌彦もその一人だつた。

「僕は誰にもわかるまいと思つて水の中でウンコをしたら、すぐに浮いたんでびつくりしてしまつた。ウンコは水よりも輕いもんなんだね。」

かう云ふことを話した淸水も海軍將校になつた後、一昨年（大正十三年）の春に故人になつた。

僕はその二三週間前に轉地先の三島からよこした淸水の手紙を覺えてゐる。

「これは僕の君に上げる最後の手紙になるだらうと思ふ。僕は喉頭結核の上に腸結核も併發してゐる。妻は僕と同じ病氣に罹り僕よりも先に死んでしまつた。あとには今年五つになる女の子が一人殘つてゐる。……まづは生前の御挨拶まで。」

僕は返事のペンを執りながら、春寒の三島の海を思ひ、何とか云ふ發句を書いたりした。今はもう發句は覺えてゐない。併し「喉頭結核でも絕望するには當らぬ」などといふ氣休めを並べたことだけは未だにはつきりと覺えてゐる。

二十九　體刑

僕の小學校にゐた頃には體刑も決して珍しくはなかつた。それも横顔を張りつける位ではない。胸ぐらをとつて小突きまはしたり、床の上へ突き倒したりしたものである。僕も一度は擲られた上、習字のお双紙をさし上げたまま、半時間も立たされてゐたことがあつた。かう云ふ時に擲られるのは格別痛みを感ずるものではない。しかし、大勢の生徒の前に立たされてゐるのは切ないものである。僕はいつか伊太利のフアツシヨは社會主義者にヒマシユを飲ませ、腹下しを起させると云ふ話を聞き、忽ち薄汚いベンチの上に立つた僕自身の姿を思ひ出したりした。のみならず

ファッショの刑罰も或は存外當人には殘酷ではないかと考へたりした。

三十　大水

僕は大水にも度たび出合つた。が、幸ひどの大水も床の上へ來たことは一度もなかつた。僕は母や伯母などが濁り水の中に二尺指しを立て、一分殖えたの二分殖えたのと騷いでゐたのを覺えてゐる。それから夜は目を覺ますと、絕えずどこかの半鐘が鳴りつづけてゐたのを覺えてゐる。

三十一　答案

確か小學校の二三年生の頃、僕等の先生は僕等の机に耳の靑い藁半紙を配り、それへ「可愛いと思ふもの」と「美しいと思ふもの」とを書けと言つた。僕は象を「可愛いと思ふもの」にし、雲を「美しいと思ふもの」にした。それは僕には眞實だつた。が、僕の答案は生憎先生には氣に入らなかつた。

「雲などはどこが美しい？　象も唯大きいばかりぢやないか？」

先生はかうたしなめた後、僕の答案へ×印をつけた。

三十二　加藤清正

加藤清正は相生町二丁目の横町に住んでゐた。と云つても勿論鎧武者ではない。極く小さい桶屋だつた。しかし主人は標札によれば、加藤清正に違ひなかつた。のみならずまだ新しい紺暖簾の紋も蛇の目だつた。僕等は時々この店へ主人の清正を覗きに行つた。清正は短い顋髯を生やし、金槌や鉋を使つてゐた。けれども何か僕等には偉さうに思はれて仕かたがなかつた。

三十三　七不思議

その頃はどの家もランプだつた。從つてどの町も薄暗かつた。かう云ふ町は明治とは云ひ條、まだ「本所の七不思議」とは全然縁のない訣ではなかつた。現に僕は夜學の歸りに元町通りを歩きながら、お竹倉の藪の向うの莫迦囃しを聞いたのを覺えてゐる。それは石原か横網かにお祭りのあつた囃しだつたかも知れない。しかし僕は二百年來の狸の莫迦囃しではないかと思ひ、一刻も早く家へ歸るやうにせつせと足を早めたものだつた。

三十四　動員令

僕は例の夜學の歸りに本所警察署の前を通つた。警察署の前にはいつもと變り、高張提灯が一對ともしてあつた。僕は妙に思ひながら、父や母にそのことを話した。が、誰も驚かなかつた。それは僕の留守の間に「動員令發せらる」と云ふ號外が家にも來てゐたからだつた。僕は勿論日露戰役に關するいろいろの小事件を記憶してゐる。が、この一對の高張提灯ほど鮮かに覺えてゐるものはない。いや、僕は今日でも高張提灯を見る度に婚禮や何かを想像するよりもまづ戰爭を思ひ出すのである。

三十五　久井田卯之助

久井田と云ふ文字は違つてゐるかも知れない。僕は唯彼のことをヒサイダさんと稱してゐた。彼は僕の實家にゐる牛乳配達の一人だつた。同時に又今日ほど澤山ゐない社會主義者の一人だつた。僕はこのヒサイダさんに社會主義の信條を教へて貰つた。それは僕の血肉には幸か不幸か滲み入らなかつた。が、日露戰役中の非戰論者に惡意を持たなかつたのは確かにヒサイダさんの影響だつた。

ヒサイダさんは五六年前に突然僕を訪問した。僕が彼と大人同志の社會主義論をしたのはこの時だけである。（彼はそれから何箇月もたたずに天城山の雪中に凍死してしまつた。）しかし僕は社

會主義論よりも彼の獄中生活談などに興味を持たずにはゐられなかつた。

「夏目さんの『行人』の中に和歌の浦へ行つた男と女とがとうとう飯を食ふ氣にならずに膳を下げさせる所があるでせう。あすこを牢の中で讀んだ時にはしみじみ勿體ないと思ひましたよ。」

彼は人懐こい笑顔をしながら、そんなことも話して行つたものだつた。

三十六　火花

やはりその頃の雨上りの日の暮、僕は馬車通りの砂利道を一隊の歩兵の通るのに出合つた。歩兵は銃を肩にしたまま、默つて進行をつゞけてゐた。が、その靴は砂利と擦れる度に時々火花を發してゐた。僕はこのかすかな火花に何か悲壯な心もちを感じた。

それから何年かたつた後、僕は白柳秀湖氏の「離愁」とか云ふ小品集を讀み、やはり歩兵の靴から出る火花を書いたものを發見した。(僕に白柳秀湖氏や上司小劍氏の名を敎へたものも或はこのサイグさんだつたかも知れない。)それはまだ中學生の僕には僕自身同じことを見てゐたせゐか、感銘の深いものに違ひなかつた。僕はこの文章から同氏の本を讀むやうになり、いつかロシヤの文學者の名前を、――殊にトウルゲネフの名前を覺えるやうになつた。それ等の小品集はどこへ行つたか、今はもう本屋でも見かけたことはない。しかし僕は同氏の文章に未だに愛惜を感じてゐ

る。殊に東京の空を罩める「鳶色の靄」などと云ふ言葉に。

三十七　日本海々戰

僕等は皆日本海々戰の勝敗を日本の一大事と信じてゐた。が、「今日晴朗なれども浪高し」の號外は出ても、勝敗は容易にわからなかつた。すると或日の午飯の時間に僕の組の先生が一人、號外を持つて教室へかけこみ、「おい、みんな喜べ。大勝利だぞ」と聲をかけた。この時の僕等の感激は確かに又國民的だつたのであらう。僕は中學を卒業しない前に國木田獨歩の作品を讀み、何でも「電報」とか云ふ短篇にやはりかう云ふ感激を描いてあるのを發見した。

「皇國の興廢この一擧にあり」云々の信號を掲げたと云ふことは恐らくは如何なる戰爭文學よりも一層詩的な出來事だつたであらう。しかし僕は十年の後、海軍機關學校の理髪師に頭を刈つて貰ひながら、彼も亦日露の戰役に「朝日」の水兵だつた關係上、日本海々戰の話をした。すると彼はにこりともせず、極めて無造作にかう云ふのだつた。

「何、あの信號は始終でしたよ。それは號外にも出てゐたのは日本海々戰の時だけですが。」

三十八　柔術

僕は中學では柔術を習つた。それから又濱町河岸の大竹と云ふ道場へもやはり寒稽古などに通つたものである。中學で習つた柔術は何流だつたか覺えてゐない。が、大竹の柔術は確か大貫揚心流だつた。僕は中學の仕合ひへ出た時、相手の稽古着へ手をかけるが早いか、忽ち見事な巴投げを食ひ、向う側に控へた生徒たちの前へ坐つてゐたことを覺えてゐる。當時の僕の柔道友だちは西川英次郎一人だつた。西川は今は鳥取の農林學校か何かの教授をしてゐる。僕はその後も秀才と呼ばれる何人かの人々に接して來た。が、僕を驚かせた最初の秀才は西川だつた。

三十九　西川英次郎

西川は渾名をライオンと言つた。それは顏がどことなしにライオンに似てゐた爲である。僕は西川と同級だつた爲めに少なからず啓發を受けた。中學の四年か五年の時に英譯の「獵人日記」だの「サツフオオ」だのを讀み嚙つたのは、西川なしには出來なかつたであらう。が、僕は西川には何も報いることは出來なかつた。若し何か報いたとすれば、それは唯足がらをすくつて西川を泣かせたことだけであらう。

僕は又西川と一しよに夏休みなどには旅行した。西川は僕よりも裕福だつたらしい。しかし僕等は大旅行をしても、旅費は二十圓を越えたことはなかつた。僕はやはり西川と一しよに中里介

山氏の「大菩薩峠」に近い丹波山と云ふ寒村に泊り、一等三十五錢と云ふ宿賃を拂つたのを覺えてゐる。しかしその宿は清潔でもあり、食事も玉子燒などを添へてあつた。
多分まだ殘雪の深い赤城山へ登つた時であらう。西川はこごみ加減に歩きながら、急に僕にこんなことを言つた。
「君は兩親に死なれたら、悲しいとか何とか思ふかい？」
僕はちよつと考へた後、「悲しいと思ふ」と返事をした。
「僕は悲しいとは思はない。君は創作をやるつもりなんだから、さう云ふ人間もゐると云ふことを知つて置く方が善いかも知れない。」
しかし僕はその時分にはまだ作家にならうと云ふ志望などを持つてゐた訣ではなかつた。それをなぜさう言はれたかは未だに僕には不可解である。

四十　勉强

僕は僕の中學時代は勿論、復習と云ふものをしたことはなかつた。しかし試驗勉强は度たびした。試驗の當日にはどの生徒も運動場でも本を讀んだりしてゐる。僕はそれを見る度に「僕ももつと勉强すれば善かつた」と云ふ後悔を伴つた不安を感じた。が、試驗場を出るが早いか、そんなた

ことはけろりと忘れてゐた。

四十一　金

僕は一圓の金を貰ひ、本屋へ本を買ひに出かけると、なぜか一圓の本を買つたことはなかつた。しかし一圓出しさへすれば、僕が欲しいと思ふ本は手にはひるのに違ひなかつた。僕は度たび七十錢か八十錢の本を持つて來た後、その本を買つたことを後悔してゐた。それは勿論本ばかりではなかつた。僕はこの心もちの中に中產下層階級を感じてゐる。今日でも中產下層階級の子弟は何か買ひものをする度にやはり一圓持つてゐるものの、一圓をすつかり使ふことに逡巡してはゐないであらうか？

四十二　虛榮心

或冬に近い日の暮、僕は元町通りを歩きながら、突然往來の人々が全然僕を顧みないのを感じた。同時に又妙に寂しさを感じた。しかし格別「今に見ろ」と云ふ勇氣の起ることは感じなかつた。薄い藍色に澄み渡つた空には幾つかの星も輝いてゐた。僕はこれ等の星を見ながら、出來るだけ威張つて歩いて行つた。

四十三　發火演習

僕等の中學は秋になると、發火演習を行つたばかりか、東京の或る聯隊の機動演習にも參加したものである。體操の教官――或陸軍大尉はいつも僕等には嚴然としてゐた。が、實際の機動演習になると、時々命令に間違ひを生じ、おほ聲に上官に叱られたりしてゐた。僕はいつもこの教官に同情したことを覺えてゐる。

四十四　渾名

あらゆる東京の中學生が教師につける渾名ほど刻薄に眞實に迫るものはない。僕は生憎今日ではそれ等の渾名を忘れてゐる。が、今から四五年前、僕の從姉の子供が一人、僕の家へ遊びに來た時、或中學の先生のことを「マツポンがどうして」などと話してゐた。僕は勿論「マツポン」とは何のことかと質問した。

「どう云ふことも何もありませんよ。唯その先生の顏を見ると、マツポンと云ふ氣もちがするだけですよ。」

僕はそれから暫くの後、この中學生と電車に乘り、偶然その先生の風丰に接した。するとそれ

は、——僕もやはり文章では到底眞實を傳へることは出來ない。つまりそれは渾名通り、正に「マツポン」と云ふ感じだつた。

（大正十五年三月—昭和二年一月）

本所兩國

「大溝」

僕は本所界隈のことをスケッチしろといふ社命を受け、同じ社のO君と一しよに久振りに本所へ出かけて行つた。今その印象記を書くのに當り、本所兩國と題したのは或は意味を成してゐないかも知れない。しかしなぜか兩國は本所區のうちにあるものの、本所以外の土地の空氣も漂つてゐることは確かである。そこでO君とも相談の上、ちよつと電車の方向板じみた本所兩國といふ題を用ひることにした。——

僕は生れてから二十歳頃までずつと本所に住んでゐた者である。明治二三十年代の本所は今日のやうな工業地ではない。江戸二百年の文明に疲れた生活上の落伍者が比較的大勢住んでゐた町である。從つて何處を歩いてみても、日本橋や京橋のやうに大商店の並んだ往來などはなかつた。若しその中に少しでも賑やかな通りを求めるとすれば、それは僅に兩國から龜澤町に至る元町通りか、或は二の橋から龜澤町に至る二つ目通り位なものだつたであらう。勿論その外に石原通り

や法恩寺橋通りにも低い瓦屋根の商店は軒を並べてゐたのに違ひない。しかし廣い「お竹倉」をはじめ、「伊達樣」「津輕樣」などといふ大名屋敷はまだ確かに本所の上へ封建時代の影を投げかけてゐた。……

殊に僕の住んでゐたのは「お竹倉」に近い小泉町である。「お竹倉」は僕の中學時代にもう兩國停車場や陸軍被服廠に變つてしまつた。しかし僕の小學時代にはまだ「大溝」に圍まれた、雜木林や竹藪の多い封建時代の「お竹倉」だつた。「大溝」とはその名の示す通り、少くとも一間半あまりの溝のことである。この溝は僕の知つてゐる頃にはもう黑い泥水をどろりと淀ませてゐるばかりだつた。（僕はそこへ金魚にやる孑孑を掬ひに行つたことをきのふのやうに覺えてゐる。）しかし「御維新」以前には溝よりも堀に近かつたのであらう。僕の叔父は十何歲かの時に年にも似合はない大小を差し、この溝の前にしやがんだまま、長い釣竿をのばしてゐた。すると誰か叔父の刀にぴしりと鞘當てをしかけた者があつた。叔父は勿論むつとして肩越しに相手を振返つてみた。僕の一家一族の內にもこの叔父程負けぬ氣の強かつた者はない。かういふ叔父はこの時にも相手によつては賣られた喧嘩を買ふ位の勇氣は持つてゐたのであらう。が、相手は誰かと思ふと、朱鞘の大小を閂差しに差した身の丈拔群の侍だつた。しかも誰にも恐れられてゐた「新徵組」の一人に違ひなかつた。かれは叔父を尻目にかけながら、にやにや笑つて歩いてゐた。叔父は彼を一目み

たぎり、二度と長い釣竿の先から目をあげずにゐたとかいふことである。

僕は小學時代にも「大溝」の側を通る度にこの叔父の話を思ひ出した。叔父は「御維新」以前には新刀無念流の劍客だつた。（叔父が安房上總へ武者修行に出かけ、二刀流の劍客と仕合をした話も矢張り僕を喜ばせたものである。）それから「御維新」前後には彰義隊に加はる志を持つてゐた。最後に僕の知つてゐる頃には年とつた猫背の測量技師だつた。「大溝」は今日の本所にはない。叔父も亦大正の末年に食道癌を病んで死んでしまつた。本所の印象記の一節にかういふことを加へるのは或は私事に及び過ぎるであらう。しかし僕はO君と一しよに兩國橋を渡りながら、大川の向うに立ち竝んだ無數のバラツクを眺めた時には實際烈しい流轉の相に驚かない訣には行かなかつた。僕の「大溝」を思ひ出したり、その又「大溝」に釣をしてゐた叔父を思ひ出したりすることも必しも偶然ではないのである。

兩國

兩國の鐵橋は震災前と變らないといつても差支へない。唯鐵の欄干の一部はみすぼらしい木造に變つてゐた。この鐵橋の出來たのはまだ僕の小學時代である。しかし櫛形の鐵橋には懷古の情

も起つて來ない。僕は昔の兩國橋に――狹い木造の兩國橋にいまだに愛惜を感じてゐる。それは僕の記憶によれば、今日よりも下流にかゝつてゐた。僕は時々この橋を渡り、浪の荒い「百本杭」や蘆の茂つた中洲を眺めたりした。中洲に茂つた蘆は勿論、「百本杭」も今は殘つてゐない。「百本杭」もその名の示す通り、河岸に近い水の中に何本も立つてゐた亂杭である。昔の芝居は殺し場などに多田の藥師の石切場と一しよに度々この人通りの少ない「百本杭」の河岸を使つてゐた。僕は夜は「百本杭」の河岸を歩いたかどうかは覺えてゐない。が、朝は何度もそこに群がる釣師の連中を眺めに行つた。O君は僕のかういふのを聞き、大川でも魚の釣れたことに多少の驚嘆を洩らしてゐた。一度も釣竿を持つたことのない僕は「百本杭」で釣れた魚の何と何だつたかを知つてゐない。しかし或夏の夜明けにこの河岸へ出かけてみると、いつも多い釣師の連中は一人もそこに來てゐなかつた。その代りに杭の間には坊主頭の土左衞門が一人俯向けに浪に搖すられてゐた。

……

兩國橋の袂にある表忠碑も昔に變らなかつた。表忠碑を書いたのは日露役の陸軍總司令官大山巖侯爵である。日露役の始まつたのは僕の中學へはひり立てだつた。明治二十五年に生れた僕は勿論日清役のことを覺えてゐない。しかし北清事變の時には大平といふ廣小路(兩國)の繪草紙屋へ行き、石版刷の戰爭の繪を時々一枚づつ買つたものである。それ等の繪には義和團の匪徒や

英吉利兵などは斃れてゐても、日本兵は一人も斃れてゐなかつた。僕はもうその時にも矢張り日本兵も一人位は死んでゐるのに違ひないと思つたりした。しかし日露役の起つた時には徹頭徹尾露西亞位惡い國はないと信じてゐた。僕のリアリズムは年と共に發達する訣には行かなかつたのであらう。もつともそれは僕の知人なども出征してゐた爲めもあるかも知れない。この知人は南山の戰に鐵條網にかかつて戰死してしまつた。鐵條網といふ言葉は今日では誰も知らない者はない。けれども日露役の起つた時には全然在來の辭書にない、新しい言葉の一つだつたのである。僕は大きい表忠碑を眺め、今更のやうに二十年前の日本を考へずにはゐられなかつた。同時に又ちよつと表忠碑にも時代錯誤に近いものを感じない訣には行かなかつた。

この表忠碑の後には確か兩國劇場といふ芝居小屋の出來る筈になつてゐた。現に僕は震災前にも落成しない芝居小屋の煉瓦壁を見たことを覺えてゐる。けれども今は薄汚い亞鉛葺きのバラツクの外に何も芝居小屋らしいものは見えなかつた。もつとも僕は兩國の鐵橋に愛惜を持つてゐないやうにこの煉瓦建の芝居小屋にも格別の愛惜を持つてゐない。兩國橋の木造だつた頃には駒止め橋もこの邊に殘つてゐた。のみならず井生村樓や二州樓といふ料理屋も兩國橋の兩側に並んでゐた。その外に鮨屋の與平、鰻屋の須崎屋、牛肉の外にも冬になると猪や猿を食はせる豐田屋、それから回向院の表門に近い横町にあつた「坊主軍鷄」――かう一々數へ立てて見ると、本所でも

名高い食物屋は大抵この界隈に集つてゐたらしい。

「富士見の渡し」

僕等は兩國橋の袂を左へ切れ、大川に沿つて歩いて行つた。「百本杭」のないことは前にも書いた通りである。しかし「伊達樣」は殘つてゐるかも知れない。僕はまだ幼稚園時代からこの「伊達樣」の中にある和靈神社のお神樂を見に行つたものである。なんでも母などの話によれば、女中の背中におぶさつたまま、熱心にお神樂をみてゐるうちに「うんこ」をしてしまつたこともあつたらしい。しかし何處を眺めても、亞鉛葺きのバラツクの外に「伊達樣」らしい屋敷は見えなかつた。「伊達樣」の庭には木犀が一本秋ごとに花を盛つてゐたものである。僕はその薄甘い匂ひを子供心にも愛してゐた。あの木犀も震災の時に勿論灰になつてしまつたことであらう。

流轉の相の僕を脅すのは「伊達樣」の見えなかつたことばかりではない。僕は確かこの近所にあつた「富士見の渡し」を思ひ出した。が、渡し場らしい小屋は何處にも見えない。僕は丁度道ばたに芋を洗つてゐた三十前後の男に渡し場の有無をたづねて見ることにした。しかし彼は「富士見の渡し」といふ名前を知つてゐないのは勿論、渡し場のあつたことさへ知らないらしかつた。「富

士見の渡し」はこの河岸から「明治病院」の裏手に當る向う河岸へ通つてゐた。その又向う河岸は堀割りになり、そこに時々何處かの家の家鴨なども泳いでゐたものである。僕は中學へはひつた後も或親戚を尋ねる爲めに度々「富士見の渡し」を渡つて行つた。その親戚は三遊派の「五りん」とかいふもののお上さんだつた。僕の家へ何かの拍子に圓朝の息子の出入したりしたのもかういふ親戚のあつた爲めであらう。僕は又その家の近所に今村次郎といふ標札を見付け、この名高い速記者（種々の講談の）に敬意を感じたことを覺えてゐる。——

僕は講談といふものを寄席では殆ど聞いたことはない。僕の知つてゐる講釋師は先代の邑井吉瓶だけである。（もつとも典山とか伯山とか或は又伯龍とかいふ新時代の藝術家を知らない訣ではない。）從つて僕は講談を知る爲めに大抵今村次郎氏の速記本に依つた。しかし落語は家族達と一しよに相生町の廣瀬だの米澤町（日本橋區）の立花家だのへ聞きに行つたものである。殊に度々行つたのは相生町の廣瀬だつた。が、どういふ落語を聞いたかは生憎はつきりと覺えてゐない。唯吉田國五郎の人形芝居を見たことだけは未だにありありと覺えてゐる。しかも僕の見た人形芝居は大抵小幡小平次とか累とかいふ怪談物だつた。僕は近頃大阪へ行き、久振りに文樂を見物した。けれども今日の文樂は僕の昔見た人形芝居よりも輕業じみたけれんを使つてゐない。吉田國五郎の人形芝居は例へば清玄の庵室などでも、血だらけな清玄の幽靈は大夫の見臺が二つに割れると、

その中から姿を現はしたものである。寄席の廣瀨も燒けてしまつたであらう。今村次郎氏も明治病院の裏手に――僕は正直に白狀すれば、今村次郎氏の現存してゐるかどうかも知らないものの一人である。

そのうちに僕は震災前と――といふよりも寧ろ二十年前と少しも變らないものを發見した。それは兩國驛の引込み線を抑へた、三尺に足りない草土手である。僕は實際この草土手に「國亡びて山河在り」といふ詠嘆を感じずにはゐられなかつた。しかしこの小さい草土手にかういふ詠嘆を感じるのはそれ自身僕には情なかつた。

「お竹倉」

僕の知人は震災の爲めに何人もこの界隈に斃れてゐる。僕の妻の親戚などは男女九人の家族中、やつと命を全うしたのは二十前後の息子だけだつた。それも火の粉を防ぐ爲めに戸板をかざして立つてゐたのを旋風の爲めに捲き上げられ、安田家の庭の池の側へ落ちてどうにか息を吹き返したのである。それから又僕の家へ毎日のやうに遊びに來た「お条さん」といふ人などは命だけは助かつたものの、一時は發狂したのも同樣だつた。（「お条さん」は髮の毛の薄い爲めに何處へも片付

かずにゐる人だつた。しかし髪の毛を生やす爲めに蝙蝠の血などを頭へ塗つてゐた。）最後に僕の通つてゐた江東小學校の校長さんは兩眼とも明を失つた上、前年にはたつた一人の息子を失ひ、震災の年には御夫婦とも燒け死んでしまつたとか言ふことだつた。僕も本所に住んでゐたとすれば、恐らくは矢張りこの界隈に火事を避けてゐたことであらう。從つて又僕は勿論、僕の家族も彼等のやうに非業の最後を遂げてゐたかも知れない。僕は高い褐色の本所會館を眺めながら、こんなことをO君と話し合つたりした。

「しかし兩國橋を渡つた人は大抵助かつてゐたのでせう？」

「兩國橋を渡つた人はね。……それでも元町通りには高壓線の落ちたのに觸れて死んだ人もあつたと言ふことですよ。」

「兎に角東京中でも被服廠程大勢燒け死んだところはなかつたのでせう。」

かういふ種々の悲劇のあつたのはいづれも昔の「お竹倉」の跡である。僕の知つてゐた頃の「お竹倉」は大體「御維新」前と變らなかつたものの、もう總武鐵道會社の敷地の中に加へられてゐた。僕はこの鐵道會社の社長の次男の友達だつたから、妄りに人を入れなかつた「お竹倉」の中へも遊びに行つた。そこは前にも言つたやうに雜木林や竹藪のある、町中には珍らしい野原だつた。のみならず古い橋のかかつた堀割りさへ大川に通じてゐた。僕は時々空氣銃を肩にし、その竹藪や

雜木林の中に半日を暮らしたものである。溝板の上に育つた僕に自然の美しさを敎へたものは何よりも先に「お竹倉」だつたであらう。僕は中學を卒業する前に英譯の「獵人日記」を拾ひ讀みにしながら、何度も「お竹倉」の中の景色を――「とりかぶと」の花の咲いた藪の陰や大きい晝の月のかかつた雜木林の梢を思ひ出したりした。「お竹倉」は勿論その頃には嚴しい陸軍被服廠や兩國驛に變つてゐた。けれども震災後の今日を思へば、――「卻つて幷州を望めば是故鄕」と支那人の歌つたのも偶然ではない。

總武鐵道の工事の始まつたのはまだ僕の小學時代だつたであらう。その以前の「お竹倉」は夜は「本所の七不思議」を思ひ出さずにはゐられない程もの寂しかつたのに違ひない。夜は？――いや、晝間さへ僕は「お竹倉」の中を歩きながら、「おいてき堀」や「片葉の蘆」は何處かこのあたりにあるものと信じない訣には行かなかつた。現に夜學に通ふ途中、「お竹倉」の向うに莫迦囃しを聞き、てつきりあれは「狸囃し」に違ひないと思つたことを覺えてゐる。それはおそらくは小學時代の僕一人の恐怖ではなかつたのであらう。なんでも總武鐵道の工事中にそこへ通つてゐた線路工夫の一人は宵闇の中に幽靈を見、氣絕してしまつたとかいふことだつた。

本所會館は震災前の安田家の跡に建つたのであらう。安田家は確か花崗石を使つたルネサンス式の建築だつた。僕は椎の木などの茂つた中にこの建築の立つてゐたのに明治時代そのものを感じてゐる。が、セセツション式の本所會館は「牛乳デイ」とかいふものの爲に植込みのある玄關の前に大きいポスタアを掲げたり、宣傳用の自動車を並べたりしてゐた。僕の水泳を習ひに行つた「日本游泳協會」は丁度この河岸にあつたものである。僕はいつか何かの本に三代將軍家光は水泳を習ひに日本橋へ出かけたと言ふことを發見し、滑稽に近い今昔の感を催さない訣には行かなかつた。しかし僕等の大川へ水泳を習ひに行つたといふことも後世には不可解に感じられるであらう。現に今でもO君などは「この川でも泳いだりしたものですかね」と少からず驚嘆してゐた。

僕は又この河岸にも昔に變らないものを發見した。それは――生憎何の木かはちよつと僕には見當もつかない。が、兎に角新芽を吹いた昔の並み木の一本である。僕の覺えてゐる柳の木は一本も今では殘つてゐない。けれどもこの木だけは何かの拍子に火事にも燒かれずに立つてゐるのであらう。僕は殆どこの木の幹に手を觸れて見たい誘惑を感じた。のみならずその木の根元には

子供を連れたお婆さんが二人曇天の大川を眺めながら、花見か何かにでも來てゐるやうに稻荷鮨を食べて話し合つてゐた。

本所會館の隣にあるのは建築中の同愛病院である。高い鐵の櫓だの、何階建かのコンクリイトの壁だの、殊に砂利を運ぶ人夫だのは確かに僕を威壓するものだつた。同時に又工業地になつた「本所の玄關」といふ感じを打ち込まなければ措かないものだつた。僕は半裸體の工夫が一人、汗に體を輝かせながら、シャベルを動かしてゐるのを見、本所全體もこの工夫のやうに烈しい生活をしてゐることを感じた。この界隈の家々の上に五月幟の翻つてゐたのは僕の小學時代の話である。今では、――誰も五月幟よりは新しい日本の年中行事になつたメイ・デイを思ひ出すのに違ひない。

僕は昔この邊にあつた「御藏橋」と言ふ橋を渡り、度々友綱の家の側にあつた或友達の家へ遊びに行つた。彼も亦海軍の將校になつた後、二三年前に故人になつてゐる。しかし僕の思ひ出したのは必しも彼のことばかりではない。彼の住んでゐた家のあたり、――瓦屋根の間に樹木の見える横町のことも思ひ出したのである。そこは僕の住んでゐた元町通りに比べると、はるかに人通りも少なければ「しもた家」も殆ど門並みだつた。「椎の木松浦」のあつた昔は暫く問はず、「江戸の横網　鶯の鳴く」と北原白秋氏の歌つた本所さへ今ではもう「歴史的大川端」に變つてしまつたと

言ふ外はない。如何に萬法は流轉するとはいへ、かういふ變化の絶え間ない都會は世界中にも珍らしいであらう。

僕等はいつか工事場らしい板圍ひの前に通りかかつた。そこにも勞働者が二三人、せつせと槌を動かしながら、大きい花崗石を削つてゐた。のみならず工事中の鐵橋さへ泥濁りに濁つた大川の上へ長々と橋梁を横たへてゐた。僕はこの橋の名前は勿論、この橋の出來る話も聞いたことはなかつた。震災は僕等の後にある「富士見の渡し」を滅してしまつた。が、その代りに僕等の前に新しい鐵橋を造らうとしてゐる。……

「これは何といふ橋ですか?」

麥藁帽を冠つた勞働者の一人は矢張り槌を動かしたまま、ちよつと僕の顏を見上げ、存外親切に返事をした。

「これですか?　これは藏前橋です。」

「一錢蒸汽」

僕等はそこから引き返して川蒸汽の客になる爲に横網の浮き棧橋へおりて行つた。昔はこの川

蒸汽も一錢蒸汽と呼んだものである。今はもう賃錢も一錢ではない。しかし五錢出しさへすれば、何區でも勝手に行かれるのである。けれども屋根のある浮き棧橋は――震災は勿論この浮き棧橋も炎にして空へ立ち昇らせたのであらう。が、一見した所は明治時代に變つてゐない。僕等はベンチに腰をおろし、一本の卷煙草に火をつけながら、川蒸汽の來るのを待つことにした。

「石垣にはもう苔が生えてゐますね。もつとも震災以來四五年になるが、……」

僕はふとこんなことを言ひ、O君の爲に笑はれたりした。

「苔の生えるのは當り前であります。」

大川は前にも書いたやうに一面に泥濁りに濁つてゐる。それから大きい浚渫船が一艘起重機を擡げた向う河岸も勿論「首尾の松」や土藏の多い昔の「一番堀」や「二番堀」ではない。最後に川の上を通る船も今では小蒸汽や達磨船である。五大力、高瀬船、傳馬、荷足、田船などといふ大小の和船も何時の間にか流轉の力に押し流されたのであらう。僕はO君と話しながら、「沅湘日夜東に流れて去る」といふ支那人の詩を思ひ出した。かういふ大都會の中の川は沅湘のやうに悠々と時代を超越してゐることは出來ない。現世は實に大川さへ刻々に工業化してゐるのである。

しかしこの浮き棧橋の上に川蒸汽を待つてゐる人々は大抵大川よりも保守的である。僕は卷煙草をふかしながら、唐棧柄の着物を着た男や銀杏返しに結つた女を眺め、何か矛盾に近いものを

感じない訣には行かなかつた。同時に又明治時代にめぐり合つた或懐しみに近いものを感じない訣には行かなかつた。そこへ下流から漕いで來たのは久振りに見る五大力である。艫の高い五大力の上には鉢巻をした船頭が一人一丈餘りの櫓を押してゐた。それからお上さんらしい女が一人御亭主に負けずに竿を差してゐた。かういふ水上生活者の夫婦位妙に僕等にも抒情詩めいた心もちを起させるものは少ないかも知れない。僕はこの五大力を見送りながら、——その又五大力の上にゐる四五歳の男の子を見送りながら、幾分か彼等の幸福を羨みたい氣さへ起してゐた。

兩國橋をくぐつて來た川蒸汽はやつと浮き棧橋へ横着けになつた。「隅田丸三十號」(?)——僕は或はこの小蒸汽に何度も前に乘つてゐるのであらう。兎に角これも明治時代に變つてゐないことは確かである。川蒸汽の中は滿員だつた上、立つてゐる客も少くない。僕等はやむを得ず船ばたに立ち、薄日の光に照らされた兩岸の景色を見て行くことにした。尤も船ばたに立つてゐたのは僕等二人に限つた訣ではない。僕等の前には夏外套を着た、顋髯の長い老人さへやはり船ばたに立つてゐたのである。

川蒸汽は靜かに動き出した。すると大勢の客の中に忽ち「毎度御やかましうございますが」と甲高い聲を出しはじめたのは繪端書や雜誌を賣る商人である。これも亦昔に變つてゐない。若し少しでも變つてゐるとすれば、「何ごとも活動ばやりの世の中でございますから」などと云ふ言葉を

挾んでゐることであらう。僕はまだ小學時代からかう云ふ商人の賣つてゐるものを一度も買つた覺えはない。が、天窓越しに彼の姿を見おろし、ふと僕の小學時代に伯母と一しよに川蒸汽へ乘つた時のことを思ひ出した。

乘り繼ぎ「一錢蒸汽」

僕等はその時にどこへ行つたのか、兎に角伯母だけは長命寺の櫻餅を一籠膝にしてゐた。すると男女の客が二人、僕等の顏を尻目にかけながら、「何か匂ひますね」「うん、糞臭いな」などと話しはじめた。長命寺の櫻餅を糞臭いとは、――僕は未だに生意氣にもこの二人を田舍者めと輕蔑したことを覺えてゐる。長命寺にも震災以來一度も足を入れたことはない。それから長命寺の櫻餅は、――勿論今でも昔のやうに評判の善いことは確かである。しかし餡や皮にあつた野趣だけはいつか失はれてしまつた。……

川蒸汽は藏前橋の下をくぐり、廐橋へ眞直に進んで行つた。そこへ向うから僕等の乘つたのとあまり變らない川蒸汽が一艘矢張り浪を蹴つて近づき出した。が、七八間隔ててすれ違つたのを見ると、この川蒸汽の後部には甲板の上に天幕を張り、ちやんと大川の兩岸の景色を見渡せる設

備も整つてゐた。かういふ古風な川蒸汽も亦目まぐるしい時代の影響を蒙らない訣には行かないらしい。その後へ向うから走つて來たのはお客や藝者を乘せたモオタアボオトである。屋根船や船宿を知つてゐる老人達は定めしこのモオタアボオトに苦々しい顏をすることであらう。僕は江戸趣味に隨喜する者ではない。從つて又モオタアボオトを無風流と思ふ者ではない。しかし僕の小學時代に大川に浪を立てるものは「一錢蒸汽」のあるだけだつた。或はその外に利根川通ひの外輪船のあるだけだつた。僕は渡し舟に乘る度に「一錢蒸汽」の浪の來ることを、――このうねうねした浪の爲に舟の搖れることを恐れたものである。しかし今日の大川の上に大小の浪を殘すものは一々數へるのに耐へないであらう。

僕は船端に立つたまま、鼠色に輝いた川の上を見渡し、確か廣重も描いてゐた河童のことを思ひ出した。河童は明治時代には、――少くとも「御維新」前後には大根河岸の川にさへ出沒してゐた。僕の母の話に依れば、觀世新路に住んでゐた或男やもめの植木屋とかは子供のおしめを洗つてゐるうちに大根河岸の川の河童に腋の下をくすぐられたと言ふことである。（觀世新路に植木屋の住んでゐたことさへ僕等にはもう不思議である。）まして大川にゐた河童の數は決して少くはなかつたであらう。いや、必しも河童ばかりではない。僕の父の友人の一人は夜網を打ちに出てゐたところ、何か舳へ上つたのを見ると、甲羅だけでも盥ほどあるすつぽんだつたなどと話してゐ

た。僕は勿論かういふ話を盡く事實とは思つてゐない。けれども明治時代――或は明治時代以前の人々はこれ等の怪物を目擊する程この町中を流れる川に詩的恐怖を持つてゐたのであらう。

「今ではもう河童もゐないでせう。」

「かう泥だの油だの一面に流れてゐるのではね。――しかしこの橋の下あたりには年を取つた河童の夫婦が二匹未だに住んでゐるかも知れません。」

川蒸汽は僕等の話の中に廐橋の下へはひつて行つた。薄暗い橋の下だけは浪の色もさすがに蒼んでゐた。僕は昔は渡し舟へ乘ると、――いや、時には橋を渡る時さへ、磯臭い匂のしたことを思ひ出した。しかし今日の大川の水は何の匂も持つてゐない。若し又持つてゐるとすれば、唯泥臭い匂だけであらう。……

「あの橋は今度出來る駒形橋ですね？」

O君は生憎僕の問に答へることは出來なかつた。駒形は僕の小學時代には大抵「コマカク」と呼んでゐたものである。が、それもとうの昔に「コマガタ」と發音するやうになつてしまつた。「君は今駒形あたりほとゝぎす」を作つた遊女も或は「コマカタ」と澄んだ音を「ほとゝぎす」の聲に響かせたかつたかも知れない。支那人は「文章は千古の事」と言つた。が、文章もおのづから匂を失つてしまふことは大川の水に變らないのである。

僕等は川蒸汽を下りて吾妻橋の袂へ出、そこへ來合せた圓タクに乘つて柳島へ向ふことにした。この吾妻橋から柳島へ至る電車道は前後に二三度しか通つた覺えはない。まして電車の通らない前には一度も通つたことはなかつたであらう。一度も？——若し一度でも通つたとすれば、それは僕の小學時代に業平橋かどこかにあつた或可也大きい寺へ葬式に行つた時だけである。僕はその葬式の歸りに確か父に「御維新」前の本所の話をして貰つた。父は往來の左右を見ながら、「昔はここいらは原ばかりだつた」とか「何とか樣の裏の田には鶴が下りたものだ」とか話してゐた。しかしそれ等の話の中でも最も僕を動かしたものは「御維新」前には行き倒れとか首縊りとかの死骸を早桶に入れ、その又早桶を葭簀に包んだ上、白張りの提灯を一本立てて原の中に据ゑて置くと云ふ話だつた。僕は草原の中に立つた白張の提灯を想像し、何か氣味の惡い美しさを感じた。しかも彼是眞夜中になると、その早桶のおのづからごろりと轉げるといふに至つては、——明治時代の本所はたとひ草原には乏しかつたにもせよ、恐らくはまだこのあたりは多少所謂「御朱引き外」の面かげをとどめてゐたのであらう。しかし今はどこを見ても、唯電柱やバラツクの押し合

ひへし合ひしてゐるだけである。僕は泥のはねかかつたタクシイの窓越しに往來を見ながら、金錢を武器にする修羅界の空氣を憂鬱に感じるばかりだつた。

僕等は「橋本」の前で圓タクをおり、水のどす黑い堀割り傳ひに龜井戸の天神樣へ行つて見ることにした。名高い柳島の「橋本」も今は食堂に變つてゐる。尤もこの家は燒けずにすんだらしい。現に古風な家の一部や荒れ果てた庭なども殘つてゐる。けれども磨り硝子へ綠いろに「食堂」と書いた軒燈は少くとも僕にははかなかつた。僕は勿論「橋本」の料理を云々するほどの通人ではない。のみならず「橋本」へ來たことさへあるかないかわからない位である。が、五代目菊五郎の最初の腦溢血を起したのは確かこの「橋本」の二階だつたであらう。

堀割りを隔てた妙見樣も今ではもうすつかり裸になつてゐる。それから堀割りに沿うた往來も、――僕は中學時代に蕪村句集を讀み、「君行くや柳綠に路長し」といふ句に出合つた時、この往來にあつた柳を思ひ出さずにはゐられなかつた。しかし今僕等の歩いてゐるのは有田ドラツグや愛聖館の並んだ、せせこましいなりに賑かな往來である。近頃私娼の多いとか云ふのも恐らくはこの往來の裏あたりであらう。僕は淺草千束町にまだ私娼の多かつた頃の夜の景色を覺えてゐる。それは窓ごとに火かげのさした十二階の聳えてゐる爲に殆ど莊嚴な氣のするものだつた。が、この往來はどちらへ拔けても、ボオドレエル的色彩などは全然見つからないのに違ひない。たとひ

デカダンスの詩人だつたとしても、僕は決してかう云ふ町裏を徘徊する氣にはならなかつたであらう。けれども明治時代の諷刺詩人、齋藤緑雨は十二階に惡趣味そのものを見出してゐた。すると明日の詩人たちは有田ドラツグや愛聖館にも彼等自身の「惡の花」を——或は又「善の花」を歌ひ上げることになることになるかも知れない。

萩寺あたり

僕は碌でもないことを考へながら、ふと愛聖館の掲示板を見上げた。するとそこに書いてあるのは確かかういふ言葉だつた。

「神様はこんなにたくさんの人間をお造りになりました。ですから人間を愛していらつしやいます。」

産兒制限論者は勿論、現世の人々はかういふ言葉に微笑しない訣にはゆかないであらう。人口過剩に苦しんでゐる僕等はこんなにたくさんの人間のゐることを神の愛の證據と思ふことは出來ない。いや、寧ろ全能の主の憎しみの證據とさへ思はれるであらう。しかし本所の或場末の小學生を教育してゐる僕の舊友の言葉に依れば、少くともその界隈に住んでゐる人々は子供の數の多

い家ほど反つて暮らしも樂だと云ふことである。それは又どの家の子供も兎に角十か十一になると、それぞれ子供なりに一日の賃金を稼いで來るからだと云ふことである。愛聖館の掲示板にかういふ言葉を書いた人は或はこの事實を知らなかつたかも知れない。が、確かにかういふ言葉は現世の本所の或場末に生活してゐる人々の氣持ちを代辯することになつてゐるであらう。尤も子供の多い程暮らしも樂だといふことは子供自身には仕合せかどうか、多少の疑問のあることは事實である。

それから僕等は通りがかりにちよつと萩寺を見物した。萩寺も突つかひ棒はしてあるものの、幸ひ震災には燒けずにすんだらしい。けれども萩の四五株しかない上、落合直文先生の石碑を前にした古池の水も涸れ涸れになつてゐるのは哀れだつた。ただこの古池に臨んだ茶室だけは昔よりも一層もの寂びてゐる。僕は萩寺の門を出ながら、昔は本所の猿江にあつた僕の家の菩提寺を思ひ出した。この寺には何でも司馬江漢や小林平八郎の墓の外に名高い浦里時次郎の比翼塚も殘つてゐたものである。僕の司馬江漢を知つたのは勿論餘り古いことではない。しかし義士の討入りの夜に兩刀を揮つて鬪つた振り袖姿の小林平八郎は小學時代の僕等には實に英雄そのものだつた。それから浦里時次郎も、——僕はあらゆる東京人のやうに芝居には惡緣の深いものである。從つて矢張り小學時代から浦里時次郎を尊敬してゐた。（けれども正直に白狀すれば、はじめて浦

里時次郎を舞臺の上に見物した時、僕の戀愛を感じたものは浦里よりも寧ろ禿だつた。）この寺は――慈眼寺といふ日蓮宗の寺は震災よりも何年か前に染井の墓地のあたりに移轉してゐる。彼等の墓も寺と一しよに定めし同じ土地に移轉してゐるであらう。が、あのじめ〱した猿江の墓地は未だに僕の記憶に殘つてゐる。就中薄い水苔のついた小林平八郎の墓の前に曼珠沙華の赤々と咲いてゐた景色は明治時代の本所以外に見ることの出來ないものだつたかも知れない。

萩寺の先にある電柱（?）は「龜井戸天神近道」といふペンキ塗りの道標を示してゐた。僕等はその横町を曲り、待合やカフヱの軒を並べた、狹苦しい往來を歩いて行つた。が、肝腎の天神樣へは容易に出ることも出來なかつた。すると道ばたに女の子が一人メリンスの袂を翻しながら、傍若無人にゴム毬をついてゐた。

「天神樣へはどう行きますか?」

「あつち。」

女の子は僕等に返事をした後、聞えよがしにこんなことを言つた。

「みんな天神樣のことばかり訊くのね。」

僕はちよつと忌々しさを感じ、この如何にもこましやくれた十ばかりの女の子を振り返つた。しかし彼女は側目も振らずに（しかも僕に見られてゐることをはつきり承知してゐながら）矢張り

毬をつき續けてゐた。實際支那人の言つたやうに「變らざるものよりして之を見れば」何ごとも變らないのに違ひない。僕も亦僕の小學時代には鐵面皮にも生藥屋へ行つて「半紙を下さい」などと言つたものだつた。

「天神様」

僕等は門並みの待合の間をやつと「天神様」の裏門へ辿りついた。するとその門の中には夏外套を着た男が一人、何か滔々としやべりながら「お立ち合ひ」の人々へ小さい法律書を賣りつけてゐた。僕は彼の雄辯に辟易せずにはゐられなかつた。が、この人ごみを通りこすと、今度は背廣を着た男が一人最新化學應用の目藥と云ふものを賣りつけてゐた。この「天神様」の裏の廣場も僕の小學時代にはなかつたものである。しかし廣場の出來た後にもここにかかる見世物小屋は活き人形や「からくり」ばかりだつた。

「こつちは法律、向うは化學――ですね。」

「龜井戸も科學の世界になつたのでせう。」

僕等はこんなことを話し合ひながら、久しぶりに「天神様」へお詣りに行つた。「天神様」の拜殿

は仕合せにも昔に變つてゐない。いや、昔に變つてゐないのは筆塚や石の牛も同じことである。僕は僕の小學時代に古い筆を何本も筆塚へ納めたことを思ひ出した。（が、僕の字は何年たつても、一向上達する容子はない。）それから又石の牛の額へ錢を投げてのせることに苦心したことも思ひ出した。かう云ふ時に投げる錢は今のやうに一錢銅貨ではない。大抵は五厘錢か寛永通寶である。その又穴錢の中の文錢を集め、所謂「文錢の指環」を拵へたのも何年前の流行であらう。僕等は拜殿の前へ立ち止まり、ちよつと帽をとつてお時宜をした。

「太鼓橋も昔の通りですか？」

「ええ、——しかしこんなに小さかつたかな。」

「子供の時に大きいと思つたものは存外あとでは小さいものですね。」

「それは太鼓橋ばかりぢやないかも知れない。」

僕等は暖簾をかけた掛け茶屋越しにどんより水光りのする池を見ながら、やつと短い花房を垂らした藤棚の下を歩いて行つた。この掛け茶屋や藤棚もやはり昔に變つてゐない。しかし木の下や池のほとりに古人の句碑の立つてゐるのは僕には何か時代錯誤を感じさせない訣には行かなかつた。江戸時代に興つた「風流」は江戸時代と一しよに滅んでしまつた。唯僕等の明治時代はまだどこかに二百年間の「風流」の匂を殘してゐた。けれども今は目のあたりに、——O君はにやにや

笑ひながら、恐らくは君自身は無意識に僕にこの矛盾を指し示した。

「カルシウム煎餅も賣つてゐますね。」

「ああ、あの大きい龜の碑の前にね。――それでもまだ張り子の龜の子は賣つてゐる。」

僕等は、「天神樣」の外へ出た後、「船橋屋」の葛餅を食ふ相談をした。が、本所に疎遠になつた僕には「船橋屋」も容易に見つからなかつた。僕はやむを得ず荒物屋の前に水を撒いてゐたお上さんに田舍者らしい質問をした。それから花柳病の醫院の前をやつと又船橋屋へ辿り着いた。船橋屋も家は新たになつたものの、大體は昔に變つてゐない。僕等は緣臺に腰をおろし、鴨居の上にかけ並べた日本アルプスの寫眞を見ながら、葛餅を一盆づつ食ふことにした。

「安いものですね、十錢とは。」

O君は大いに感心してゐた。しかし僕の中學時代には葛餅も一盆三錢だつた。僕は僕の友だちと一しよに江東梅園などへ遠足に行つた歸りに度たびこの葛餅を食つたものである。江東梅園も臥龍梅と一しよにとうに滅びてしまつてゐるであらう。水田や榛の木のあつた龜井戶はから云ふ梅の名所だつた爲に南畫らしい趣を具へてゐた。が、今は船橋屋の前も廣い新開の往來の向うに二階建の商店が何軒も軒を並べてゐる。……

僕は天神橋の袂から又圓タクに乘ることにした。この界隈はどこを見ても、――僕はもう今昔の變化を云々するのにも退屈した。僕の目に觸れるものは半ば出來上つた小公園である。或は亞鉛塀を繞らした工場である。或は又見すぼらしいバラツクである。齋藤茂吉氏は何かの機會に「ものの行きとどまらめやも」と歌ひ上げた。しかし今日の本所は「ものの行き」を現してゐない。そこにあるものは震災の爲に生じた「ものの飛び」に近いものである。僕は昔この邊に糧秣廠のあつたことを思ひ出し、更にその糧秣廠に火事のあつたことを思ひ出し、如露亦如電といふ言葉の必しも誇張でないことを感じた。

僕の通つてゐた第三中學校も鐵筋コンクリイトに變つてゐる。僕はこの中學校へ五年の間通ひつづけた。當時の校舍も震災の爲に灰になつてしまつたのであらう。が、僕の中學時代には鼠色のペンキを塗つた二階建の木造だつた。それから校舍のまはりにはポプラアが何本かそよいでゐた。(この界隈は土の痩せてゐる爲にポプラア以外の木は育ち惡かつたのである。)僕はそこへ通つてゐるうちに英語や數學を覺えた外にも如何に僕等人間の情け無いものであるかを經驗した。か

う云ふのは僕の先生たちや友だちの惡口を言つてゐるのではない。僕等人間と云ふうちには勿論僕のこともはひつてゐるのである。たとへば僕等は或友だちをいぢめ、彼を砂の中に生き埋めにした。僕等の彼をいぢめたのは格別理由のあつた訣ではない。若し又理由らしいものを擧げるとすれば、唯彼の生意氣だつた、――或は彼の彼自身を容易に曲げようとしなかつたからである。僕はもう五六年前、久しぶりに彼とこの話をし、この小事件も彼の心に暗い影を落してゐるのを感じた。彼は今は楊子江の岸に不相變孤獨に暮らしてゐる。……

かう云ふ僕の友だちと一しよに僕の記憶に浮んで來るのは僕等を敎へた先生たちである。僕はこの「繁昌記」の中に一々そんな記憶を加へるつもりはない。けれども唯一人この機會にスケツチしておきたいのは山田先生である。山田先生は第三中學校の劍道部と云ふものの先生だつた。先生の劍道は封建時代の劍客に勝るとも劣らなかつたのであらう。何でも先生に學んだ一人は武德會の大會に出、相手の小手へ竹刀を入れると、餘り氣合ひの烈しかつた爲に相手の腕を一打ちに折つてしまつたとか云ふことだつた。が、僕の傳へたいのは先生の劍道のことばかりではない。先生は又食物を減じ、仙人に成る道も修行してゐた。のみならず明治時代にも不老不死の術に通じた、正眞紛れのない仙人の住んでゐることを確信してゐた。僕は不幸にも先生のやうに仙人に敬意を感じてゐない。しかし先生の鍛煉にはいつも敬意を感じてゐる。先生は或時博物學敎室へ

行き、そこにあつたコツプの昇汞水を水と思つて飲み干してしまつた。それを知つた博物學の先生は驚いて醫者を迎へにやつた。醫者は勿論やつて來るが早いか、先生に吐劑を飲ませようとした。けれども先生は吐劑と云ふことを知ると、自若としてかう云ふ返事をした。

「山田次郎吉は六十を越しても、まだ人樣のゐられる前でへどを吐くほど耄碌はしませぬ。どうか車を一臺お呼び下さい。」

先生は何とか云ふ法を行ひ、とうとう醫者にもかからずにしまつた。僕はこの三四年の間は誰からも先生の噂を聞かない。あの面長の山田先生は或はもう列仙傳中の人々と一しよに遊んでゐるのであらう。しかし僕は不相變埃臭い空氣の中に、――僕等をのせた圓タクは僕のそんなことを考へてゐるうちに江東橋を渡つて走つて行つた。

綠町、龜澤町

江東橋を渡つた向うもやはりバラツクばかりである。僕は圓タクの窓越しに赤錆をふいた亞鉛屋根だのペンキ塗りの板目だのを見ながら、確か明治四十三年にあつた大水のことを思ひ出した。今日の本所は火事には會つても、洪水に會ふことはないであらう。が、その時の大水は僕の記憶

に殘つてゐるのでは一番水嵩の高いものだつた。江東橋界隈の人々の第三中學校へ避難したのもやはりこの大水のあつた時である。僕は江東橋を越えるのにも一面に漲つた泥水の中を泳いで行かなければならなかつた。……

「では淺い所もあつたのですね？」

「實際その時は大へんでしたよ。尤も僕の家などは床の上へ水は來なかつたけれども。」

「綠町二丁目――かな。何でもあの邊は膝位まででしたがね。僕はSと云ふ友だちと一しよにその露地の奥にゐるもう一人の友だちを見舞ひに行つたんです。するとSと云ふ友だちが溝の中へ落ちてしまつてね。……」

「ああ、水が出てゐたから、溝のあることがわからなかつたんですね。」

「ええ、――しかしSのやつは膝まで水の上に出てゐたんです。それがあつと言ふ拍子に可也深い溝だつたと見え、水の上に出てゐるのは首だけになつてしまつたんでせう。僕は思はず笑つてしまつてね。」

　僕等をのせた圓タクはかう云ふ僕等の話の中に壽座の前を通り過ぎた。畫看板を揭げた壽座は餘り昔と變らないらしかつた。僕の父の話によれば、この邊。――二つ目通りから先は「津輕樣」の屋敷だつた。「御維新」前の或年の正月、父は川向うへ年始に行き、歸りに兩國橋を渡つて來る

と、少しも見知らない若侍が一人偶然父と道づれになつた。彼もちやんと大小をさし、鷹の羽の紋のついた上下を着てゐた。父は彼と話してゐるうちにいつか僕の家を通り過ぎてしまつた。のみならずふと氣づいた時には「津輕樣」の溝へ轉げこんでゐた。同時に又若侍はいつかどこかへ見えなくなつてゐた。父は泥まみれになつたまま、僕の家へ歸つて來た。何でも父の刀は鞘走つた拍子にさかさまに溝の中に立つたと云ふことである。それから若侍に化けた狐は（父は未だにこの若侍を狐だつたと信じてゐる。）刀の光に恐れた爲にやつと逃げ出したのだと云ふことである。實際狐の化けたかどうかは僕にはどちらでも差支へない。僕は唯父の口からかう云ふ話を聞かされる度にいつも昔の本所の如何に寂しかつたかを想像してゐた。

僕等は龜澤町の角で圓タクをおり、元町通りを兩國へ歩いて行つた。菓子屋の壽徳庵は昔のやうにやはり繁昌してゐるらしい。しかしその向うの質屋の店は安田銀行に變つてゐる。この質屋の「利いちやん」も僕の小學時代の友だちだつた。僕はいつか遊び時間に僕等の家にあるものを自慢し合つたことを覺えてゐる。僕の友だちは僕のやうに年とつた小役人の息子ばかりではない。が、誰も「利いちやん」の言葉には驚嘆せずにはゐられなかつた。

「僕の家の土藏の中には大砲万右衛門の化粧廻しもある。」

大砲は僕等の小學時代に、——常陸山や梅ケ谷の大關だつた時代に横綱を張つた相撲だつた。

相生町

本所警察署もいつの間にかコンクリイトの建物に變つてゐる。僕の記憶にある警察署は古い赤煉瓦の建物だつた。僕はこの警察署長の息子も僕の友だちだつたのを覺えてゐる。それから警察署の鄰にある蝙蝠傘屋も――傘屋の木島さんは今日でも僕のことを覺えてゐてくれるであらうか？ いや、木島さん一人ではない。僕はこの界隈に住んでゐた大勢の友だちを覺えてゐる。しかし僕の友だちは長い年月の流れるのにつれ、もう全然僕などとは縁のない暮らしをしてゐるであらう。僕は四五年前の簡閲點呼に大紙屋の岡本さんと一しよになつた。僕の知つてゐた大紙屋は封建時代に變りのない土藏造りの紙屋である。その又薄暗い店の中には番頭や小僧が何人も忙しさうに歩きまはつてゐた。が、岡本さんの話によれば、今では店の組織も變り、海外へ紙を輸出するのにもいろいろ計畫を立ててゐるらしい。

「この邊もすつかり變つてゐますか？」

「昔からある店もありますけれども、……町全體の落ち着かなさ加減はね。」

僕はその大紙屋のあつた「馬車通り」（「馬車通り」と云ふのは四つ目あたりへ通ふガタ馬車のあ

つた爲である。」のぬかるみを思ひ出した。しかしまだ明治時代にはそこにも大紙屋のあつたやうに封建時代の影の落ちた何軒かの「しにせ」は殘つてゐた。僕はこの馬車通りにあつた「魚善」といふ肴屋を覺えてゐる。それから又樋口さんといふ門構への醫者を覺えてゐる。最後にこの樋口さんの近所にピストル强盜清水定吉の住んでゐたことを覺えてゐる。明治時代もあらゆる時代のやうに何人かの犯罪的天才を造り出した。ピストル强盜も稻妻强盜や五寸釘の虎吉と一しよにかう云ふ天才たちの一人だつたであらう。僕は彼の按摩になつて警官の目をくらませてゐたり、彼の家の壁をがんどう返しにして出沒を自在にしてゐたことにロマン趣味を感じずにはゐられなかつた。これ等の犯罪的天才は大抵は小說の主人公になり、更に又所謂壯士芝居の劇中人物になつたものである。僕はかういふ壯士芝居の中に「大惡僧」とか云ふものを見、一場々々の血なまぐささに夜も碌々眠られなかつた。尤もこの「大惡僧」は或はピストル强盜のやうに實在の人物ではなかつたかも知れない。

僕等はいつか埃の色をした國技館の前へ通りかかつた。國技館は丁度日光の東照宮の模型か何かを見世物にしてゐる所らしかつた。僕の通つてゐた江東小學校は丁度ここに建つてゐたものである。現に殘つてゐる大銀杏も江東小學校の運動場の隅に、——といふよりも附屬幼稚園の運動場の隅に枝をのばしてゐた。當時の小學校の校長の震災の爲に死んだことは前に書いた通りであ

る。が、僕はつい近頃やはり當時から在職してゐたT先生にお目にかかり、女生徒に裁縫を敎へてゐた或女の先生も割り下水に近い京極子爵家(?)の溝の中に死んだことを知つたりした。この先生は着物は腐れ、體は骨になつてゐたものの、貯金帳だけちやんと殘つてゐた爲にやつと誰だかわかつたさうである。T先生の話によれば、僕等を敎へた先生たちは大抵は本所にゐないらしい。僕は比留間先生に張り倒されたことを覺えてゐる。それから宗先生に後頭部を突かれたことを覺えてゐる。それから葉若先生に、――けれども僕の覺えてゐるのは體罰を受けたことばかりではない。僕は又この小學校の中にいろいろの喜劇のあつたことも覺えてゐる。殊に大島と云ふ僕の親友のちやんと机に向つたまま、いつかうんこをしてゐたのは喜劇中の喜劇だつた。しかしこの大島敏夫も――花や歌を愛してゐた江東小學校の秀才も二十前後に故人になつてゐる。……

國技館の鄰りに回向院のあることは大抵誰でも知つてゐるであらう。所謂本場所の相撲も亦國技館の出來ない前には回向院の境內に蓆張りの小屋をかけてゐたものである。僕等はこの義士の打ち入り以來、名高い回向院を見る爲に國技館の横を曲つて行つた。が、それもここへ來る前にひそかに僕の豫期してゐたやうにすつかり昔に變つてゐた。

囘向院

今日の囘向院はバラックである。如何に金の紋を打つた亞鉛葺きの屋根は反つてゐても、硝子戸を立てた本堂はバラックと云ふ外に仕かたはない。僕等は讀經の聲を聞きながら、やはり僕には昔馴染みの鼠小僧の墓を見物に行つた。墓の前には今日でも乞食が三四人集つてゐた。が、そんなことはどうでも善い。それよりも僕を驚かしたのは膃肭獸供養塔と云ふものの立つてゐたことである。僕はぼんやりこの石碑を見上げ、何かその奧の鼠小僧の墓に同情しない訣には行かなかつた。

鼠小僧治郎太夫の墓は建札も示してゐる通り、震災の火事にも滅びなかつた。赤い提灯や蠟燭や教覺速善居士の額も大體昔の通りである。尤も今は墓の石を缺かれない用心のしてあるばかりではない。墓の前の柱にちやんと「御用のおかたにはお守り石をさし上げます」と書いた、小さい紙札も貼りつけてある。僕等はこの墓を後ろにし、今度は又墓地の奧に、——國技館の後ろにある京傳の墓を尋ねて行つた。

この墓地も僕にはなつかしかつた。僕は僕の友だちと一しよに度たびいたづらに石塔を倒し、

寺男や坊さんに追ひかけられたものである。尤も昔は樹木も茂り、一口に墓地と云ふよりも卵塔場と云ふ氣のしたものだつた。が、今は墓石は勿論、墓を繞つた鐵柵にも凄まじい火の痕は殘つてゐる。僕は「水子塚」の前を曲り、京傳の墓の前へ辿り着いた。京傳の墓も京山の墓と一しよにやはり昔に變つてゐない。唯それ等の墓の前に柿か何かの若木が一本、ひよろりと枝をのばしたまま、若葉を開いてゐるのは哀れだつた。

僕等は回向院の表門を出、これもバラツクになつた坊主軍鷄を見ながら、一つ目の橋へ歩いて行つた。僕の記憶を信ずるとすれば、この一つ目の橋のあたりは大正時代にも幾分か廣重らしい畫趣を持つてゐたものである。しかしもう今日ではどこにもそんな景色は殘つてゐない。僕等は無慙にもひろげられた路を向う兩國へ引き返しながら、偶然「泰ちやん」の家の前を通りかかつた。「泰ちやん」は下駄屋の息子である。僕は僕の小學時代にも作文は多少上手だつた。が、僕の作文は、――と云ふよりも僕等の作文は、大抵は所謂美文だつた。「富士の峯白くかりがね池の面に下り、空仰げば月麗しく、余が影法師黑し。」――これは僕の作文ではない。二三年前に故人になつた僕の小學時代の友だちの一人、――清水昌彥君の作文である。「泰ちやん」はかう云ふ作文の中にひとり教科書の匂のない、活き活きした口語文を作つてゐた。それは何でも「虹」といふ作文の題の出た時である。僕は內心僕の作文の一番になることを信じてゐた。が、先生の一番にした

のは「泰ちやん」――下駄屋「伊勢甚」の息子木村泰助君の作文だつた。「泰ちやん」は先生の命令を受け、彼自身の作文を朗讀した。それは恐らくは誰よりも僕を動かさずにはおかなかつた。僕は勿論「泰ちやん」の爲に見事に敗北を受けたことを感じた。同時に又「泰ちやん」の描いた「虹」にありありと夕立ちの通り過ぎたのを感じた。僕を動かした文章は東西に亙つて少くはない。しかしまづ僕を動かしたのはこの「泰ちやん」の作文である。運命は僕を賣文の徒にした。若し「泰ちやん」も僕のやうにペンを執つてゐたとすれば、「大東京繁昌記」の讀者はこの「本所兩國」よりも或は數等美しい印象記を讀んでゐたかも知れない。けれども「泰ちやん」はどうしてゐるであらう？僕は幾つも下駄の並んだ飾り窓の前に佇んだまま、そつと店の中へ目を移した。店の中には「泰ちやん」のお母さんらしい人が一人坐つてゐる。が、木村泰助君は生憎どこにも見えなかつた。

……

方丈記

僕「けふは本所へ行つて來ましたよ。」
父「本所もすつかり變つたな。」

母「うちの近所はどうなつてゐるえ？」

僕「どうなつてゐるつて、……釣竿屋の石井さんにうちを賣つたでせう。あの石井さんのあるだけですね。ああ、それから提灯屋もあつた。……」

伯母「あすこには洗湯もあつたでせう。」

僕「今でも常磐湯と云ふ洗湯はありますよ。」

伯母「常磐湯と言つたかしら。」

妻「あたしのゐた邊も變つたでせうね？」

僕「變らないのは石河岸だけだよ。」

妻「あすこにあつた、大きい柳は？」

僕「柳などは勿論焼けてしまつたさ。」

母「お前のまだ小さかつた頃には電車も通つてゐなかつたんだからね。」

父「上野と新橋との間さへ鐵道馬車があつただけなんだから。——鐵道馬車と云ふ度に思ひ出すのは……」

僕「僕の小便をしてしまつた話でせう。滿員の鐵道馬車に乘つたまま。……」

伯母「さうさう、赤いフランネルのズボン下をはいて、……」

父「何、あの鐵道馬車會社の神戸さんのことさ。神戸さんもこの間死んでしまつたな。」

僕「東京電燈の神戸さんでせう。へえ、神戸さんを知つてゐるんですか？」

父「知つてゐるとも。大倉さんなども知つてゐたもんだ。」

僕「大倉喜八郎をね……」

父「僕もあの時分にどうかすれば、……」

僕「もうそれだけで澤山ですよ。」

伯母「さうだね。この上損でもされてゐた日には……」（笑ふ）

僕「『榛の木馬場』あたりはかたなしですね。」

父「あすこには葛飾北齋が住んでゐたことがある。」

僕「『割り下水』もやつぱり變つてしまひましたよ。」

母「あすこには惡御家人が澤山ゐてね。」

僕「僕の覺えてゐる時分でも何かそんな氣のする所でしたね。」

妻「お鶴さんの家はどうなつたでせう？」

僕「お鶴さん？　ああ、あの藍問屋の娘さんか。」

妻「ええ、兄さんの好きだつた人。」

僕は「あの家どうだつたかな。兄さんの爲にも見て來るんだつけ。尤も前は通つたんだけれども。」

伯母「あたしは地震の年以來一度も行つたことはないんだから、――行つても驚くだけだらうけれども。」

僕「それは驚くだけですよ。伯母さんには見當もつかないかも知れない。」

父「何しろ變りも變つたからね。そら、昔は夕がたになると、みんな門を細目にあけて往來を見てゐたもんだらう？」

母「法界節や何かの歸つて來るのをね。」

伯母「あの時分は蝙蝠も澤山ゐたでせう。」

僕「今は雀さへ飛んでゐませんよ。僕は實際無常を感じてね。……それでも一度行つてごらんなさい。まだずんずん變らうとしてゐるから。」

妻「わたしは一度子供たちに龜井戸の太鼓橋を見せてやりたい。」

父「臥龍梅はもうなくなつたんだらうな？」

僕「ええ、あれはもうとうに。……さあ、これから驚いたと云ふことを十五回だけ書かなければならない。」

妻「驚いた、驚いたと書いてゐれば善いのに。」（笑ふ）

僕「その外に何も書けるもんか。若し何か書けるとすれば、……さうだ。このポケツト本の中にちやんともう誰か書き盡してゐる。――『玉敷の都の中に、棟を並べ甍を爭へる、尊き卑しき人の住居は、代々を經てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。……いにしへ見し人は、二三十人が中に、僅に一人二人なり。朝に死し、夕に生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。』……」

母「何だえ、それは？　『お文様』のやうぢやないか？」

僕「これですか？　これは『方丈記』ですよ。僕などよりもちよつと偉かつた鴨の長明と云ふ人の書いた本ですよ。」

（昭和二年五月）

凶

大正十二年の冬(?)、僕はどこからかタクシイに乘り、本郷通りを一高の横から藍染橋へ下らうとしてゐた。あの通りは甚だ街燈の少い、いつも眞暗な往來である。そこにやはり自動車が一臺、僕のタクシイの前を走つてゐた。僕は卷煙草を啣へながら、勿論その車に氣もとめなかつた。しかしだんだん近寄つて見ると、――僕のタクシイのヘッド・ライトがぼんやりその車を照らしたのを見ると、それは金色の唐艸をつけた、葬式に使ふ自動車だつた。

大正十三年の夏、僕は室生犀星と輕井澤の小みちを歩いてゐた。山砂もしつとりと濕氣を含んだ、如何にもの靜かな夕暮だつた。僕は室生と話しながら、ふと僕等の頭の上を眺めた。頭の上には澄み渡つた空に黑ぐろとアカシヤが枝を張つてゐた。のみならずその又枝の間に人の脚が二本ぶら下つてゐた。僕は「あつ」と言つて走り出した。室生も亦僕のあとから「どうした？ どうした？」と言つて追ひかけて來た。僕はちよつと羞しかつたから、何とか言つて護摩化してしま

つた。

大正十四年の夏、僕は菊池寛、久米正雄、植村宋一、中山太陽堂社長などと築地の待合に食事をしてゐた。僕は床柱の前に坐り、僕の右には久米正雄、僕の左には菊池寛、――と云ふ順序に坐つてゐたのである。そのうちに僕は何かの拍子に餉臺の上の麥酒罎を眺めた。するとその麥酒罎には人の顏が一つ映つてゐた。それは僕の顏にそつくりだつた。しかし何も麥酒罎は僕の顏を映してゐた訣ではない。その證據には實在の僕は目を開いてゐたのにも關らず、幻の僕は目をつぶつた上、稍仰向いてゐたのである。僕は傍にゐた藝者を顧み、「妙な顏が映つてゐる」と言つた。藝者は始は常談にしてゐた。けれども僕の座に坐るが早いか、「あら、ほんたうに見えるわ」と言つた。菊池や久米も替る替る僕の座に來て坐つて見ては、「うん、見えるね」などと言ひ合つてゐた。それは久米の發見によれば、麥酒罎の向うに置いてある杯洗や何かの反射だつた。しかし僕は何となしに凶を感ぜずにはゐられなかつた。

大正十五年の正月十日、僕はやはりタクシイに乘り、本郷通りを一高の横から藍染橋へ下らうとしてゐた。するとあの唐艸をつけた、葬式に使ふ自動車が一臺、もう一度僕のタクシイの前にぼんやりと後ろを現し出した。僕はまだその時までは前に擧げた幾つかの現象を聯絡のあるものとは思はなかつた。しかしこの自動車を見た時、――殊にその中の棺を見た時、何ものか僕に冥

冥の裡に或警告を與へてゐる、——そんなことをはつきり感じたのだつた。（大正十五年四月十三日鵠沼にて淨書）

〔遺稿〕

鵠沼雜記

僕は鵠沼の東屋の二階にぢつと仰向けに寢ころんでゐた。その又僕の枕もとには妻と伯母とが差向ひに庭の向うの海を見てゐた。僕は目をつぶつたまま、「今に雨がふるぞ」と言つた。妻や伯母はとり合はなかつた。殊に妻は「このお天氣に」と言つた。しかし二分とたたないうちに珍らしい大雨になつてしまつた。

×

僕は全然人かげのない松の中の路を散歩してゐた。僕の前には白犬が一匹、尻を振り振り歩いて行つた。僕はその犬の睾丸を見、薄赤い色に冷たさを感じた。犬はその路の曲り角へ來ると、急に僕をふり返つた。それから確かににやりと笑つた。

×

僕は路ばたの砂の中に雨蛙が一匹もがいてゐるのを見つけた。その時あいつは自動車が來たら、

どうするつもりだらうと考へた。しかしそこには自動車などのはひる筈のない小みちだつた。しかし僕は不安になり、路ばたに茂つた草の中へ杖の先で雨蛙をはね飛ばした。

×

僕は風向きに從つて一樣に曲つた松の中に白い洋館のあるのを見つけた。すると洋館も歪んでゐた。僕は僕の目のせゐだと思つた。しかし何度見直しても、やはり洋館は歪んでゐた。これは無氣味でならなかつた。

×

僕は風呂へはひりに行つた。彼是午後の十一時だつた。風呂場の流しには青年が一人、手拭を使はずに顏を洗つてゐた。それは毛を拔いた鷄のやうに痩せ衰へた青年だつた。僕は急に不快になり、僕の部屋へ引返した。すると僕の部屋の中に腹卷が一つぬいであつた。僕は驚いて帶をといて見たら、やはり僕の腹卷だつた。（以上東屋にゐるうち）

×

僕は夢を見てゐるうちはふだんの通りの僕である。ゆうべ（七月十九日）は佐佐木茂索君と馬車に乘つて歩きながら、麥藁帽をかぶつた馭者に北京の物價などを尋ねてゐた。しかしはつきり目がさめてから二十分ばかりたつうちにいつか憂鬱になつてしまふ。唯灰色の天幕の裂け目から明

るい風景が見えるやうに時々ふだんの心もちになる。どうも僕は頭からじりじり參つて來るのらしい。

×

僕はやはり散歩してゐるうちに白い水着を着た子供に遇つた。子供は小さい竹の皮を兎のやうに耳につけてゐた。僕は五六間離れてゐるうちから、その鋭い竹の皮の先が妙に恐しくてならなかつた。その恐怖は子供とすれ違つた後も、暫くの間はつづいてゐた。

×

僕はぼんやり煙草を吸ひながら、不快なことばかり考へてゐた。僕の前の次の間にはここへ來て雇つた女中が一人、こちらへは背中を見せたまま、おむつを疊んでゐるらしかつた。僕はふと「そのおむつには毛蟲がたかつてゐるぞ」と言つた。どうしてそんなことを言つたかは僕自身にもわからなかつた。すると女中は頓狂な調子で「あら、ほんたうにたかつてゐる」と言つた。

×

僕はバタの罐をあけながら、輕井澤の夏を思ひ出した。その拍子に頸すぢがちくりとした。僕は驚いてふり返つた。すると輕井澤に澤山ゐる馬蠅が一匹飛んで行つた。それもこのあたりの馬蠅ではない。丁度輕井澤の馬蠅のやうに綠色の目をした馬蠅だつた。

×

僕はこの頃空の曇つた、風の強い日ほど恐しいものはない。あたりの風景は敵意を持つてぢりぢり僕に迫るやうな氣がする。その癖前に恐しかつた犬や神鳴は何ともない。僕はをととひ（七月十八日）も二三匹の犬が吠え立てる中を歩いて行つた。しかし松風が高まり出すと、晝でも頭から蒲團をかぶるか、妻のゐる次の間へ避難してしまふ。

×

僕はひとり散歩してゐるうちに齒醫者の札を出した家を見つけた。が、二三日たつた後、妻とそこを通つて見ると、そんな家は見えなかつた。僕は「確かにあつた」と言ひ、妻は「確かになかつた」と言つた。それから妻の母に尋ねて見た。するとやはり「ありません」と言つた。しかし僕はどうしても、確かにあつたと思つてゐる。その札は齒と本字を書き、イシヤと片假名を書いてあつたから、珍らしいだけでも見違へではない。（以上家を借りてから）（一五・七・二〇）

〔遺稿〕

補遺

寒山拾得

〔二七七頁に〕

久しぶりに漱石先生の所へ行つたら、先生は書齋のまん中に坐つて、腕組みをしながら、何か考へてゐた。「先生、どうしました」と云ふと、「今、護國寺の三門で、運慶が仁王を刻んでゐるのを見て來た所だよ」と云ふ返事があつた。この忙しい世の中に、運慶なんぞどうでも好いと思つたから、浮かない先生をつかまへて、トルストイとか、ドストエフスキイとか云ふ名前のはいる、六づかしい議論を少しやつた。それから先生の所を出て、元の江戶川の終點から、電車に乘つた。

電車はひどくこんでゐた。が、やつと隅の吊革につかまつて、懷に入れて來た英譯の露西亞小說を讀み出した。何でも革命の事が書いてある。勞働者がどうとかしたら、氣が違つて、ダイナマイトを抛りつけて、しまひにその女までどうとかしたとあつた。兎に角萬事が切迫してゐて、暗澹たる力があつて、とても日本の作家なんぞには、一行も書けないやうな代物だつた。勿論白

分は大に感心して、立ちながら、行の間へ何本も色鉛筆の線を引いた。

所が飯田橋の乘換でふと氣がついて見ると、窓の外の往來に、妙な男が二人歩いてゐた。その男は二人とも、同じやうな襤褸々々の着物を着てゐた。しかも髮も髭ものび放題で、如何にも古怪な顏つきをしてゐた。自分はこの二人の男に何處かで遇つたやうな氣がしたが、どうしても思ひ出せなかつた。すると隣の吊革にゐた道具屋じみた男が、

「やあ、又寒山拾得が歩いてゐるな」と云つた。

さう云はれて見ると、成程その二人の男は、箒をかついで、卷物を持つて、大雅の畫からでも脱け出したやうに、のつそりかんと歩いてゐた。が、いくら賣立てが流行るにしても、正物の寒山拾得が揃つて飯田橋を歩いてゐるのも不思議だから、隣の道具屋らしい男の袖を引張つて、

「ありや本當に昔の寒山拾得ですか」と、念を押すやうに尋ねて見た。けれどもその男は至極家常茶飯な顏をして、

「さうです。私はこの間も、商業會議所の外で遇ひました」と答へた。

「へえ、僕はもう二人とも、とうに死んだのかと思つてゐました。」

「何、死にやしません。ああ見えたつて、ありや普賢文殊です。あの友だちの豐干禪師つて大將も、よく虎に騎つちや、銀座通りを歩いてますぜ。」

それから五分の後、電車が動き出すと同時に、自分は又さつき讀みかけた露西亞小說へとりかかつた。すると一頁と讀まない内に、ダイナマイトの臭ひよりも、今見た寒山拾得の怪しげな姿が懷しくなつた。そこで窓から後を透して見ると、彼等はもう豆のやうに小さくなりながら、それでもまだはつきりと、朗な晩秋の日の光の中に、箒をかついで歩いてゐた。

自分は吊革につかまつた儘、元の通り書物を懷に入れて、家へ歸つたら早速、漱石先生へ、今日飯田橋で寒山拾得に遇つたと云ふ手紙を書かうと思つた。さう思つたら、彼等が現代の東京を歩いてゐるのも、略々無理がないやうな心もちがした。

かちかち山

〔三二四頁に〕

童話時代のうす明りの中に、一人の老人と一頭の兎とは、舌切雀のかすかな羽音を聞きながら、しづかに老人の妻の死をなげいてゐる。とほくに懶い響を立ててゐるのは、鬼ケ島へ通ふ夢の海の、永久にくづれる事のない波であらう。

老人の妻の屍骸を埋めた土の上には、花のない櫻の木が、ほそい青銅の枝を、細（こまか）く空にのばしてゐる。その木の上の空には、あけ方の半透明な光が漂つて、吐息ほどの風さへない。

やがて、兎は老人をいたわりながら、前足をあげて、海邊（うみべ）につないである二艘の舟を指さした。舟の一つは白く、一つは墨をなすつたやうに黒い。

老人は、涙にぬれた顔をあげて、頷いた。

童話時代のうす明りの中に、一人の老人と一頭の兎とは、花のない櫻の木の下に、互に互をなぐさめながら、力なく別れをつげた。老人は、蹲つたまま泣いてゐる。兎は何度も後をふりむき

ながら、舟の方へ歩いてゆく。その空には、古切雀のかすかな羽音がして、あけ方の半透明な光も、何時か少しづつひろがつて來た。

黑い舟の上には、さつきから、一頭の狸が、ぢつと波の音を聞いてゐる。これは龍宮の燈火の油をぬすむつもりであらうか。或は又、水の中に住む赤魚の戀を妬んでもゐるのであらうか。

兎は、狸の傍に近づいた。さうして、彼等は徐に遠い昔の話をし始めた。彼等が、火の燃える山と砂の流れる河との間にゐて、おごそかに獸の命をまもつてゐた「むかしむかし」の話である。

童話時代のうす明りの中に、一頭の兎と一頭の狸とは、それぞれ白い舟と黑い舟とに乘つて、靜に夢の海へ漕いで出た。永久にくづれる事のない波は、善惡の舟をめぐつて、懶い子守唄をうたつてゐる。

花のない櫻の木の下にゐた老人は、この時漸頭をあげて、海の上へ眼をやつた。くもりながら、白く光つてゐる海の上には、二頭の獸が、最後の爭ひをつづけてゐる。徐に沈んで行く黑い舟には、狸が乘つてゐるのではなからうか。さうして、その近くに浮いてゐる、白い舟には、兎が乘つてゐるのではなからうか。

老人は、涙にぬれた眼をかがやかせて、海の上の兎を扶けるやうに、高く兩の手をさしあげた。見よ。それと共に、花のない櫻の木には、貝殼のやうな花がさいた。あけ方の半透明な光にあ

ふれた空にも、青ざめた金(きん)いろの日輪が、さし昇つた。

童話時代の明け方に、――獸性の獸性を亡ぼす爭ひに、歡喜する人間を象徵しようとするのであらう、日輪は、さうして、その下にさく象嵌のやうな櫻の花は。

孔雀

これは異本「伊曾保の物語」の一章である。この本はまだ誰も知らない。

「或鴉おのれが人物を驕慢し、孔雀の羽根を見つけて此處かしこにまとひ、爾餘の諸鳥をば大きに卑しめ、わが上はあるまじいと飛び廻れば、諸鳥安からず思ひ、『なんぢはまことの孔雀でもないに、なぜにわれらをおとしめるぞ』と、取りまはいてさんざんに打擲したれば、羽根は拔かれ脚は折られ、なよなよとなつて息が絶えた。

「その後またまことの孔雀が來たに、諸鳥はこれも鴉ぢやと思うたれば、やはり打ちつ蹴つして殺してしまうた。して諸鳥の云うたことは、『まことの孔雀にめぐり遇うたなら、如何やうな禮儀をも盡さうずるものを。さてもさても世の中には僞せ孔雀ばかり多いことぢや。』

「下心。――天下の諸人は阿呆ばかりぢや。才も不才もわかることではござらぬ。」

商賈聖母

天草の原の城の内曲輪。立ち昇る火焰。飛びちがふ矢玉。伏し重なつた男女の屍骸。その中に手を負つた一人の老人。老人は石垣の上に懸けた麻利耶の畫像を仰ぎながら、高聲に「はるれや」を唱へてゐる。

忽ち又一發の銃彈。

老人はのけざまに仆れたぎり、二度と起き上る氣色は見えない。白衣の聖母は石垣の上から、默默とその姿を見下してゐる。おごそかに、悠悠と。

白衣の聖母？　いや、わたしは知つてゐる。それは白衣の聖母ではない。明らかに唯の女人である。一朶の薔薇の花を愛する唯の紅毛の女人である。見給へ。その女人の下にはかう云ふ金色の横文字さへある。ウイルヘルム煙草商會、アムステルダム。阿蘭陀……

仙人

〔四〇九頁に〕

この「仙人」は琵琶湖に近いO町の裁判官を勤めてゐた。彼の道樂は何よりも先に古い瓢箪を集めることだつた。從つて彼の借りてゐた家には二階の戸棚の中は勿論、柱や鴨居に打つた釘にも瓢箪が幾つもぶら下つてゐた。

三年ばかりたつた後(のち)、この「仙人」はO町からH市へ轉任することになつた。家具家財を運ぶのは勿論彼には何でもなかつた。が、彼是二百餘りの瓢箪を運ぶことだけはどうすることも出來なかつた。

「汽車に積んでも、馬車に積んでも、無事には着かないのに違ひない。」

この仙人はいろいろ考へた揚句、とうとう瓢箪を皆括り合はせ、それを琵琶湖の上へ浮かせて舟の代りにすることにした。(その又瓢箪舟の中心になつたのはやはり彼の「掘り出して來た」遊行柳の根つこだつた。)天氣は丁度晴れ渡つた上、幸ひ風も吹かなかつた。彼はかういふ瓢箪舟に乘

り、彼自身棹を使ひながら、靜かに湖の上を渡つて行つた。

　昔の仙人は誰も皆不老不死の道に達してゐる。しかしこの「仙人」だけは世間並みにだんだん年をとり、最後に胃癌になつてしまつた。何でも死ぬ前夜には細り切つた兩手をあげ、「あしたあたりはお目出度なるだらう。萬歲！」と言つたと云ふことである。しかし彼の遺言狀は生死を超越しない俗人よりも更に綿密だつたと云ふことである。尤も彼の遺族たちはこの「仙人」の遺言狀を一々忠實には守らなかつたらしい。のみならず彼の瓢箪を目當てに彼の南畫を習つてゐた年少の才子もない訣ではなかつた。從つて彼の愛してゐた彼是二百餘りの瓢箪は彼の一周忌もすまないうちにいつかどこかへ流れ出してしまつた。

〔斷片〕

明治二十年代に生まれた東京人の顏は、――殊に男よりも女の顏は艶布きんをかけた古柱に似てゐる。

×

南町五丁目。――「南」と云ふ字に黄色を感じたのは僕一人に限つてゐるかしら？

×

僕は汗の色に氣をつけてゐる。一番多いのは黄いろであらう。黑い色にも二三度出合つてゐる。石竹色は前後に一度しか見ない。若し譃だと思つたら、いろいろの人のシャツや襟に、――殊に綱シャツや、柔い襟にちよつと注意を向けて見給へ。

後記。神崎淸君のお父さんは綠いろの汗を滴らすさうである。

×

隅田川の川口に集つた帆前船や達磨船の一群、——誰もまだこの「箱」の中のロマンを僕等に見せたものはない。

×

おやぢやおふくろは銀座のことをいつも「煉瓦」と呼んでゐる。アスフアルトの代りに敷いてあつた煉瓦はあの柳の並み木よりも先に滅びたことも忘れたやうに。

×

或小公園のポプラアの下に子供服を着た少女が二人、熱心に足でぢやんけんをしてゐる。

×

なぜ又あらゆる共同便所は橋の側にばかりあるのかしら？

（大正十五・三）

（寺島製本）

昭和十年三月一日印刷
昭和十年三月五日發行

芥川龍之介全集第七卷

著作者　芥川龍之介

發行者　岩波茂雄
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者　白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地

印刷所　精興社
東京市神田區錦町三丁目十一番地

發行所　岩波書店
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
電話(33)一一八七・一八八八番
九段(33)二一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番